

山口大学埋蔵文化財資料館年報  
—令和 2 年度—

2024

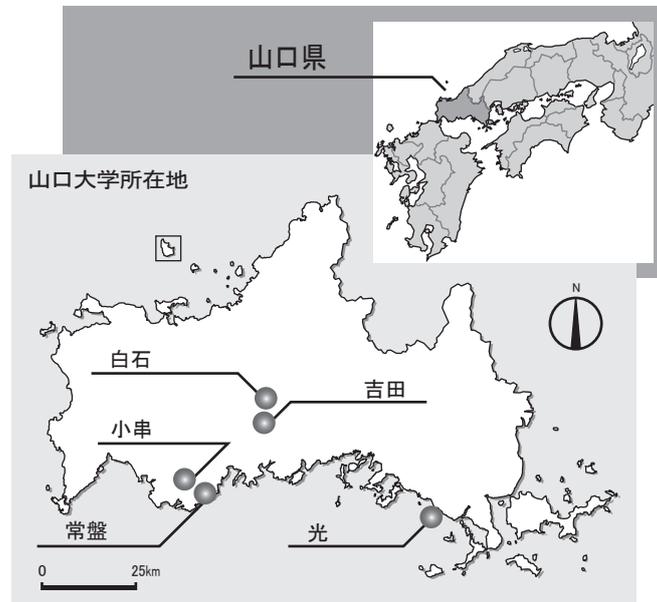
山口大学埋蔵文化財資料館



# 山口大学埋蔵文化財資料館年報

令和2年度 山口大学埋蔵文化財資料館活動報告

令和2年度 山口大学構内遺跡発掘調査概報



2024

山口大学埋蔵文化財資料館



## 序

山口大学埋蔵文化財資料館は、吉田構内をはじめ小串・常盤・白石・光構内に所在する山口大学構内遺跡における埋蔵文化財の保護活動を主要業務としています。発掘調査にて得られた諸成果については、学術的な調査報告書(埋蔵文化財資料館年報)を刊行するだけでなく、実物資料展示や広報誌などを通じて、広く地域社会に公開しています。大学教育においても、当館の展示見学が複数の授業で採用されており、また当館専任教員が学芸員資格課程の授業を担当するなど一定の役割を担っています。また、近年は県内博物館との連携事業にも取り組んでおり、その活動の場を広げています。

令和2(2020)年度は、長期におよび本邦を襲ったコロナ禍の1年目に当たります。本学においてもその影響は多方面に現れ、当館の展示活動は同年秋まで停止を余儀なくされ、秋以降は様々な制限のもと、活動を再開させることになりました。

埋蔵文化財保護業務に関しても、地下の掘削を伴う工事計画は減少し、工事立会は農作業に伴うものを含め吉田構内での5件、小串構内の1件のほか、光構内での確認調査1件にとどまりました。

一方で、生じた時間の有効活用も行われ、館に所蔵される未公開資料、未公開情報の整理作業が進行したことにより、本書に所収される付篇として結実したことは、当館として転禍為福と感じています。

本書には、令和2年度に当館が実施した構内遺跡の調査成果をはじめ、収蔵資料の調査報告、展示活動や社会連携活動、館員の研究活動等を収録しております。本書が山口大学および学外研究機関、地域社会において幅広く活用されることを願います。

当館は、人的な埋蔵文化財保護体制の維持をはじめ、出土品や調査記録の整理・保管場所の不足が年々深刻化するなど、多くの課題を抱えています。学内ばかりでなく、地域に開かれた学術研究・教育の場として活用していただけるよう、全力を尽くして取り組む所存です。末尾となりますが、これまで当館の調査・研究活動にご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

Loehr Marc



## 例言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」と呼称）が令和2年度に実施した山口大学構内の遺跡発掘調査成果報告と、同年度に資料館が実施した社会教育等の活動報告を記したものである。
2. 構内遺跡発掘調査に関しては、現地での調査は資料館員である田畑直彦（資料館助教）・横山成己（資料館助教）・水久保祥子（資料館技術職員）が担当した。
3. 発掘調査における現地での実測と写真撮影は田畑・横山・水久保が行った。製図・整図は田畑・横山・水久保が行った。
4. 文化財保護法に伴う事務は、事務局情報環境部学術情報課総務係（当時）が統括した。
5. 発掘調査の諸記録類と出土資料は資料館で適正に保管している。
6. 本文の執筆分担は目次に記した。
7. 本書の編集は館員の補助を得て横山が行った。

# 凡例

1. 山口大学の吉田・白石・小串・常盤・光構内は、いずれもが文化財保護法(法律第214号)で示される「周知の埋蔵文化財包蔵地」内に位置する。各構内の位置する遺跡名は以下の通りである。

吉田構内～吉田遺跡      白石構内～白石遺跡      小串構内～山口大学医学部構内遺跡  
常盤構内～山口大学工学部構内遺跡      光構内～御手洗遺跡・月待山遺跡

2. 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、日本測地系に基づいた国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA-24区南西隅を起点(構内座標 $x=0$ ,  $y=0$ )とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値( $X$ ,  $Y$ )と構内座標値( $x$ ,  $y$ )とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

3. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

竪穴住居……SB

掘立柱建物……SH

土壙……SK

溝……SD

柱穴・ピット……Pit・SP

落ち込み……SX

4. 本書で使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

5. 標高数値は海拔標高を示す。

6. 土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

8. 遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器

断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、石器、木器、金属器、  
瓦

## 本文目次

第1章	令和2年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告	(横山)	1
第1節	資料館における展示・情報公開活動		
1	山口県大学ML連携特別展『白石遺跡とその周辺～白石から古墳をのぞむ～』	…(水久保)	2
2	令和2年度刊行物	(横山)	3
第2節	資料館における社会教育活動		
1	山口県立山口博物館との共催事業『講座 古代ウォーク』	(横山)	4
第2章	令和2年度山口大学構内遺跡の調査		
第1節	令和2年度に実施した遺跡調査の概要	(横山)	6
第2節	吉田構内(吉田遺跡)の調査		
1	基幹・環境整備(ため池改修)工事に伴う立会調査	(横山)	9
2	農学部附属農場果樹園土壌改良作業に伴う立会調査	(横山)	10
3	農学部授業(生物資源環境科学基礎実験)に伴う立会調査	(横山)	12
4	農学部附属農場ぶどう園植樹作業に伴う立会調査	(横山)	14
5	学生会館(仮称)新営工事に伴う立会調査	(横山)	17
第3節	小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査		
1	ライフライン再生(特高受変電設備)工事に伴う立会調査	(横山)	18
第4節	光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査		
1	基幹・環境整備(擁壁安全対策)工事に伴う確認調査	(田畑)	19
付節1	令和2年度 山口大学構内遺跡調査要項		21
付節2	山口大学構内の主な調査		23
付篇1	吉田遺跡古代埋没谷出土の木製品(Ⅱ)	(横山)	48
付篇2	平成20年度吉田遺跡出土木製品の樹種同定	((株)吉田生物研究所)	76
付篇3	防府市多々良廃寺跡採取の古代瓦	(水久保)	114
付篇4	館蔵品調査報告―平生町宮原古墳出土遺物―	(横山)	124
付篇5	山口県東部における弥生時代高地性集落出土土器	(田畑)	128

## 挿図目次

第2章第1節 令和2年度に実施した遺跡調査の概要	図27 周辺調査区の位置と出土遺物……………49・50
図1 山口大学吉田・白石構内位置図……………7	図28 動物医療センター改修Ⅲ期工事 第2調査区平面図・断面図……………51
図2 小串・常盤構内位置図……………8	図29 第2調査区谷埋土6直上出土木製品①…53
図3 光構内位置図……………8	図30 第2調査区谷埋土6直上出土木製品②…55
第2章第2節 令和2年度吉田構内（吉田遺跡）の調査	図31 第2調査区谷埋土5直上出土木製品……………55
図4 調査区位置図……………9	図32 第2調査区谷埋土4下層出土木製品①…55
図5 土層断面柱状図……………9	図33 第2調査区谷埋土4下層出土木製品②…56
図6 調査区位置図……………10	図34 第2調査区谷埋土4上層出土木製品①…56
図7 調査区平面図……………11	図35 第2調査区谷埋土4上層出土木製品②…57
図8 調査区位置図……………12	図36 第2調査区谷埋土4上層出土木製品③…58
図9 A・B地点土層断面柱状図……………13	図37 第2調査区谷埋土4上層出土木製品④…59
図10 調査区位置図……………14	図38 第2調査区谷埋土4上層出土木製品⑤…60
図11 第1～3地点土層断面柱状図……………14	図39 第2調査区谷埋土4上層出土木製品⑥…61
図12 第4～6地点土層断面柱状図……………15	図40 第2調査区谷埋土3出土木製品……………62
図13 第7～9地点土層断面柱状図……………15	図41 第2調査区谷埋土2出土木製品……………62
図14 第10～13地点土層断面柱状図……………16	図42 第2調査区谷左岸肩部木製杭・矢板①…63
図15 調査区位置図……………17	図43 第2調査区谷左岸肩部木製杭・矢板②…64
図16 土層断面柱状図……………17	付篇3 防府市多々良廃寺跡採取の古代瓦
第2章第3節 令和2年度小串構内（山口大学医学部構内遺跡） の調査	図44 多々良廃寺跡周辺遺跡分布図……………115
図17 調査区位置図……………18	図45 多々良廃寺跡採取瓦実測図①……………116
図18 土層断面柱状図……………18	図46 多々良廃寺跡採取瓦実測図②……………117
第2章第4節 令和2年度光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査	図47 多々良廃寺跡採取瓦実測図③……………118
図19 調査区位置図……………19	付篇4 館藏品調査報告－平生町宮原古墳出土遺物－
図20 A地点土層断面柱状図……………20	図48 平生町大野の主な横穴式石室墳 の位置……………124
第2章付節2 山口大学構内の主な調査	図49 宮原古墳出土遺物……………126
図21 山口大学吉田構内地区割および 主な調査区位置図……………41・42	図50 宮原古墳出土遺物（当館所蔵）……………127
図22 山口大学白石構内（幼稚園・小学校） 調査区位置図……………43	付篇5 山口県東部における弥生時代高地性集落出土土器
図23 山口大学白石構内（中学校） 調査区位置図……………44	図51 関連遺跡位置図……………128
図24 山口大学小串構内調査区位置図……………45	図52 沓松遺跡位置図……………128
図25 山口大学常盤構内調査区位置図……………46	図53 出土遺物実測図（土器）①……………129
図26 山口大学光構内調査区位置図……………47	図54 植山遺跡・千束遺跡位置図……………130
付篇1 吉田遺跡古代埋没谷出土の木製品（Ⅱ）	図55 出土遺物実測図（土器）②……………132

## 写真目次

第1章第1節 令和2年度資料館における展示・情報公開活動	写真32 第7地点土層断面……………15
写真1 特別展ポスター……………2	写真33 第8地点土層断面……………15
写真2 展示の模様……………2	写真34 第9地点土層断面……………15
写真3 令和2年度埋蔵文化財資料館刊行物 ……3	写真35 第10地点土層断面……………16
第1章第2節 令和2年度資料館における社会教育活動	写真36 第11地点土層断面……………16
写真4 山口市長野公民館での資料熟覧……………5	写真37 第12地点土層断面……………16
写真5 大塚1号墳見学・解説……………5	写真38 第13地点土層断面……………16
写真6 大内長野から大内氷上へ……………5	写真39 北西壁土層断面……………17
写真7 氷上橋から仏供田遺跡遠望・解説……………5	第2章第3節 令和2年度小串構内（山口大学医学部構内遺跡）
写真8 妙見社2号墳へ……………5	の調査
写真9 大内氷上古墳見学・解説……………5	写真40 調査地点土層断面……………18
第2章第1節 令和2年度に実施した遺跡調査の概要	第2章第4節 令和2年度光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査
写真10 吉田構内航空写真……………7	写真41 調査区西部調査前状況……………19
写真11 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）	写真42 調査区全景……………19
航空写真……………7	写真43 調査区西部土層断面……………20
写真12 白石構内（教育学部附属山口中学校）	写真44 調査区東部掘削状況……………20
航空写真……………7	写真45 B地点土層断面……………20
写真13 小串構内航空写真……………8	付篇2 平成20年度吉田遺跡出土木製品の樹種同定
写真14 常盤構内航空写真……………8	写真46 木製品顕微鏡写真①……………81
写真15 光構内航空写真……………8	写真47 木製品顕微鏡写真②……………82
第2章第2節 令和2年度吉田構内（吉田遺跡）の調査	写真48 木製品顕微鏡写真③……………83
写真16 堤体土層断面……………9	写真49 木製品顕微鏡写真④……………84
写真17 調査区全景……………10	写真50 木製品顕微鏡写真⑤……………85
写真18 調査区風景……………10	写真51 木製品顕微鏡写真⑥……………86
写真19 遺構g・h検出状況……………11	写真52 木製品顕微鏡写真⑦……………87
写真20 遺構d・e検出状況……………11	写真53 木製品顕微鏡写真⑧……………88
写真21 遺構a検出状況……………11	写真54 木製品顕微鏡写真⑨……………89
写真22 調査区南端部土層断面……………11	写真55 木製品顕微鏡写真⑩……………90
写真23 A地点土層断面……………13	写真56 木製品顕微鏡写真⑪……………91
写真24 B地点土層断面……………13	写真57 木製品顕微鏡写真⑫……………92
写真25 掘削状況……………14	写真58 木製品顕微鏡写真⑬……………93
写真26 第1地点土層断面……………14	写真59 木製品顕微鏡写真⑭……………94
写真27 第2地点土層断面……………14	写真60 木製品顕微鏡写真⑮……………95
写真28 第3地点土層断面……………14	写真61 木製品顕微鏡写真⑯……………96
写真29 第4地点土層断面……………15	写真62 木製品顕微鏡写真⑰……………97
写真30 第5地点土層断面……………15	写真63 木製品顕微鏡写真⑱……………98
写真31 第6地点土層断面……………15	写真64 木製品顕微鏡写真⑲……………99

写真65 木製品顕微鏡写真⑳	100	写真81 多々良廃寺跡採取瓦③	123
写真66 木製品顕微鏡写真㉑	101	付篇4 館藏品調査報告—平生町宮原古墳出土遺物—	
写真67 木製品顕微鏡写真㉒	102	写真82 宮原古墳推定地遠景	124
写真68 木製品顕微鏡写真㉓	103	写真83 宮原古墳推定地近景	124
写真69 木製品顕微鏡写真㉔	104	写真84 宮原古墳出土遺物（当館所蔵）	127
写真70 木製品顕微鏡写真㉕	105	付篇5 山口県東部における弥生時代高地性集落出土土器	
写真71 木製品顕微鏡写真㉖	106	写真85 沓松遺跡遠景	129
写真72 木製品顕微鏡写真㉗	107	写真86 沓松遺跡近景	129
写真73 木製品顕微鏡写真㉘	108	写真87 植山遺跡・千束遺跡・筏山遺跡遠景	131
写真74 木製品顕微鏡写真㉙	109	写真88 植山遺跡	131
写真75 木製品顕微鏡写真㉚	110	写真89 千束遺跡	131
写真76 木製品顕微鏡写真㉛	111	写真90 出土遺物（土器）①	135
写真77 木製品顕微鏡写真㉜	112	写真91 出土遺物（土器）②	136
写真78 木製品顕微鏡写真㉝	113	写真92 出土遺物（土器）③	137
付篇3 防府市多々良廃寺跡採取の古代瓦			
写真79 多々良廃寺跡採取瓦①	121		
写真80 多々良廃寺跡採取瓦②	122		

## 表目次

第1章第1節 令和2年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告		表14 谷埋土5直上出土木製品の樹種	72
表1 埋蔵文化財資料館利用者の推移	1	表15 谷埋土4下層出土木製品の樹種	72
表2 令和2年度月別入館者数	1	表16 谷埋土4上層出土木製品の樹種	72
第2章第1節 令和2年度に実施した遺跡調査の概要		表17 谷埋土3出土木製品の樹種	72
表3 令和2年度山口大学構内遺跡調査一覧	6	表18 谷埋土2出土木製品の樹種	72
第2章付節2 山口大学構内の主な調査		表19 谷埋土4上層出土木製品（材）の樹種	73
表4 山口大学構内の主な調査一覧表	23	表20 谷埋土4上層出土木製品（火付け木） の樹種	73
付篇1 吉田遺跡古代理没谷出土の木製品（Ⅱ）		表21 谷埋土出土木製品（火付け木）の樹種	73
表5 谷埋土6直上出土木製品観察表	65	表22 谷左岸肩部杭・矢板の樹種	73
表6 谷埋土5直上出土木製品観察表	65	表23 谷埋土出土木製品（杭）の樹種	73
表7 谷埋土4下層出土木製品観察表	65	付篇3 防府市多々良廃寺跡採取の古代瓦	
表8 谷埋土4上層出土木製品観察表	66	表24 出土遺物（瓦）観察表	123
表9 谷埋土3出土木製品観察表	70	付篇4 館藏品調査報告—平生町宮原古墳出土遺物—	
表10 谷埋土2出土木製品観察表	70	表25 出土遺物（土器）観察表	127
表11 谷左岸肩部杭・矢板観察表	71	付篇5 山口県東部における弥生時代高地性集落出土土器	
表12 木製品の樹種（全体）	71	表26 出土遺物（土器）観察表	137
表13 谷埋土6直上出土木製品の樹種	71		

# 第1章 令和2年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる社会教育活動を行っている。具体的には、展示・情報公開活動として、当館展示室において年度内に3回程度の資料展示を行うこと、刊行物やホームページなど各種メディアを通じて遺跡及び収蔵資料の情報を公開すること、社会教育活動としては、講座やワークショップの開催、授業や講演会等への講師派遣、公立博物館との連携事業の開催など、学内外の要望に応じた地域連携・生涯学習支援活動を実施することである。

新型コロナウイルスの影響により、令和2年度は9月まで資料展示活動を行えなかった。10月に至り、本学の新型コロナウイルスに対する全学的な方針が示されたことから、一定の制限を設けて展示活動(令和2年度山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリー)連携特別展)を再開することになった。しかし、年度末から開催が予定されていた山口大学学術資産継承事業成果展『宝山の一角』については、委員会での審議の結果、新型コロナウイルスの流行(第3波)への対策が重視されたことから、開催が見送られることとなった。

社会教育活動では、山口県立山口博物館との連携で継続的に実施している講座「古代ウォーク」を、山口市大内地区を対象に実施した。

当年度は、展示開催期間が10月～1月の4ヶ月に限定されたことや、入館に際して諸制限を設けたことなどが影響し、総入館者数はわずかに152名であった(表2)。前年度比で92.3%の減少、平成7年度に計測を開始して以降、2番目に入館者が少ない年度となった(表1)。

次頁より、当該年度に実施した展示・情報公開活動と社会教育活動の詳細を報告する。

表1 埋蔵文化財資料館利用者の推移

平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30	令和元	令和2
355	267	191	200	516	142	555	573	913	669	808	1,157	1,228	776	1,333	1,718	1,473	1,072	2,037	1,787	1,995	2,192	2,072	1,918	1,964	152

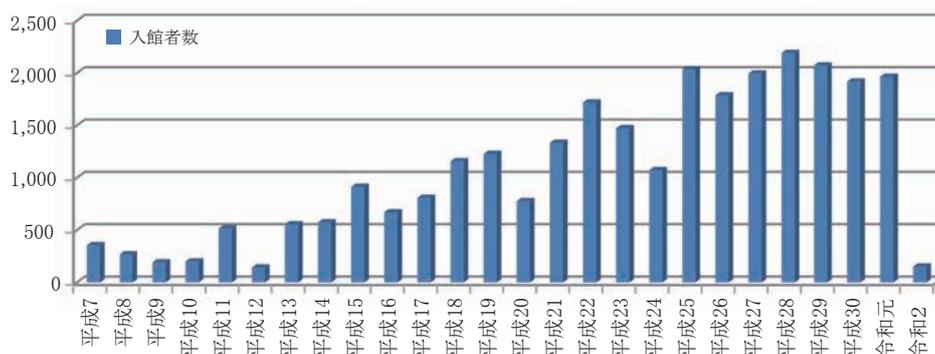
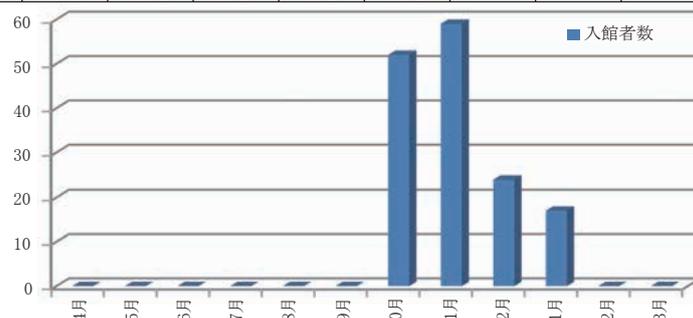


表2 令和2年度月別入館者数

入館者数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	休館	休館	休館	休館	休館	休館	52	59	24	17	休館	休館



## 第1節 資料館における展示・情報公開活動

### 1. 山口県大学ML連携特別展『白石遺跡とその周辺～白石から古墳をのぞむ～』

新型コロナウイルスの影響を受けて令和2年3月より7ヶ月間休館していたため、令和2年度初の展示は、山口大学ML(ミュージアム・ライブラリー)連携特別展参加企画となった。今年度の共通テーマは「のぞむ」となり、当館では、令和元年度に白石遺跡(弥生時代から古墳時代、室町時代の集落遺跡)内に所在する教育学部附属山口小学校の改修工事に伴った発掘調査の成果をうけて、『白石遺跡とその周辺～白石から古墳をのぞむ～』と題して、これまでの調査成果を振り返るとともに、近隣に所在する墳墓遺跡との関係を考察する展示を企画した。

展示の概要は、これまでの発掘調査の成果をもとに時代毎に白石遺跡の様相を概観したのち、亀山と障子ヶ岳に挟まれた一帯を白石遺跡周辺として、そこに所在する糸米遺跡、鴻ノ峰古墳群などの各墳墓遺跡について紹介した。また、白石遺跡が弥生時代終末から古墳時代中期にかけての墳墓群の被葬者たちの集落であった可能性を示した。

展示品については、当館所蔵の白石遺跡出土品のほか、(公財)山口県埋蔵文化財センターから鴻ノ峰古墳群・糸米遺跡・白石遺跡、山口県立山口博物館から茶臼山古墳群・茶臼山石棺群、山口市教育委員会から茶臼山石棺群の出土遺物や調査記録写真を借用した。各機関のご協力に感謝したい。

展示期間は令和2年10月5日(月)～令和3年1月29日(金)で、例年と比較すると減少したものの、会期中152名の方々に観覧いただいた。

#### 【註】

1) 発掘調査報告書では、鴻ノ峰古墳群の東部を鴻ノ峰古墳群、西部を白石古墳群としており、展示もそれに則った。

山口県教育委員会・建設省山口工事事務所(1977)「鴻ノ峰1号墳」, 山口県教育委員会文化課(編)『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』, 山口県埋蔵文化財調査報告第33集, 山口

建設省山口工事事務所・山口県教育委員会(1980)山口県教育委員会文化課(編), 『白石古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告書第52集, 山口

山口県教育委員会(1993)山口県埋蔵文化財センター(編)『白石第5号墳 白石近世墓』, 山口県埋蔵文化財調査報告第155集, 山口



写真1 特別展ポスター



写真2 展示の様相

## 2. 令和2年度刊行物

### 1. 『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成28年度－』

平成28年度に実施した資料館活動報告と構内遺跡発掘調査概報を所収した年報を刊行した。

活動報告としては、展示・情報公開活動として企画展と山口県大学ML連携特別展、山口大学学術資産継承事業成果展のほか、3件の当該年度刊行物を報告した。社会教育活動としては、山口県立山口博物館との連携により実施した講座1件を報告した。

発掘調査に関しては、本発掘調査1件(吉田)、予備発掘調査1件(吉田)、立会調査8件(吉田5・白石1・小串1・光1)の成果を報告した。本発掘調査1件は本学共同獣医学部のEAEVE認証(欧州獣医学教育認証)取得のため計画された実習棟(動物病理解剖施設(現:総合病性鑑定研究施設)新営に伴うもので、古代の埋没谷や円面硯を含む多量の須恵器のほか、製塩土器や鞆羽口などが出土した。

そのほか水久保による「動物医療センター(リニアック室等)新営その他工事(プレハブ撤去)に伴う立会調査出土の木製品について」、横山による「吉田遺跡第IV地区の調査」と題する付篇を所収している。

### 2. 『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』

当年報は当館設立以降から平成14年度までの構内遺跡調査成果を報告するものである。令和2年度は、平成10年に実施した調査報告を所収した年報を刊行した。事前調査3件(小串2・吉田1)、試掘調査2件(吉田1・白石1)、立会調査9件(吉田7・白石1・光1)の成果が報告されている。そのほか、田畑による「吉田遺跡第I地区E区の未報告図面及び写真について」と題する付篇を所収している。

事前調査のうち吉田地区1件は、第2学生食堂増築及び改修に伴う調査であり、弥生時代の遺構とともに弥生土器、石器が出土した。古代に所属するものとしては、溝や掘立柱建物跡などの遺構や、須恵器を主体とする土器類、鉄製品や鉄滓などが出土している。

### 3. 山口大学埋蔵文化財資料館通信 第31号『てらこや埋文』

平成18年(2005)より刊行を開始した広報誌であり、当初季刊で刊行していたが、平成23年度以降は年度末に1度の刊行となっている。巻頭頁に展示活動を、2-3頁に山口県立山口博物館との共済事業「古代ウォーク」実施報告を、4-5頁に遺跡めぐりサイクリングコース「平生町」の紹介記事を、6-7頁に「資料館この一品」として、白石遺跡出土の鳥形木製品を掲載している。



写真3 令和2年度埋蔵文化財資料館刊行物

## 第2節 資料館における社会教育活動

### 1. 山口県立山口博物館との連携事業『講座 古代ウォーク』

当館は、平成27年(2016)6月24日に山口博物館と連携協力協定を締結した。以降、毎年継続して実施している事業が『講座 古代ウォーク』である。これは、山口県内を県央部、東部、北部、西部の4ブロックに分け、順次見学地域を設定し、出土資料を観覧し、実際に遺跡地をめぐるという内容である。実施の際に重視している点は、当該自治体と連携しながら、未公開の資料も含め、出土資料を確認すること、周辺地形と遺跡の立地を確認するため、できる限り遺跡地まで歩いて行くことなどである。

令和2年度は県央部を対象とすることが決定しており、山口博物館との協議により小地域として山口市大内地区を選定し、山口市教育委員会の後援を得て、10月31日(土)に事業を開催することとなった。また山口博物館の方針に従い、募集定員は新型コロナウイルス感染対策を考慮し8組20名までとなった。

開催にあたり、4月24日(金)と6月11日(木)にコース設定のため現地視察、5月29日(金)に山口博物館に所蔵される大内地区出土・採取資料の確認を行った。10月17日(土)にコースの最終確認を行い、開催当日を迎えた。

当日は好天に恵まれ、24組36名の応募から抽選で選ばれた8組14名の参加者を迎え、講座を開催した。当日の実際のスケジュールは以下の通りであった。

12時30分～13時00分 受付

13時00分 開始予定だったが、参加者連絡葉書の開始時刻に誤記載があったことから30分遅延

13時30分 大内地区長野公民館で趣旨説明と遺物解説(写真4)

14時15分 大塚古墳群見学と解説(写真5)

14時25分 長野遺跡遠望と解説

14時45分 仏供田遺跡遠望と解説(写真7)

15時30分 妙見社古墳群2号墳見学と解説(写真8)

16時00分 大内氷上古墳見学と解説(写真9)

16時43分 氷上バス停留所でアンケート記入、解散。バスで長野公民館まで戻る

大内氷上古墳見学後、昭和10年(1935)の土取工事中に破壊された墳墓遺跡である入野遺跡、古代瓦が出土した御堀遺跡、山口市最古級の横穴式石室墳で、昭和45年(1970)に造成工事により消滅した馬塚古墳を訪れる予定であったが、開始時刻が遅れたこと、長野公民館に戻る路線バスの運行数が少ないことなど諸事情により、氷上バス停留所にて会を閉じ、解散することとなった。

長野公民館から氷上バス停留所まで往復約6kmの行程中、遺跡が分布していない地域を歩き続ける場面(写真6)もあったが、参加者全員が無事に歩き終えることができた。参加者からは「普段なかなか行けない場所、職員の方の解説を聞きながら巡るのはとても有意義です」「近くに住みながら、初めて行く所ばかりで興味深かったです」「また行きたい。すごくわかりやすく楽しかった。あと3つ行きたかった」などの声が寄せられた。

山口市内で開催される歴史見学ツアーは、室町時代(大内文化)、江戸時代末期～明治時代初期(明治維新)に偏重しがちであり、市内に色濃く残る先史時代の歴史遺産に目を向ける機会が少ないように感じられる。この傾向は、山口市ばかりでなく県内に広く見られることから、当講座の開催意義は大きいと思われる。また、毎年反省点として挙がる「資料観察と遺跡地見学時間の不足」を解消するため、講座修了直後より、次年度以降の開催時間の延長について検討されることとなった。



写真4 山口市長野公民館での資料熟覧



写真5 大塚1号墳見学・解説

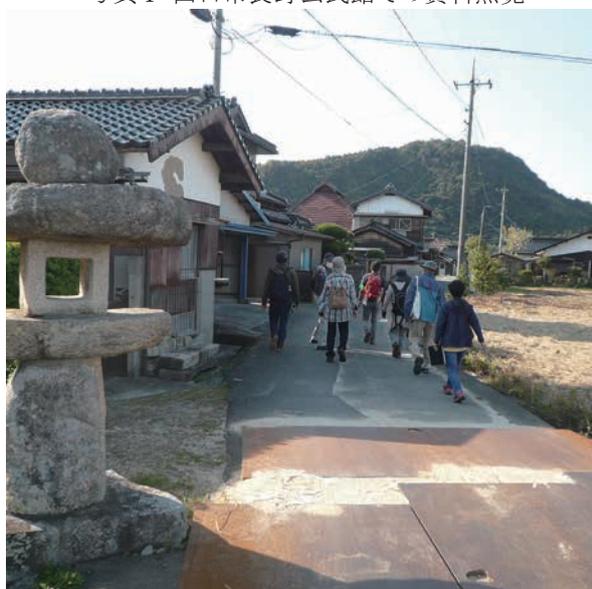


写真6 大内長野から大内氷上へ



写真7 氷上橋から仏供田遺跡遠望・解説

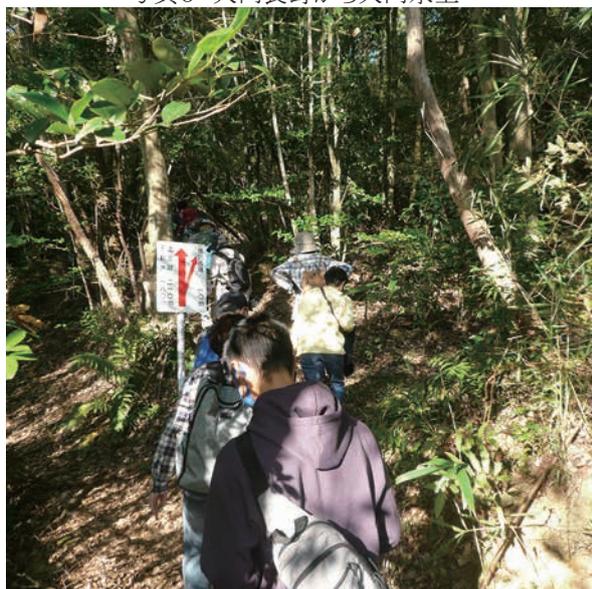


写真8 妙見社2号墳へ



写真9 大内氷上古墳見学・解説

## 第2章 令和2年度山口大学構内遺跡の調査

### 第1節 令和2年度に実施した遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市(吉田・白石構内)、宇部市(小串・常盤構内)、光市(光構内)の県内各市に分散しているが、各構内はいずれも「周知の埋蔵文化財包蔵地」内、いわゆる「遺跡」の上に立地している。各構内の様相を概観すると、吉田構内は縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての全時代を網羅する複合集落遺跡であり、古代官衙遺跡としても著名である吉田遺跡内に、白石構内は弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡である白石遺跡内に、小串・常盤構内は旧石器時代から江戸時代にかけての遺物を包含する山口大学医学部構内遺跡内・山口大学工学部構内遺跡内に、光構内は縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡・遺物散布地である御手洗遺跡と月待山遺跡にまたがり立地している。

このような環境のもと、山口大学埋蔵文化財資料館は、大学構内に埋存する貴重な埋蔵文化財の保護・調査・研究・活用する施設として、昭和52年(1977)に竣工し、翌昭和53年(1978)に構内遺跡調査要綱(埋蔵文化財資料館規則など)が制定、昭和54年(1979)に教職員が配置されて以降、その重責を担い続けている。当館の令和2年度の調査体制は以下の通りである。

まず、各構内において地下掘削を伴う工事が計画された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において事業計画を確認した後、文化財保護法の諸手続のもと、山口大学各構内が所在する地方公共団体(山口県および各市)の指導により、埋蔵文化財保護の観点から、文化財に支障が生じる可能性が考えられる場合には、本発掘・予備発掘・工事立会の3種いずれかの方法で、厳密に調査を実施している。「周知の埋蔵文化財包蔵地」外に位置する大学関連施設(公認サークル施設や職員宿舍等)敷地内で地下掘削を伴う工事が実施される場合においても、埋蔵文化財の新規発見の可能性を考慮して、できる限り工事掘削時に館員が確認調査を行っている。これらの調査に対する令和2年度の当館の教職員配置は、兼任の館長および副館長が1名ずつ、専任教員2名、専任技術職員1名、技術補佐員1名であった。上記の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合には、遺跡のさらなる現状変更を避けるべく、埋蔵文化財資料館専門委員会において、工事計画、工法の変更等で現状保存が可能であるか厳格な協議を行い、保存方法を選定している。また、調査成果については、地方公共団体への報告後、内業整理等を経て、可能な限り迅速に発掘調査概報(年報)を刊行している。

令和2年度は、本学における予算配分が新型コロナウイルス対策に集中したこともあり、土地の掘削を伴う工事計画は激減した。上記の体制のもと、令和2年度に当館が実施した大学構内における調査は、表3のとおり工事立会6件、確認調査1件にとどまった。

表3 令和2年度山口大学構内遺跡調査一覧

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	本書掲載頁
立会	基幹・環境設備(ため池改修)工事	吉田	R-12	18	7月9日	9
	農学部附属農場果樹園土壌改良作業	吉田	S-17・18	19.25	10月1日	10
	農学部授業(生物資源環境科学基礎実験)	吉田	Q-15 T-17	1	10月26日	12
	農学部附属農場ぶどう園植樹作業	吉田	R・S・T-17・18	13	12月18日	14
	学生会館(仮称)新営工事	吉田	G-13	2	11月16日	17
	ライフライン再生(特高受変電設備)工事	小串		91	9月8日	18
確認	基幹・環境整備(擁壁安全対策)工事	光		132	2月8・15・16日	19

**吉田構内**(本部、人文・教育・経済・理・農の各学部:山口市吉田1677-1、教育学部附属特別支援学校:同吉田3003所在)

5件の立会調査を実施した。農学部附属農場果樹園土壌改良作業に伴う立会調査において複数の遺構を確認したほかは、顕著な埋蔵文化財は確認されなかった。

**白石構内**(教育学部附属山口幼稚園:山口市白石三丁目1-2、同山口小学校:白石三丁目1-1、同山口中学校:白石一丁目9-1所在)

令和2年度中に掘削を伴う工事計画は立案されなかった。

**小串構内**(医学部、同附属病院:宇部市南小串1丁目1-1)

1件の工事立会が実施されたが、埋蔵文化財に支障は生じなかった。

**常盤構内**(工学部:宇部市常盤台2丁目16-1、尾山宿舍:同上野中町2658-3所在)

令和2年度中に土地の掘削を伴う工事計画は立案されなかった。

**光構内**(教育学部附属光小学校、同光中学校:光市室積8丁目4番1号)

周知の埋蔵文化財包蔵地隣接地にて確認調査を実施し、石垣裏込土の可能性のある層を確認した。



写真10 吉田構内航空写真(南東から)



写真11 白石構内(教育学部附属山口幼稚園・小学校)  
航空写真(東から)



写真12 白石構内(教育学部附属山口中学校)  
航空写真(南から)



図1 山口大学吉田・白石構内位置図



図2 小串・常盤構内位置図



写真13 小串構内航空写真（南東から）



写真14 常盤構内航空写真（南から）



写真15 光構内航空写真（北東から）



図3 光構内位置図

## 第2節 吉田構内(吉田遺跡)の調査

### 1. 基幹・環境整備(ため池改修)工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内R-12区

調査面積 18㎡

調査期間 令和2年7月9日

調査担当 横山成己

#### 調査結果

当工事は令和元年度に着手されており、同年度は予備発掘調査と立会調査を実施した。<sup>註1</sup> 工事は2カ年計画であったことから、翌令和2年度に掘削が行われる池4堤体部を対象に、立会調査を行うことになった。

江戸時代中期(18世紀前半～中頃)に作成された「地下上申絵図吉田村清図」に描かれた「北サコ堤」はため池2とみられ、ため池4は江戸時代後期以降に築造されたと考えられる。

工事は、ため池4の堤体南東部を部分的に切り通すものであったが(図4)、表土下は全て盛土で、コンクリート片などが混入していることから、現堤体が近現代に構築されたものであることが判明した(図5、写真16)。

#### 【註】

- 1) 横山成己(2023)「基幹・環境整備(ため池改修)工事に伴う予備発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-令和元年度-』, 山口  
横山成己(2023)「基幹・環境整備(ため池改修)工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-令和元年度-』, 山口



図4 調査区位置図



写真16 堤体土層断面(北東から)

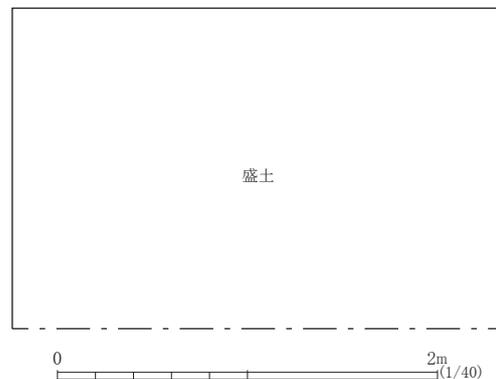


図5 土層断面柱状図

## 2. 農学部附属農場果樹園土壌改良作業に伴う立会調査



図6 調査区位置図

調査地区 吉田構内S-17・18区  
 調査面積 19.25㎡  
 調査期間 令和2年10月1日  
 調査担当 横山成己 水久保祥子  
 調査結果

農学部附属農場果樹園の南方から西方に位置する、動物医療センターから総合研究棟にかけての敷地は、既往の調査で古代官衙に関連する遺構・遺物が密に検出されていることから、果樹園敷地を含め、構内でも最も慎重な埋蔵文化財保護対応を要する地域の一つとなっている。ただし、敷地の大部分を占める果樹園については、小規模工事に伴う工事立会で遺構を確認することに<sup>註1</sup>とどまっております。地下の様相が不明瞭のままに現在に至っているため、附属農場関係者の理解と協力により、当該年度より農作業や授業での地下掘削に対しても立会調査を実施することとなった。

調査対象としたのは、西側ブドウ園の東方で実施された土壌改良を目的とした掘削で、規模は南北方向に全長38.5m、幅0.5m、深さ0.35～0.4mであった(図6、写真17・18)。

調査の結果、掘削域の中央付近は攪乱を受けていることが判明し、北側と南側にて露出した地山面に複数の遺構が分布することを確認した(図7、写真19～22)。遺構埋土は黒褐色、または灰色～黄灰色を呈しており、後者は中世以降の遺構と推定される。前者は土の締まりが弱いことから、近現代の攪乱である可能性が高い。

当調査の成果により、果樹園では広域に遺構が分布することが明らかとなった。

## 【註】

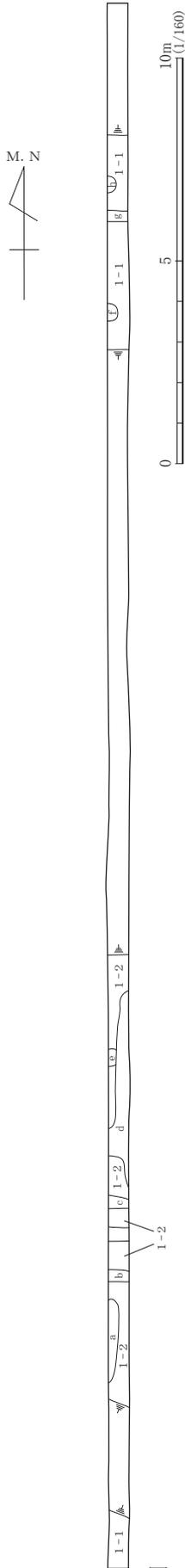
- 1) 横山成己(2011)「農学部附属農場内電源敷設工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成19年度—』, 山口  
 横山成己(2014)「農学部附属農場果樹園側溝新設工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成22年度—』, 山口



写真17 調査区全景(南から)



写真18 調査区全景(北から)



- 【遺構検出層(地山)】  
 1-1 灰色(7.5Y6/1)シルト(マンガン斑あり)  
 1-2 明黄褐色(2.5Y7/6)シルト
- 【遺構埋土】  
 a 黒褐色(2.5Y3/1)シルトに明黄褐色(2.5Y6/6)シルトのブロック混じる  
 b 黄灰色(2.5Y5/1)シルト  
 c 黄灰色(2.5Y5/1)シルト  
 d 黒褐色(2.5Y3/1)シルトに明黄褐色(2.5Y6/6)シルトのブロック混じる  
 e 黄灰色(2.5Y5/1)シルト  
 f 灰色(10Y4/1)シルトに明黄褐色(2.5Y7/6)シルトのブロック混じる  
 g 黄灰色(2.5Y5/1)シルト  
 h 灰色(10Y4/1)シルトに明黄褐色(2.5Y7/6)シルトのブロック混じる

図7 調査区平面図



写真 19 遺構g・h検出状況(東から)



写真 20 遺構d・e検出状況(東から)



写真 21 遺構a検出状況(東から)



写真 22 調査区南端部土層断面(北東から)

## 3. 農学部授業(生物資源環境科学基礎実験)に伴う立会調査

調査地区 吉田構内Q-15、T-17区 調査面積 1 m<sup>2</sup>  
 調査期間 令和2年10月26日 調査担当 横山成己

## 調査結果

農学部開講の授業「生物資源環境科学基礎実験」では、毎年吉田構内東～南東部に位置する農学部附属農場敷地内、果樹園と実験水田の2箇所<sup>註1</sup>で人力掘削を行い、本学移転前の土地利用である棚田耕作土の土壌観察を行っている。

前述したように、広域に及ぶ果樹園敷地の地下の様相は、大部分が不明確である。実験水田敷地<sup>註2</sup>においては、平成9年度に5号田にて実施した試掘調査<sup>註1</sup>や、水田水捌け改善のために実施した立会調査<sup>註2</sup>において、遺構や河川跡、遺物包含層を確認しており、当地が道祖ヶ峠から西に伸びる谷地に位置することが判明している。一方で、高所である1号田は、本学統合移転時の造成工事により大きく削平されていること、2号田についても、南方は現耕土直下が岩盤風化層であることが確認されている<sup>註3</sup>。

令和2年度の授業では、北側ブドウ園の北西側(A地点)と、実験水田5号田北西側(B地点)の2箇所(図8)で掘削が行われたことから、授業後に調査を実施した。

A地点では現地表下80cmの掘削が行われ、層厚10cmの表土の下位に、層厚40cmの造成土、層厚30cmの旧耕土を確認した(図9、写真23)。旧耕土下位にわずかに見られた黄灰色(2.5Y6/1)シルトは旧床土と推測される。

B地点では現地表下70cmの掘削が行われ、層厚15cmの耕土下に、層厚20cmの床土と、薄く遺存する旧耕土、層厚5cmの旧床土とみられる黄灰色(2.5Y6/1)シルトを確認した。その下に堆積する層厚20cmの黒褐色(10YR3/1)シルトは遺物包含層である可能性が高く、その下位に認められた層厚10cm以上の灰色(7.5YR5/1)砂は河川堆積とみられ、平成9年度の試掘調査で検出された河川1または2の下流部と推定される(図9、写真24)。

本学の吉田地区統合移転は昭和41年(1966)に始まるが、最初期に移転した農学部の関連施設は、埋蔵文化財調査を経ずして造成工事が行われたことから、構内面積のおよそ3分の1を占有している<sup>註4</sup>に



図8 調査区位置図

も関わらず、地下の埋蔵文化財情報が不足したまま現在に至っている。本件のような小規模掘削においても、地下の情報を丁寧に拾い上げることで、将来的な埋蔵文化財保護に繋げて行きたい。

【註】

- 1) 田畑直彦(2004)「農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 2) 横山成己(2013)「農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成21年度－』, 山口
- 3) 横山成己(2019)「農学部附属農場水田排水路工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成26年度－』, 山口  
横山成己(2020)「農学部附属農場水田排水路工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成27年度－』, 山口
- 4) 過去に実験水田が設けられていた構内北部の駐車場(キャンパスマスタープラン2021「社会連携ゾーン」)を含む。



写真 23 A地点土層断面(西から)



写真 24 B地点土層断面(西から)

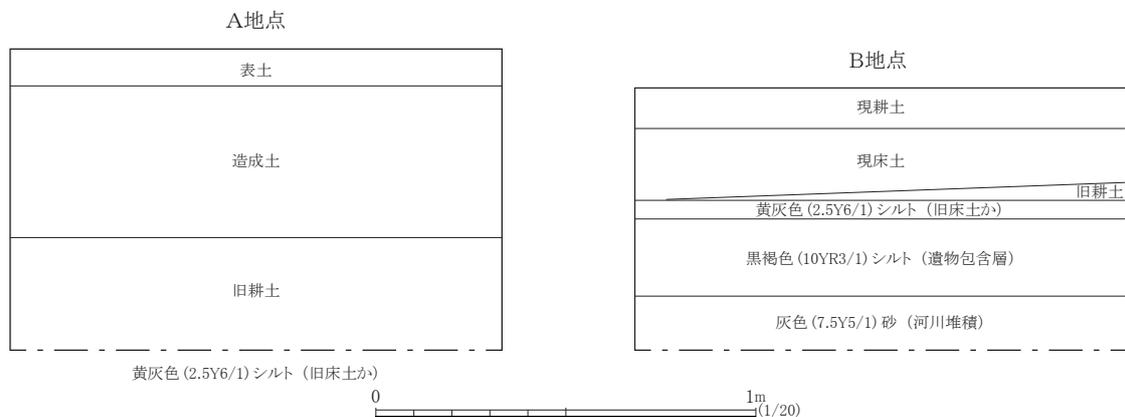


図9 A・B地点土層断面柱状図

#### 4. 農学部附属農場ぶどう園植樹作業に伴う立会調査



図10 調査区位置図

調査地区 吉田構内R・S・T-17・18区

調査面積 13m<sup>2</sup>

調査期間 令和2年12月18日

調査担当 横山成己 水久保祥子

#### 調査結果

農学部附属農場果樹園土壌改良に伴う立会調査中に、果樹園担当職員より、ぶどう苗植え付けのための掘削について相談が寄せられた。小型油圧ショベルでブドウ園に11箇所の掘削を行うという内容であったことから、これについても掘削時に立会調査を実施することにした(図10、写真25)。

掘削は深さ30~40cm程度で、13箇所において行われた。掘削坑はバケットポイントにより不整形となったため、記録作成が困難であったが、以下に各地点の概要を記しておく(図11~14、写真26~38)。

掘削が表土および造成土内に止まったのは、第1~3、10、11、13地点の6箇所であった。

第4地点の下位に確認された黄灰色(2.5Y6/1)は、土質から中世以降の遺構埋土である可能性がある。

地山状の地層が露出したのは、第5~9、12地点の6箇所である。このうち第6、8、9地点では部分的



写真25 掘削状況(北東から)



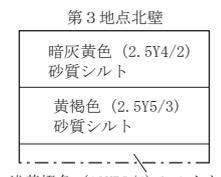
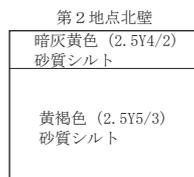
写真26 第1地点土層断面(南から)



写真27 第2地点土層断面(南から)



写真28 第3地点土層断面(南から)



浅黄褐色 (10YR8/4) シルトと黄灰色 (2.5Y6/1) シルトまだらに混じる

図11 第1~3地点土層断面柱状図



写真 29 第4地点土層断面(南から)

写真 30 第5地点土層断面(南から)

写真 31 第6地点土層断面(南から)

第4地点北壁

暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト
黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト
黄橙色 (10YR7/6) シルトと 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト まだらに混じる
黄灰色 (2.5Y6/1) シルト

第5地点北壁

灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルト
黄褐色 (10YR6/8) シルト (地山)

0 50cm (1/20)

第6地点北壁

灰黄褐色 (10YR5/2) シルトに 黒色 (2.5Y2/1) シルトの ブロック混じる
明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト (地山)

図 12 第4～6地点土層断面柱状図



写真 32 第7地点土層断面(北から)

写真 33 第8地点土層断面(西から)

写真 34 第9地点土層断面(東から)

7 トレンチ南壁

黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト
黄褐色 (10YR5/8) シルト (地山)

8 トレンチ東壁

灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルト
橙色 (7.5YR6/6) シルト (地山)

0 50cm (1/20)

9 トレンチ北壁

灰褐色 (10YR5/2) 砂質シルト
にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルト (地山)

灰黄色 (2.5Y6/1) シルトに  
にぶい黄褐色 (10YR7/4)  
シルトのブロック混じる  
(肥料土)

図 13 第7～9地点土層断面柱状図

に地山が深く掘り込まれていた。これらは近年の掘削痕とみられ、附属農場職員による暗渠の設置や、肥料の溝埋めなどが原因と推測される。

今年度の調査により、ブドウ園敷地では比較的浅い深度で地山が露出することが明らかとなった。附属農場設置以降、およそ半世紀が経過し、農作業による様々な掘削が行われたようであるが、未だ相当数の遺構が埋存するものと予想される。今後とも慎重な対応を心がけたい。

なお、調査終了後に果樹園担当者から、次年度以降の果樹(モモ)植え替えについて相談があった。附属農場は小型油圧ショベルバケットのツース盤を所有していないとのことであったので、今回の反省を踏まえ、次年度以降は植え替え地点に対し人力掘削による埋蔵文化財調査を実施することにした。



写真35 第10地点土層断面(南西から)



写真36 第11地点土層断面(南東から)



写真37 第12地点土層断面(南東から)



写真38 第13地点土層断面(北西から)

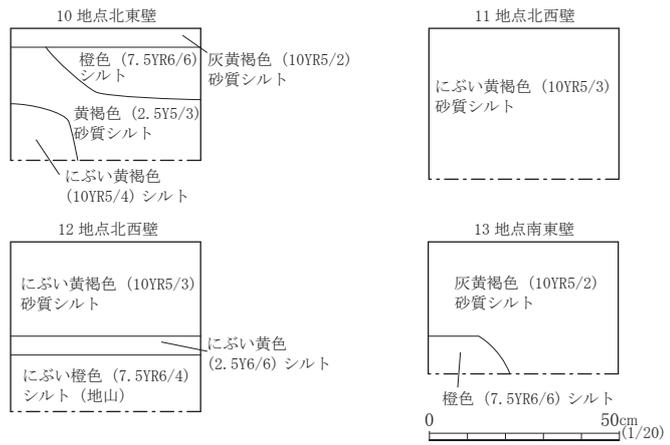


図14 第10～13地点土層断面柱状図

### 5. 学生会館(仮称)新営工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内G-13区

調査面積 2m<sup>2</sup>

調査期間 令和2年11月16日

調査担当 横山成己

#### 調査結果

令和元年度に、吉田構内正門南西側に位置する排水処理センター生活排水施設および廃棄物倉庫を解体し、学生会館(仮称)<sup>註1</sup>を新営する計画が立案され、同年度中に建物計画地を対象に予備発掘調査を実施した。調査では弥生時代に機能した河川跡1条を検出したが、遺物の包含が希薄であり、他に遺構も認められなかったことから、計画地に対する埋蔵文化財保護対応を終了した。

令和2年度は、建物の北西側に県道61号線(山口小郡秋穂線)と接続する架橋の新設工事が行われることから、本学構内敷地側の基礎掘削時に立会調査を実施することとなった(図15)。

掘削は、吉田構内の北西縁部を南西に流れる九田川沿いで行われ、掘削深度は現地地表下1,700cmに及んだ。土層断面調査を実施したところ、層厚1,200cmの造成土下に、層厚10cmの灰色(10Y4/1)砂質シルト(旧耕土)、層厚8cmのにぶい黄色(2.5Y6/3)シルト(旧床土)を確認した。その下位に層厚5cmの灰黄褐色(10YR6/2)シルト、層厚3cmの褐灰色(10YR6/1)砂混シルトを確認したが、遺物の包含は認められなかった。最下部に検出した層厚25cm以上のにぶい黄橙色(10YR6/3)シルトが地山とみられる(図16、写真39)。

#### 【註】

- 1) 現名称は「Uni E'terna 山口吉田学生会館」で、山口大学生活協同組合により学生用マンションとして運営されている。
- 2) 横山成己(2023)「学生会館(仮称)新営工事に伴う予備発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館—令和元年度—』, 山口

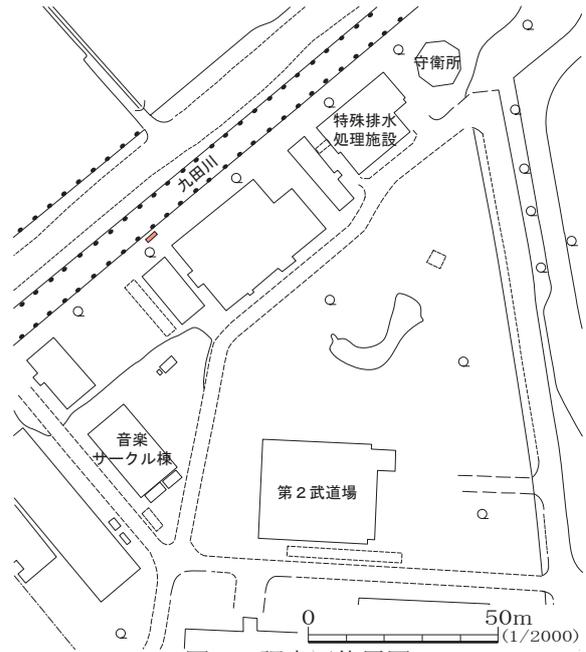


図15 調査区位置図



写真39 北西壁土層断面(北東から)

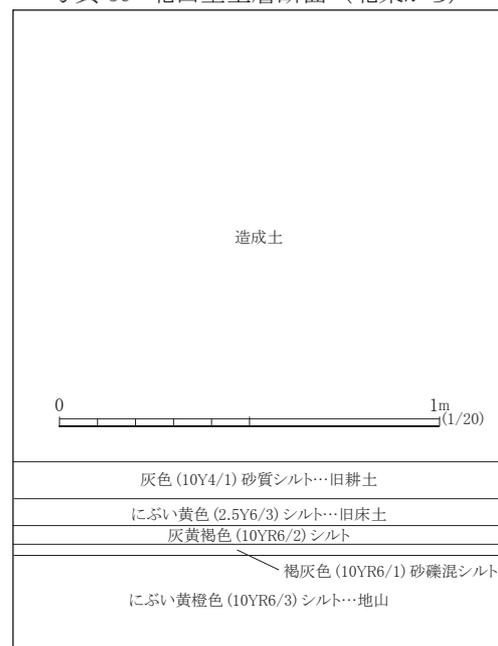


図16 土層断面柱状図

### 第3節 小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

#### 1. ライフライン再生(特高受変電設備)工事に伴う立会調査



図17 調査区位置図



写真40 調査地点土層断面(北東から)

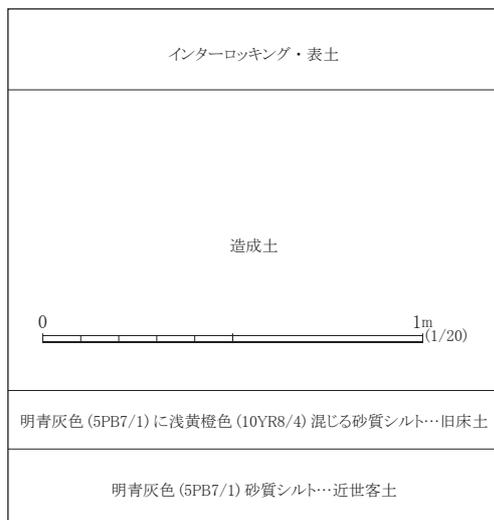


図18 土層断面柱状図

**調査地区** 小串構内北入口南側空地

**調査面積** 91㎡

**調査期間** 令和2年9月8日

**調査担当** 横山成己

#### 調査結果

令和元年度末に、小串構内北西部に位置する特高受変電棟およびエネルギーセンター棟から特高ケーブルを新設する計画が医学部より提出された。前者は共同溝にケーブルを引き込む計画であったが、後者は新たに地下掘削を行い埋設する計画であったことから、令和元年度第8回埋蔵文化財資料館専門委員会(令和2年3月30日開催)にて埋蔵文化財の有無を確認するための立会調査の実施が諮られ、承認された。

調査は、深度が最も深くなる北入口横の掘削時に行った(図17、写真40)。断面精査の結果、インターロッキングおよび表土の下に層厚80cmの造成土が存在し、その直下が層厚16cmの明青灰色(5PB7/1)に浅黄橙色(10YR8/4)混じるシルト(旧床土)であることを確認した。大正年間から昭和初期にかけて、旧山口県立宇部工業学校または旧宇部市高等小学校造成時に、耕土を除去したのであろう。

床土の下位に層厚20cm以上の明青灰色(5PB7/1)砂質シルトを検出した。これは近世の耕地化に伴う客土とみられ、既往の調査では主として中近世の遺物が出土しているが、今回の調査では遺物の包含を確認できなかった。

当客土は、小串構内北部では現地地表下150cmほどで検出されることが多いが、北東端部においてはおよそ120cmで検出されることが明らかとなった。今後の埋蔵文化財保護対応時の指標にしたい。

#### 【註】

1) 横山成己(2006)「医学部基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成16年度-』, 山口

## 第4節 光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査

### 1. 基幹・環境整備(擁壁安全対策)工事に伴う確認調査

調査地区 光構内

調査面積 約132㎡

調査期間 令和3年2月8・15・16日

調査担当 田畑直彦

#### 調査結果

当該工事は、擁壁安全対策に伴い既存の護岸を撤去して新たに擁壁を設置するものである。調査地は埋蔵文化財包蔵地ではないが、学生宿泊施設(学生実習宿泊棟)敷地を含む海岸沿いには、18世紀末に萩藩によって室積会所が設置され、『防長風土注進案』によると、1805(文化2)年に回船の荷揚波戸一カ所が「撫育方御蔵会所沖手」に築かれたとされる<sup>註1</sup>。また、光構内では、昭和58年度の自転車置場設置に伴う試掘調査で割石積の石垣、平成12年度の護岸石積改修工事に伴う立会調査<sup>註2</sup>で円礫<sup>註3</sup>を使用した石積み<sup>註3</sup>が検出され、近世～近代の陶磁器が出土している。

上記から、工事予定地内でも近世～近代の護岸や埋立地に関連する遺構・遺物が検出される可能性があるため、令和元年度第8回埋蔵文化財資料館専門委員会(令和2年3月30日(月))の審議を経て、確認調査を行った。工事では、護岸に沿ってL字状に掘削が行われ、2月8日に調査区西部(北西-南東ライン)、2月15日に調査区東部(北東-南西ライン)で調査を行った。また、2月26日に排土に含まれている遺物の調査を行った。

調査の結果、北西-南東ラインの南西壁では、現地表下約110～167cmで、層厚約27～70cmで瓦片を大量に含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂を検出した。瓦はいずれも砕かれた棧瓦片で他に陶磁器が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。砕かれた瓦片は透水を目的にしたと考えられるので、この層は近世もしくは近代の石垣の裏込土であった可能性がある。また、図19で示したようにこの層は調査区北・南側へ続いていると推測される。

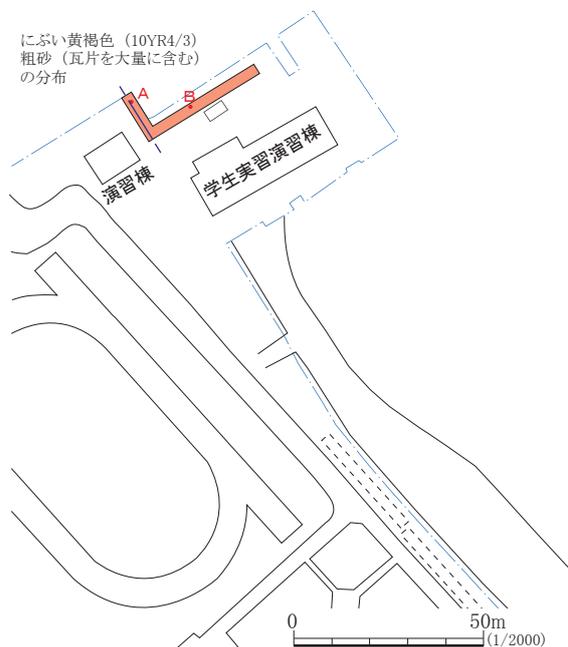


図19 調査区位置図



写真41 調査区西部調査前状況(東から)



写真42 調査区全景(北東から)



写真 43 調査区西部土層断面 (東から)

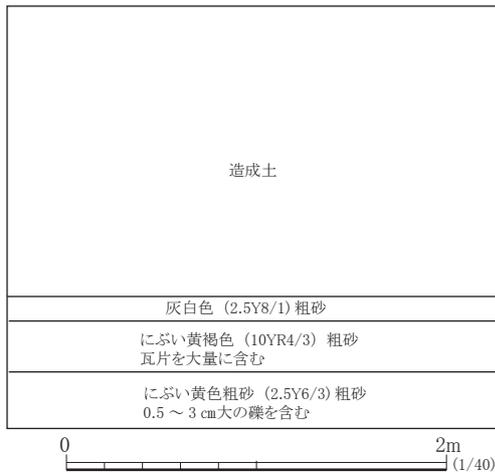


図 20 A地点土層断面柱状図

北東-南西ラインの南東壁では旧地表から最大で約150cmまで掘削が行われたが、全て造成土であった。

なお、造成土(排土を含む)からは、土師器及び近世～近代の陶磁器が出土した。

今後の調査で、瓦片を大量に含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂の分布や時期の確認が必要である。

【註】

- 1) 山口県文書館(編)(1963)『防長風土注進案第七巻 熊毛判』,山口
- 2) 森田孝一・磯部貴文(1985)「教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口
- 3) 田畑直彦(2017)「教育学部附属光・中学校護岸石積改修工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅩ』,山口



写真 44 調査区東部掘削状況 (南西から)



写真 45 B地点土層断面 (北西から)

## 付節1 令和2年度山口大学構内遺跡調査要項

### 山口大学埋蔵文化財資料館規則

(平成16年4月1日規則第148号)

改正 平成17年3月24日規則第52号 平成18年3月29日規則第54号  
平成21年4月20日規則第50号 平成22年2月26日規則第10号  
平成22年3月30日規則第42号 平成27年3月24日規則第172号  
令和2年3月18日規則第18号 令和3年3月30日規則第52号  
(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人山口大学学則(平成16年規則第1号)第10条の2第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

[国立大学法人山口大学学則(平成16年規則第1号)第10条の2第2項]  
(目的)

第2条 資料館は、文化財保護法(昭和25年法律第214号)に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)に所在する遺跡の埋蔵文化財の発掘調査及び研究を行い、出土品を収蔵・公開することを目的とする。

(業務)

第3条 資料館は、次の業務を行う。

- (1) 本法人構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究
- (2) 本法人構内等における埋蔵文化財の発掘調査及び報告書の刊行
- (3) その他埋蔵文化財に関する必要な業務

(職員)

第4条 資料館に、次の職員を置く。

- (1) 館長
- (2) 副館長
- (3) 資料館所属の大学教育職員
- (4) その他必要な職員

2 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

3 特別調査員は、専門委員会の意見を聴いて、館長が委嘱する。

(館長)

第5条 館長は、学術基盤を担当する副学長をもって充てる。

2 館長は、資料館の業務を掌理する。

(副館長)

第6条 副館長は、本法人の教授又は准教授のうちから館長が指名し

た者をもって充てる。

2 副館長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、副館長に欠員が生じた場合の後任の副館長の任期は、前任者の残任期間とする。

3 副館長は、館長を補佐し、日常的な業務の執行及びこれに必要な意思決定に関し、館長を助けるものとする。

(専門委員会)

第7条 資料館の管理及び運営に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会(以下「専門委員会」という。)を置く。

2 専門委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第8条 資料館に関する事務は、学術基盤部学術基盤推進課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、資料館に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

附 則(平成17年3月24日規則第52号)

この規則は、平成17年4月1日から施行する。

附 則(平成18年3月29日規則第54号)

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

附 則(平成21年4月20日規則第50号)

この規則は、平成21年4月20日から施行し、この規則による改正後の山口大学埋蔵文化財資料館規則の規定は、平成21年4月1日から適用する。

附 則(平成22年2月26日規則第10号)

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

附 則(平成22年3月30日規則第42号)

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

附 則(平成27年3月24日規則第172号)

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則(令和2年3月18日規則第18号)

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

## 山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会内規

(趣旨)

第1条 この内規は、山口大学埋蔵文化財資料館規則(平成16年規則第148号)第7条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会(以下「専門委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 専門委員会は、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)に関し、次の事項について審議する。

- (1) 管理及び運営に関する事項
- (2) 整備充実にに関する事項
- (3) 予算に関する事項
- (4) その他資料館に関し必要な事項

(組織)

第3条 専門委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1) 学術基盤担当副学長(館長)
- (2) 副館長
- (3) 資料館所属の専任大学教育職員
- (4) 考古学担当の国立大学法人山口大学専任の大学教育職員
- (5) 施設環境部長
- (6) 学術基盤部長
- (7) 学術基盤部学術基盤推進課長
- (8) 資料館所属の専任技術職員
- (9) 発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

(委員長)

第4条 専門委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。

2 委員長は、専門委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときには、副館長がその職務を代行する。

(委員以外の者の出席)

第5条 専門委員会が必要と認めるときは、専門委員以外の者を専門委員会に出席させることができる。

(部会等)

第6条 専門委員会は、必要に応じて部会等を置くことができる。

2 部会等に関し必要な事項は、専門委員会が別に定める。

(事務)

第7条 専門委員会の事務は、情報環境部学術情報課において処理する。

(雑則)

第8条 この内規に定めるもののほか、専門委員会の運営に関し必要な事項は、専門委員会が定める

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成21年6月15日から施行し、この規則による改正後の山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会内規の規定は、平成21年4月1日から適用する

附 則

この内規は、平成30年5月11日から施行し、平成30年4月1日から適用する。

附 則

この内規は、令和2年4月1日から施行する。

## 令和2年度 山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会

委員長 根ヶ山 徹(学術基盤担当副学長 館長 人文学部教授)

委員 藤間 充(副館長 農学部准教授) 村田 裕一(人文学部准教授)

高野 潔(施設環境部長)

田中 俊二(学術基盤部長・学術基盤部学術基盤推進課長併任)

田畑 直彦(埋蔵文化財資料館助教) 横山 成己(埋蔵文化財資料館助教)

水久保 祥子(埋蔵文化財資料館技術職員)

## 付節2 山口大学構内の主な調査

表4 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L~N-15	1	30?	土壌・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野忠熙	年報 XI・XXI
	第Ⅱ地区家畜病院新営	R-20・21 S・T-19・20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	〃	〃	年報 3
	第Ⅱ地区		3			弥生土器、土師器	試掘	〃	①
	第Ⅳ地区牛舎新営	S・T-10・11	4	300	弥生溝・土壌、古墳堅穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	〃	年報 14
	第Ⅳ地区		5				試掘	〃	
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区 および陸上競技場	D-19・20 E-17・19~21 F-17・18	6	1,600	杭列、弥生堅穴住居	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	〃	①
	第Ⅲ地区南区	G-21~23 H-22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃	
	第Ⅲ地区北区	H-20 I-19~21 J-20・21	8	1,400	堅穴住居、溝、土壌、柱穴		〃	〃	
	第Ⅲ地区東南区	G-23 H-23・24 I・J-24 K-23・24 L-23	9		弥生堅穴住居	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅲ地区野球場		10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃	
	第Ⅴ地区学生食堂	J-20 N-14 P-18	11		弥生溝、古墳土壌	弥生土器、土師器	事前	〃	
	第Ⅴ地区		12		河川跡、柱穴、土壌	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田 遺跡調査団	
	第Ⅰ地区C区大学本部新営	K・L-14	13	600	堅穴住居、溝、土壌	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	〃	
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃	
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	L-13	14		近世大溝	弥生土器、木炭屑	〃	〃	年報 X III
	第Ⅰ地区D区第2地点	L-13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石鍋	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第3地点	M-13・14	16		土壌、柱穴	弥生土器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N-14	17		土壌、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第5地点	L-12・13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第6地点	M-13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第7地点	M・N-13	20			須恵器	〃	〃	
昭和50年	第Ⅱ地区					弥生土器	試掘	〃	①
昭和51年	第Ⅲ地区				堅穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃	〃	
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N-21	22	160			〃	調査担当 近藤喬一	年報 X
昭和54年	教育学部附属養護学校新営	A-20・21 B-19・20 C-19	23	410	溝、土壌	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学埋蔵 文化財資料館 山口市 教育委員会	年報 IX
	理学部校舎新営	N・O-19・20	24	250			〃	〃	年報 X
	農学部動物舎新営	P-19	25	380			〃	〃	
	本部管理棟新営	L-14	26	740	溝、土壌、柱穴、中世井戸、土壌墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前	〃	年報 VIII
昭和55年	経済学部校舎新営	K-21	27	66			試掘	〃	年報 X
	農学部農業観測実験施設新営	P・Q-15	28	50	溝、土壌		事前	〃	
	本部環境整備	E-14~16 F-15・16	29				立会	〃	

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和55年	農学部環境整備	N-11 O-10・11 P-9・10	30				〃		年報X
昭和56年	教育学部校舎新営	H-19	31		弥生堅穴住居、 土壌、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報I
	教育学部音楽棟新営	H-16	32		溝		〃		
	教育学部美術科・ 技術科実験実習棟新営	J・K-19・20	33		旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、 須恵器、土師器	〃		
	正門橋脚新営	I-11	34				立会		
	時計塔埋設	I-14	35				〃		
	本部構内擁壁取設	K・L-13・14	36				〃		
	教養部構内擁壁取設	I-15～17 J-17	37				〃	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J～M-15 M・N・16	38				〃		
	農学部中庭整備	N・O-17	39				〃		
	暖房施設改修	O-16	40				〃	工法等変更	
学生部文化会車庫新営	M-8・9	41				〃	工法等変更		
学生部馬場整備	M・N-8・9	42				〃			
昭和57年	附属図書館増築	L・M-16	43	600	弥生～古墳溝、土壌、 柱穴、杭列	弥生土器、土師器、 須恵器、石器	事前		年報II
	大学会館新営	M・N-14・15	44	130	弥生堅穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護 学校プール新営	A・B-21	45	880			立会		
	放射性同位元素総合実験室 排水溝新営	O-18	46	2			〃		
	教養部自転車置場 昇降口新営	L-17	47	10			〃		
	教養部中庭環境整備	J・K-16	48	150			〃		
昭和58年	大学会館新営	M・N-12・13	49	2,000	古墳井戸、土壌、 柱穴、中世井戸、 掘立柱建物	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入陶磁器、 国産陶器、瓦質土器、 緑釉陶器、木簡、石器	事前		年報III
	ラグビー場防球ネット新営	G-18・19 H-19・20	50	114	弥生溝、弥生～古墳 堅穴住居、土壌	弥生土器、土師器、 石製品	〃	堅穴住居は工 法変更により 現地保存	
	理学部大学院校舎新営	M・N-20	51	409			立会		
	正門・南門二輪車置場 および正門花壇新営	I・J-12・13 H-23	52	183			〃		
	学生部アーチェリー場の台・ 電柱設置	N-8・9	53	33			〃		
	学生部厩舎整備	M-7・8	54	1.6			〃		
	学生部野球場散水栓取設	I-21 K-22	55	1			立会		
	教養部環境整備	I-15・16 J-15 K-17・18 L-18	56	81			〃		
学生部テニスコート改修	C-18 D-17 E-15・16 F-16	57	12			〃			
昭和59年	大学会館ケーブル布設	N-12	58	160	弥生土壌、柱穴	弥生土器	事前		年報IV
	大学会館排水管布設	J～L-13	59	180	弥生～中世遺物包含 層、古墳土壌、 古代～中世土壌、 溝、柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、青磁、白磁、 瓦質土器	〃		
	学生部テニスコートフェンス改修	B-17 C-16・17 D-16 E-15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K-19・21	61	8			立会		
昭和60年	大学会館環境整備	L-14・15 M・N-15	62	592	弥生～中世遺物包含 層、弥生堅穴住居、 貯蔵穴、土壌、 古代～近世土壌、 溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、 瓦質土器、輸入磁器、 国産陶磁器、土製品、 石斧、原石、鉄器、窯壁	試掘		年報V
	経済学部環境整備(樹木移植)	K・L-20	63	5			立会		
	農学部附属農場飼料園 排水溝修復整備	R-17～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、 輸入陶磁器、輪口、 石器、鉄滓	〃		
	農学部附属農場農道改修	V-15～17	65	325			〃		
	教育学部前庭環境整備 (樹木移植)	I・J-19	66	430			〃		
中央ボイラー棟車止設置	O・P-16	67	2.5		須恵器	〃			

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	学生会館環境整備(樹木移植)	M-15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	〃		年報V
	交通標識設置	J-20 N-14 P-18	69	3			〃		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備(実験動物運動場設置)	Q-18	70	16			〃		
	理学部環境整備(藤棚設置)	N-21	71	4			〃		
	農学部附属家畜病院舗装	S・T-19	72	270			〃		
昭和61年	国際交流会館新営	M-22・23 N-22	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鉄砲玉、加工痕のある剥片	試掘		年報VI
	山口銀行現金自動支払機設営(電線路埋設)	J-19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S-20 T・U-19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	〃	工法変更	
	農学部附属農場農道交通規制(施錠ポール設置)	M-10 P-15 Q-15～17	76	12			〃		
	正門横(水田内)境界杭設置	J-10	77	0.25	包含層か		〃		
経済学部環境整備(樹木移植・記念碑建立)	L-20	78	3			〃			
昭和61年	吉田構内交通標識設置	G-23 K-9 O-22 S-20 V-17	79	3		須恵器	立会		年報VI
	市道神郷1号線および問田神郷線の送水管理設	B-17・18 C-18・19 D-19・20 E-20・21 F-21・22 G-22・23 H-23・24 I・J・K-24 L-23・24 M・N-23 O-22・23 P・Q-22 R-21・22 S-21 T-20・21 U-19・20 V-18・19 W・X-18	80	2,100	古墳・弥生溝、 古代河川跡、 弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器(墨書のあるもの含む) 瓦質土器、製塩土器、石斧、板石	立会	山口市教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	教養部自動販売機埋設(屋根設置および観覧席移動)	K・L-18	81	3.5			〃		
	教養部身体障害者用スロープ取設	L-15・16	81	3			〃		
	経済学部散水線取設	L-20	83	4			〃		
	吉田構内水泳プール改修等	E-15 F-15・16 H-15	84	26.5	包含層		〃		
	農学部附属農場水道管理設	S-12	85	3			〃		
	吉田構内汚水排水管等総改修	M-18 O-15	86	15.5		土師質土器	〃		
	本部身体障害者用スロープ取設	L-14	87	12			〃		
	経済学部身体障害者用スロープ取設	K-18～20 L-18	88	78			〃	工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設	L-16	89	8		弥生土器	〃		
	教養部37番教室改修	K-16	90	1			〃		
	昭和62年	教育学部附属教育実践研究指導センター新営	J・K-18・19	91	240		ブランク、削器、植物遺体	事前	
教養部複合棟新営		J・K-17	92	35	埋甕土壇、溝、柱穴	土師器、須恵器、土師質土器、石斧	試掘		
教養部複合棟新営		I・J-16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和62年	教養部複合棟新営	J・K-17・18	94	900	落し穴、河川跡、 堅穴住居、土壇、溝、 井戸、埋土土壇、 掘立柱建物跡、 谷状遺構、柱穴	縄文土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 須恵質土器、 陶磁器、石鏃、石斧、 木製品	事前		年報 VII
	九田川局部改修	B-16・17 C-16	95	20			立会	山口県教育 委員会 山口大学埋蔵 文化財資料館	
	国際交流会館新営	M・N-22・23	96	195			〃		
	教育学部附属養護学校 自転車置場移設	B-20	97	1			〃		
	農学部附属農場E7圃場 排水管理設及び E6圃場進入路拡幅	L～N-12	98	55	中世土壇墓か	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入白磁、 国産磁器、敲石	〃		
	農学部植栽	N-17	99	3			〃		
経済学部集水桝取設	J-20	100	0.5			〃			
昭和63年	教養部複合棟新営に伴う 自転車置場移設	I-16	101	1	包含層か		立会		年報 VIII
	国際交流会館新営に伴う 排水管理設	N・O-22	102	35	河川跡(溝か)、 包含層	弥生土器、須恵器	〃		
	教養部複合棟新営に伴う ケーブル埋設	J-18	103	1			〃		
	サッカー・ラグビー場改修	F-19・21 G-18	104	25	性格不明	弥生土器	〃		
	消防用水設置	K～M-22	105	7.5			〃		
平成元年	水銀灯新営	J・L-15	106	4	古墳溝状遺構柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、 六連式製塩土器	事前		年報 IX
	榎野寮ボイラー設備改修	O-20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	H-22 I-21・22 J・K-21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器	〃		
	防火水槽配管布設	K・-21・22	109	15	柱穴		〃		
	吉田寮ボイラー設備改修	M-8	110	4			〃		
	体育施設系給水管改修	G・H-16	111	50		陶器	〃	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M-13	112	6			〃		
	吉田寮ボイラー棟 地下貯油槽設備改修	M-8	113	45	包含層	土師器、須恵器、 土師質土器、陶器、 剥片、 二次加工のある剥片	〃		
	第2武道場排水溝新営	G-15	114	2	溝		〃		
	案内標識設置	I-14 L-18	115	0.5			〃		
平成2年	本部車庫給水管改修	L-13	116	6.5		弥生土器	〃		年報 X
	大学会館前庭環境整備	N-14・15	117	35	中世溝		〃		
平成3年	大学会館前庭環境整備	M-15	118	2			〃		年報 X I
	第1学生食堂設備改修	I・J-19	119	7			〃		
	教育学部附属養護学校案内板設置	E-20	120	1			〃		
	農学部連合獣医学科棟新営	O・P-17	121	76	縄文河川	縄文土器、石器	試掘		
	農学部仮設プレハブ倉庫設置	P-17	122	6		須恵器	立会		
平成4年	農学部微生物実験室 その他模様替機械設備改修	P-17	123	8			〃		年報 X II
	大学会館前庭記念植樹	L・M-15	124	2			〃		
	サークル棟新営	F-14	125	1			〃		
	農学部連合獣医学科棟新営	O・P-17	126	980	縄文河川	縄文土器、石器	事前		
	交通規制標識及びバリカー設置	H-22 M-10 O-22 R-19 S-20	127				立会		
	吉田構内道路 (南門ロータリー)取設	H-23	128	40			〃		
	ボイラー室給水管漏水補修	O-16	129	4			〃		
	農学部附属農場ガラス室新営	S-14	130	3.5			〃		
大学会館前庭記念植樹	L・M-15	131	3			〃			
平成5年	泉町平川線緊急地方道路整備工事 及び山口大学吉田団地 環境整備(正門周辺)	E-11・12	132				〃		年報 X III
	泉町平川線緊急地方道路整備 (信号機設置)	I-11	133	7			〃		
	本部裏給水管埋設	K～M-13	134	70	溝、柱穴	弥生土器、土師器、 滑石製模造品	事前		
人文学部・理学部講義棟新営	M-20	135	4			試掘			

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成5年	第2屋内運動場新営	G・H-16	136	144	溝	弥生土器、須恵器、砥石	〃		年報XIII
	農学部給水管埋設	N~P-18	137	9			〃		
	基幹整備 (屋外他給水管改修)	L-15 M-17・18	138	16			立会		
	農学部連合獣医学科棟新営 電気設備	O-16	139	4			〃		
	大学会館前庭パブリカー設置	N-14	140	1			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L-15	141	1.6			〃		
	九田川河川局部改良	C-16 D-15・16	142	40			〃		
	農学部電柱立替	V-17	143	0.2			〃		
	農学部ガラス室設置	S-14	144	10			〃		
	教育学部給水管埋設	H・J-19	145	15			〃		
	環境整備(大学会館前庭)	L-14 M-13~15 N-14・15	146	140.9			〃		
環境整備(遺跡保存地区)	H-20 I-19~21 J-20・21	147	361			〃			
環境整備(正門周辺)	G-13 H-12	148	350			〃			
平成6年	グラント屋外照明施設新設	E-20 F-21 G-18・22 H-19・20 I-21	149	600	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生~古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	事前	工法等変更	年報XIV
	第2屋内運動場新営	G・I-15・16	150	726	弥生~古代溝、貯蔵穴、土坑、近世溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、砥石、磨石、敲石、剥片、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、下駄	〃		
	グラント屋外照明施設配線埋設	F-21 G-20・21 H-19・20	151	200	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生~古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	〃	工法等変更	
	経済学部商品資料館新営	K・L-21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験廃液処理施設棟新営	H-12・13	153	2	河川		〃		
	体育器具庫及び便所新営	G・H-17	154	60	河川		〃	工法等変更	
	経済学部商品資料館 仮設電柱設置	L-22 M-22・23	155	5			立会		
	人文学部前駐車場整備	K-23 L-22・23	156	6			〃		
	教育学部附属養護学校 生活排水管改修	F-19	157	2			〃		
	テニスコート改修	B-17 C-16・18 D-15~17 E-15・16	158	15			〃		
	教育学部附属養護学校 生活訓練施設棟新営	B-20~22 C-20	159	16			〃		
	陸上競技場整備(透水管埋設)	C-18 D-18・19	160	200			〃		
	ハンドボール場改修(プレハブ設置)	K-22	161	30			〃		
	野球場フェンス改修	H-22 I-21・22	162	3			立会		
	基幹環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O-16	163	4	河川か		〃		
	九田川河川局部改良	D-15 E-14・15	164	100			〃		
	第2屋内運動場電柱仮設	G-14・15	165	0.5			〃		
	教養部水道管破裂修理	I-16	166	2			〃		
	グラント屋外照明施設配線埋設	E-20 F-20~21 G-18・19・22 H-19・20 I-20・21	167	150			〃		
	公共下水道接続 (教育学部附属養護学校 プール排水施設設置)	A-21	168	4			〃		
サークル棟給水管埋設	F-14	169	1			〃			
プール新営給水管埋設	E-15 F-15・16	170	10			〃			
公共下水道接続 (汚水管雨水排水施設設置)	C-18	171	6	河川	土師器	〃			
教育学部スロープ設置(音楽棟)	H-17	172	10			〃			

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成7年	農学部RI実験研究施設新営	Q・R-17	173	86	中世井戸、近世溝	土師器、須恵器、瓦質土器	試掘		年報XV
	農学部RI実験研究施設新営	Q・R-17	174	514.5	近世溝	石斧、須恵器、磁器、瓦質土器	事前		
	公共下水道布設	C・D-18 E-16 G-14	175	72.5	溝、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道布設	C・D-18 D・E-17 E・F-16 F・G-15 G-14	176	344.9	土坑、河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、石器、骨角器	事前		
	農学部附属農場牛舎新営	S-10	177	23.6			試掘		
	独身宿舎改修	O-22	178	23.5	包含層、河川	縄文土器、須恵器	試掘		
	第2学生食堂増築	N・O-15	179	52.8	柱穴、包含層	須恵器、石鏃	試掘		
	第2屋内運動場外周照明施設新設	G-16	180	1.3			立会		
	機器分析センター新営工用電柱仮設	O-19~22 P-20	181	1			〃		
	農学部附属家畜病院バリア新設	R-19	182	0.2			〃		
	吉田寮可燃ゴミ置場新設	N-10	183	6			〃		
	農学部RI実験研究施設電気・情報通信ケーブル及びガス・給排水管布設	N・O・P・Q-16 P・Q-17	184	380.6		縄文土器、須恵器、土師器、瓦質土器、剥片	〃		
	情報処理センタースロープ新設	O-19	185	26.1			〃		
基幹環境整備(ATMネットワークケーブル布設)	E-19・20 F-18・19 G-18 H-17・18 I-15~17	186	276.3		弥生土器、土師器、須恵器	〃			
基幹環境整備(外灯新設)	J-20 K-19 M-10・11 N-12 O-19~22 P-18・19 Q-17・18	187	15.2			〃			
平成8年	基幹環境整備(独身宿舎・国際交流会館排水管布設)	M-23 O-22	188	22.5	河川		試掘		年報XVI
	基幹環境整備(外灯新設)	H・I-21・22	189	306	河川	縄文土器、弥生土器、土師器、石器	試掘		年報XVI
	農学部附属農場排水管布設	S-10・11	190	93	包含層、ピット	土師器、須恵器	試掘		
	陸上競技場鉄棒取設	G-18	191	5.5	包含層		立会		
	農学部附属農場排水溝改修	R-11	192	2.2			〃		
	榎野寮バリア新設	O-20・21	193	7			〃		
	サッカー場給水管取替	H-19・20 I-19	194	12	包含層		〃		
	基幹環境整備(共通教育センタースロープ・テラス新設)	J・K-17	195	14.3	河川	縄文土器、須恵器	〃		
	九田川河川局部改良	E-14	196	18			〃		
	農学部附属農場道路舗装	K-12・13 L-12 M-11	197	27.6	近世用水路、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器	〃		
本部裏排水管取替	K-14	198	2			〃			
農学部附属農場家畜病院患畜舎困障取設	S・T-19	199	1			〃			
平成9年	農学部附属農場堆肥舎新営	S-10	200	41.5			試掘		年報XVII
	農学部バイオ環境制御施設新営	Q-15・16	201	140	河川、溝	土師器、須恵器、製塩土器、石鏃	試掘		
	カーブミラー新設	M-11 N-21	202	0.8			立会		
	基幹環境整備(外灯新設)	J・K-21 K・L-22 L-23	203	23.5	包含層		〃		
	共通教育棟エレベーター新設	K-16	204	42			〃		
	九田川河川局部改良	E-14	205	48			〃		
	本部2号館西側バリア新設	L-13	206	0.5			〃		
	教育学部附属養護学校時計塔新設	D-21	207	1.4	包含層	土師器	〃		
	基幹環境整備(教育学部附属養護学校排水管取替)	C・D-21	208	17	河川		〃		
基幹環境整備(焼却場裏表土すきとり)	O-16	209	40			〃			
平成10年	第2学生食堂の増築及び改修	N・O-15	210	967.2	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石鏃、鉄製品	事前立会		年報XVIII
	教育学部附属養護学校給食室改修	C-21	211	12.3	縄文河川、土坑、柱穴	縄文土器、弥生土器	試掘		
	九田川河川局部改良	E・F-14 F-13	212	60			立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成10年	基幹環境整備(バリカー新設)	H-15 I・J-20 O-16・18 L-22	213	3.4			〃		年報 XVIII
	農学部動物用焼却炉改修	Q-18	214	53			〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-17~19 M・N-18	215	4			〃		
	理学部スロープ新設	M-18	216	16			〃		
平成11年	ステンレス回転モニュメント新設	M-13・14	217	27.6			〃		年報 XIX
	第2学生食堂増築その他に伴う 屋外電力線路施設整備	O-14~16	218	6.6	包含層、柱穴、河川	土師器、須恵器	〃		
	九田川河川局部改良	F・G-13 G・H-12	219	222			〃		
	第2学生食堂北西擁壁新設	N-14	220	43			〃		
	サッカー場南側防球ネット新設	G・H-22	221	3.2			〃		
	第1体育館・共通教育本館 スロープ新設	H-15 K-16	222	201.1			〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-12 K・L-18 L-15 M・N-17	223	4		須恵器	〃		
平成12年	総合研究棟新営	Q-18 R-17~19	224	268	河川	土師器、須恵器	試掘		年報 XX
	総合研究棟新営	Q・R-18・19 S-20	225	808	河川、土坑	縄文土器、土師器、 須恵器、製塩土器、 瓦質土器、石鏃	事前 立会		
	厩舎及び周辺施設改修	M-8	226	3.6			立会		
	架空電線取り外し埋設	O-15 P-15・16 Q-14・15・ 18・19 R-13・14 R・S-19 S-14	227	268	包含層		〃		
	九田川河川局部改良	H-11・12 I-10・11 J-9・10 K・L-9	228	616			〃		
	山口合同ガスガバナールーム新設 及びガス配管布設	O・P-22	229	313			〃		
	基幹環境整備 (バリカー新設)	N-22 M-10 V-17	230	0.4			〃		
	あずまや新設	L-18	231	5			〃		
	共通教育センター空調設備 新設	J-16	232	1.4			〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	J・K-21 M-10	233	2			〃		
平成13年	経済学部校舎改修 (プレハブ校舎新営)	K-21	234	40	河川	縄文土器、土師器、 須恵器	試掘		年報 XXI
	九田川河川局部改良 (平成12年度工事追加)	K-9 L-8・9	235	42	河川		立会		
	総合研究棟新営(屋外配管布設)	P・Q-18	236	60			〃		
	理学部改修1期(屋外配管布設)	M-18~20 N-19~21 O-19	237	76			〃		
	九田川河川局部改良	L-8	238	96			〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-14・15 J・L-15 M-15 N-16 Q-17・19 R-17・19 S・T・U・V-17	239	15.4	河川		〃		
	理学部校舎改修2期 (ポンプ室配管布設)	M-19	240	11			〃		
	理学部校舎改修2期 (自転車置場・渡り廊下屋根新設)	M・N-20	241	196			〃		
	第1学生食堂トイレ改修	I・J-19	242	6			〃		
	経済学部校舎改修 (プレハブ校舎配管布設)	L-21	243	10			〃		
平成14年	農学部校舎改修(解剖実習棟 プレハブ校舎新営)	R・S-19	244	520	掘立柱建物、柱穴、 土坑、包含層、河川	土師器、須恵器 (墨書土器)、 製塩土器、緑釉陶器、 瓦、轆口、鉈尾、銅鋌石	事前 立会		
	農学部附属農場実験圃場整地	O-14	245				〃		
	農学部校舎他改修	N~Q-17・18	246		河川	縄文土器	〃		
	理学部改修3期工事(薬品庫掲示板・ 自転車置場新設)	N・O-19 M-19・20	247				〃		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成14年	東アジア研究科 プレハブ校舎新営	N-21		248			〃		
	農学部校舎改修(解剖実習棟 プレハブ校舎新営)	R・S-19		249	河川、包含層		〃		
	教育学部トイレ改修	I-18		250			〃		
平成15年	農学部附属農場ガス管漏洩修理	O・P-16 Q-15		251	12 河川		立会		年報 1
	教育学部附属養護学校給食調理員 専用トイレ新設	C-21		252	1.7		〃		
	農学部環境観測実験棟南側温室	P・Q-15		253	52		〃		
	理学部中庭通路屋根新設	N-19		254	5.8		〃		
	理学部中庭あずまや新設	N-20		255	6.8		〃		
平成17年	基幹環境整備(外灯)	F-16、H-14 G-13~15・18 I-16・19 J-19、L-12 Q-15		256	11.5 河川		〃		年報 3
	教育総合研究センター改修Ⅰ期	J・K-16		257	130	ピット、河川	弥生土器、土師器	予備	
	教育総合研究センター改修Ⅰ期	I・J・K-16 H-12、E-20		258	580	ピット、河川	弥生土器、土師器 須恵器	立会	
	日本ベトロジー学会 水田土壌の断面調査	R-16		259	3.1	河川		〃	
	基幹環境整備(外灯)取設	H-17・22・23		260	7.7			〃	
平成18年	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K・L-16、K-17 J-16・17		261	92	ピット、溝、河川	弥生土器、土師器 石器	予備	年報 4
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20		262	36	包含層・谷	土師器・須恵器 製塩土器	予備	
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20		263	225	掘立柱建物跡、溝、土壌	土師器、須恵器 緑釉陶器、木製品(柱根)	本	
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20		264	19	包含層		立会	
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K・L-16		265	84	ピット、河川、杭列	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器	本	
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	J・K・L-16 I・J・K・L-17		266	480	ピット、河川、溝	弥生土器、土師器 打製石斧、柱材	立会	
	資料館(東亜経済研究所)新営	L-20・21		267	100	土壌、落ち込み、河川		予備	
	プレハブ倉庫移設	I-16		268	29			立会	
	第一学生食堂改修	J-20		269	75			〃	
	図書館前広場環境整備	L-17・18		270	55			〃	
平成19年	プレハブ校舎新営	F-14・15、G-15		271	400			〃	年報 5
	人文学部外灯用電源敷設	M-20		272	6			〃	
	テニスコートフェンス改修	B・C-17、C-18		273	10	河川、包含層		〃	
	農学部附属動物医療センター改修Ⅱ期	T-20		274	48	土壌、ピット	土師器・須恵器 瓦質土器	本	
	駐車場整備工事	J-21		275	10			立会	
	資料館(東亜経済研究所)新営	L-20・21		276	550			〃	
平成20年	第一事務局庁舎改修	L-15		277	5			〃	年報 6
	吉田寮前配水管敷設	M-11		278	11			〃	
	農学部附属農場内電源敷設	Q-15、S-18		279	0.5	ピット	須恵器	〃	
	経済学部研究棟改修工事	L・M-19		280	26	河川、落ち込み		予備	
	新教育研究棟新営	M・N-11・12		281	473	谷、ピット、溝	弥生土器、土師器 須恵器、瓦質土器 青磁	〃	
	新教育研究棟設備関連工事	L-12~14 M-12・13		282	313	ピット、溝、土壌	土師器、須恵器 緑釉陶器、白磁、青磁 国産陶器、砥石	本	
	新教育研究棟新営	M・N-11・12		283	1,333	掘立柱建物、ピット 溝、土壌、井戸、谷	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器、青磁 緑釉陶器、瓦質土器 木製品	〃	
	農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期	T-19 S-20		284	250	掘立柱建物、ピット 溝、谷	弥生土器、土師器 須恵器、製塩土器 青磁、瓦質土器 木製品	〃	
	国際交流会館B棟改修工事	N・O-22 N-23		285	457	河川		立会	
	サッカーグラウンド防球ネット取設	H-21・22 I-21		286	8.5	河川、ピット		〃	
	正門改修等工事	L-13 M-12・13		287	174	ピット、溝、落ち込み	土師器、須恵器 瓦質土器、陶器、磁器	〃	
教育実践センター廻りフェンス取設	K-19		288	2	土壌	縄文土器	〃		
平成21年	東アジア研究棟・経済学研究科新営	K-21		289	117	溝、河川	弥生土器、土師器 須恵器、木製品	予備	年報 7

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成21年	野球場防球ネット取設置	H-23 I-24 K-24	290	40	ピット、溝、包含層	弥生土器、砥石	予備		年報7
	教育学部研究実験棟改修	H・I-17・18 I・K-24	291	35.3			〃		
	里山整備工事	Q-10 O・P・Q-11	292	36.9			〃		
	新教育研究棟新営	L-13・14 M-11・12 N-12	293	340.5			立会		
	ピオトーブ周辺雨水配水管取設	H-12	294	60			〃		
	仮設高圧引込工事	L・M-10・11	295	7			〃		
	ため池整備工事	S-8	296	130			〃		
	基幹整備(铸铁管改修)	J-14・15	297	156	包含層		〃		
	事務局外灯設置	J-14	298	1			〃		
	第1事務局庁舎東駐車場カーポート設置	L-14	299	1.2	ピット		〃		
	基幹・環境整備 (第1体育館周辺排水整備)	H-13	300	300			〃		
	男子学生寮東側丘陵災害復旧	N-8 O-8・9	301	700			〃		
	人文学部外灯設置	N-21	302	10			〃		
	人文学部西側アプローチ改修	M-20	303	750			〃		
	教育学部研究実験棟改修電気設備	K-18	304	40	包含層、河川		〃		
	理学部ソーラー外灯設置	O-20	305	0.3			〃		
	農学部インターロッキング設置	P-17	306	9			〃		
	農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期	S-19・20	307	154	包含層、埋没谷	土師器、須恵器	〃		
	農学部附属農場水田暗渠排水	Q-15・16 R-15 S-15 T-15 U-15 V-15	308	96	包含層、河川	土師器、須恵器	〃		
	農学部植物工場新営	P-15	309	98	包含層	土師器、須恵器	〃		
男子学生寮新営	M-10・11	310	1350			〃			
ラグビー場排水整備	E-20 F-21	311	58.6			〃			
アーチェリー場整備工事	N-7・8 O-7・8	312	750			〃			
テニスコート改修	C-17 D-16・17	313	18.3			〃			
共通教育講義棟改修	L-17	314	11.6			〃			
石彫実習場整備その他	N・O・P-8 Q-9	315	29			〃			
平成22年	教育学部研究実験棟B棟改修工事	H・I・J-18	316	80	落ち込み、溝	弥生土器	予備 立会		年報8
	音楽サークル棟新営工事	G-14	317	13.5			予備		
	教育学部研究実験棟G棟改修工事	G-18	318	22			立会		
	吉田寮改修工事	L・M-9	319	1,820			〃		
	基幹整備(铸铁管改修)工事	Q-18	320	13.6	河川		〃		
	基幹整備(第1体育館周辺排水整備)工事	G-13	321	8			〃		
	事務局2号館車寄せ取設工事	L-14	322	3.6	土壌		〃		
	里山遊歩道手摺り取設工事	N・O-14	323	15.2			〃		
	人文学部駐輪場外灯設置工事	M-22	324	13.6			〃		
	教育学部附属特別支援学校 構内雨水排水補修工事	C・D-21	325	18	包含層、河川		〃		
農学部附属農場果樹園側溝新設工事	R・S-19	326	10	ピット、溝、土壌		〃			
平成23年	特高受変電設備棟新営工事	P・Q-16 R・S・T・U・V-17	327	380	ピット、杭列、河川	土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、石鏃	本 立会		年報9
	基幹整備 (第1体育館周辺排水整備)工事	G-13・14	328	72			立会		
	埋蔵文化財資料館スロープ取設工事	N-16	329	48			〃		
	第2学生食堂西側 テーブル・ベンチ取設工事	M-15	330	8			〃		
	農学部植物工場新設工事	P-15	331	224	ピット		〃		
	農学部連合獣医学科棟横倉庫 撤去・新設工事	O-17	332	75			〃		
	教育学部附属特別支援学校 散水栓増設工事	C・D-21	333	16.8			〃		
平成24年	図書館改修工事及び環境整備 (図書館周辺道路迂回)工事	M-16	334	172	河川、杭列	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 緑釉陶器、製塩土器 石器、木器、鈔帯丸鞆	本		年報10
	産業動物実験施設新営工事	S・T-10	335	45			予備		
	榎野寮新営工事	O-21・22 P-22	336	48	溝		須恵器	予備	
	第1学生食堂増築工事	I-19・20 J-20	337	66.1	河川、ピット		弥生土器、土師器	予備	
	陸上競技場トラック排水溝改修工事	D-17~19 E-17・19 F-16~19 G-16~18	338	495	河川、溝			立会	
	人文・理学部管理棟EV設置工事	M-20	339	42.75			〃		
農場本館事務室等改修機械設備工事	R・S-13	340	27			〃			
図書館改修その他工事 (廃棄物プール設置)	K-10	341	25			〃			

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成24年	国際交流会館1号館引込給水管改修工事	M・N-22	342	15			立会		年報10
平成25年	獣医学国際教育研究センター棟新営工事	P・Q-17	343	608	縄文時代河川	縄文土器	本		年報11
	第1武道場耐震改修その他工事	F・G-16 G-17	344	692	弥生古墳時代河川溝、土壌	弥生土器、土師器、石器 竹製網代編み製品	〃		
	第1武道場耐震改修その他工事	H-15	345	1			立会		
	農場本館研究・実験室改修工事	S-13	346	4			〃		
	農学部本館他電気接地改修工事	S-13	347	1			〃		
	榎野寮新営工事	O-20・21	348	35	落ち込み、ピット、河川		〃		
	陸上競技場外灯設置工事	E-19・20 F-19 G・H-18	349	56			〃		
	自転車置き場設置工事	G・H-15	350	90			〃		
平成26年	基幹・環境整備(太陽光発電設備)工事	L・M-15 L-19	351	20			〃		年報12
	交通標識設置工事	J-15 K-11 L-13 M-11・12 O-18	352	6	包含層		〃		
	学術情報資産の集約管理システム設備工事	K-14	353	22.8			〃		
	動物医療センター(リアック室等)新営その他工事	R-19 S-19・20	354	247	埋没谷 溝 土壌 ピット	須恵器、土師器、鉄器 製塩土器、墨書土器 木製品	本		
	榎野寮1号棟改修工事	O-20・21 P-20・21	355	801	落ち込み ピット 河川	須恵器、土師器	立会		
	動物医療センター改修電気設備工事	S-19	356	9			〃		
	農学部附属農場水田排水路工事	U・V-17	357	50			〃		
	経済学部D棟改修電気設備工事	K-19	358	4			〃		
平成27年	第1学生食堂増築工事	I-19・20 J-20	359	341	河川	弥生土器	〃		年報13
	第1学生食堂増築電気設備工事	I-19	360	16			〃		
	南門アプローチ整備工事	H・I-21・22	361	66.5	河川	弥生土器、土師器	〃		
	総合研究棟(国際総合科学部)改修工事	H-18・19	362	56.5	土壌、ピット、溝	弥生土器	本	工事位置変更	
	動物医療センター(リアック室等)新営その他工事(設備関連)	R・S-19	363	44.5	埋没谷	須恵器、土師器	立会		
	動物医療センター(リアック室等)新営その他工事(プレハブ撤去)	S-19・20	364	50	埋没谷	須恵器、土師器 製塩土器、輪羽口 木製品(音義木筒)	〃		
	動物医療センター(リアック室等)新営その他工事(外灯設置)	S-20	365	2	遺物包含層	須恵器	〃		
	動物医療センター外灯設置工事	S-20	366	22	土壌、溝埋没谷	須恵器、土師器	〃		
平成27年	共同獣医学部解剖実習棟前動物体焼却炉設置工事	R-19・20 S-20	367	10.75	遺物包含層		〃		年報13
	共同獣医学部控場設置築工事	R・S-20	368	25	遺物包含層		〃		
	共同獣医学部カーポート設置工事	N-17	369	3			〃		
	農学部附属農場水田排水路工事	T・U-15・17	370	100	溝		〃		
	理学部駐輪場屋根新設工事	N-20	371	16			〃		
	図書館周辺雨水排水整備工事	N-16	372	35			〃		
	総合研究棟横小路パッカー設置工事	Q-18・19	373	0.25			〃		
	総合研究棟北側喫煙所新設工事	Q-17・18	374	4.5			〃		
	陸上競技場横遊歩道標識設置工事	E-20 H-18	375	2			〃		
	正門前樹木植樹工事	I-12	376	5			〃		
	事務局前樹木移設工事	K-15 I-16	377	14.5			〃		
	平成28年	実習棟(動物病理解剖施設)新営その他工事	Q・R-19	378	491	埋没谷、土壌、ピット 風倒木痕	須恵器、土師器、円面硯 製塩土器、輪羽口 縦長剥片、打製石鏃 凹石、敲石、砥石、 木製品	本	
実習棟(動物病理解剖施設)新営その他工事		Q・R-18・19	379	233	遺物包含層	須恵器、土師器	立会		
総合研究棟(国際総合科学部)改修工事		H-18	380	160			〃		
農学部果樹園排水工事		O-15	381	9	竪穴式住居跡か 土壌、ピット	須恵器、土師質土器	〃	工法変更 (盛土保存)	
人文学部駐輪場屋根新設工事		M-20	382	26			〃		
共通教育棟周辺駐輪場整備工事		J・K・L-16 J・L-17	383	53	河川、遺物包含層		〃		
平成29年	福利厚生施設新営工事	M-17・18	384	149	竪穴式住居跡		予備		年報15
	福利厚生施設新営工事	M-17・18	385	1,100	竪穴式住居跡、河川 掘立柱建物跡、土壌 ピット、溝、風倒木痕 遺物包含層	縄文土器、弥生土器 初期須恵器、須恵器 土師器、石鏃、石錘 磨石	本	一部埋め戻し 保存	
	教育学部附属特別支援学校ガス管引替工事	C-21 D-20・21	386	41.5			立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成29年	解剖実習棟屋外環境整備工事	R-19	387	40.3			立会		年報15
	環境整備(ため池5)雨水改修工事	O-6 K-10 L-10	388	18.5			〃		
	理学部1号館駐輪場設置工事	N-20	389	3.8			〃		
平成30年	福利厚生施設新営工事(緊急)	M-18	390	91	土壌、ピット、溝		立会		年報16
	福利厚生施設新営工事(設備)	M-18	391	20			〃		
	農学部附属農場牛舎改修工事	T-10	392	1.35			〃		
	経済学部身障者用駐車場カーポート設置	K-21	393	3.6			〃		
	理学部3号館横駐輪場設置	P-18	394	64.1			〃		
	実験研究棟(中高温微生物研究センター)改修工事	O-16	395	21			〃		
	国際総合科学部誘導サイン取設	I-16	396	0.85			〃		
	基幹・環境整備(ブロック塀対策)工事	H-22・23 I・J-23・24 K-23	397	0.54			〃		
	桜花爛漫植替工事	L-12	398	51.5			〃		
音楽サークル棟空調設備設置	G-14・15	399	52.4			〃			
令和元年	学生会館(仮称)新営工事	G-13	400	75	河川	弥生土器	予備		年報17
	基幹・環境整備(ため池改修)工事	S・T-9	401	42			〃		
	基幹・環境整備(ため池改修)工事	S・T-8	402	2,810			立会		
	基幹・環境整備(ブロック塀対策)工事	H-22	403	23	河川		〃		
	生活排水処理施設解体に伴う排水管支障迂回工事	G・H-13	404	53			〃		
	東門フェンス改修工事	V・W-17	405	2.25			〃		
	総合研究棟(経済学系)改修工事	K-20	406	15.5			〃		
	ライフライン再生(電気設備)工事	B・C・D-21	407	169.4	河川、遺物包含層		〃		
	ライフライン再生(給水設備)工事	D・E-20	407	169.4	河川、遺物包含層		〃		
東アジア研究科・経済学部研究科棟渡り廊下屋根取設工事	K-21	408	9.7	河川		〃			
令和2年	基幹・環境整備(ため池改修)工事	R-12	409	18			立会		年報18
	農学部附属農場果樹園土壌改良作業	S-17・18	410	19.25	土壌、ピット		〃		
	農学部授業(生物資源環境科学基礎実験)	Q-15 T-17	411	1	河川		〃		
	農学部附属農場ぶどう園植樹作業	R・S・T-17・18	412	13			〃		
	学生会館(仮称)新営工事	G-13	413	2			〃		

## 白石構内

## 山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献				
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳堅穴住居、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅲ				
昭和60年	教育学部附属山口小学校散水栓改修		2	1			立会		年報Ⅴ				
	教育学部附属山口中学校球技コート整備		3	2			〃						
	教育学部附属幼稚園環境整備(樹木植樹)		4	1			〃						
昭和61年	教育学部山口附属学校	幼稚園・小学校部分	5	57	中世土壌か	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、	試掘		年報Ⅵ				
	汚水排水管布設	中学校部分			20	河川跡か・杭列				陶磁器、不明鉄製品、石鏃、剥片、植物遺体			
昭和61年	教育学部附属山口小学校電柱移設		6				立会		年報Ⅵ				
昭和62年	教育学部附属幼稚園遊戯室拡張		7	40			〃		年報Ⅶ				
昭和63年	教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剥片	〃		年報Ⅷ				
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳堅穴住居、土壌、溝、柱穴、河川跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質陶器、黒色土器、搔器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、石核、砥石	事前		年報Ⅸ				
	教育学部附属幼稚園バレーコート支柱設置	10								0.3			立会
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設	11								170	弥生溝状遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、削器、剥片、石核	〃
平成2年	教育学部附属山口中学校汚水排水管布設		12	70	溝状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、不明鉄製品、石鏃、敲石、扁平打製石斧、砥石、剥片	事前		年報Ⅹ				
			13	130		弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器、扁平打製石斧、砥石	立会						
平成6年	教育学部附属山口小学校プール新営給水管埋設		14	3			〃		年報ⅩⅣ				
	教育学部附属山口中学校プール新営給水管埋設		15	7			〃						
平成7年	教育学部附属山口中学校自転車置場新設		16	2.7			〃		年報ⅩⅤ				
平成10年	教育学部附属山口小学校給食室改修		17	15.8			試掘立会		年報ⅩⅧ				
平成12年	教育学部附属山口中学校防球ネット新設		18				立会		年報ⅩⅩ				
平成14年	教育学部附属山口中学校給水設備改修		19				〃						
平成15年	教育学部附属幼稚園運動場整備		20		河川、柱穴	土師器	〃						
	教育学部附属山口幼稚園庇新設 山口小学校スロープ新設		21	27.7			立会		年報1				
平成16年	白石地区市道歩道改修		22	1	河川		立会		年報2				
	教育学部附属山口小学校事務室新営		23	101	河川、土壌または溝		〃						
	教育学部附属山口幼稚園・小学校フェンス・通用門改修		24	11			〃						
平成17年	教育学部附属山口幼稚園・小学校給水管改修		25	10			立会		年報3				
平成19年	教育学部附属山口中学校校舎等改修		26	121	河川、落ち込み、ピット	縄文土器、弥生土器	予備		年報5				
	教育学部附属山口中学校校舎等改修		27	38	河川、包含層		立会						
平成21年	教育学部附属山口小学校共用棟・教室B棟間渡り廊下屋根取設		28	2.5			〃		年報7				

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成21年	教育学部附属幼稚園園内中庭池改修整備		29	50	落ち込み		立会		年報7
	教育学部附属山口中学校中庭庇取付		30	1.5			〃		
平成22年	教育学部附属山口小学校渡り廊下設置		31	12			立会		年報8
平成23年	教育学部附属学校園案内板設置工事		32	1			立会		年報9
	教育学部附属幼稚園渡り廊下屋根拡張工事		33	11.5			〃		
平成24年	教育学部附属幼稚園遊具設置工事		34	0.35			立会		年報10
	教育学部附属幼稚園園舎テラス取設工事		35	7.9			〃		
	教育学部附属山口中学校看板表示設置工事		36	0.6			〃		
	教育学部附属山口中学校テニスコート防球ネット嵩上げ工事		37	4.8			〃		
	教育学部附属山口中学校武道場新営植物移植工事		38	3			〃		
平成25年	教育学部附属山口中学校武道場新営工事		39	235.8		弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、木製品	予備		年報11
	教育学部附属山口中学校武道場新営工事に伴う外溝及び渡り廊下取設工事		40	77.6		縄文土器、弥生土器、土師器	立会		
平成27年	教育学部附属山口中学校グラウンド防球ネット新設工事		41	1.3			立会		年報13
	教育学部附属山口小学校ガス管交換工事		42	8			〃		
平成28年	教育学部附属山口小学校雨水管改修工事		43	24	土壌、溝、ピット	弥生土器、瓦質土器磁器	立会		年報14
平成30年	教育学部附属山口小学校運動場鉄棒改修		44	15			立会		年報16
令和元年	教育学部附属山口小学校改修工事(EV・渡り廊下)		45	60	河川		本		年報17
	教育学部附属山口小学校校舎改修工事		46	798	土壌、溝、ピット、	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	立会		
	教育学部附属山口小学校基幹・環境整備(ブロック塀対策)工事		47	0.54			〃		
	教育学部附属山口小学校校舎改修工事(仮設校舎)		48	205			〃		

小串構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報 III
	医学部図書館増築		2	4			立会		
	医学部体育館新営		3	1			〃		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報 IV
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	〃		
	医学部基幹整備(特高受変電設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
	医学部臨床講義棟病理解剖棟新営		7	38			〃		
昭和60年	医学部附属病院外来診療棟新営		8	390		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃		年報 V
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	〃		
	医学部看護婦宿舍改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舍改修		11	20			〃		
昭和61年	医学部環境整備(樹木移植)		12	40			〃		年報 VI
	医学部附属病院外来診療棟新営		13	5			〃		
	医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等(雨水樹埋設)		14	18			〃		
昭和62年	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			〃		年報 VII
	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、細石刃核	試掘		
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、敲石、礫、原石、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	立会		年報 VIII
	医学部附属病院運動場整備		18	220			〃		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新営		19	45		削器、細石刃、二次加工のある剥片、剥片、石核	試掘		年報 IX
平成3年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報 X I
平成4年	焼却棟地盤調査		22				〃		年報 X II
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他		23	9			〃		年報 X III
	医学部附属病院基幹設備(焼却棟新営)		24	6			〃		
平成6年	医学部附属病院MRI-CT装置棟新営		25	300			〃		年報 X IV
平成7年	医学部附属病院看護婦宿舍新営		26	27			試掘		年報 X V
平成8年	医療技術短期大学部屋外排水管布設		27	6			立会		年報 X VI
平成9年	医学部慰霊碑・納骨堂新営		28	15.2			試掘		年報 X VII
	基幹環境整備(看護婦宿舍浄化槽撤去)		29	4			立会		
	医学部剖検棟移設		30	10			〃		
平成10年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線)		31	253.1	包含層、近世～近代用水路	剥片、弥生土器、土師器、陶器、磁器	事前	宇部市教育委員会と合同調査	年報 X VIII
	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線・医学部敷地西側特殊道路)		32	381.1	包含層、近世～近代溝	剥片、縄文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器	〃	宇部市教育委員会と合同調査	年報 X VIII
平成11年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線)		33	818.9	近世～近代用水路土坑	瓦質土器、土師質土器陶器、磁器、銭貨	〃	宇部市教育委員会と合同調査	年報 X IX
平成13年	医学部附属病院立体駐車場新営		34	229	包含層	縄文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器鉄釘	試掘		年報 XXI
平成14年	医学部附属病院高エネルギー棟新営		35	13.25			〃		
	総合研究棟新営		36	382	包含層	縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器	〃		
平成15年	基幹環境整備(煙突)新営		37	76			試掘		年報 1

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成16年	医学部基幹環境整備 (地下オイルタンク他)		38	144		縄文土器、土師器、 陶器、磁器、石錘	試掘		年報 2
	医学部職員宿舎他公共下水接続		39	400		弥生土器、土師器、 瓦質土器、陶器、磁器	〃		
	医学部総合研究棟北側 連絡用渡り廊下取設		40	40.6			立会		
平成17年	医学部附属病院基幹環境整備 (冷熱源設備他改修)		41	37			〃		年報 3
	医学部南側通用門塀取設		42	30			〃		
平成18年	モニュメント設置		43	6.2			〃		年報 4
平成19年	医学部総合研究棟改修Ⅰ期		44	6.75			予備		年報 5
平成20年	医学部総合研究棟改修Ⅱ期		45	9			〃		年報 6
平成21年	小串宿舎B棟埋設ガス管改修		46	58			立会		年報 7
平成22年	医学部附属病院患者用 ・職員用立体駐車場建設		47	125		煙管、陶器、磁器、 瓦質土器、土師器	予備 立会		年報 8
	地域医療教育研修センター新営		48	156	畦畔、溝	磁器、陶器、泥メノコ、 土人形、煙管、土錘、 土師器、須恵器、 弥生土器、縄文土器	予備		
平成23年	地域医療教育研修センター新営工事		49	4			立会		年報 9
平成26年	基幹・環境整備及び診療棟・病棟 新営工事		50	90		縄文土器、土師器、 石錘	予備		年報 12
	基幹・環境整備及び診療棟・病棟 新営工事		51	30			立会		
	廃棄物管理棟新営工事		52	149			〃		
平成27年	保育所新営その他工事		53	50		陶器	予備		年報 13
平成28年	基幹・環境整備及び診療棟・病棟 新営工事(自家発電設備工事)		54	100		弥生土器、石錘	立会		年報 14
平成30年	総合研究棟(医学系)新営工事 (機械設備工事)		55	6			立会		年報 16
	基幹・環境整備及び診療棟・病棟 新営工事		56	75			〃		
	基幹・環境整備(熱源設備更新)工事		57	15			〃		
令和2年	ライフライン再生 (特高受変電設備)工事		58	91			立会		年報 18

山口大学構内の主な調査

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報 III
	工学部図書館増築		2	70			〃		
昭和59年	工学部尾山宿舍排水管布設			20			立会		年報 IV
昭和60年	工学部尾山宿舍擁壁取設等			65			〃		年報 V
	工学部受水槽改修		3	1.5			〃		
昭和61年	工学部尾山宿舍排水管改修			6			〃		年報 VI
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			〃		
	情報処理センター(常盤センター)空調設備取設		5	30			〃		
昭和63年	工学部焼却炉上屋新営		6	225			〃		年報 VIII
平成元年	工学部夜間照明装置及び防球ネット設置		7	2			〃		年報 IX
	工学部記念植樹		8	2.5			〃		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			〃		年報 X
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			〃		年報 X I
平成4年	工学部プレハブ研究・実験棟新営		11	6			試掘		年報 X II
	工学部・工業短期大学の改組再編・博士課程設置に伴う建築物等の新営		12	40			〃		
	工学部および工業短期大学部職員宿舍取壊		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			〃		
平成5年	工学部プレハブ研究・実験棟新営		15	12			試掘		年報 X III
	工学部地域共同研究開発センター新営		16	16			〃		
平成7年	国際交流会館新営		17	6.4			〃		年報 X V
平成8年	国際交流会館新営		18	352	段状遺構	ナイフ形石器、剥片	事前		年報 X VI
平成12年	工学部福利厚生棟新営		19	38.5			試掘		年報 X X
平成13年	工学部インキュベーションセンター新営		20	60		土師質土器、瓦	〃		年報 XX I
平成14年	総合研究棟新営		21	13.5			〃		
平成15年	工学部本館改修		22	428			立会		年報 1
平成16年	工学部定歪速度応力腐食割れ実験室新営		23	20			試掘		年報 2
	工学部光半導体素子実験室新営		24	52.5			〃		
	工学部雨水幹線工事		25	9			立会		
平成17年	工学部職員宿舍揚水施設改修		26	65			〃		年報 3
	工学部会議棟身障者スロープ取設置		27	38			〃		
平成18年	総合研究棟改修工事(Ⅱ期・本館北)		28	280			確認		年報 4
平成19年	工学部総合研究棟改修(Ⅲ期・本館)		29	147			〃		年報 5
平成20年	工学部女子学生寄宿舎新営その他		30	24			予備		年報 6
平成21年	工学部ガス管改修		31	12.5			確認		年報 7
平成26年	常盤寮C棟新営工事		32	103			立会		年報 12

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報 III
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 焼却炉新営		2				立会		年報 IV
昭和60年	教育学部附属光中学校 外灯改修		3	1		土師器	〃		年報 V
昭和61年	教育学部附属光小学校創立 記念事業(ブロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	〃		年報 VI
昭和62年	教育学部附属光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、 瓦質土器、 土師質土器、瓦	〃	御手洗湾採集	年報 VII
昭和63年	教育学部附属光小学校 遊器具移設		6	10		土師器、土師質土器、 陶磁器	〃		年報 VIII
	教育学部附属光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、 土錘	〃	御手洗湾採集	
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 施釉陶器、磁器、 土錘、剥片、鉾滓	試掘	御手洗湾採集 遺物含む	年報 IX
	教育学部附属光小学校 運動場改修		9	23	土壌	土師器、須恵器、 須恵器模倣土師器	事前		
平成3年	教育学部附属光中学校 武道館新営		10	38	土壌、溝状遺構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報 X I
	教育学部附属光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石錘	立会		
	教育学部附属光中学校 バックネット新設		12	0.5		土師器	〃		
平成4年	教育学部附属光中学校 武道館新営		13	500	土壌、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前		年報 X II
	教育学部附属光中学校 武道館地盤調査		14				立会		
平成5年	教育学部附属光中学校 武道館新営その他		15	6			〃		年報 X III
平成6年	教育医学部附属光小中学校 プール新営給排水管理設		16	19			〃		年報 X IV
平成8年	教育学部附属光小・中学校 囲障(外周フェンス・防球ネット)取設		17	7		陶磁器	〃		年報 X VI
平成10年	教育学部附属光小学校 給食室改修		18	5.2			〃		年報 X VIII
平成11年	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包含層、柱穴、 近世土坑、柱穴	土師器、須恵器、 韓式系土器、 甕形土器、陶器、磁器	試掘 立会		年報 X IX
平成12年	教育学部附属光小・中学校 護岸石積改修		20	173	石垣	陶磁器	立会		年報 X X
	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		21	23			〃		
平成15年	教育学部附属光小学校エレベータ 昇降路等新設		22	169	ピット、土壌、溝	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器、石器	試掘 立会		年報 1
平成17年	教育学部附属光小学校 体育器具庫新営		23	53		土師器、須恵器 磁器陶	予備		年報 3
	教育学部附属光小・中学校護岸改修		24	40	石垣	陶磁器	立会		
平成21年	教育学部附属光中学校校舎改修		25	107	ピット、土壌	須恵器	本		年報 7
	教育学部附属光中学校校舎改修工事 に伴うプレハブ建設		26	225			立会		
平成22年	教育学部附属光中学校 防球ネット設備		27	1			立会		年報 8
平成23年	教育学部附属光小学校 下水道接続工事		28	19.4		土師器、須恵器、陶磁器	予備		年報 9
	教育各部附属光小学校遊具設置工事		29	20			立会		
平成24年	教育学部附属光小学校下水 接続工事		30	125.4	ピット、土壌、溝、 落ち込み、包含層	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 韓式系土器、製塩土器	本		年報 10
	教育学部附属光小学校下水 接続工事		31	889	ピット、土壌、溝、 落ち込み、包含層	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 韓式系土器、製塩土器	立会		
平成25年	教育学部附属光小学校仮設校舎 設置工事		32	57	土壌	土師器	立会		年報 11
	教育学部附属光小学校改修その他工事 教育学部附属光小学校改修その他機械 設備工事 教育学部附属光小学校改修その他電気 設備工事		33	412	落ち込み、包含層	土師器、須恵器	立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成26年	教育学部附属光小学校グラウンド鉄棒新設工事		34	23	ピット	縄文土器、須恵器土師器、鉄器	立会		年報12
	教育学部附属光中学校校舎排水管改修工事		35	3			緊急		
平成28年	教育学部附属光小学校バスケットゴール設置工事		36	4			立会		年報14
平成30年	基幹・環境整備(ブロック塀対策)工事		37	7.3			立会		年報16
令和2年	基幹・環境整備(擁壁安全対策)工事		38	132			確認		年報18

その他構内

調査年度	調査名	構内地区割	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート艇庫合宿研修所整備	宇部市大字小野字土井	0.5			立会		年報IV
	学生部ヨット艇庫合宿研修所整備	吉敷郡秋徳町東字中道				〃		
昭和60年	熊野荘給湯機器取設	山口市熊野町3-21	7			〃		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	35	杭		〃		年報VI
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市旭通り2丁目3-32 山口市水の上町6-9	1 7		土師質土器 瓦	〃	6号宿舎 2号宿舎	
昭和63年	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市白石二丁目8-7	1		須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃	7号宿舎採集	年報VIII
平成元年	本部職員宿舎公共下水道切替	山口市水の上町6-1	1			〃	1号宿舎	年報IX
平成2年	人文・理学部職員宿舎公共下水道切替	山口市石観音町1-25	1.2		陶磁器	〃	7号宿舎	年報X
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市香山町3-1	0.5			〃	3号宿舎	
平成3年	湯田宿舎A棟給配水その他改修	山口市湯田温泉6丁目	30			〃		年報XI
	経済学部6号職員宿舎電柱設置	山口市旭通り2丁目3-32	0.5			〃		
	人文・理学部職員宿舎公共下水道切替	山口市天花932-2	1			〃		
平成4年	上堅小路共同下水管布設	山口市上堅小路字久保7-4	7			〃		年報XII
平成6年	湯田宿舎公共下水道接続及び排水施設改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	44			〃		年報XIV
平成15年	ボート部合宿所給排水整備	宇部市大字小野字土井	80			確認		年報1
平成16年	湯田宿舎B棟自転車置場新営	山口市湯田温泉6丁目8-29	11			確認		年報2
平成17年	経済学部職員宿舎2号フェンス取替	山口市水の上街6-9	1			確認		年報3
	工学部職員宿舎(尾山)揚水施設改修	宇部市上野中町1-33・34	15			確認		
平成21年	秋徳団地(ヨット艇庫)浄化槽改修	山口市秋徳東706-2	4.5			〃		年報7

※文献① 山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけではなく注意が必要である。

山口大学構内の主な調査

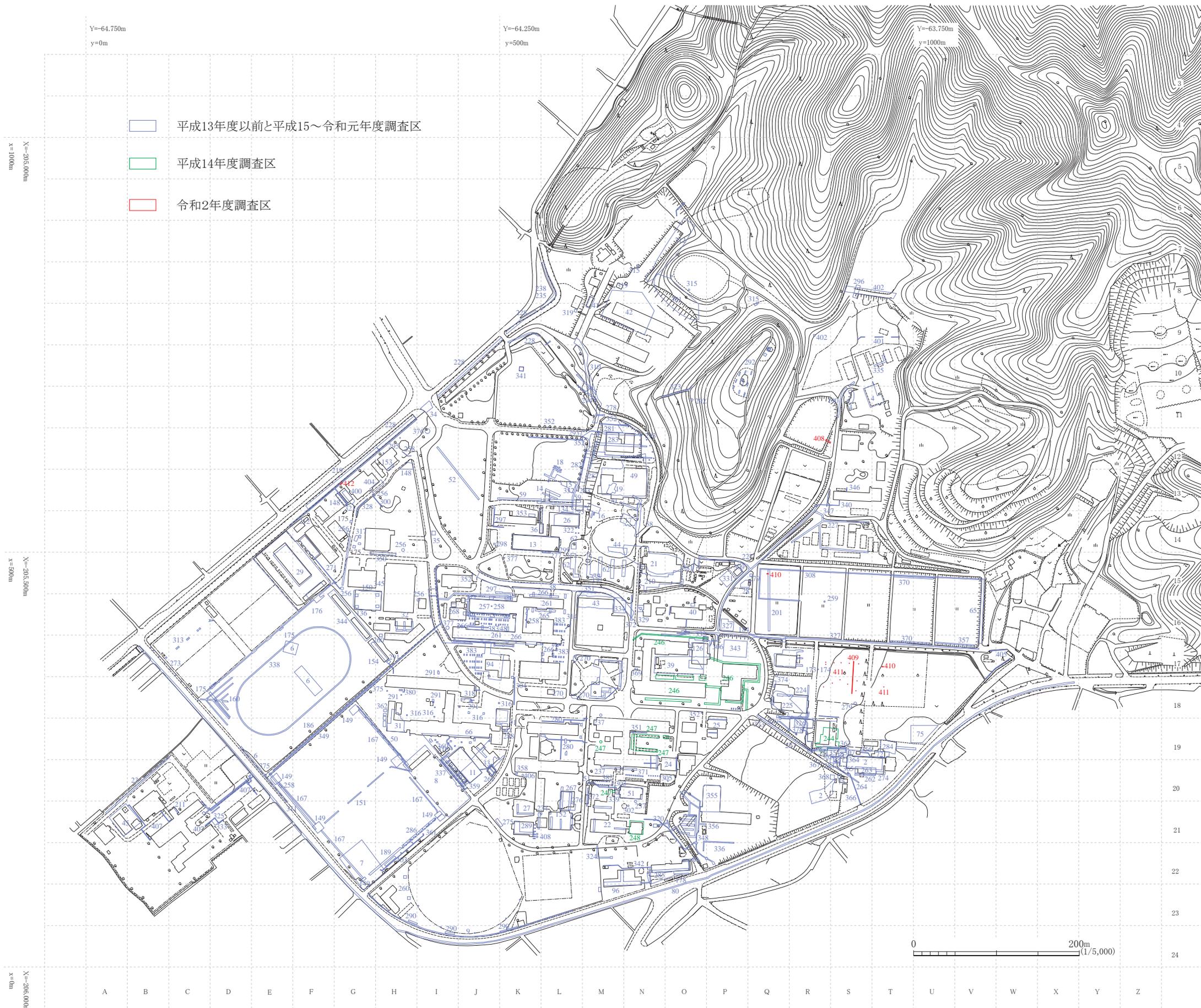


図21 山口大学吉田構内地区割および主な調査区位置図

山口大学構内の主な調査

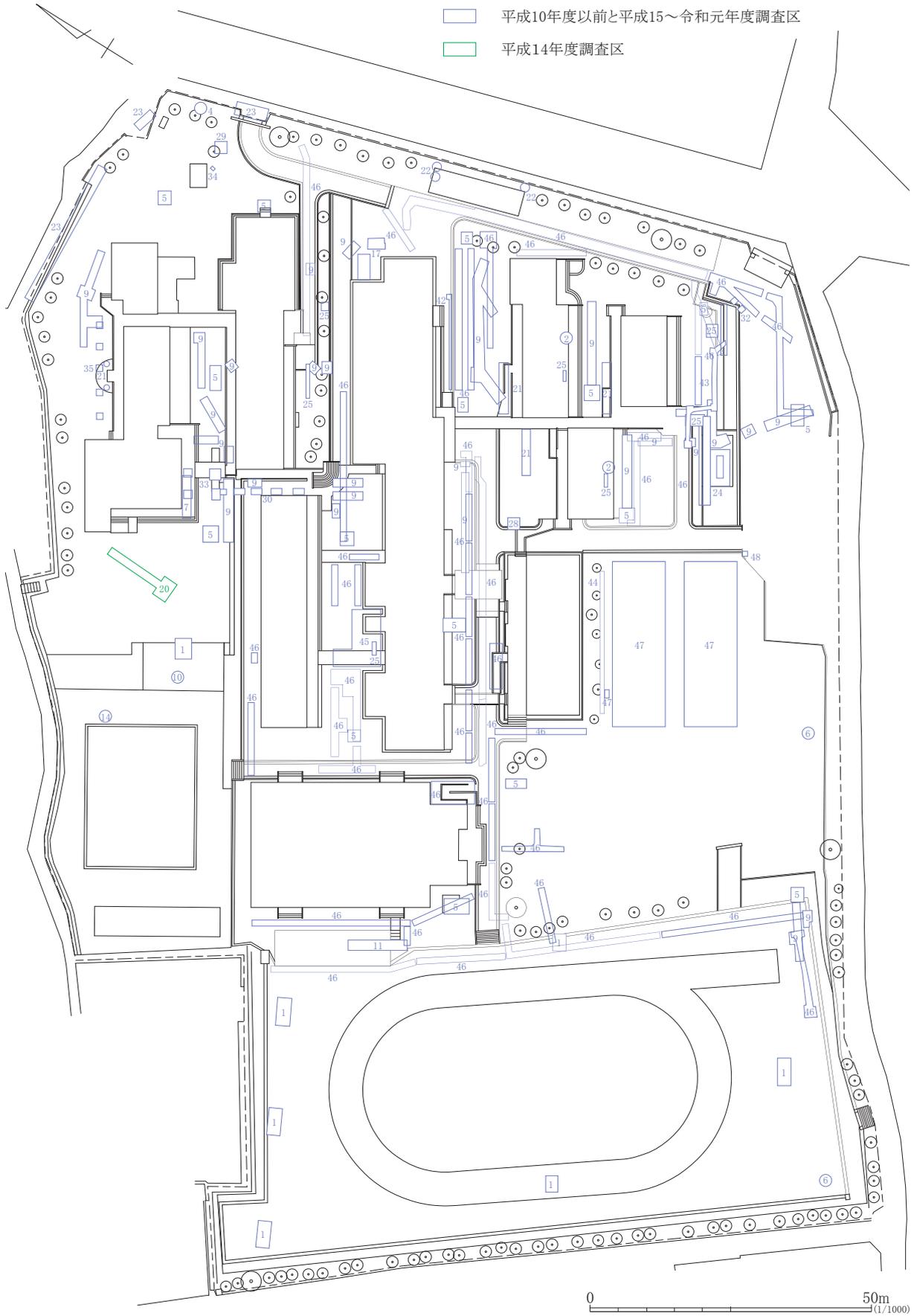


図 22 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

山口大学構内の主な調査

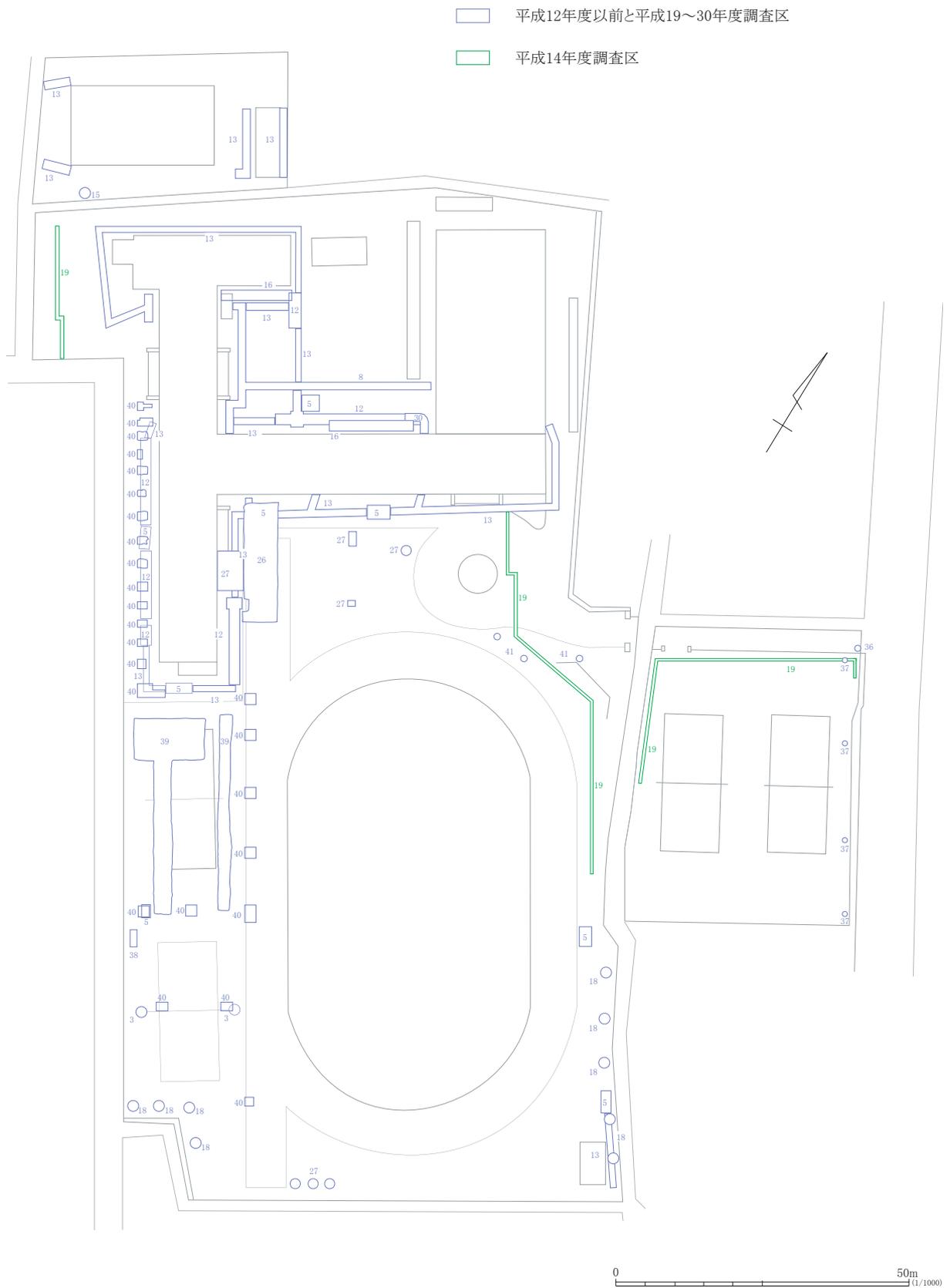


図23 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図



図24 山口大学小串構内調査区位置図

山口大学構内の主な調査

- 構内旧境界線
- 構内境界線

□ 平成13年度以前と平成15～26年度調査区

□ 平成14年度調査区

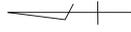


図25 山口大学常盤構内調査区位置図

山口大学構内の主な調査

-  構内境界線
-  昭和58年～平成30年度調査区
-  令和2年度調査区



図 26 山口大学光構内調査区位置図

## 付篇1

## 吉田遺跡古代理没谷出土の木製品(Ⅱ)

横山 成己

## 1. はじめに(図27)

吉田構内南東部では、平成12年度に実施された総合研究棟新営に伴う発掘調査以降、主として共同獣医学部(平成24年4月創設、旧名称は農学部連合獣医学科)の施設拡充を目的とした工事計画が頻出し、発掘調査が繰り返し実施されたことにより、官衙遺跡としての実体が明らかになりつつある。

具体的な調査成果を見ると、いずれの調査区においても、南東の山地を起源とし、北西に走る谷筋が検出されており、谷右岸傾斜地では、大型掘立柱建物跡や総柱掘立柱建物跡、柵列など、古代官衙に関連する施設と目される遺構が確認されている。急勾配となる谷左岸には、護岸用の杭や矢板が設けられている。谷の埋土からは、「千字文」を書写した音義木簡や、「官」「主」「口少カ 殿」「田」「井」などの文字が書かれた墨書土器、円面硯など文字関連資料が出土している。そのほか、蛇尾末製品や銅鉞石、鞆羽口などの金属鑄造関連資料が出土しており、やはり官衙の存在を強く示唆する資料として評価されている。

谷筋に関しては、既往調査区の南東部に地域を限定して、土器類とともに多量の木製品が出土することが注目されている(図27)。木製品には、前述の音義木簡のほか、曲物、斧柄、横槌、木錘、杭、建築部材など原形の判明する資料が少数ながら含まれているものの、それらはいずれも破損品であり、数的には板・角・棒材など、木製品製作の過程で生じたとみられる端材が圧倒している。出土状況からは、破損した土器および木製品の廃材・端材を谷底に投棄した様子がうかがえることから、近隣に厨家とともに木工を執り行う施設が存在した可能性を指摘できる。

既報の調査概要では、木製品の樹種に関して報告できていなかったが、令和4年度刊行の年報にて、平成18年度に実施した農学部附属家畜病院(現:動物医療センター)改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査((横山・藤野2010)以降、改修Ⅰ期調査と表記)にて出土した資料の樹種同定結果を報告し(吉田生物研究所2023)、使用樹種に関する検討を行った(横山2023)。これに引き続き、本稿では平成20年度に実施した動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査(第2調査区)にて出土した木製品に関して報告を行いたい。なお、木製品の保存処理および樹種同定は、本学学術資産継承事業委員会の予算配分を受け、(株)吉田生物研究所に委託し、平成25年度から令和元年度までの7ヶ年で実施した。樹種同定結果の詳細は、本書付篇2に所収している。

## 2. 木製品の名称(分類)について(表5~10)

本稿では、出土木製品における樹種の傾向を考察するため、調査概報に掲載した資料名称に若干の修正を加え、「曲物」「斧柄」「木錘」「斎串」「板状製品」「棒状製品」「板材」「角材」「角棒材」「丸材」「端材」「杭」「火付け木」の13種に分類し直した。遺物番号は変更していない。

このうち火付け木としたものは、棒状製品の先端または両端が焦げているもので、平成18年度および平成20年度調査報告では「松明」に分類したが、近年は、同様の木製品を「付け木」「燃えさし」などとして報告する例(藤田2014・2019、浦2021)が散見されるようになった。当館では平成26年度調査(横山2019)以降は、この特徴を有する木製品を、灯火具ではなく着火や移し火に用いたと判断し、「火付け木」という分類名を付して報告している。

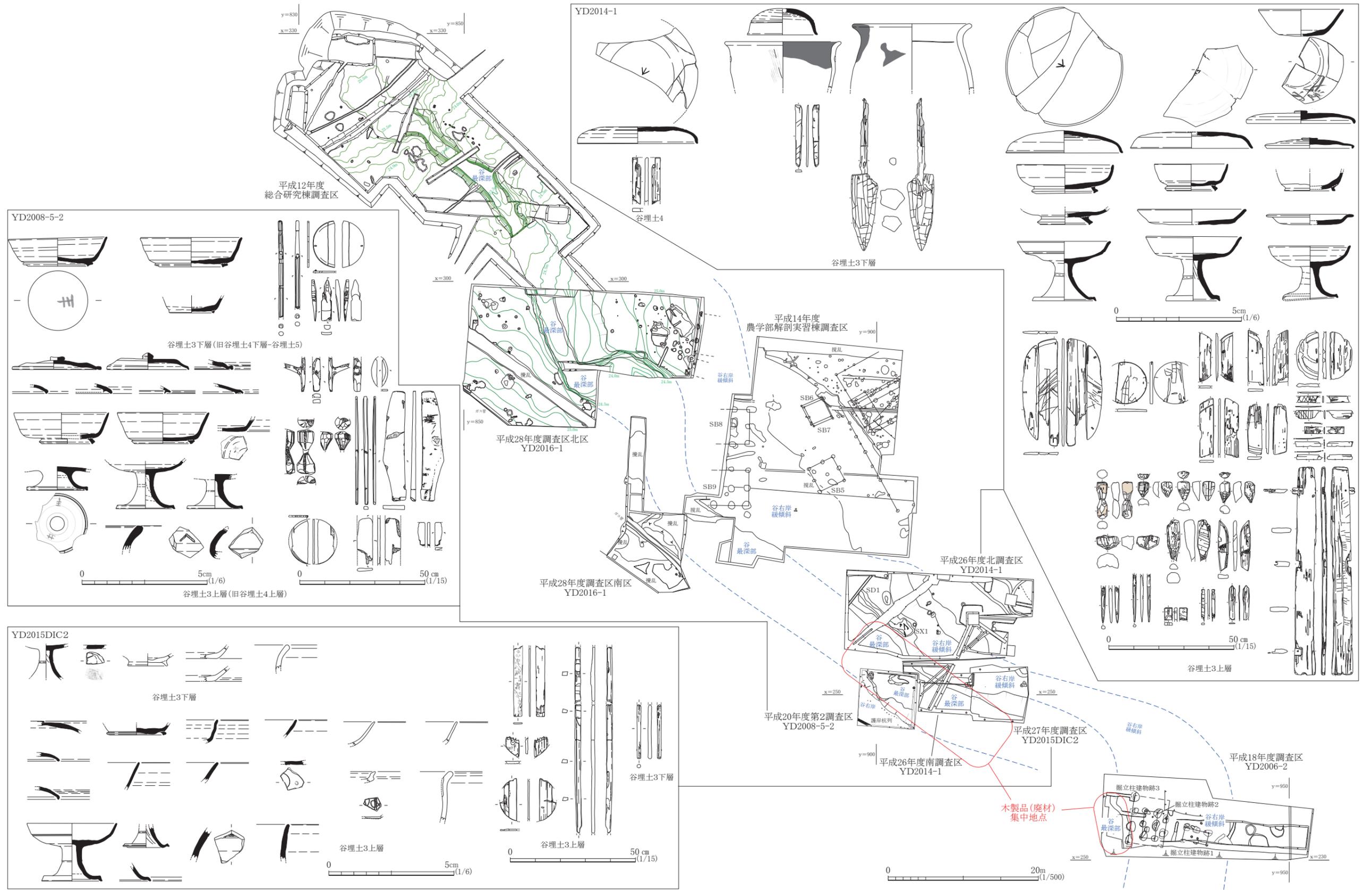
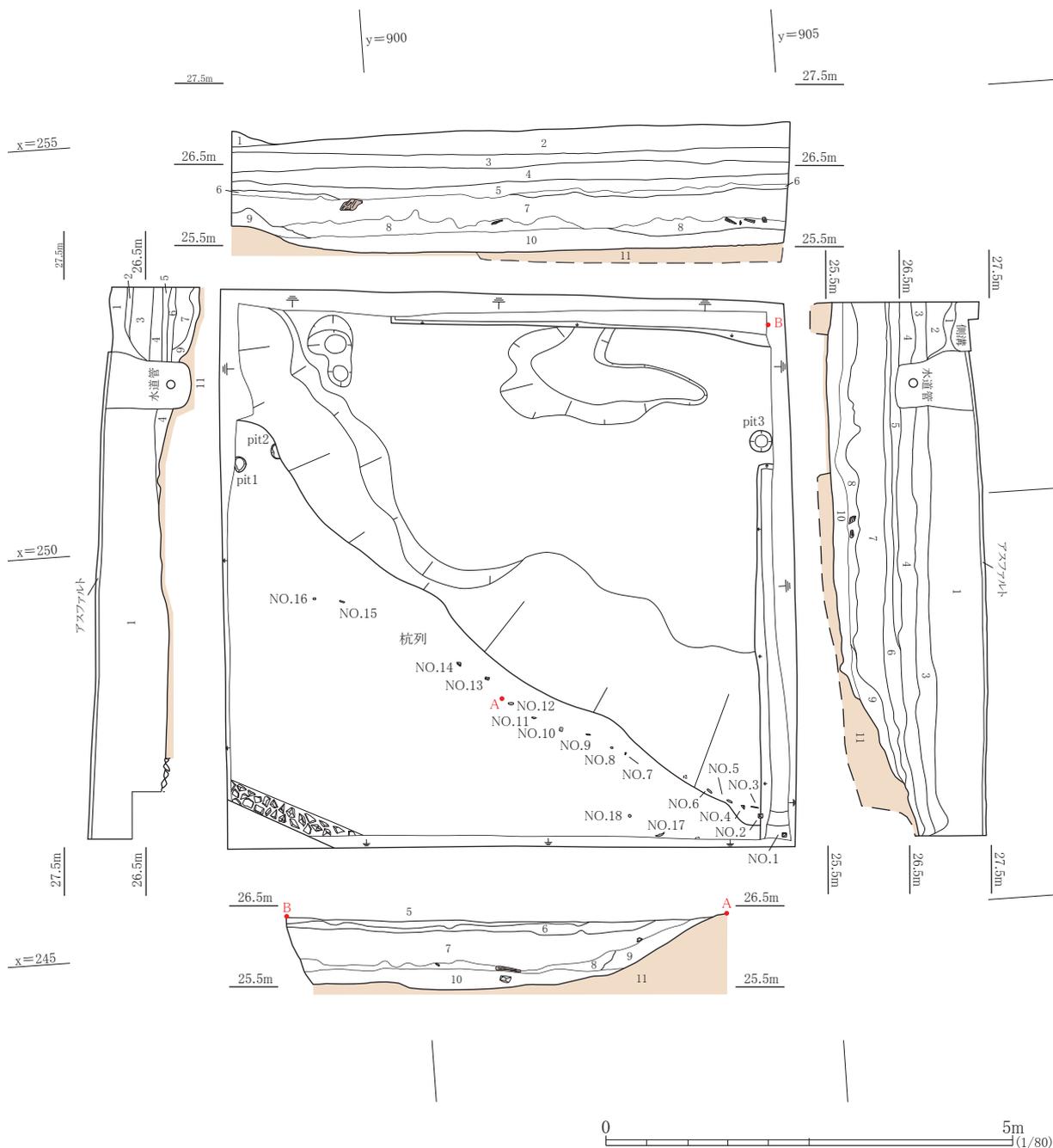


図 27 周辺調査区的位置と出土遺物

吉田遺跡古代理没谷出土の木製品(Ⅱ)



- 1 造成土・碎石等
- 2 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土…包含層1
- 3 褐灰色(10YR4/1)に褐色(10YR4/4)が混ざる粘質土…包含層2
- 4 黄灰色(2.5Y4/1)強粘質土に1~2mmφの白色礫が極少量混ざる…谷埋土1(NR1L1)
- 5 黒褐色(10YR3/1)弱粘質土に0.5~2mmφの礫が少量混ざる…谷埋土2(NR1L2)
- 6 5と同色・同質であるが0.5~3cmφの礫が多量に混ざる…谷埋土3(NR1L3)
- 7 黒褐色(2.5Y3/2)泥土に0.5~3cmφの礫が極少量混ざる(木製品多量に含む)…谷埋土4上層(NR1L4上層)
- 8 黒色(N/2)泥土(木製品多く含む)…谷埋土4下層(NR1L4下層)
- 9 黒褐色(2.5Y3/2)泥土に灰黄色(2.5Y6/2)強粘質土が混ざる…谷埋土5(NR1L5)
- 10 0.5~10cmφの砂礫(水流堆積層)…谷埋土6(NR1L6)
- 11 明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土に灰色(N/5)粘質土が部分的に混ざる…地山

図28 動物医療センター改修Ⅲ期工事 第2調査区平面図・断面図

### 3. 出土層位について(図28)

平成20年度の調査では、造成土下位の基本層序を遺物包含層1(後世に水田床土の機能を果たすが本学造成時に大きく削平を受ける)、遺物包含層2(中世期の上部丘陵からの流れ込み堆積)、谷埋土(NR)を上位よりL1~6と分類した。前後の調査で確認した堆積層との対応関係は、層序的には

(平成18年度)	(平成20年度)	(平成26年度以降)
遺物包含層L3	遺物包含層2	遺物包含層2
谷埋土L1	谷埋土1	谷埋土1
谷埋土L2	谷埋土2	谷埋土2上層
谷埋土L3	谷埋土3	谷埋土2下層
谷埋土L4	谷埋土3	谷埋土2下層
遺物包含層8(L6)か	谷埋土4上層	谷埋土3上層
遺物包含層9(L6)か	谷埋土4下層	谷埋土3下層
遺物包含層谷10(L6)か	谷埋土5	谷埋土4
	谷埋土6	谷埋土5

となる可能性があるが、含まれる遺物に関しては大きな相違も見られる。改修I期調査で多量の木製品が出土した遺物包含層L6は7世紀後半の土器が主体であるのに対し、同じく多量の木製品が出土した平成20年度調査の谷埋土4、同一層である平成26年度以降の谷埋土3では、8世紀代の土器が主体となっている。木製品は平成20年度調査では谷埋土4上層に、平成26年度以降調査では谷埋土3上層に集中するのに対し、平成18年度調査では遺物包含層L6の8層にも含まれるものの、9・10層から多量の出土を見た。土質的には改修I期調査の谷埋土L4が平成20年度の谷埋土4上層に近く、両地点はおおよそ20mの隔たりがあることから、層序の対応関係には慎重であるべきだろう。

### 4. 出土木製品の概要(図29~39、表5~10)

#### 谷埋土6直上出土木製品(図29・30、表5)

水流堆積で無遺物層であった谷埋土6直上(谷埋土4下層との境界面)出土で、15点を取りあげた。

**124・125**は棒状製品で、両者とも端部を肥厚させており、先端部から約14cmの位置に平面方形の孔を削り込むが、貫通させていない。124は端部から16cm、27cmの位置に浅く溝を巡らせる。125の先端部は谷埋土4出土。樹種はいずれもヒノキ科ヒノキ属。**126**は半損した曲物底板。1箇所側に側板を綴じる樹皮が残る。ヒノキ科ヒノキ属。**127**は板状製品。両側部中央に抉りを入れ、一方を平面長方形、他方を三角形形状に加工している。厚みがあるが、斎串の可能性も残る。ヒノキ科アスナロ属。**128~133**は板材や端材。樹種は128、131・132がヒノキ科アスナロ属、129、133がヒノキ科ヒノキ属、130がブナ科クリ属クリ。**134**は火付け木。ヒノキ科アスナロ属。**135**は板材としたが、折損していない側の端部に加工痕が残る。ヤナギ科ヤナギ属。**136**は残長68.4cmを測る棒状製品。片側端部を嘴状に尖らせている。ハイノキ科ハイノキ属。**137・138**は角材。137は表面が炭化する。樹種はともにヒノキ科アスナロ属。

#### 谷埋土5直上出土木製品(図31、表6)

谷埋土5直上(谷埋土4上層との境界面)出土は2点のみである。**139・140**は板材。140の端部には直交方向の浅い切込みが見られる。樹種は139がヒノキ科アスナロ属、140がヒノキ科ヒノキ属。

#### 谷埋土4下層出土木製品(図32・33、表7)

6点が出土している。**141**は曲物蓋の半損品で、ヒノキ科ヒノキ属。**142~144**は板材。樹種は142、144

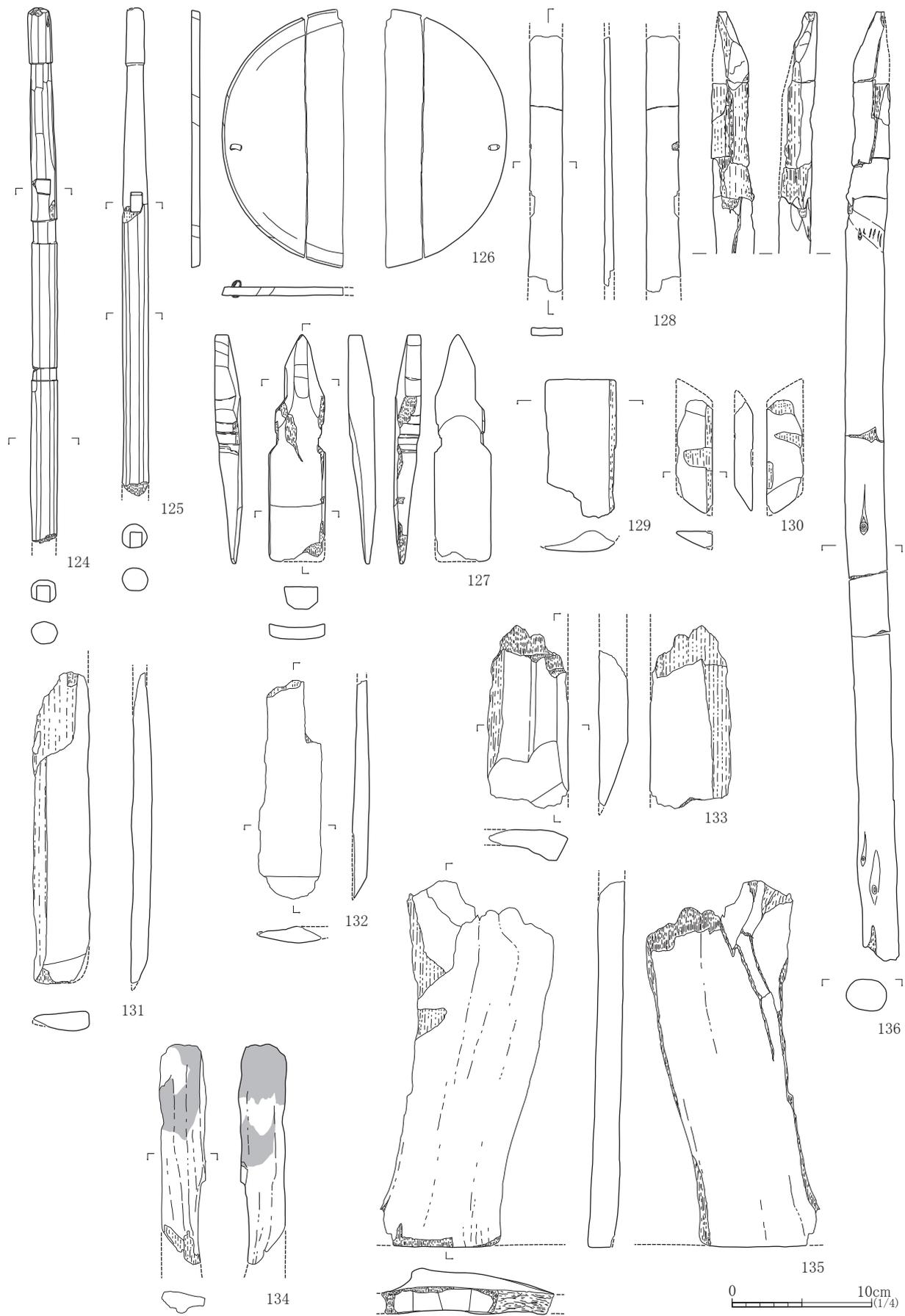


図 29 第2調査区谷埋土6直上出土木製品①

がヒノキ科アスナロ属、143がスギ科スギ属スギ。145は杭先で、全体が炭化している。ブナ科クリ属クリ。146は火付け木で、ヒノキ科アスナロ属。

#### 谷埋土4上層出土木製品(図34～39、表8)

谷埋土から出土した木製品181点中、135点(75%)が当層から出土しており、谷への廃材投棄が本格化した時期の堆積層であることが分かる。当層から出土する土器類の遺存状態が良好であることからみても、遺物は谷内であまり移動しておらず、出土地点が廃棄地点をそのまま反映していると考えて良い。

147は斧柄で、斧台前部と斧柄の下半部を欠失する。樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属。148は曲物蓋の小破片。ヒノキ科ヒノキ属。149・150は半損した木錘。長軸方向に剥離している149はブナ科コナラ属アカガシ亜属、括れ部で折損している150はツバキ科ツバキ属。151は一方の端部両角を斜めに切り落とした棒状製品で、齋串としての使用が考えられる。2片の接合品である。ヒノキ科ヒノキ属。152はほぼ完形に遺存する板状製品。片側部は直線的に切り落とし、端部手前で段を成形している。反対側部は「へ」字状に切り落とす。片面複数箇所には擦痕が見られることから、作業板としても使用された可能性がある。樹種はブナ科コナラ属アカガシ亜属。

153以降は板材、角材、角棒材を掲載した。樹種はヒノキ科(ヒノキ属・アスナロ属)が大多数を占める。ただし、板材で両端部を斜めに切り落とした166(ヒノキ科ヒノキ属)は齋串の可能性もあり、片面に丁寧に段を成形する168(ヒノキ科ヒノキ属)は建築部材等であった可能性がある。

端部の炭化が見られる190(ブナ科シイ属)、198、221(ヒノキ科ヒノキ属)、230・231、235、244(ヒノキ科アスナロ属)は火付け木とした。

247・248は棒状製品で、247は両端部が挟り込み部で折損しており、248は平面方形の非貫通孔が穿たれている。124・125と同種の木製品とみられる。樹種はともにヒノキ科ヒノキ属。249は表面が炭化した板状製品であるが、形状から曲物底板か蓋の可能性もある。ウルシ科ウルシ属。

250～255は杭。250と253は表面の大部分が炭化している。樹種は250がシキミ科シキミ属シキミ、251と253がブナ科シイ属、252と254がブナ科コナラ属アカガシ亜属、255がウルシ科ウルシ属。

256～281は火付け木。256のみがマツ科マツ属で、他はヒノキ科ヒノキ属またはアスナロ属である。

#### 谷埋土3出土木製品(図40、表9)

282～289は板材と角棒材。285と286は水漬け保管中に保存処理、樹種同定が困難な状態にまで劣化させてしまった。本稿を借りてお詫びしたい。残りの樹種はいずれもヒノキ科ヒノキ属またはアスナロ属。290～295は火付け木。樹種は全てヒノキ科アスナロ属である。

#### 谷埋土2出土木製品(図40、表9)

296～299は板材と角棒材。樹種はヒノキ科ヒノキ属とアスナロ属、ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節、ユキノシタ科ウツギ属が見られる。300～303は火付け木としたが、ヤナギ科ヤナギ属の300はほぼ全面が炭化している。301はマツ科マツ属、302・303はヒノキ科アスナロ属。304は両端に切断面が残る。ユキノシタ科ウツギ属。

#### 谷左岸肩部杭・矢板(図42・43、表11)

谷の左岸肩部には、護岸用とみられる杭・矢板列が設けられていた。調査区南東隅から20～40cm間隔で打ち込まれていたが(図28)、確認できたのは調査区中央南までの<sup>註1</sup>15本(A列:NO. 1～14)、北西に1.6m隔てて2本(NO. 15・16)、A列の南西側に同方向に並列する<sup>註2</sup>3本(B列:NO. 17・18)である。取りあげた18本の樹種はいずれも広葉樹で、ブナ科シイ属(9本)、ブナ科クリ属クリ(2本)、バラ科サクラ属(6本)、マツ科マツ属(1本)が見られる。

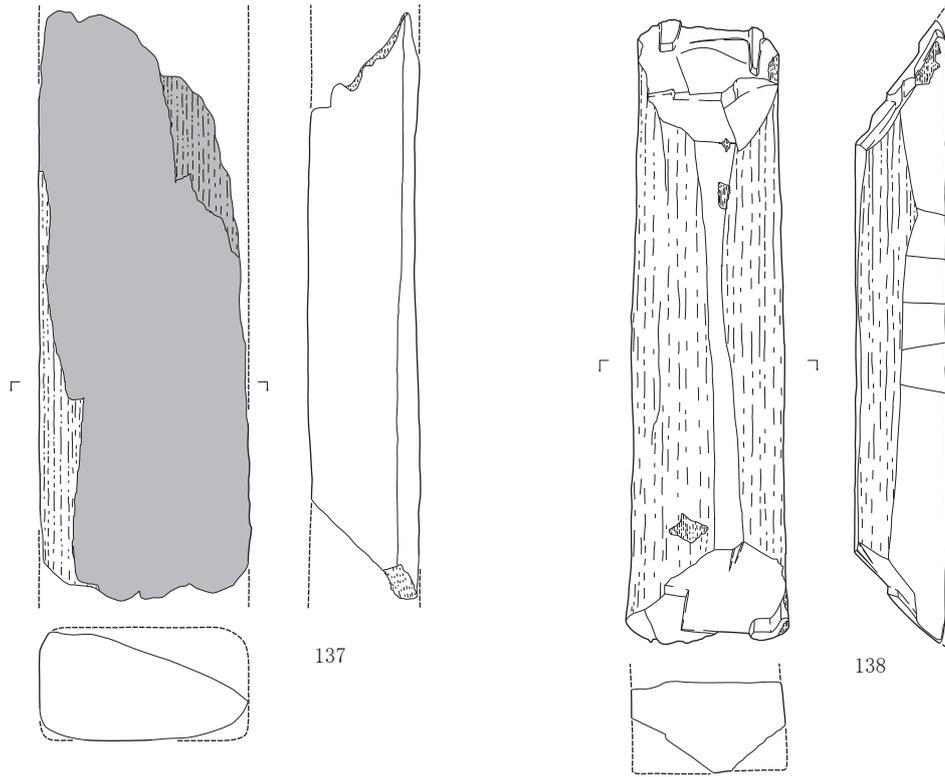


図 30 第2調査区谷埋土6直上出土木製品②

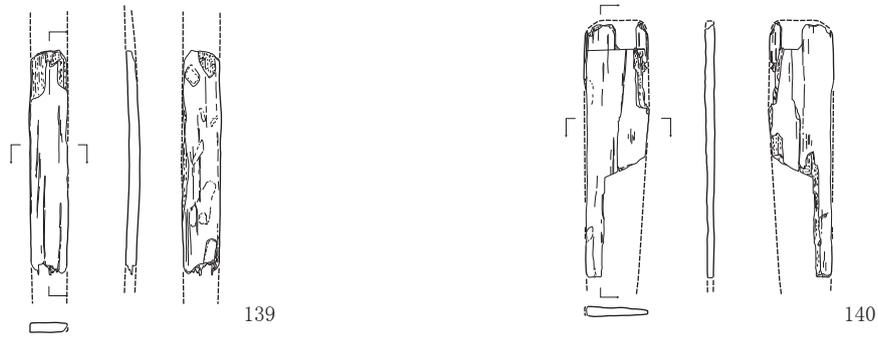


図 31 第2調査区谷埋土5直上出土木製品

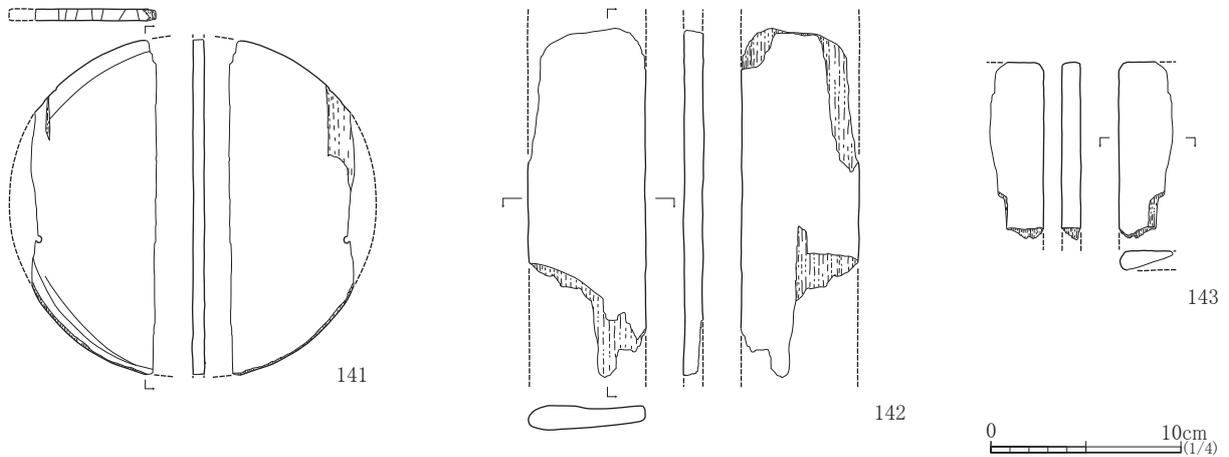


図 32 第2調査区谷埋土4下層出土木製品①

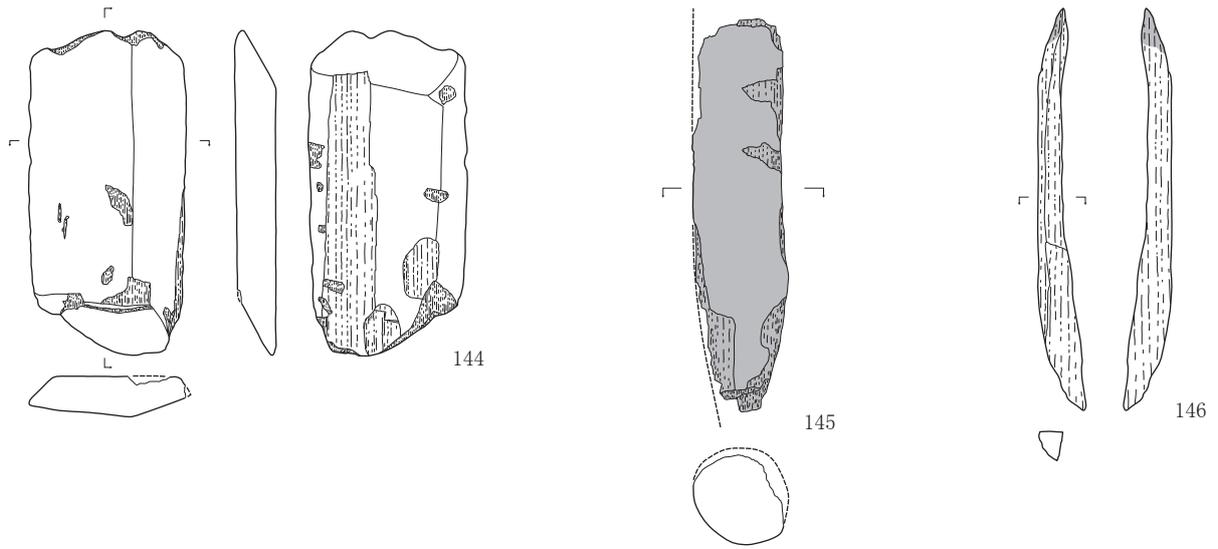


図 33 第2調査区谷埋土4下層出土木製品②

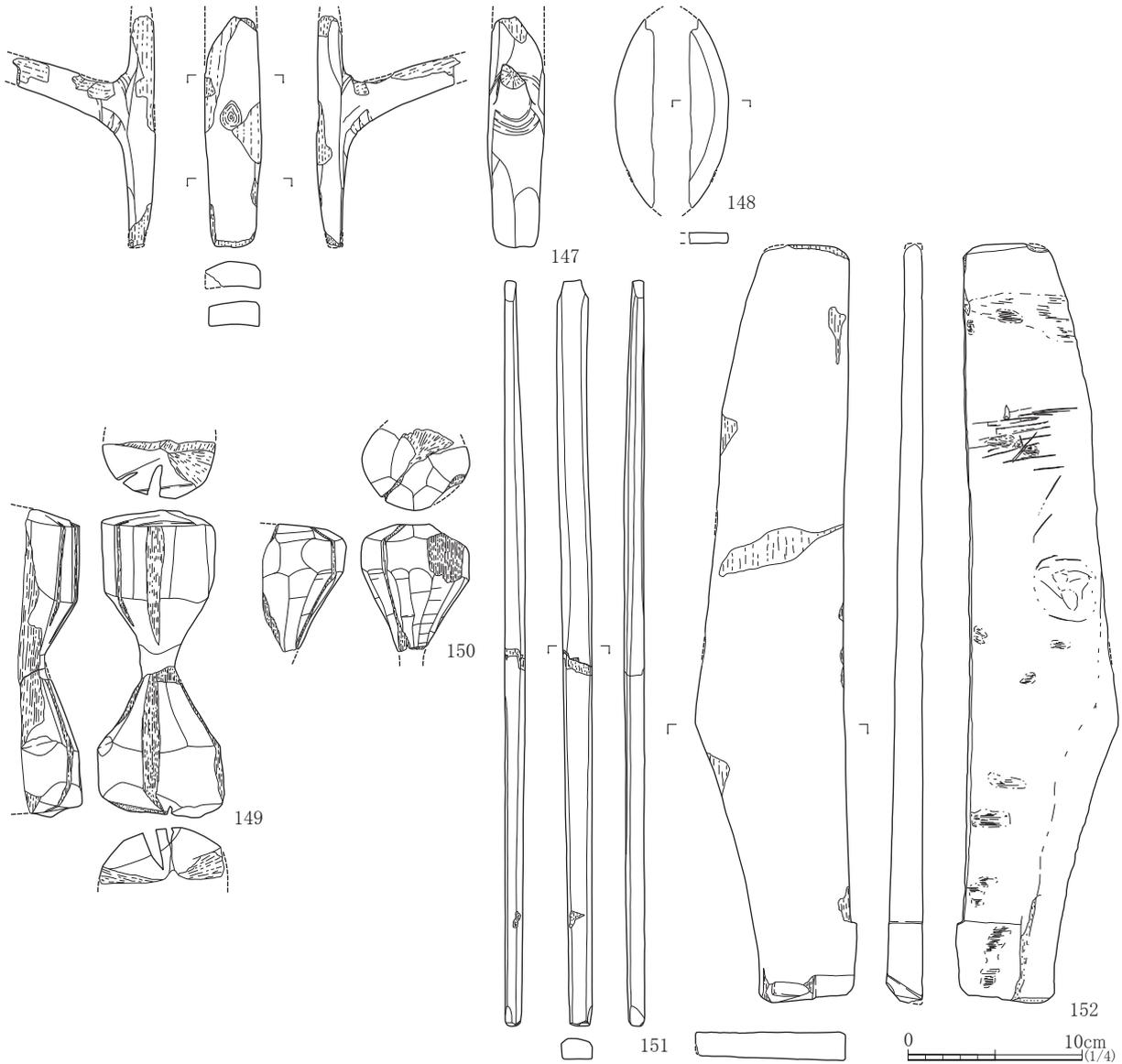


図 34 第2調査区谷埋土4上層出土木製品①

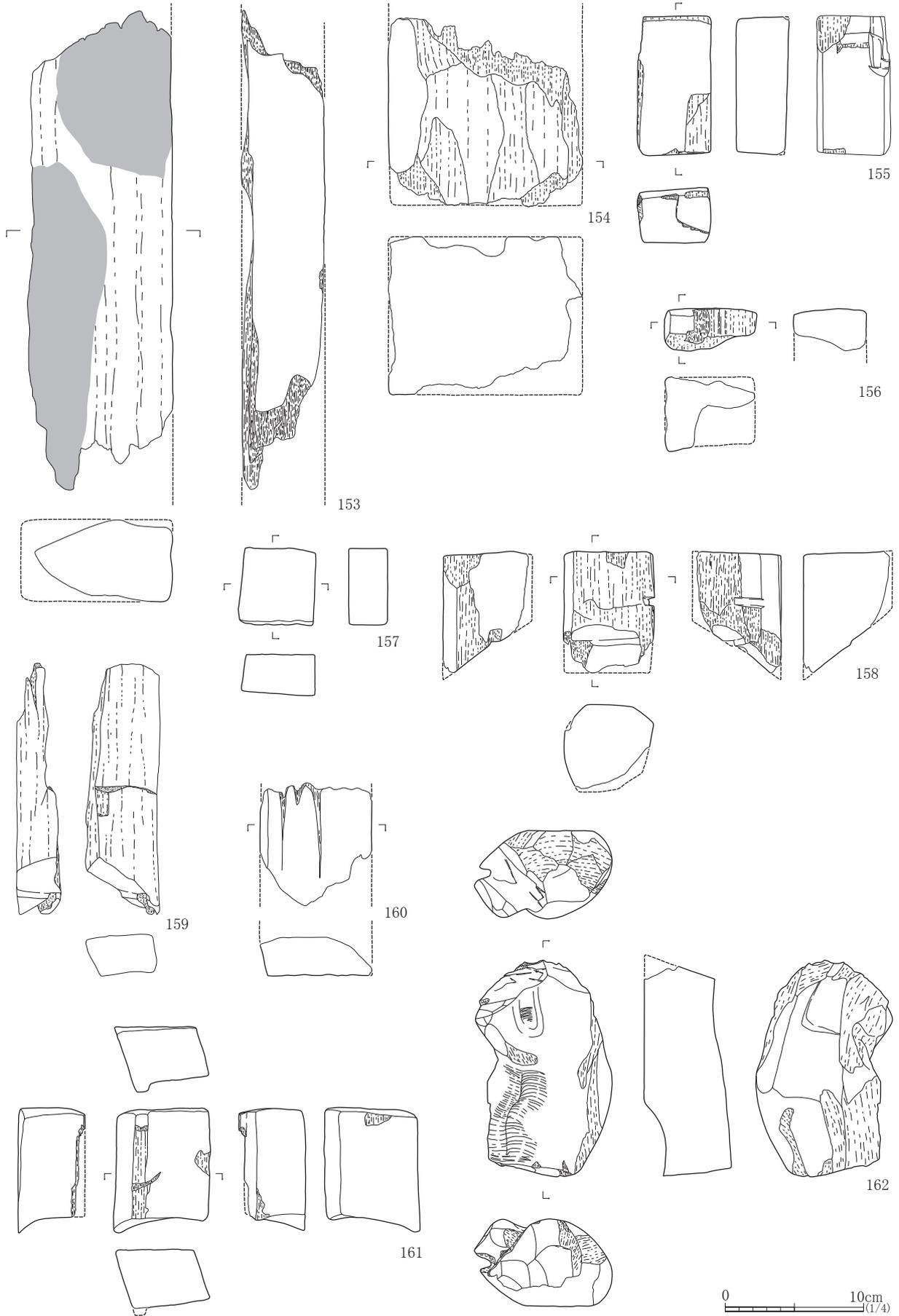


図 35 第2調査区谷埋土4上層出土木製品②

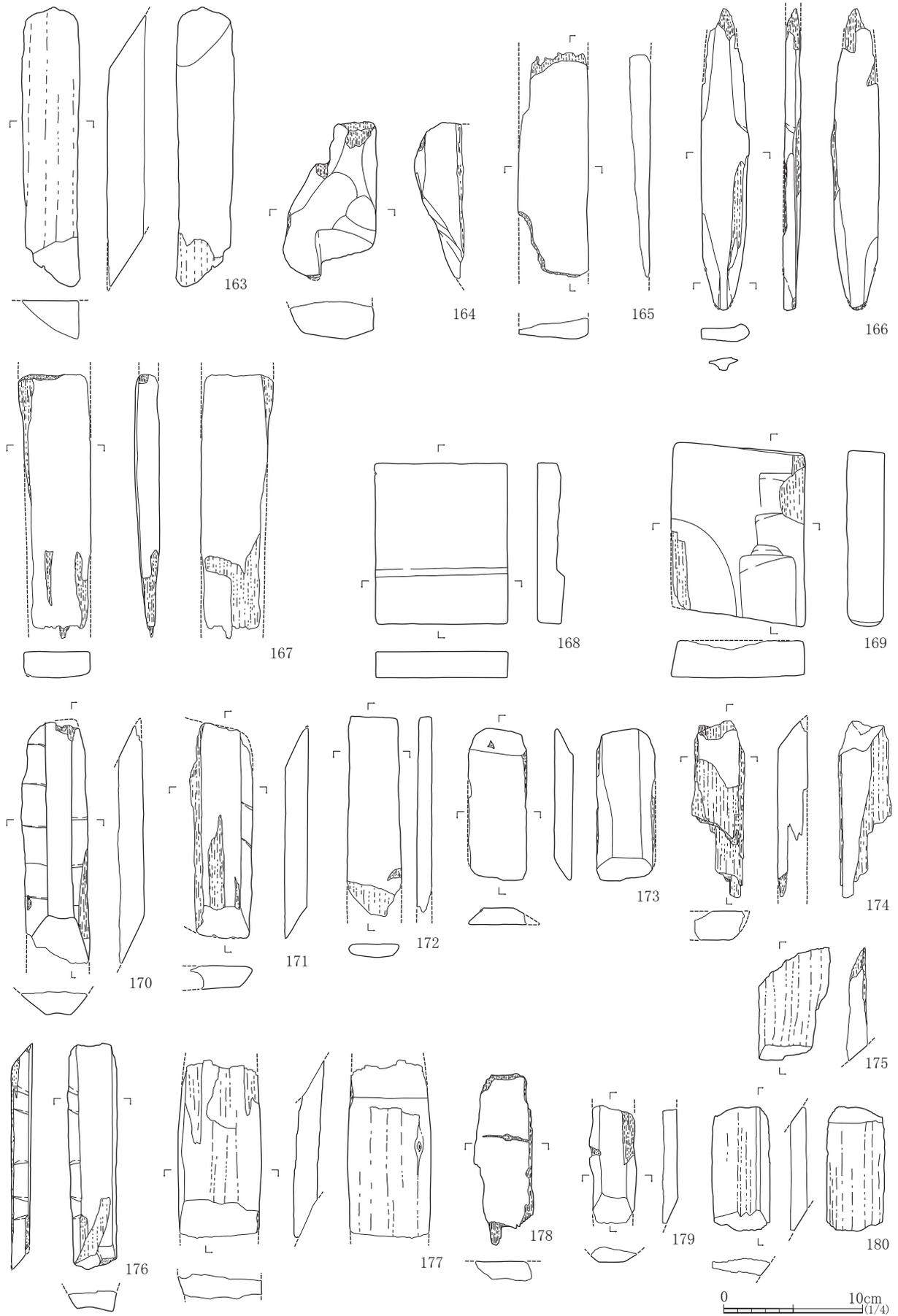


図 36 第2調査区谷埋土4上層出土木製品③

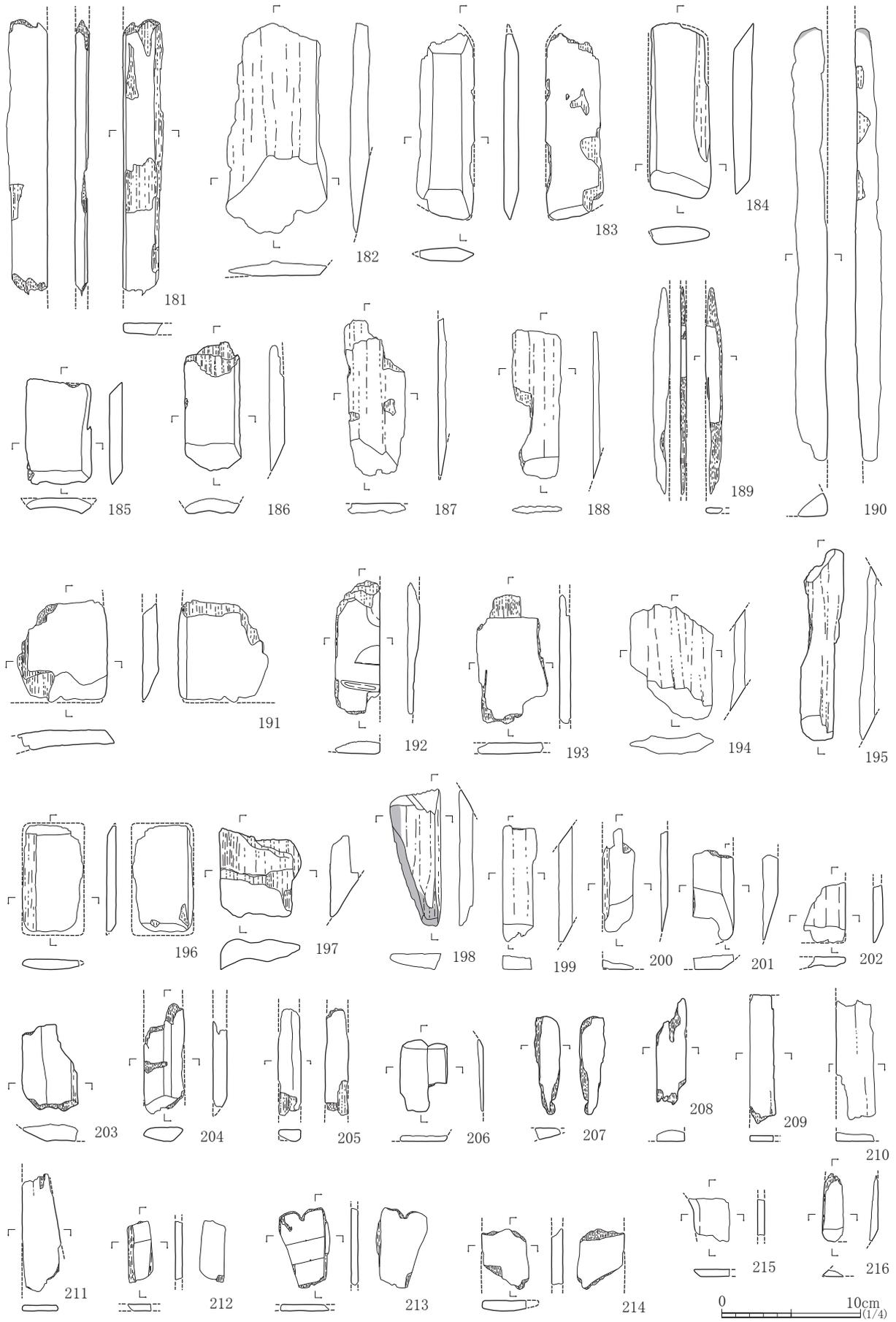


図 37 第2調査区谷埋土4上層出土木製品④

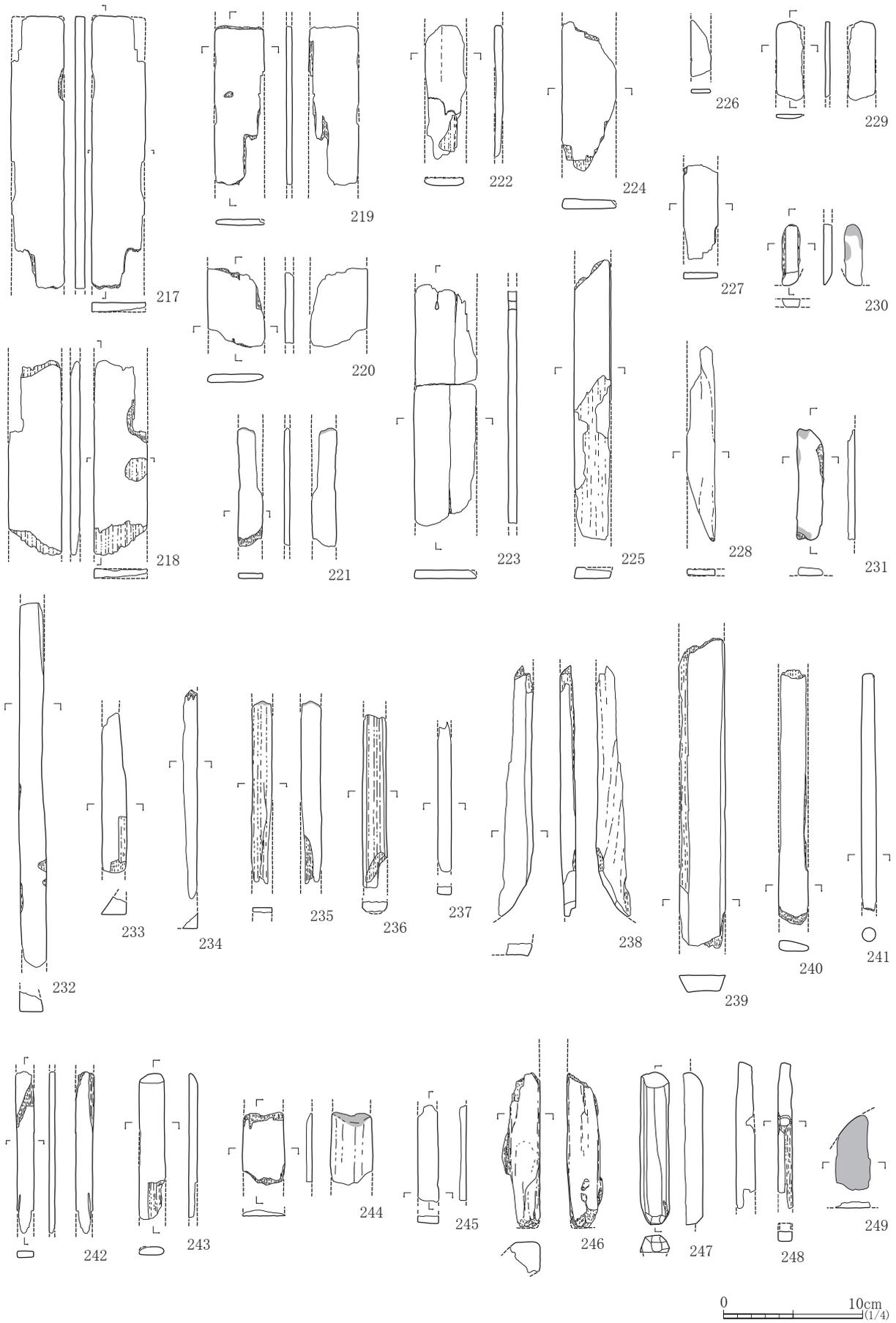


図 38 第2調査区谷埋土4上層出土木製品⑤

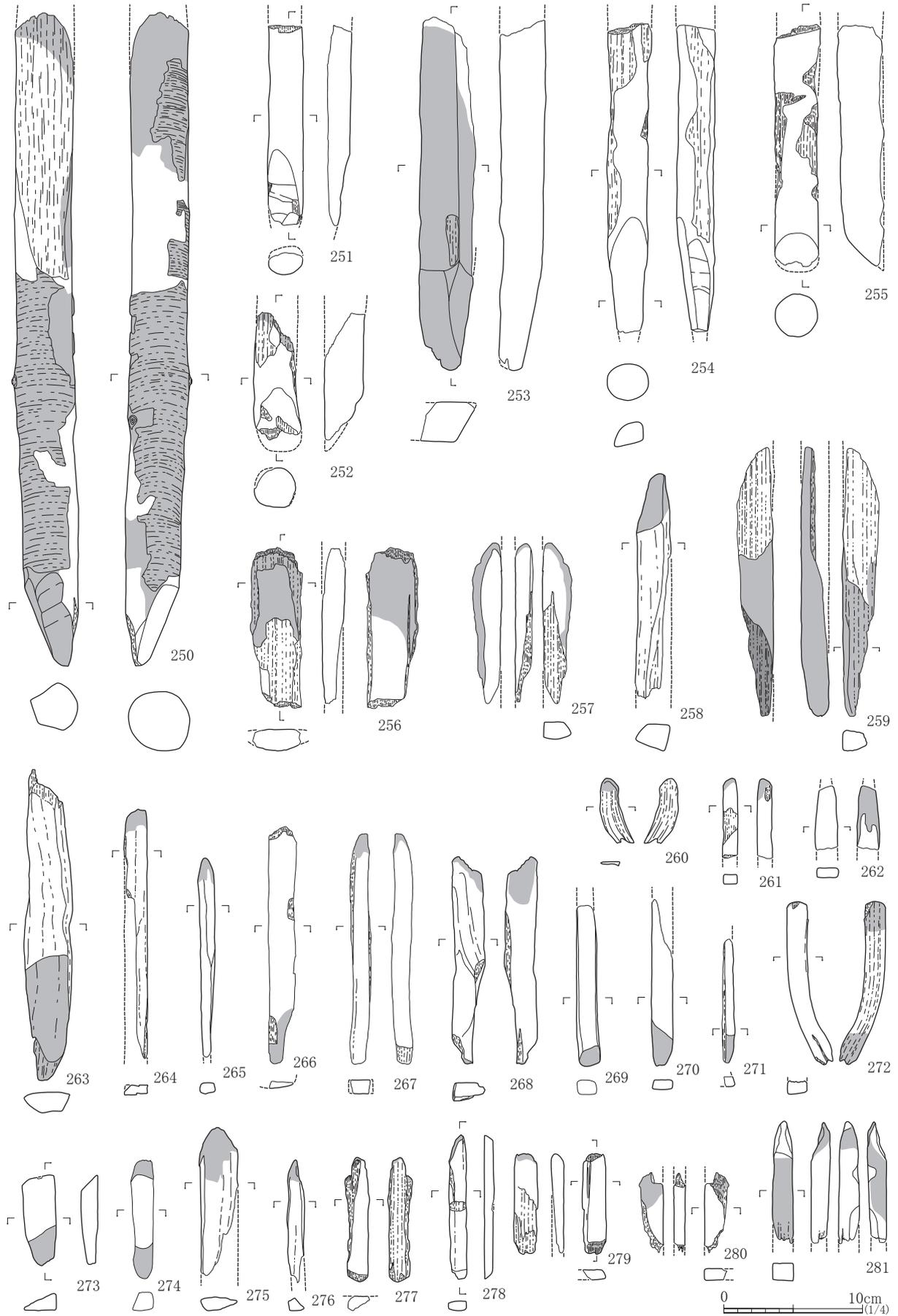


図 39 第2調査区谷埋土4上層出土木製品⑥

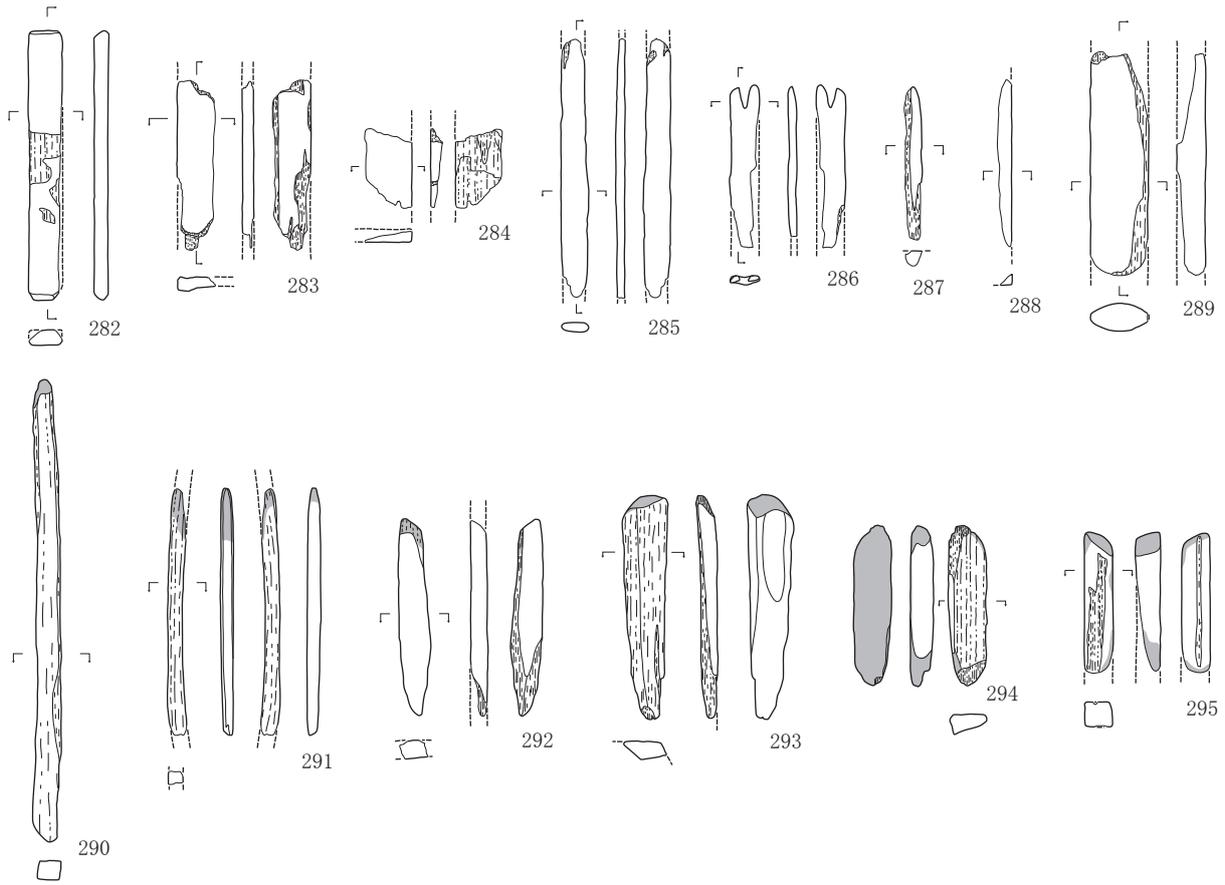


図 40 第2調査区谷埋土3出土木製品

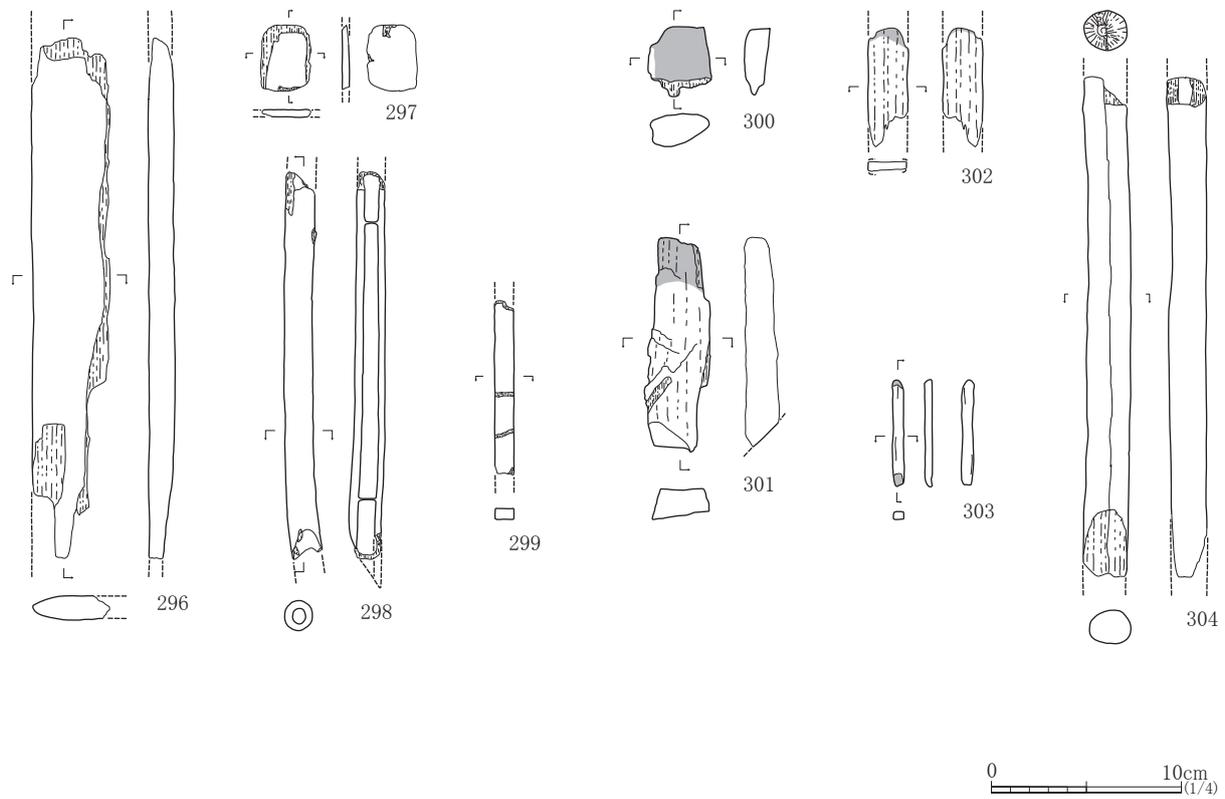


図 41 第2調査区谷埋土2出土木製品

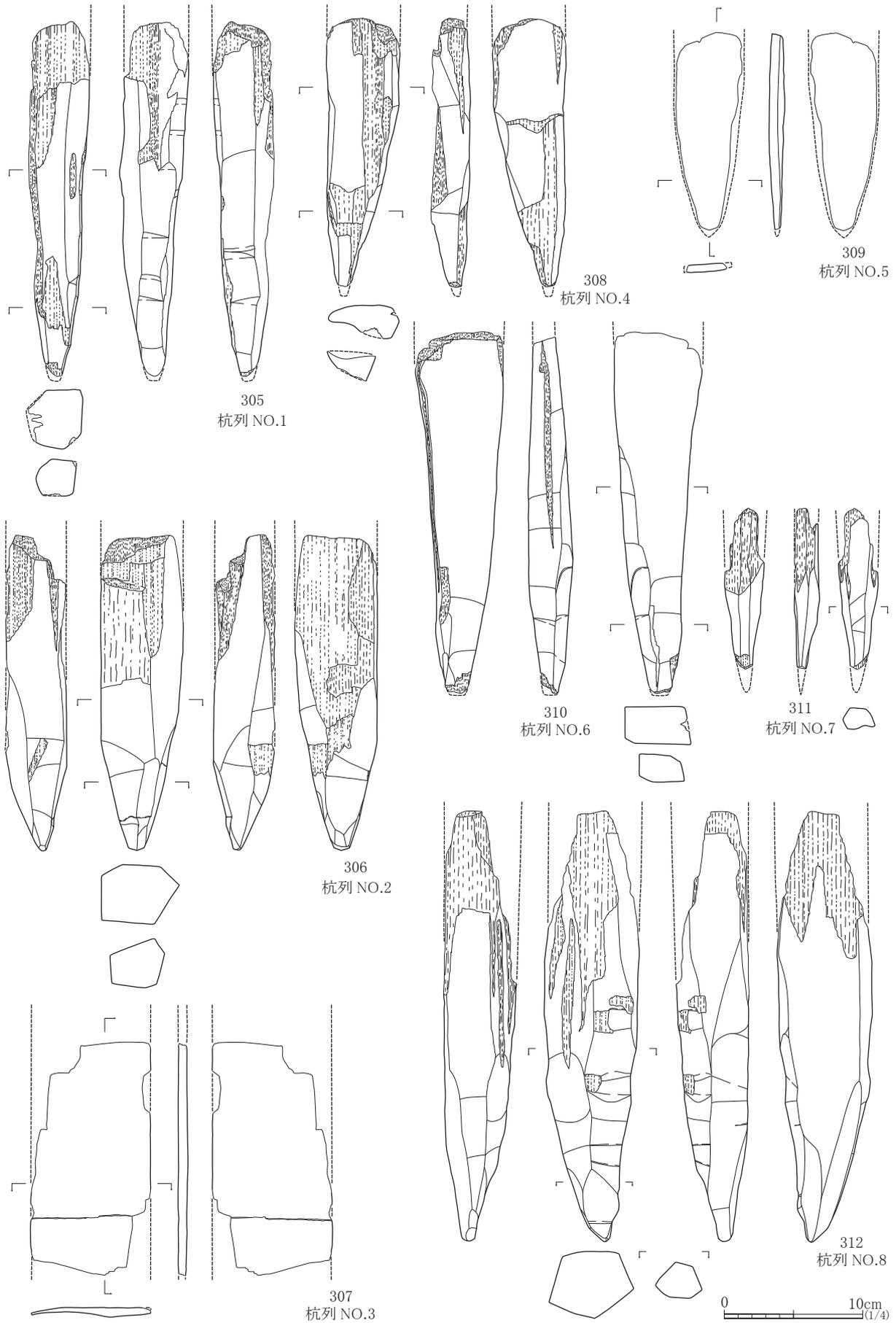


図 42 第2調査区谷左岸肩部木製杭・矢板①

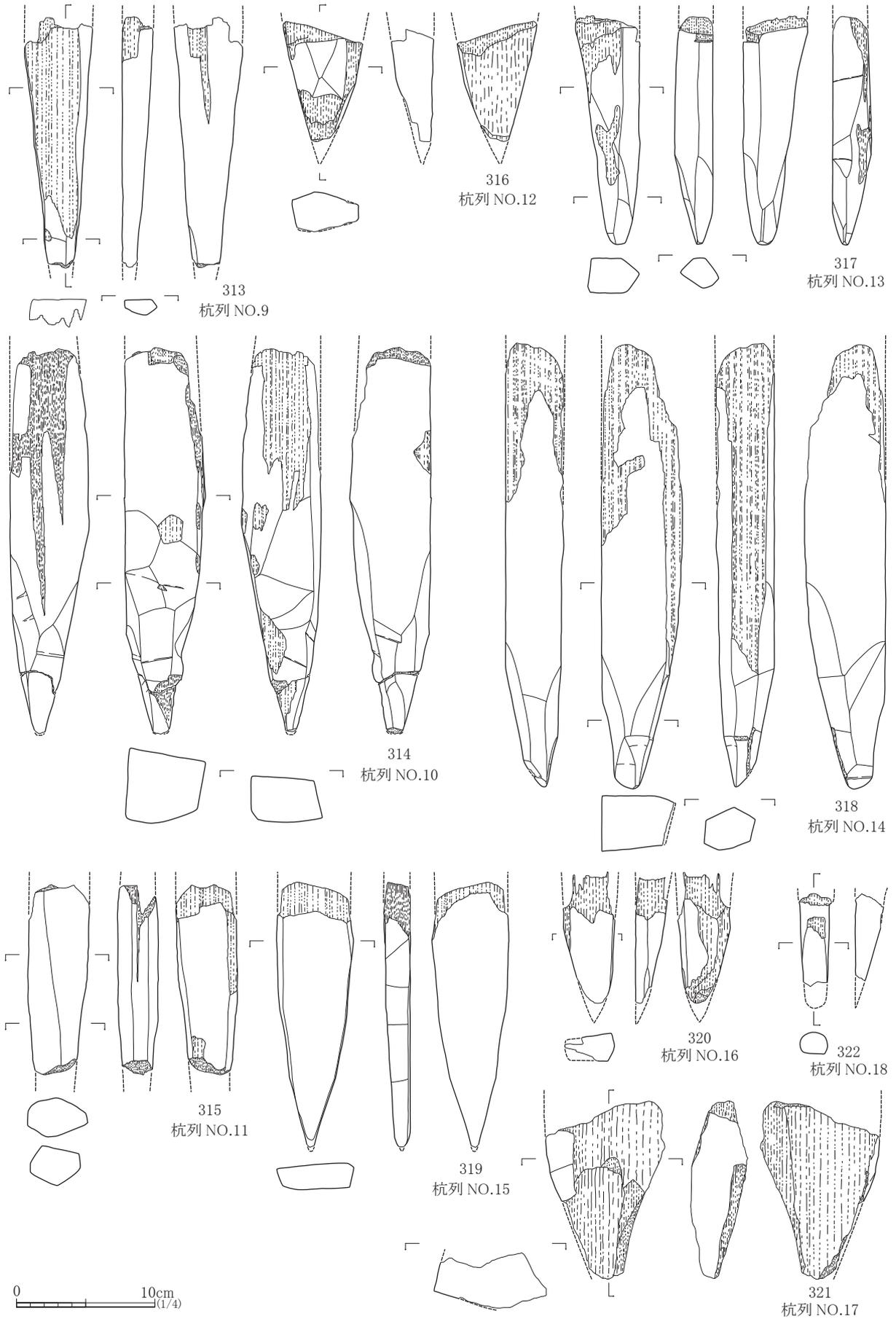


図 43 第2調査区谷左岸肩部木製杭・矢板②

表5 谷埋土6直上出土木製品観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
124	谷埋土6直上	棒状製品	残長38.6 径1.8	ヒノキ科ヒノキ属	125と同一個体か
125	谷埋土6直上	棒状製品	残長35.2 径1.8	ヒノキ科ヒノキ属	先端部は谷埋土4出土124と同一個体か
126	谷埋土6直上	曲物底板	残存径18.8 厚み0.6	ヒノキ科ヒノキ属	半損品 樹皮結合曲物
127	谷埋土6直上	板状製品(祭祀具か)	長さ16.4 幅4.0 厚み2.0	ヒノキ科アスナロ属	
128	谷埋土6直上	板材	残長18.4 残幅2.3 厚み0.7	ヒノキ科アスナロ属	
129	谷埋土6直上	端材	残長10.0 幅5.1 厚み1.5	ヒノキ科ヒノキ属	
130	谷埋土6直上	端材	残長8.2 幅3.6 厚み1.3	ブナ科クリ属クリ	
131	谷埋土6直上	板材	残長22.5 残幅4.0 厚み1.4	ヒノキ科アスナロ属	
132	谷埋土6直上	板材	残長15.7 残幅4.5 厚み1.2	ヒノキ科アスナロ属	
133	谷埋土6直上	板材	残長13.2 残幅5.8 厚み2.2	ヒノキ科ヒノキ属	
134	谷埋土6直上	火付け木	残長15.9 残幅3.1 残厚1.5	ヒノキ科アスナロ属	端部炭化
135	谷埋土6直上	板材	残長26.4 残幅12.8 厚み2.0	ヤナギ科ヤナギ属	片側端部に加工痕あり 側面に凹みあり
136	谷埋土6直上	棒状製品	残長68.4 幅2.9	ハインキ科ハインキ属	先端加工痕
137	谷埋土6直上	角材	残長31.2 残幅10.8 残厚5.7	ヒノキ科アスナロ属	表面炭化
138	谷埋土6直上	角材	残長33.0 幅8.1 残厚4.7	ヒノキ科アスナロ属	

表6 谷埋土5直上出土木製品観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
139	谷埋土5直上	板材	残長11.9 残幅2.0 厚み0.6	ヒノキ科アスナロ属	
140	谷埋土5直上	板材	残長14.1 残幅3.4 厚み0.5	ヒノキ科ヒノキ属	片面端部付近に直交方向の切込み痕(深さ約2mm)

表7 谷埋土4下層出土木製品観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
141	谷埋土4下層	曲物蓋	残長17.7 残幅6.7 厚み0.6	ヒノキ科ヒノキ属	半損品
142	谷埋土4下層	板材	残長18.5 幅6.7 厚み1.0	ヒノキ科アスナロ属	
143	谷埋土4下層	板材	残長9.3 残幅2.9 厚み1.0	スギ科スギ属スギ	
144	谷埋土4下層	板材	残長17.1 幅8.3 厚み2.1	ヒノキ科アスナロ属	
145	谷埋土4下層	杭	残長20.7 径(4.7)	ブナ科クリ属クリ	表面全体が炭化
146	谷埋土4下層	火付け木	残長21.3 残幅1.3 残厚1.5	ヒノキ科アスナロ属	端部が炭化

表8 谷埋土4上層出土木製品観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
147	谷埋土4上層	横斧柄	基部残長13.5 幅3.2 厚み1.7 柄部残長6.5 径2.1	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	斧台装着部・握り基部欠失
148	谷埋土4上層	曲物蓋	残長10.9 残幅2.3 厚み0.6	ヒノキ科ヒノキ属	
149	谷埋土4上層	木錘	長さ17.7 残幅(径)7.3 残厚3.3	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	半損
150	谷埋土4上層	木錘	残長7.2 幅(径)6.2 残厚4.8	ツバキ科ツバキ属	半損
151	谷埋土4上層	斎串か	残長43.2 幅1.8 厚み1.2	ヒノキ科ヒノキ属	両端部両側面を斜めに切り落とす
152	谷埋土4上層	板状製品	長さ43.9 幅8.6 厚み2.1	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	片面を作業板として使用か
153	谷埋土4上層	角材	残長34.5 残幅10.0 残厚6.0	ヒノキ科ヒノキ属	表面が炭化
154	谷埋土4上層	角材	残長13.5 幅14.5 厚み11.5	ヒノキ科アスナロ属	
155	谷埋土4上層	角材	長さ10.2 幅5.4 厚み4.0	ヒノキ科アスナロ属	
156	谷埋土4上層	板材	残長3.1 幅6.5 厚み5.4	ヒノキ科ヒノキ属	
157	谷埋土4上層	角材	長さ5.6 幅5.6 厚み3.0	ヒノキ科ヒノキ属	
158	谷埋土4上層	角材	長さ8.8 幅6.5 残厚6.4	マキ科マキ属イヌマキ	一側面に溝 建築部材を切断か
159	谷埋土4上層	角材	残長18.1 残幅5.3 残厚3.2	ブナ科クリ属クリ	
160	谷埋土4上層	板材	残長9.0 幅8.1 残厚2.8	ヒノキ科アスナロ属	
161	谷埋土4上層	角材	残長9.1 幅6.8 厚み4.8	ヒノキ科ヒノキ属	
162	谷埋土4上層	丸材	残長15.2 幅10.0 厚み6.3	ツバキ科ヒサカキ属	両端部に切断面
163	谷埋土4上層	板材	残長20.4 残幅4.1 残厚2.8	ヒノキ科ヒノキ属	両端部に切断面
164	谷埋土4上層	板材	残長11.4 残幅6.7 残厚3.6	ブナ科クリ属クリ	
165	谷埋土4上層	板材	残長16.3 幅5.0 残厚1.5	ヒノキ科アスナロ属	
166	谷埋土4上層	板材(斎串か)	残長21.9 幅3.5 厚み1.3	ヒノキ科ヒノキ属	両端部両側面を斜めに削り落とす
167	谷埋土4上層	板材	残長19.1 幅4.8 厚み1.8	ヒノキ科ヒノキ属	
168	谷埋土4上層	板状製品	長さ11.7 幅9.5 厚み2.0	ヒノキ科ヒノキ属	片面に段を形成
169	谷埋土4上層	板材	長さ13.4 幅9.7 厚み2.7	ヒノキ科ヒノキ属	
170	谷埋土4上層	板材	残長17.6 残幅4.7 残厚1.7	ヒノキ科ヒノキ属	両端部に切断面 側部加工面
171	谷埋土4上層	板材	残長16.7 残幅4.5 残厚1.7	ヒノキ科ヒノキ属	両端部に切断面 側部加工面
172	谷埋土4上層	板材	残長14.5 残幅3.9 厚み1.0	ヒノキ科ヒノキ属	
173	谷埋土4上層	板材	長さ11.0 幅4.2 厚み1.3	ヒノキ科アスナロ属	両端部に切断面 側部加工面
174	谷埋土4上層	板材	残長12.8 残幅3.8 厚み2.1	ヒノキ科ヒノキ属	端部に切断面
175	谷埋土4上層	板材	残長6.7 残幅4.9 残厚1.5	ヒノキ科ヒノキ属	端部に切断面
176	谷埋土4上層	板材	残長16.5 残幅3.5 残厚1.5	ヒノキ科ヒノキ属	両端部に切断面 側部加工面
177	谷埋土4上層	板材	残長13.0 幅6.0 残厚1.8	ヒノキ科ヒノキ属	両端部に切断面 側部加工面
178	谷埋土4上層	板材	残長12.4 残幅4.2 残厚1.4	ヒノキ科ヒノキ属	
179	谷埋土4上層	板材	残長8.6 残幅3.4 残厚1.1	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面 側部加工面
180	谷埋土4上層	板材	残長9.0 残幅4.2 残厚1.2	ヒノキ科ヒノキ属	両端部に切断面 側部加工面

## 吉田遺跡古代理没谷出土の木製品(Ⅱ)

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
181	谷埋土4上層	板材	残長20.0 残幅2.9 厚み1.0	ヒノキ科アスナロ属	
182	谷埋土4上層	板材	残長15.2 残幅4.4 残厚1.1	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面 側部加工面
183	谷埋土4上層	板材	残長13.5 残幅3.9 厚み1.0	ヒノキ科ヒノキ属	両端部に切断面 側部加工面
184	谷埋土4上層	板材	残長12.7 残幅4.3 厚み1.5	ヒノキ科ヒノキ属	両端部切断面
185	谷埋土4上層	板材	長さ7.7 残幅4.7 厚み0.9	ヒノキ科ヒノキ属	両端部切断面
186	谷埋土4上層	板材	残長9.3 残幅3.9 残厚1.1	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
187	谷埋土4上層	板材	残長11.3 残幅4.6 残厚0.6	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
188	谷埋土4上層	板材	残長10.8 残幅3.5 残厚0.5	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
189	谷埋土4上層	板材	残長15.0 残幅1.2 厚み0.4	ヒノキ科ヒノキ属	
190	谷埋土4上層	火付け木	残長31.4 残幅2.3 残厚1.9	ブナ科シイ属	一方の先端が炭化
191	谷埋土4上層	板材	残長7.4 残幅6.5 厚み1.2	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面 側部加工面
192	谷埋土4上層	板材	残長9.5 残幅3.2 残厚0.9	ヒノキ科ヒノキ属	
193	谷埋土4上層	板材	残長8.9 残幅5.1 厚み0.8	ヒノキ科ヒノキ属	
194	谷埋土4上層	板材	残長8.3 残幅6.0 残厚1.5	ヒノキ科ヒノキ属	両端部切断面
195	谷埋土4上層	板材	残長13.8 残幅3.2 残厚1.2	ヒノキ科ヒノキ属	両端部切断面
196	谷埋土4上層	板材	残長7.8 残幅4.4 厚み0.8	ヒノキ科ヒノキ属	両端部切断面
197	谷埋土4上層	板材	残長6.4 残幅5.9 残厚2.0	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
198	谷埋土4上層	火付け木	残長9.9 残幅3.7 残厚1.2	ヒノキ科ヒノキ属	部分的に炭化
199	谷埋土4上層	板材	残長8.4 残幅2.5 残厚1.0	ヒノキ科ヒノキ属	両端部切断面
200	谷埋土4上層	板材	残長7.5 残幅2.2 残厚0.7	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
201	谷埋土4上層	板材	残長6.5 残幅2.9 残厚1.1	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
202	谷埋土4上層	板材	残長4.2 残幅3.0 残厚0.8	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
203	谷埋土4上層	板材	残長6.3 残幅4.0 残厚1.2	ブナ科クリ属クリ	
204	谷埋土4上層	板材	残長8.0 幅3.0 厚み1.0	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
205	谷埋土4上層	板材	残長7.8 幅1.6 厚み0.9	ヒノキ科ヒノキ属	
206	谷埋土4上層	板材	残長5.2 残幅3.4 残厚0.4	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
207	谷埋土4上層	板材	残長7.1 残幅1.8 残厚0.8	ヒノキ科ヒノキ属	
208	谷埋土4上層	板材	残長7.6 残幅2.1 残厚0.8	ヒノキ科ヒノキ属	
209	谷埋土4上層	板材	残長9.3 残幅1.9 厚み0.4	ヒノキ科アスナロ属	
210	谷埋土4上層	板材	残長8.6 残幅2.9 残厚0.6	ヒノキ科ヒノキ属	
211	谷埋土4上層	板材	残長8.5 残幅2.8 厚み0.4	ヒノキ科ヒノキ属	
212	谷埋土4上層	板材	残長4.5 残幅1.9 厚み0.5	ヒノキ科ヒノキ属	
213	谷埋土4上層	板材	残長5.8 残幅3.5 厚み0.5	ヒノキ科ヒノキ属	
214	谷埋土4上層	板材	残長4.4 残幅3.4 厚み0.8	ヒノキ科ヒノキ属	

## 吉田遺跡古代理没谷出土の木製品(Ⅱ)

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
215	谷埋土4上層	板材	残長3.1 残幅3.0 厚み0.5	ヒノキ科ヒノキ属	
216	谷埋土4上層	板材	残長5.0 残幅1.5 残厚0.6	ヒノキ科ヒノキ属	端部切断面
217	谷埋土4上層	板材	残長19.8 幅4.9 厚み0.7	ヒノキ科アスナロ属	
218	谷埋土4上層	板材	残長9.1 幅4.9 厚み0.7	ヒノキ科ヒノキ属	
219	谷埋土4上層	板材	残長11.5 幅3.6 厚み0.4	ヒノキ科ヒノキ属	
220	谷埋土4上層	板材	残長5.7 幅4.7 厚み0.6	ヒノキ科アスナロ属	
221	谷埋土4上層	火付け木	残長8.5 残幅1.8 残厚0.4	ヒノキ科ヒノキ属	一方の先端が炭化
222	谷埋土4上層	板材	残長9.7 幅3.0 厚み0.6	ヒノキ科ヒノキ属	
223	谷埋土4上層	板材	残長17.5 幅4.5 厚み0.6	ヒノキ科ヒノキ属	片側端部に人為的に穿たれたと見られる孔あり
224	谷埋土4上層	板材	残長10.8 幅3.9 厚み0.8	ヒノキ科ヒノキ属	
225	谷埋土4上層	板材	残長20.3 幅2.7 厚み0.8	ヒノキ科ヒノキ属	
226	谷埋土4上層	板材	残長4.1 幅2.4 厚み0.3	ヒノキ科ヒノキ属	
227	谷埋土4上層	板材	残長6.8 幅2.5 厚み0.5	ヒノキ科ヒノキ属	
228	谷埋土4上層	板材	残長14.1 残幅2.0 厚み0.5	ヒノキ科アスナロ属	
229	谷埋土4上層	板材	残長5.8 幅2.0 厚み0.3	ヒノキ科ヒノキ属	
230	谷埋土4上層	火付け木	残長4.4 残幅1.3 厚み0.6	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端と側部が炭化
231	谷埋土4上層	火付け木	残長8.0 残幅1.9 残厚0.6	ヒノキ科アスナロ属	両端が炭化
232	谷埋土4上層	角棒材	残長26.4 幅1.7 残厚1.5	ヒノキ科ヒノキ属	
233	谷埋土4上層	角棒材	残長11.6 幅1.8 残厚1.3	ヒノキ科ヒノキ属	
234	谷埋土4上層	角棒材	残長15.2 残幅1.1 残厚1.1	ヒノキ科ヒノキ属	
235	谷埋土4上層	火付け木	残長13.3 幅1.5 残厚0.4	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
236	谷埋土4上層	板材	残長12.5 幅1.8 残厚0.8	ヒノキ科アスナロ属	
237	谷埋土4上層	板材	残長10.8 幅1.0 残厚0.6	ヒノキ科アスナロ属	
238	谷埋土4上層	板材	残長16.1 残幅1.9 残厚0.8	ヒノキ科アスナロ属	
239	谷埋土4上層	板材	残長22.4 幅3.3 厚み1.2	ヒノキ科アスナロ属	
240	谷埋土4上層	板材	残長18.5 幅2.1 厚み0.8	ヒノキ科ヒノキ属	
241	谷埋土4上層	棒状製品	残長17.2 径1.0	ヒノキ科ヒノキ属	
242	谷埋土4上層	板材	残長11.7 幅1.2 厚み0.5	ヒノキ科ヒノキ属	
243	谷埋土4上層	板材	残長10.5 幅1.8 厚み0.6	ヒノキ科アスナロ属	端部切断面
244	谷埋土4上層	火付け木	残長3.2 幅3.0 残厚0.4	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
245	谷埋土4上層	板材	残長7.0 幅1.5 残厚0.5	ブナ科シイ属	
246	谷埋土4上層(側溝)	角棒材	残長12.3 残幅2.8 残厚2.5	ヒノキ科アスナロ属	
247	谷埋土4上層	棒状製品	残長11.0 幅2.1 残厚1.2	ヒノキ科ヒノキ属	両端挟り込み部で折損
248	谷埋土4上層	棒状製品	残長10.6 幅1.0 厚み1.4	ヒノキ科ヒノキ属	非貫通の孔が穿たれる

## 吉田遺跡古代理没谷出土の木製品(Ⅱ)

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
249	谷埋土4上層	曲物底板か	残長5.4 残幅2.5 残厚0.4	ウルシ科ウルシ属	表面炭化
250	谷埋土4上層	杭	残長47.4 径4.3	シキミ科シキミ属シキミ	表面炭化
251	谷埋土4上層	杭	残長14.5 幅2.5 残厚1.6	ブナ科シイ属	
252	谷埋土4上層	杭	残長9.3 幅3.0 厚み2.9	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	端部が炭化
253	谷埋土4上層	杭	残長25.8 残幅4.0 厚み3.4	ブナ科シイ属	表面炭化
254	谷埋土4上層	杭	残長22.2 幅3.0 厚み2.8	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
255	谷埋土4上層	杭	残長17.5 幅3.3 厚み3.4	ウルシ科ウルシ属	
256	谷埋土4上層(側溝)	火付け木	残長11.3 残幅3.6 厚み1.6	マツ科マツ属[二葉松類]	一方の先端が炭化
257	谷埋土4上層	火付け木	残長11.6 残幅2.1 厚み1.2	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端と側部が炭化
258	谷埋土4上層	火付け木	残長16.2 残幅2.5 残厚2.0	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
259	谷埋土4上層	火付け木	残長19.5 残幅2.6 厚み2.0	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端と側部が炭化
260	谷埋土4上層	火付け木	残長4.6 残幅1.5 残厚0.2	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
261	谷埋土4上層	火付け木	残長5.8 幅1.0 厚み0.7	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
262	谷埋土4上層	火付け木	残長4.7 幅1.6 厚み0.7	ヒノキ科ヒノキ属	片側表面が炭化
263	谷埋土4上層	火付け木	残長22.7 残幅3.5 残厚1.5	ヒノキ科ヒノキ属	一方の先端が炭化
264	谷埋土4上層	火付け木	残長18.1 残幅1.7 残厚0.7	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
265	谷埋土4上層	火付け木	残長14.5 幅1.1 厚み0.8	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
266	谷埋土4上層	火付け木	残長17.2 残幅2.0 残厚0.5	ヒノキ科ヒノキ属	一方の先端が炭化
267	谷埋土4上層	火付け木	残長16.7 残幅1.5 厚み1.0	ヒノキ科ヒノキ属	一方の先端が炭化
268	谷埋土4上層	火付け木	残長15.0 残幅2.3 残厚1.0	ヒノキ科ヒノキ属	両端が炭化
269	谷埋土4上層	火付け木	残長11.7 幅1.4 厚み1.1	ヒノキ科ヒノキ属	一方の先端が炭化
270	谷埋土4上層	火付け木	残長12.1 幅1.5 厚み0.7	ヒノキ科ヒノキ属	一方の先端が炭化
271	谷埋土4上層	火付け木	残長9.0 残幅0.9 残厚0.7	ヒノキ科ヒノキ属	一方の先端が炭化
272	谷埋土4上層	火付け木	残長11.8 幅1.4 残厚1.0	ヒノキ科アスナロ属	両端が炭化
273	谷埋土4上層	火付け木	残長6.6 残幅2.4 残厚1.2	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
274	谷埋土4上層	火付け木	残長8.6 残幅1.6 残厚1.3	ヒノキ科ヒノキ属	両端が炭化
275	谷埋土4上層	火付け木	残長10.8 幅2.8 厚み1.0	ヒノキ科ヒノキ属	一方の先端が炭化
276	谷埋土4上層	火付け木	残長8.9 残幅1.3 残厚0.9	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
277	谷埋土4上層	火付け木	残長9.0 残幅1.8 残厚1.1	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
278	谷埋土4上層	火付け木	長さ10.4 幅1.3 厚み0.7	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
279	谷埋土4上層	火付け木	残長7.2 残幅1.7 残厚0.9	ヒノキ科アスナロ属	両端が炭化
280	谷埋土4上層	火付け木	残長5.8 残幅1.6 厚み0.8	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
281	谷埋土4上層	火付け木	残長8.8 幅1.4 厚み1.2	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端と2側面が炭化

表9 谷埋土3出土木製品観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
282	谷埋土3	板材	長さ14.2 幅1.7 厚み0.8	ヒノキ科アスナロ属	
283	谷埋土3	板材	残長9.0 幅2.0 厚み0.6	ヒノキ科ヒノキ属	
284	谷埋土3	板材	残長4.2 残幅2.5 残厚0.6	ヒノキ科ヒノキ属	
285	谷埋土3(側溝)	板材	残長13.6 幅1.5 厚み0.5		※水漬け保管中に破損
286	谷埋土3(側溝)	板材	残長8.5 幅1.5 厚み0.5		※水漬け保管中に破損
287	谷埋土3	角棒材	長さ8.1 残幅0.9 残厚0.8	ヒノキ科アスナロ属	
288	谷埋土3	角棒材	残長8.9 残幅0.8 残厚0.6	ヒノキ科アスナロ属	
289	谷埋土3	板材	残長11.9 幅3.0 厚み1.5	ヒノキ科アスナロ属	断面凸レンズ状
290	谷埋土3	火付け木	残長24.5 幅1.4 厚み1.0	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
291	谷埋土3	火付け木	残長13.1 幅0.8 残厚0.7	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
292	谷埋土3	火付け木	残長10.4 残幅1.5 厚み1.0	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
293	谷埋土3	火付け木	残長10.0 幅1.6 厚み1.0	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
294	谷埋土3	火付け木	残長8.5 幅2.0 厚み1.2	ヒノキ科アスナロ属	両端と片面が炭化
295	谷埋土3	火付け木	残長7.5 幅1.5 厚み1.3	ヒノキ科アスナロ属	両端が炭化

表 10 谷埋土2出土木製品観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
296	谷埋土2(側溝)	板材	残長27.6 残幅4.1 厚み1.3	ヒノキ科アスナロ属	
297	谷埋土2	板材	残長4.7 残幅3.5 厚み0.5	ブナ科コナラ属コナラ亜属 コナラ節	
298	谷埋土2	棒材	残長20.5 幅1.5 厚み1.6	ユキノシタ科ウツギ属	
299	谷埋土2	角棒材	残長9.2 幅1.0 厚み0.6	ヒノキ科ヒノキ属	
300	谷埋土2	火付け木	残長3.7 残幅3.2 残厚0.3	ヤナギ科ヤナギ属	表面炭化
301	谷埋土2	火付け木	残長11.3 残幅3.4 残厚1.8	マツ科マツ属[二葉松類]	一方の先端が炭化
302	谷埋土2	火付け木	残長6.3 幅2.1 残厚0.5	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化
303	谷埋土2	火付け木	残長8.1 残幅6.0 残厚3.1	ヒノキ科アスナロ属	両端が炭化
304	谷埋土2	棒材	残長26.5 幅2.3 厚み2.0	ユキノシタ科ウツギ属	

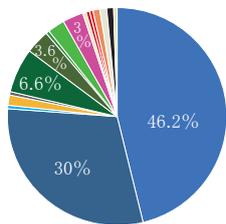
表 11 谷左岸肩部杭・矢板観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
305	谷左岸肩部	杭	残長25.8 幅5.0 厚み4.3	ブナ科シイ属	杭列NO. 1
306	谷左岸肩部	杭	残長23.0 幅5.9 厚み4.4	バラ科サクラ属	杭列NO. 2
307	NR1左岸肩部	矢板	残長17.0 幅8.6 厚み7.0	ブナ科シイ属	杭列NO. 3
308	谷左岸肩部	矢板	残長14.5 幅5.3	ブナ科シイ属	杭列NO. 4
309	谷左岸肩部	矢板	残長14.2 残幅4.7 厚み0.6	ブナ科シイ属	杭列NO. 5
310	谷左岸肩部	矢板	残長26.7 残幅6.4 厚み3.2	ブナ科シイ属	杭列NO. 6
311	谷左岸肩部	杭	残長11.7 残幅1.6	ブナ科シイ属	杭列NO. 7
312	谷左岸肩部	杭	残長30.2 幅6.9 厚み5.2	バラ科サクラ属	杭列NO. 8
313	谷左岸肩部	矢板	残長18.2 幅4.9 厚み2.2	ブナ科シイ属	杭列NO. 9
314	谷左岸肩部	杭	残長27.8 幅5.8 厚み5.7	バラ科サクラ属	杭列NO. 10
315	谷左岸肩部	杭	残長13.8 幅4.3	ブナ科シイ属	杭列NO. 11
316	谷左岸肩部	矢板	残長8.7 残幅5.5 厚み3.0	バラ科サクラ属	杭列NO. 12
317	谷左岸肩部	杭	残長16.7 残幅4.6 厚み2.8	バラ科サクラ属	杭列NO. 13
318	谷左岸肩部	杭	残長32.3 残幅5.9 厚み4.1	バラ科サクラ属	杭列NO. 14
319	谷左岸肩部	矢板	残長19.3 幅5.5 厚み1.8	ブナ科クリ属	杭列NO. 15
320	谷左岸肩部	矢板	残長9.6 残幅3.7 厚み2.0	ブナ科クリ属	杭列NO. 16
321	谷左岸肩部	矢板	残長13.0 残幅8.5 残厚4.0	ブナ科シイ属	杭列NO. 17
322	谷左岸肩部	杭	残長6.7 残幅2.1 厚み2.0	マツ科マツ属[二葉松類]	杭列NO. 18

表 12 木製品の樹種(全体)

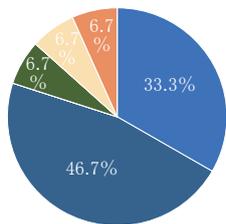
樹種	ヒノキ科ヒノキ属	ヒノキ科アスナロ属	スギ科スギ属スギ	マツ科マツ属[二葉松類]	マキ科マキ属イヌマキ	ブナ科シイ属	ブナ科クリ属クリ	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	バラ科サクラ属	ハイノキ科ハイノキ属	ツバキ科ツバキ属	ツバキ科ヒサカキ属	ヤナギ科ヤナギ属	ユキノシタ科ウツギ属	ウルシ科ウルシ属	シキミ科シキミ属シキミ	総数
点数	91	59	1	3	1	13	7	1	5	6	1	1	1	2	2	2	1	197
%	46.2	30	0.5	1.5	0.5	6.6	3.6	0.5	2.5	3	0.5	0.5	0.5	1	1	1	0.5	99.9



- 【針葉樹】**
- ヒノキ科ヒノキ属
  - ヒノキ科アスナロ属
  - スギ科スギ属スギ
  - マツ科マツ属二葉松類
  - マキ科マキ属イヌマキ
- 【広葉樹】**
- ブナ科シイ属
  - ブナ科クリ属クリ
  - ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
  - ブナ科コナラ属アカガシ亜属
  - バラ科サクラ属
  - ハイノキ科ハイノキ属
  - ツバキ科ツバキ属
  - ツバキ科ヒサカキ属
  - ヤナギ科ヤナギ属
  - ユキノシタ科ウツギ属
  - ウルシ科ウルシ属
  - シキミ科シキミ属シキミ

表 13 谷埋土6直上出土木製品の樹種

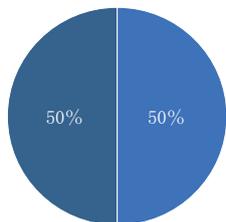
樹種	ヒノキ科ヒノキ属	ヒノキ科アスナロ属	スギ科スギ属スギ	マツ科マツ属[二葉松類]	マキ科マキ属イヌマキ	ブナ科シイ属	ブナ科クリ属クリ	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	バラ科サクラ属	ハイノキ科ハイノキ属	ツバキ科ツバキ属	ツバキ科ヒサカキ属	ヤナギ科ヤナギ属	ユキノシタ科ウツギ属	ウルシ科ウルシ属	シキミ科シキミ属シキミ	総数
点数	5	7	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	15
%	33.3	46.7	0	0	0	0	6.7	0	0	0	6.7	0	0	6.7	0	0	0	100.1



- 【針葉樹】**
- ヒノキ科ヒノキ属
  - ヒノキ科アスナロ属
  - スギ科スギ属スギ
  - マツ科マツ属二葉松類
  - マキ科マキ属イヌマキ
- 【広葉樹】**
- ブナ科シイ属
  - ブナ科クリ属クリ
  - ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
  - ブナ科コナラ属アカガシ亜属
  - バラ科サクラ属
  - ハイノキ科ハイノキ属
  - ツバキ科ツバキ属
  - ツバキ科ヒサカキ属
  - ヤナギ科ヤナギ属
  - ユキノシタ科ウツギ属
  - ウルシ科ウルシ属
  - シキミ科シキミ属シキミ

表 14 谷埋土5直上出土木製品の樹種

樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
%	50	50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100



【針葉樹】

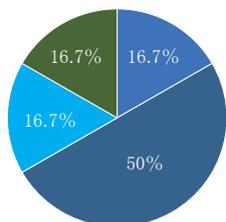
- ヒノキ科ヒノキ属
- ヒノキ科アスナロ属
- スギ科スギ属スギ
- マツ科マツ属二葉松類
- マキ科マキ属イヌマキ

【広葉樹】

- ブナ科シイ属
- ブナ科クリ属クリ
- ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
- ブナ科コナラ属アカガシ亜属
- バラ科サクラ属
- ハイノキ科ハイノキ属
- ツバキ科ツバキ属
- ツバキ科ヒサカキ属
- ヤナギ科ヤナギ属
- ユキノシタ科ウツギ属
- ウルシ科ウルシ属
- シキミ科シキミ属シキミ

表 15 谷埋土4下層出土木製品の樹種

樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
%	16.7	50	16.7	0	0	0	16.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100.1



【針葉樹】

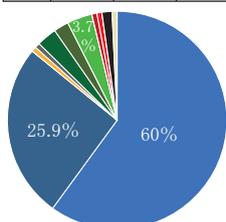
- ヒノキ科ヒノキ属
- ヒノキ科アスナロ属
- スギ科スギ属スギ
- マツ科マツ属二葉松類
- マキ科マキ属イヌマキ

【広葉樹】

- ブナ科シイ属
- ブナ科クリ属クリ
- ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
- ブナ科コナラ属アカガシ亜属
- バラ科サクラ属
- ハイノキ科ハイノキ属
- ツバキ科ツバキ属
- ツバキ科ヒサカキ属
- ヤナギ科ヤナギ属
- ユキノシタ科ウツギ属
- ウルシ科ウルシ属
- シキミ科シキミ属シキミ

表 16 谷埋土4上層出土木製品の樹種

樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	81	35	0	1	1	4	3	0	5	0	0	1	1	0	0	2	1	135
%	60	25.9	0	0.7	0.7	3	2.2	0	3.7	0	0	0.7	0.7	0	0	1.5	0.7	99.8



【針葉樹】

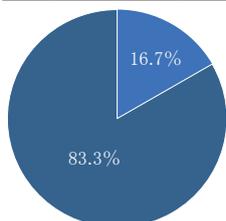
- ヒノキ科ヒノキ属
- ヒノキ科アスナロ属
- スギ科スギ属スギ
- マツ科マツ属二葉松類
- マキ科マキ属イヌマキ

【広葉樹】

- ブナ科シイ属
- ブナ科クリ属クリ
- ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
- ブナ科コナラ属アカガシ亜属
- バラ科サクラ属
- ハイノキ科ハイノキ属
- ツバキ科ツバキ属
- ツバキ科ヒサカキ属
- ヤナギ科ヤナギ属
- ユキノシタ科ウツギ属
- ウルシ科ウルシ属
- シキミ科シキミ属シキミ

表 17 谷埋土3出土木製品の樹種

樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	2	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
%	16.7	83.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100



【針葉樹】

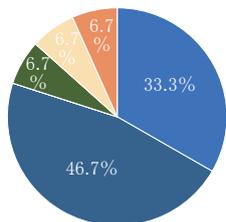
- ヒノキ科ヒノキ属
- ヒノキ科アスナロ属
- スギ科スギ属スギ
- マツ科マツ属二葉松類
- マキ科マキ属イヌマキ

【広葉樹】

- ブナ科シイ属
- ブナ科クリ属クリ
- ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
- ブナ科コナラ属アカガシ亜属
- バラ科サクラ属
- ハイノキ科ハイノキ属
- ツバキ科ツバキ属
- ツバキ科ヒサカキ属
- ヤナギ科ヤナギ属
- ユキノシタ科ウツギ属
- ウルシ科ウルシ属
- シキミ科シキミ属シキミ

表 18 谷埋土2出土木製品の樹種

樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	1	3	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	0	9
%	11.1	33.3	0	11.1	0	0	0	11.1	0	0	0	0	0	11.1	22.2	0	0	99.9



【針葉樹】

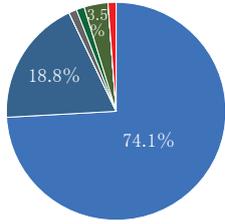
- ヒノキ科ヒノキ属
- ヒノキ科アスナロ属
- スギ科スギ属スギ
- マツ科マツ属二葉松類
- マキ科マキ属イヌマキ

【広葉樹】

- ブナ科シイ属
- ブナ科クリ属クリ
- ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
- ブナ科コナラ属アカガシ亜属
- バラ科サクラ属
- ハイノキ科ハイノキ属
- ツバキ科ツバキ属
- ツバキ科ヒサカキ属
- ヤナギ科ヤナギ属
- ユキノシタ科ウツギ属
- ウルシ科ウルシ属
- シキミ科シキミ属シキミ

表 19 谷埋土4上層出土木製品(材)の樹種

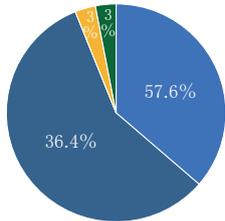
樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	63	16	0	0	1	1	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	85
%	74.1	18.8	0	0	1.2	1.2	3.5	0	0	0	0	0	1.2	0	0	0	0	100



- 【針葉樹】
- ヒノキ科ヒノキ属
  - ヒノキ科アスナロ属
  - スギ科スギ属スギ
  - マツ科マツ属二葉松類
  - マキ科マキ属イヌマキ
- 【広葉樹】
- ブナ科シイ属
  - ブナ科クリ属クリ
  - ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
  - ブナ科コナラ属アカガシ亜属
  - バラ科サクラ属
  - ハイノキ科ハイノキ属
  - ツバキ科ツバキ属
  - ツバキ科ヒサカキ属
  - ヤナギ科ヤナギ属
  - ユキノシタ科ウツギ属
  - ウルシ科ウルシ属
  - シキミ科シキミ属シキミ

表 20 谷埋土4上層出土木製品(火付け木)の樹種

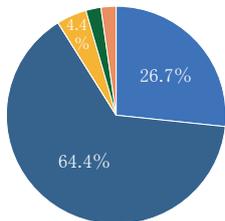
樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	12	19	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
%	36.4	57.6	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100



- 【針葉樹】
- ヒノキ科ヒノキ属
  - ヒノキ科アスナロ属
  - スギ科スギ属スギ
  - マツ科マツ属二葉松類
  - マキ科マキ属イヌマキ
- 【広葉樹】
- ブナ科シイ属
  - ブナ科クリ属クリ
  - ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
  - ブナ科コナラ属アカガシ亜属
  - バラ科サクラ属
  - ハイノキ科ハイノキ属
  - ツバキ科ツバキ属
  - ツバキ科ヒサカキ属
  - ヤナギ科ヤナギ属
  - ユキノシタ科ウツギ属
  - ウルシ科ウルシ属
  - シキミ科シキミ属シキミ

表 21 谷埋土出土木製品(火付け木)の樹種

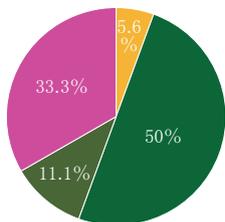
樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	12	29	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	45
%	26.7	64.4	0	4.4	0	2.2	0	0	0	0	0	0	0	2.2	0	0	0	99.9



- 【針葉樹】
- ヒノキ科ヒノキ属
  - ヒノキ科アスナロ属
  - スギ科スギ属スギ
  - マツ科マツ属二葉松類
  - マキ科マキ属イヌマキ
- 【広葉樹】
- ブナ科シイ属
  - ブナ科クリ属クリ
  - ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
  - ブナ科コナラ属アカガシ亜属
  - バラ科サクラ属
  - ハイノキ科ハイノキ属
  - ツバキ科ツバキ属
  - ツバキ科ヒサカキ属
  - ヤナギ科ヤナギ属
  - ユキノシタ科ウツギ属
  - ウルシ科ウルシ属
  - シキミ科シキミ属シキミ

表 22 谷左岸肩部杭・矢板の樹種

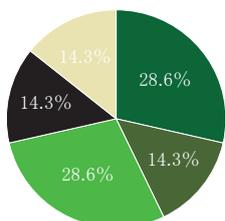
樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	0	0	0	1	0	9	2	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	18
%	0	0	0	5.6	0	50	11.1	0	0	33.3	0	0	0	0	0	0	0	100



- 【針葉樹】
- ヒノキ科ヒノキ属
  - ヒノキ科アスナロ属
  - スギ科スギ属スギ
  - マツ科マツ属二葉松類
  - マキ科マキ属イヌマキ
- 【広葉樹】
- ブナ科シイ属
  - ブナ科クリ属クリ
  - ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
  - ブナ科コナラ属アカガシ亜属
  - バラ科サクラ属
  - ハイノキ科ハイノキ属
  - ツバキ科ツバキ属
  - ツバキ科ヒサカキ属
  - ヤナギ科ヤナギ属
  - ユキノシタ科ウツギ属
  - ウルシ科ウルシ属
  - シキミ科シキミ属シキミ

表 23 谷埋土出土木製品(杭)の樹種

樹種	ヒノキ科 ヒノキ属	ヒノキ科 アスナロ属	スギ科 スギ属 スギ	マツ科 マツ属 〔二葉松類〕	マキ科 マキ イヌマキ	ブナ科 シイ属	ブナ科 クリ属 クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	ツバキ科 ツバキ属	ツバキ科 ヒサカキ属	ヤナギ科 ヤナギ属	ユキノシタ科 ウツギ属	ウルシ科 ウルシ属	シキミ科 シキミ属 シキミ	総数
点数	0	0	0	0	0	2	1	0	2	0	0	0	0	0	0	1	1	7
%	0	0	0	0	0	28.6	14.3	0	28.6	0	0	0	0	0	0	14.3	14.3	100.1



- 【針葉樹】
- ヒノキ科ヒノキ属
  - ヒノキ科アスナロ属
  - スギ科スギ属スギ
  - マツ科マツ属二葉松類
  - マキ科マキ属イヌマキ
- 【広葉樹】
- ブナ科シイ属
  - ブナ科クリ属クリ
  - ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
  - ブナ科コナラ属アカガシ亜属
  - バラ科サクラ属
  - ハイノキ科ハイノキ属
  - ツバキ科ツバキ属
  - ツバキ科ヒサカキ属
  - ヤナギ科ヤナギ属
  - ユキノシタ科ウツギ属
  - ウルシ科ウルシ属
  - シキミ科シキミ属シキミ

## 5. 樹種に見る木製品の特徴(表12～23)

当調査で樹種同定を行ったのは、谷左岸肩部から抜き取った杭・矢板を含めて197点である。確認された樹種は、針葉樹5種、広葉樹12種で、割合は針葉樹が78.7%を占める(表12)。中でもヒノキ科ヒノキ属が46.2%(91点)、ヒノキ科アスナロ属が30%(59点)となっており、総数の3/4に材としてヒノキ科が用いられていることが分かる。既往調査で実施した谷埋土の花粉分析では、ヒノキ科花粉が検出されていない(野井2004)ことから、改修Ⅰ期調査にて7世紀後半代の土器と伴に出土した木製品同様(横山2023)、8世紀以降も遠隔地のヒノキ科材を伐採し、当地まで運搬して使用していたと推定される。

谷埋土4上層以外では、木製品の集中出土(多量投棄)は見られなかったが、樹種比率(表13～18)は各層ともヒノキ科が主体となっている(表13～18)。ただし、上位に堆積する谷埋土2・3については、谷上流および谷右岸緩傾斜地(官衙関連遺構分布域)を由来地とする二次堆積層と考えられる(横山219)ことから、含まれていた木製品の廃棄時期は、堆積年代と異なる可能性を有している。

谷埋土4上層に投棄された木製品135点の樹種を見ると、ヒノキ科が他を圧倒しており、85.9%(116点)を占めている(表16)が、116点のうちヒノキ属が70%(81点)で、アスナロ属が30%(35点)に過ぎないことには注意が必要であろう。両者の比率は、改修Ⅰ期調査の遺物包含層L6における様相(ヒノキ属46%(11点)、アスナロ属54%(13点))と大きな相違を見せており、谷埋土4上層下位の谷埋土6直上(表13)、谷埋土4下層(表15)、二次堆積層の可能性のある上位の谷埋土3(表17)、谷埋土2(表18)においても、ヒノキ属よりアスナロ属が優勢となっていることがその理由である。この結果は、谷埋土4上層が堆積する一定期間(木製品廃材多量投棄期間)に、ヒノキ科でもヒノキ属の需要が著しく高まったことを示唆している。

谷埋土4上層に含まれる木製品は、大多数が板状や角状の端材で、出土した85点中、ヒノキ科が占める割合はさらに高まり、92.9%(79点)となる(表19)。79点のうちヒノキ属が80%(63点)を占め、アスナロ属は20%(16点)に過ぎない。製品として用途が分かる斧柄(147:ブナ科コナラ属アカガシ亜属)や木錘2点(149:ブナ科コナラ属アカガシ亜属、150:ツバキ科ツバキ属)などは、材として適しているヒノキ科以外の樹種が選択されていることから、ヒノキ科ヒノキ属材の主たる用途は、曲物底板などの板状製品以外では、建材への使用や、木簡(文書や帳簿、荷札)での使用が想像されるが、集落構造の変化(有力首長集落から官衙への移行)や植生の変化を含めた時期差、ヒノキ科樹木伐採地の変更など、様々な要因を考慮する必要がある。周辺遺跡での調査事例を含め、今後の情報増加に期待したい。

火付け木については、総数33点が確認された谷埋土4上層では94%(31点)がヒノキ科であった。その内訳を見ると、39%(12点)がヒノキ属、61%(19点)がアスナロ属であり、同層の木製品比率とは反する結果となった(表20)。他層を含めた樹種比率でも、総数45点中ヒノキ科が91%(41点)を占め、41点のうちの29%(12点)がヒノキ属、71%(29点)がアスナロ属であった(表21)。

火付け木に関する先行研究では、いずれも木製品製作時の端材や廃材が用いられたと推測されている(藤田2014、2019、浦2021)が、その解釈が妥当であれば、材と火付け木の樹種比率は比例値を示すはずである。今回の検討では反比例値を示していることから、火付け木にはヒノキ科でもアスナロ属を選択する何らかの理由があったものと思われる。一方で、改修Ⅰ期調査の火付け木として主として用いられたマキ科マキ属イヌマキが、当調査では全く確認できなかったことにも注意すべきであろう。

谷左岸肩部から抜き取ることができた杭・矢板18点の樹種は、針葉樹ではマツ科マツ属二葉松類が1点(138)見られるのみで、他は広葉樹でありブナ科シイ属が9点、ブナ科クリ属クリが2点、バラ科サクラ属が6点となっており(表22)、選択的に硬材が用いられていたことが分かる。また、調査区南東端部から

約1.5m北西までの範囲には主としてシイ属(シイ属6本、サクラ属1本)が、調査区南東端部から北西に2~5mの範囲にはサクラ属とシイ属(サクラ属5本、シイ属5本)が密に打ち込まれており、1.5mの空間を経て打たれたNO. 14とNO. 15にはクリが用いられている。意図的な樹種の使い分けではなく、杭・矢板の製作や運搬単位を示すと思われる。また、谷埋土から出土した杭は7点で、ブナ科が5点(シイ属2、アカガシ亜属2、クリ1)、他はウルシ科ウルシ属1点、シキミ科シキミ属シキミ1点であった(表23)。

## 6. おわりに

本稿では、平成20年度実施の動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査にて出土した木製品197点の樹種に関し報告を行った。改修Ⅰ期調査同様、樹種の主体はヒノキ科で、谷肩部の杭・矢板列を除くと木製品の83.8%(150点)を占めている。改修Ⅰ期調査では、ヒノキ科木製品が谷埋土で84.6%(11点)、下位の遺物包含層L6で53.3%(24点)を占めていることから、8世紀以降にヒノキ科材の需要が急増加したと考えられる。換言すると、改修Ⅰ期調査で小数ではあるが木製品を包含した谷埋土L4が、当調査の谷埋土4上層と同一である可能性を示唆しており、層の土質もそれを支持している。また、改修Ⅰ期調査遺物包含層L6では、材におけるヒノキとアスナロの比率がほぼ同じ(9点と10点)であるのに対し、当調査谷埋土4上層ではほぼ4対1(63点と16点)となっており、8世紀に至りヒノキを多用する傾向が強まったことが分かる。その反面、谷埋土4上層におけるヒノキ科火付け木の比率は2対3(12点と19点)と逆転することから、火付け木としては意図的にアスナロが用いられたと理解できる。

埋没谷出土木製品は大多数が廃材であることから、現状では当地の古代における木製品生産や利用の実体にまで考察が進められないが、情報提供を継続することで今後の研究の深化に繋げていきたい。

### 【註】

- 1) NO. 6北西の杭は、先端のみ遺存しており、腐食が進行していたため取りあげられなかった。
- 2) NO. 17南東の杭は、調査区南壁際に検出されたことから、抜き取りを断念した。
- 3) 埋没谷から出土している唯一の木簡(「千字文」を原典とする音義木簡)の樹種は、ヒノキ科ヒノキ属であった(横山2018)。

### 【文献】

- 浦蓉子(2021)「奈良時代の燃えさしについて」、深澤芳樹・浦蓉子(編)『古代の灯火—先史時代にいたる灯明具に関する研究』基盤研究(C)15K0300, 奈良
- 野井英明(2004)「山口大学構内吉田遺跡における官衙遺構立地前後の植生変化」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 藤田慎一(2014)「付け木について」、砺波市教育委員会・株式会社上智(編)『大丹保遺跡発掘調査報告書』, 砺波(富山)
- 藤田慎一(2019)「砺波市大丹保遺跡・増山遺跡出土の付け木について」、『学術財研究』編集事務局(編)『学術財研究』第1集, 京都
- 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口
- 横山成己(2018)「吉田遺跡出土「千字文」音義木簡略報」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成25年度—』, 山口
- 横山成己(2019)「動物医療センター(リニアック室等)新営その他工事に伴う本発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成26年度—』, 山口
- 横山成己(2023)「吉田遺跡古代理没谷出土の木製品(Ⅰ)」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—令和元年度—』, 山口

## 付篇2

## 平成20年度吉田遺跡出土木製品の樹種同定

(株)吉田生物研究所

## 1. 試料

試料は平成20年度に吉田遺跡から出土した木製品197点である。

## 2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。なお、遺物の劣化が著しいので採取できない切片もあった。

## 3. 結果(写真46～78)

樹種同定結果(針葉樹5種、広葉樹12種)の顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1)ヒノキ科ヒノキ属(*Chamaecyparis* sp.)

91点 (124～126, 129, 133, 140・141, 148, 151, 153, 156・157, 161, 163, 166～172, 174～180, 182～189, 191～202, 204～208, 210～216, 218・219, 221～227, 229, 232～234, 240～242, 247・248, 262・263, 266～271, 274・275, 283・284, 299)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

2)ヒノキ科アスナロ属(*Thujopsis* sp.)

59点 (127・128, 131・132, 134, 137～139, 142, 144, 146, 154・155, 160, 165, 173, 181, 209, 217, 220, 228, 230・231, 235～239, 243・244, 246, 257～261, 264・265, 272・273, 276～282, 287～296, 302・303)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3)スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D.Don)

1点 (143)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では

放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

#### 4) マツ科マツ属[二葉松類] (*Pinus* sp.)

3点 (256, 301, 322)

256の木口は採取出来なかった。301、322は木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

#### 5) マキ科マキ属イヌマキ (*Podocarpus macropyllus* Sweet)

1点 (158)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続(ストランド)をなして存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。イヌマキは本州(中・南部)、四国、九州、琉球に分布する。

#### 6) ブナ科シイ属 (*Castanopsis* sp.)

13点 (190, 245, 251, 253, 305, 307~311, 313, 315, 321)

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管(~300  $\mu$ m)は単独でかつ大きい接線方向には連続していない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスタジイがあるが、ツブラジイに見られる集合~複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は本州(福島、佐渡以南)、四国、九州、琉球に分布する。

#### 7) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

7点 (130, 145, 159, 164, 203, 319・320)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管(~500  $\mu$ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

#### 8) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Sect. *Prinus* Loudon syn. *Diversipilosae*, *Dentatae*)

1点 (297)

環孔材である。木口では大道管(～380  $\mu$  m)が年輪界にそって1～3列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは2～3個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### 9) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

5点 (147, 149, 152, 252, 254)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちの大きさの道管(～200  $\mu$  m)が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

#### 10) バラ科サクラ属 (*Prunus* sp.)

6点 (306, 312, 314, 316～318)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～100  $\mu$  m)がほぼ一定の大きさで、単独あるいは放射方向ないし斜方向に連なり分布している。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔及び螺旋肥厚を有する。道管内には着色物質が見られる。放射組織は同性ないし異性で中央部の平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなる。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～1mmからなる。サクラ属はサクラ、ヤマナシなどがあり、本州、四国、九州、琉球に分布する。

#### 11) ハイノキ科ハイノキ属 (*Symplocos* Jacq.)

1点 (136)

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管(～60  $\mu$  m)が平等に分布する。虫害によりできた傷害組織(ピスフレック)が見られる。柾目では道管は階段穿孔と側壁に螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔がある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～600  $\mu$  mからなる。単列部と多列部との幅はほぼ同じですっきりとした形をしている。ハイノキ属はハイノキ、クロバイがあり、本州(千葉以西)、四国、九州、琉球に分布する。

#### 12) ツバキ科ツバキ属 (*Camellia* sp.)

1点 (150)

散孔材である。木口では極めて小さい道管( $\sim 40 \mu\text{m}$ )が、単独ないし2~3個接合して均等に分布する。放射組織は1~3細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔(とくに直立細胞)は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。板目では放射組織は1~4細胞列、高さ $\sim 1\text{mm}$ 以下からなり、平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木繊維の壁には有縁壁孔が一行に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ、サザンカ、チャがあり、本州、四国、九州に分布する。

### 13) ツバキ科ヒサカキ属(*Eurya* sp.)

1点 (162)

散孔材である。木口では極めて小さい道管( $\sim 50 \mu\text{m}$ )が単独ないし2~4個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は1~4細胞列で、高さ $\sim 5\text{mm}$ からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一行に多数並んでいるのが全体で見られる。ヒサカキ属はヒサカキ、ハマヒサカキがあり、本州(岩手、秋田以南)、四国、九州、琉球に分布する。

### 14) ヤナギ科ヤナギ属(*Salix* sp.)

2点 (135, 300)

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管( $\sim 110 \mu\text{m}$ )が単独または2~4個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顕著。柾目では、道管は単穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、篩状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ $\sim 450 \mu\text{m}$ であった。ヤナギ属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

### 15) ユキノシタ科ウツギ属(*Deutzia* sp.)

2点 (298, 304)

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管( $\sim 50 \mu\text{m}$ )が単独ないし2~3個複合して分布する。年輪界は凸状になる。柾目では道管は階段穿孔を有する。放射組織は平伏、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はきわめて小さくかつ多い。木繊維に螺旋肥厚がある。板目では放射組織は1~7細胞列、高さ $\sim 2\text{mm}$ からなる。鞘細胞が見られる。ウツギ属は北海道、本州、四国、九州に分布する。

### 16) ウルシ科ウルシ属(*Rhus* sp.)

2点 (249, 255)

環孔材である。木口ではやや大きい道管( $\sim 270 \mu\text{m}$ )が、単独または2ないし数個が集団で複合して孔圏部を形成している。孔圏外は単独ないし数個複合して散在している。軸方向柔細胞は周囲状

が顕著である。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～700 $\mu$ mからなる。ウルシ属はヌルデ、ヤマウルシがあり、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。

#### 17) シキミ科シキミ属シキミ (*Illicium religiosum* Sieb. et Zucc.)

1点 (250)

散孔材である。木口では小道管(～40 $\mu$ m)が単独または2～4個が接線状、放射状に複合して分布する。年輪界の始めで道管が年輪にそって環孔状に配列している。柾目では道管は階段穿孔、側壁に階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～800 $\mu$ mからなる。シキミは本州(関東以西)、四国、九州に分布する。

#### 【参考文献】

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所(1991)  
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」京都大学木質科学研究所(1999)  
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)  
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社(1979)  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

#### 【使用顕微鏡】

Nikon DS-Fi1

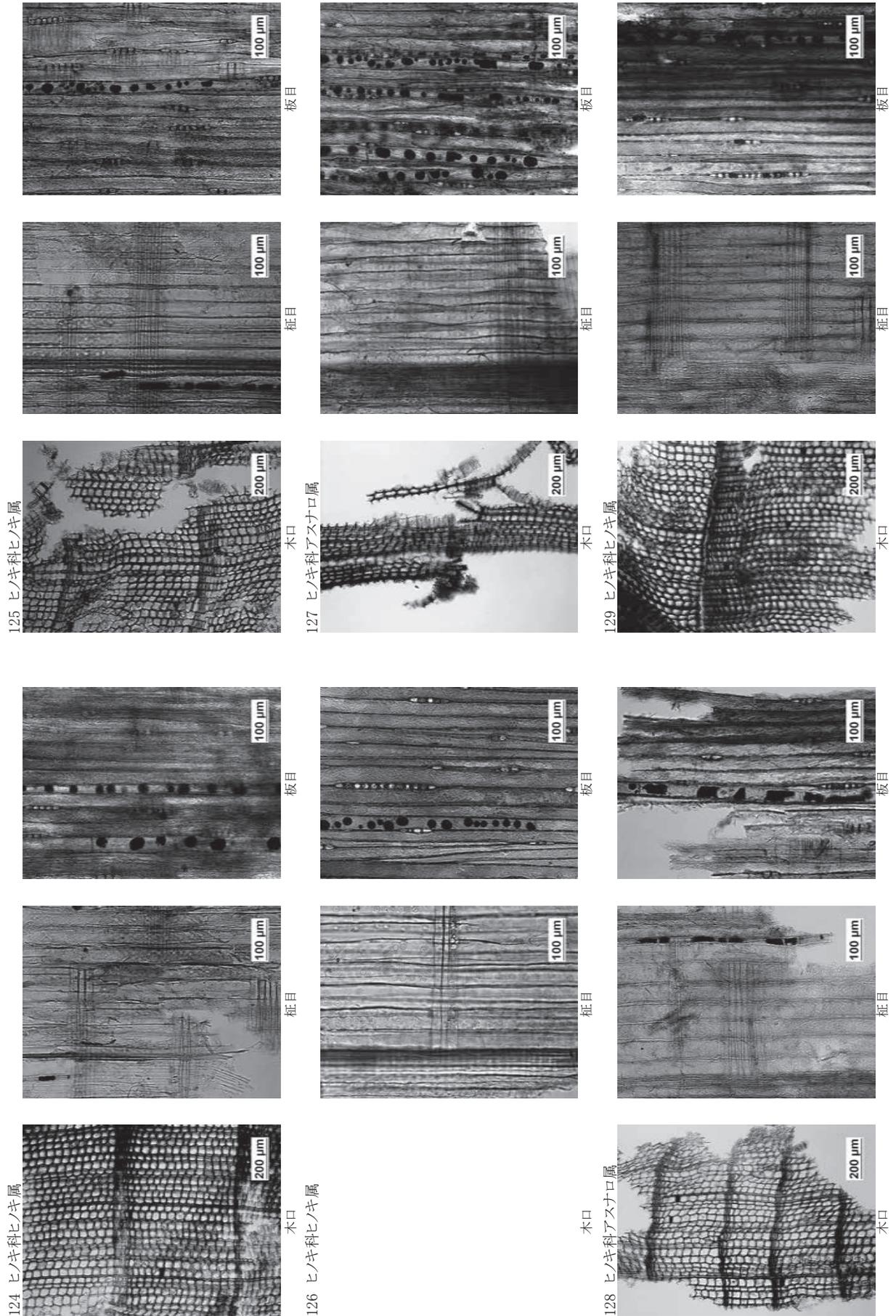


写真 46 木製品顕微鏡写真①

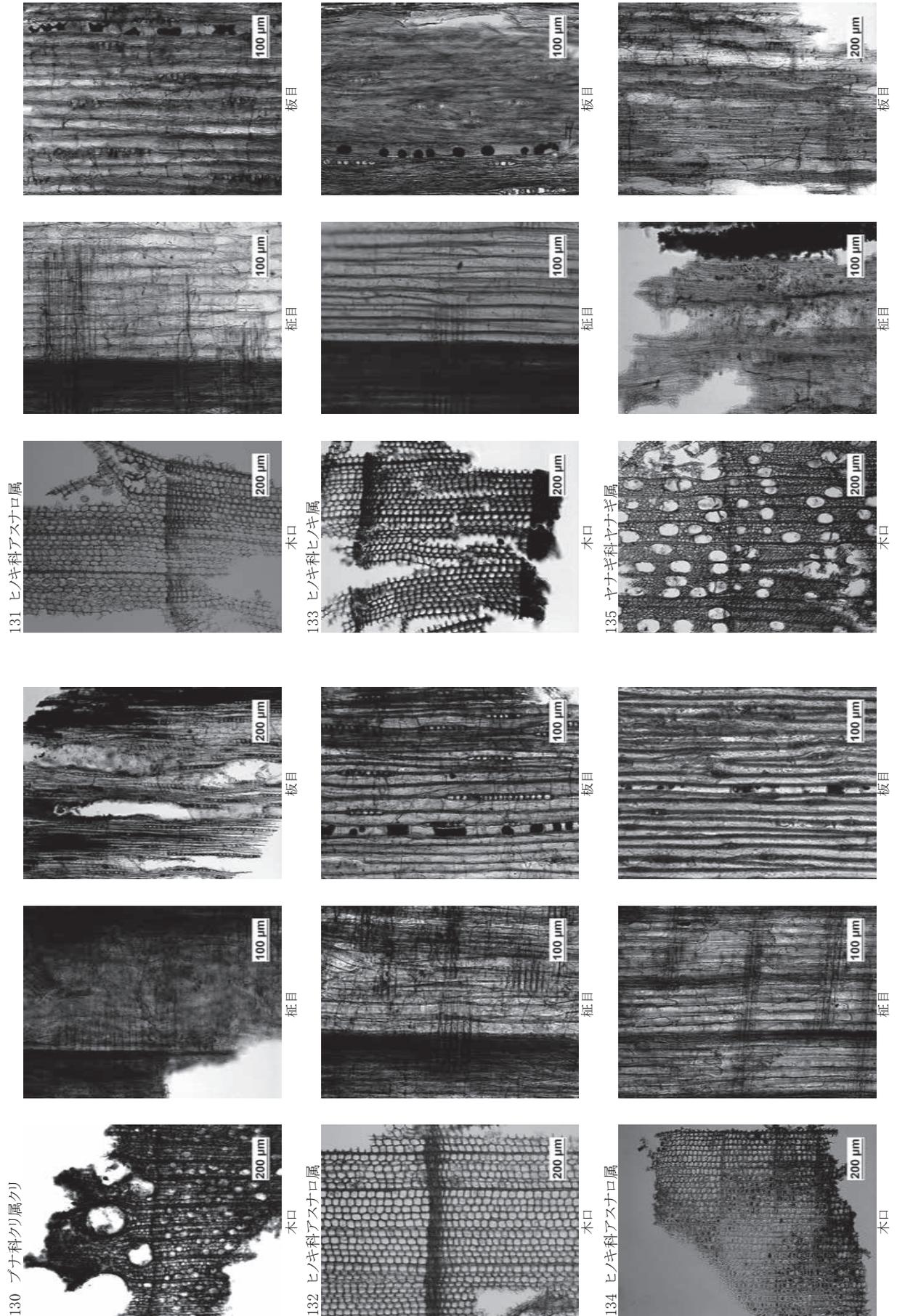


写真 47 木製品顕微鏡写真②



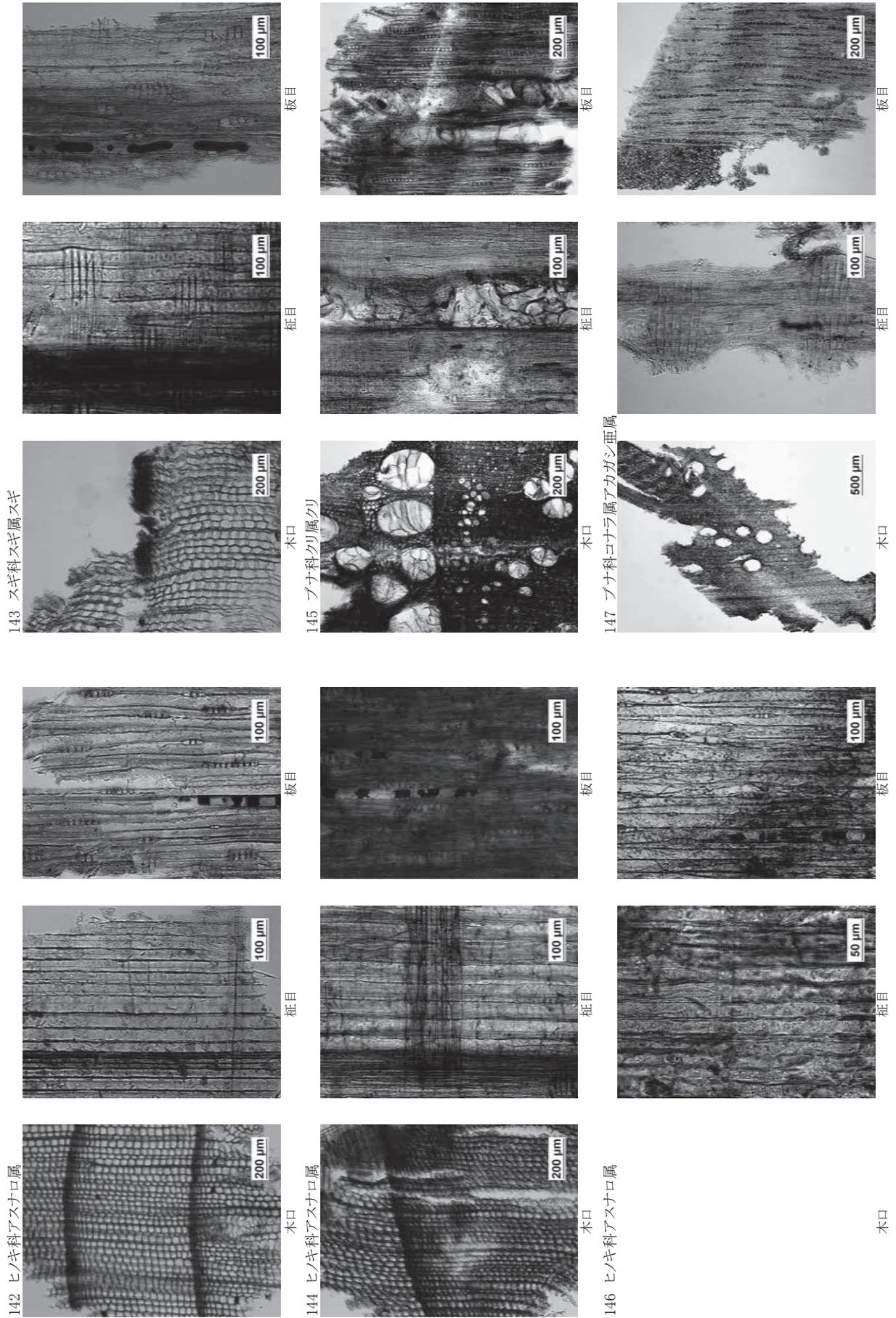
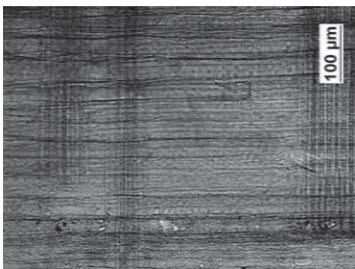


写真 49 木製品顕微鏡写真④

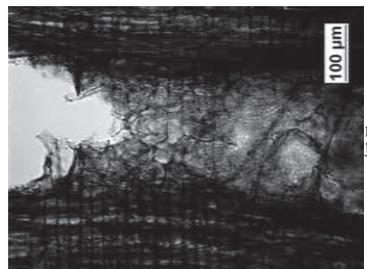
148 ヒノキ科ヒノキ属



板目

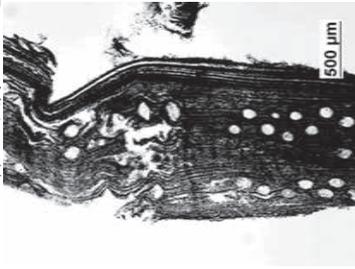


板目

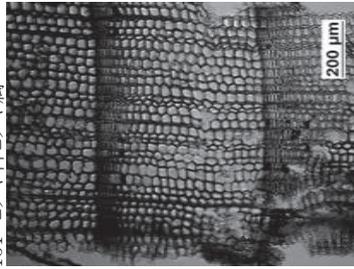


板目

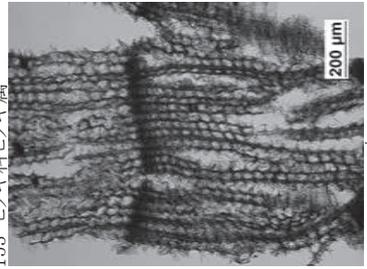
149 ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口



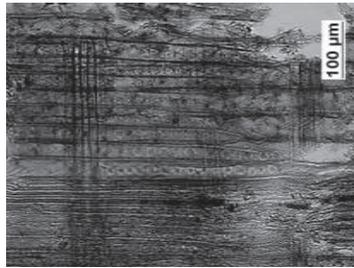
木口



木口



板目



板目



板目



板目



板目



板目

150 ツバキ科ツバキ属



木口

152 ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口

写真 50 木製品顕微鏡写真⑤





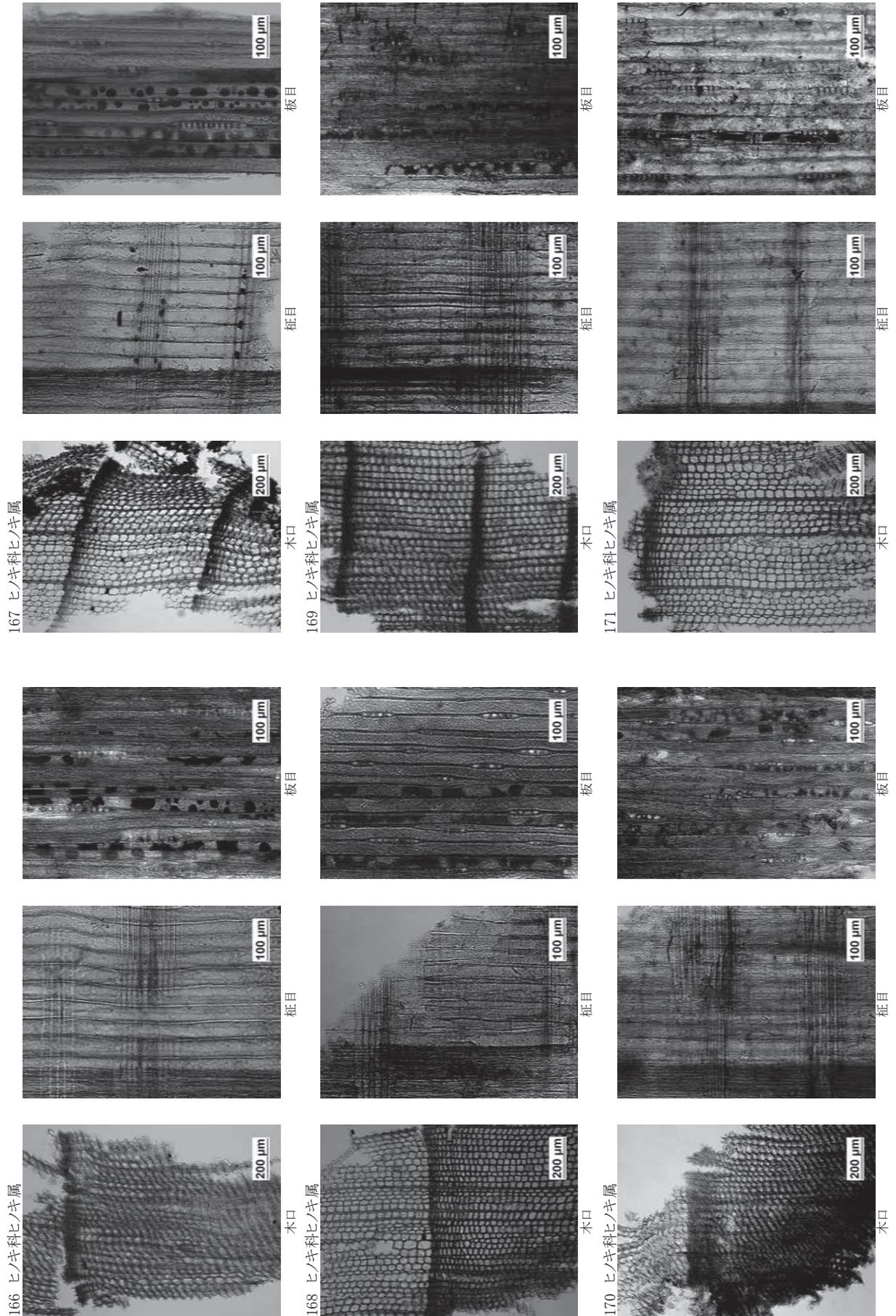
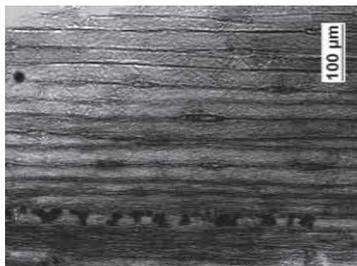
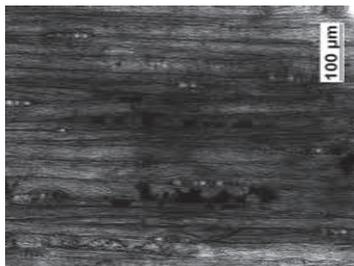


写真 53 木製品顕微鏡写真⑧

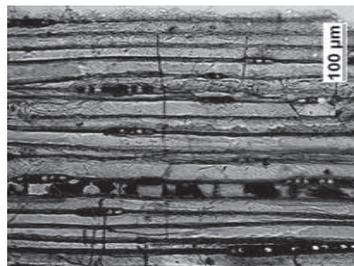
173 ヒノキ科アスナロ属



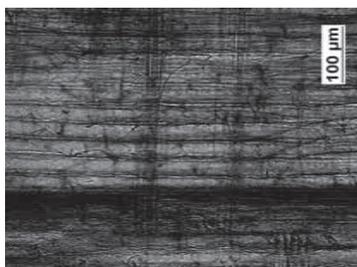
板目



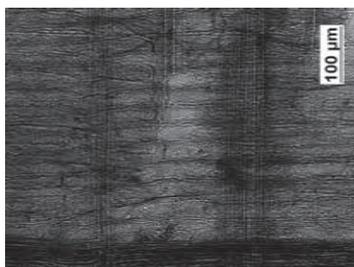
板目



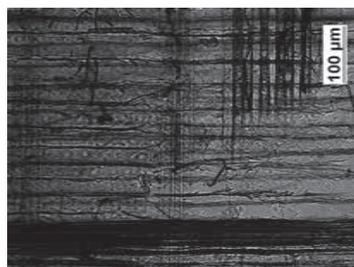
板目



板目



板目



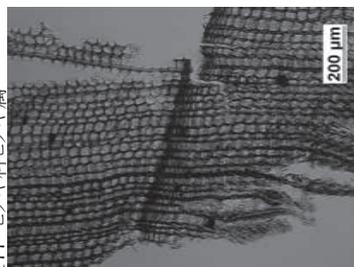
板目

木口  
175 ヒノキ科ヒノキ属



木口

177 ヒノキ科ヒノキ属



木口



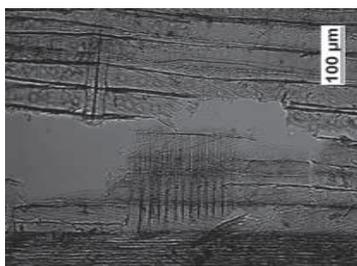
板目



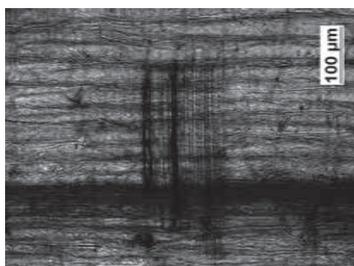
板目



板目



板目

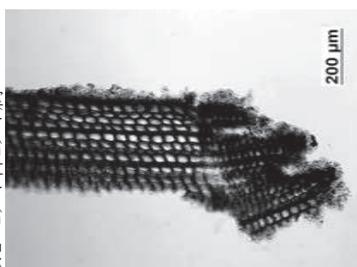


板目



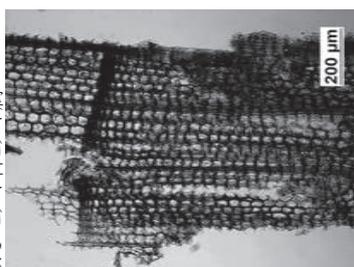
板目

172 ヒノキ科ヒノキ属



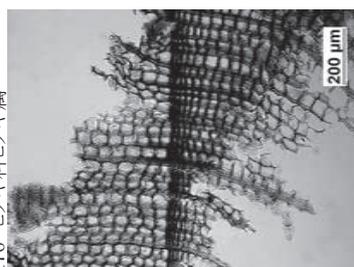
木口

174 ヒノキ科ヒノキ属



木口

176 ヒノキ科ヒノキ属



木口

写真 54 木製品顕微鏡写真⑨

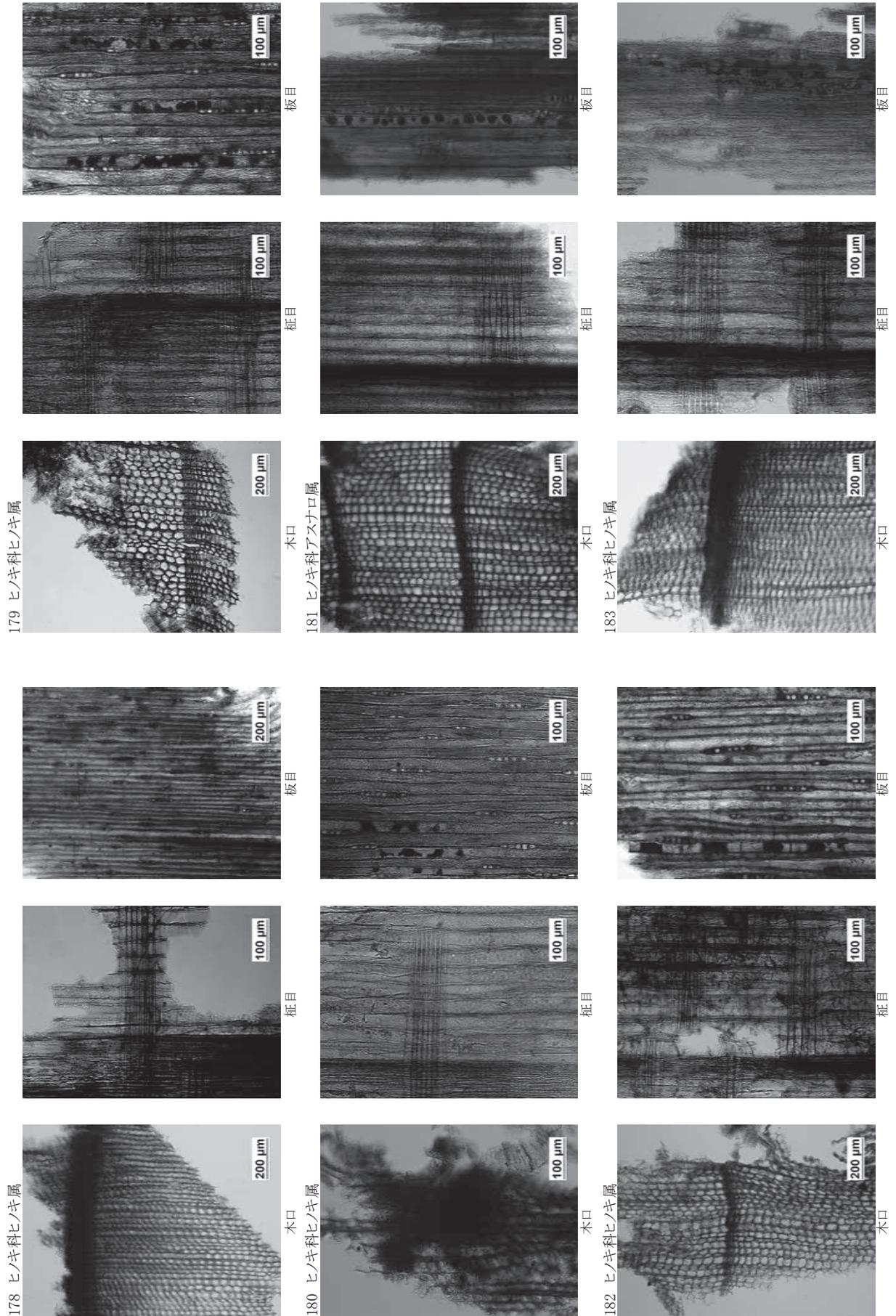


写真 55 木製品顕微鏡写真⑩

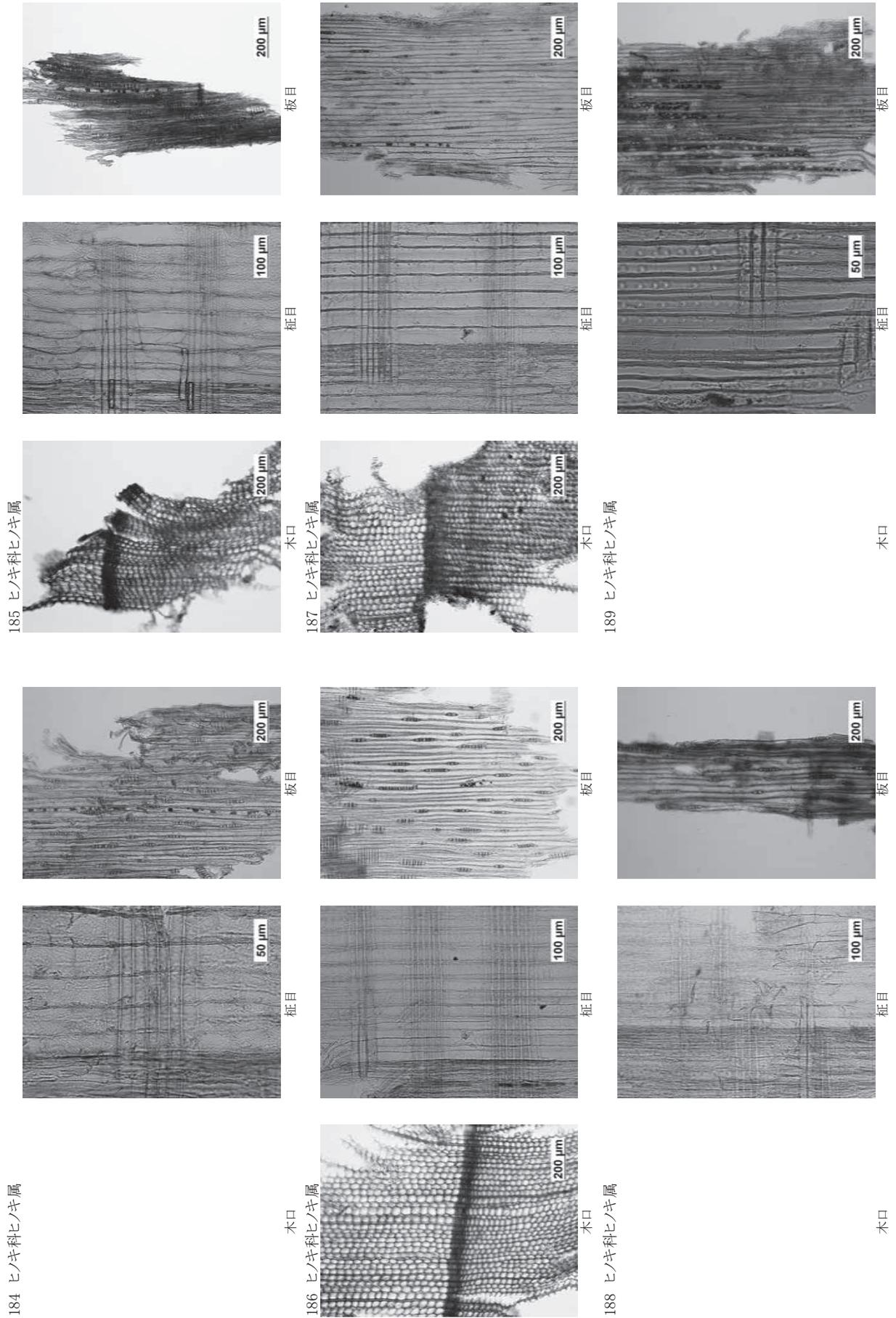


写真 56 木製品顕微鏡写真①

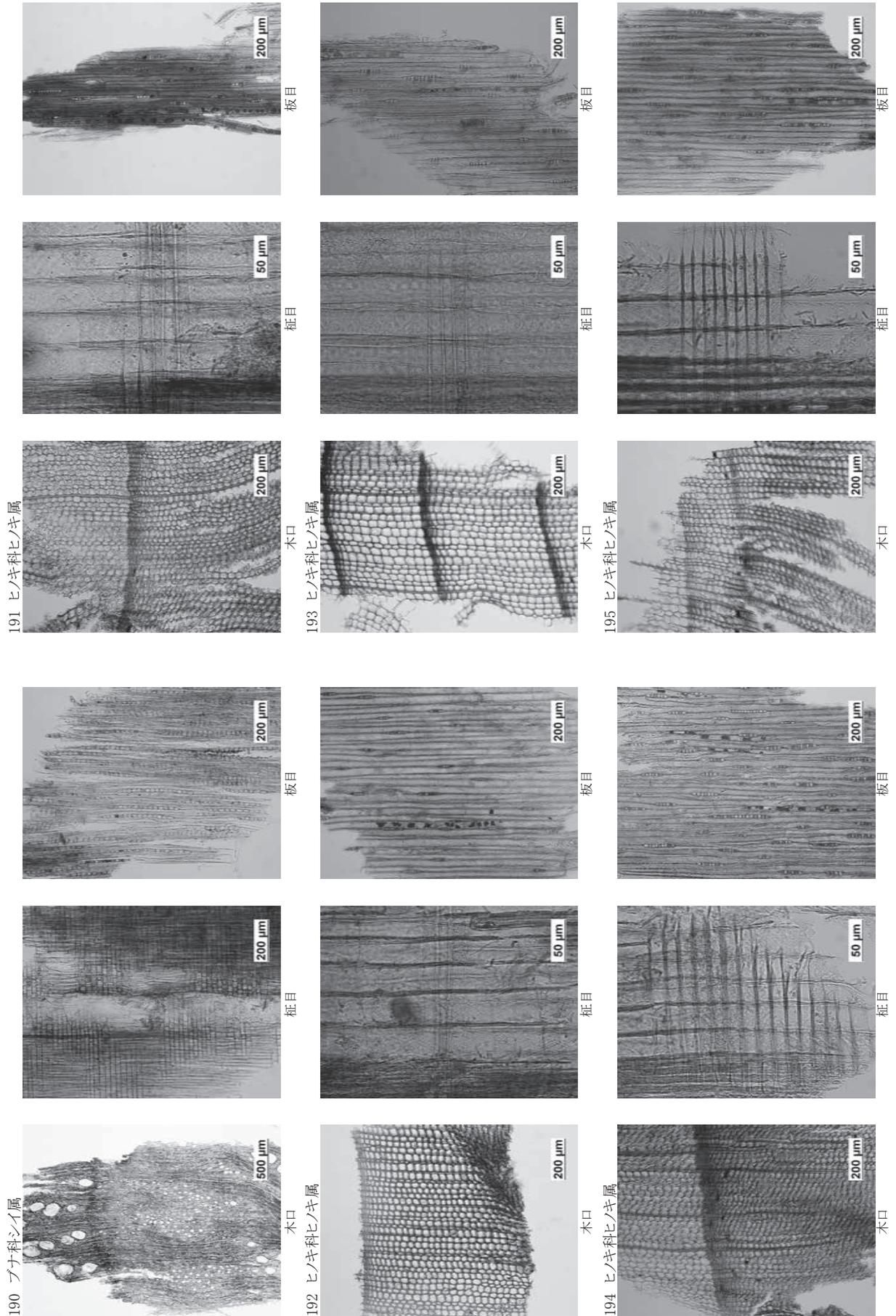


写真 57 木製品顕微鏡写真⑫

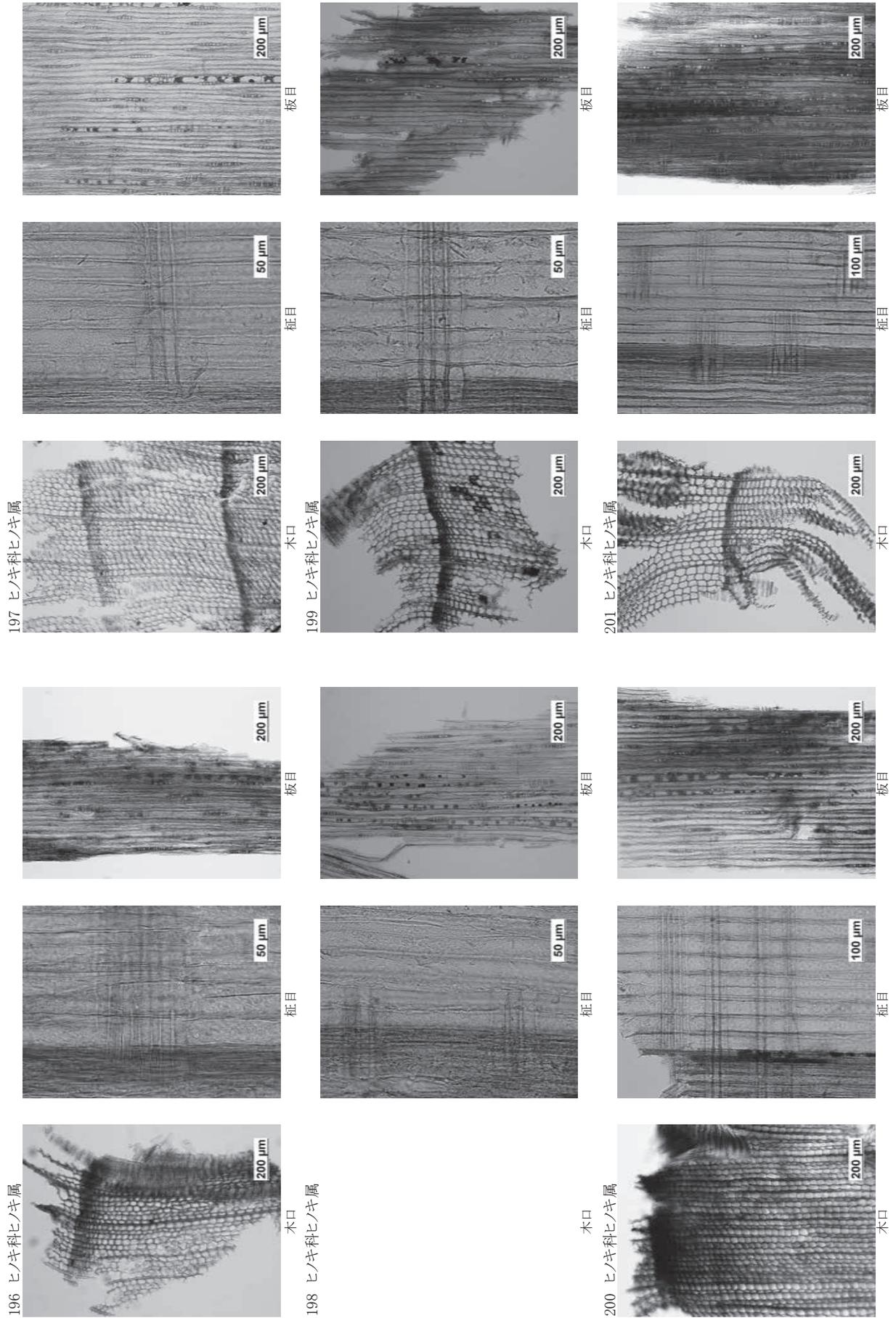


写真 58 木製品顕微鏡写真⑬



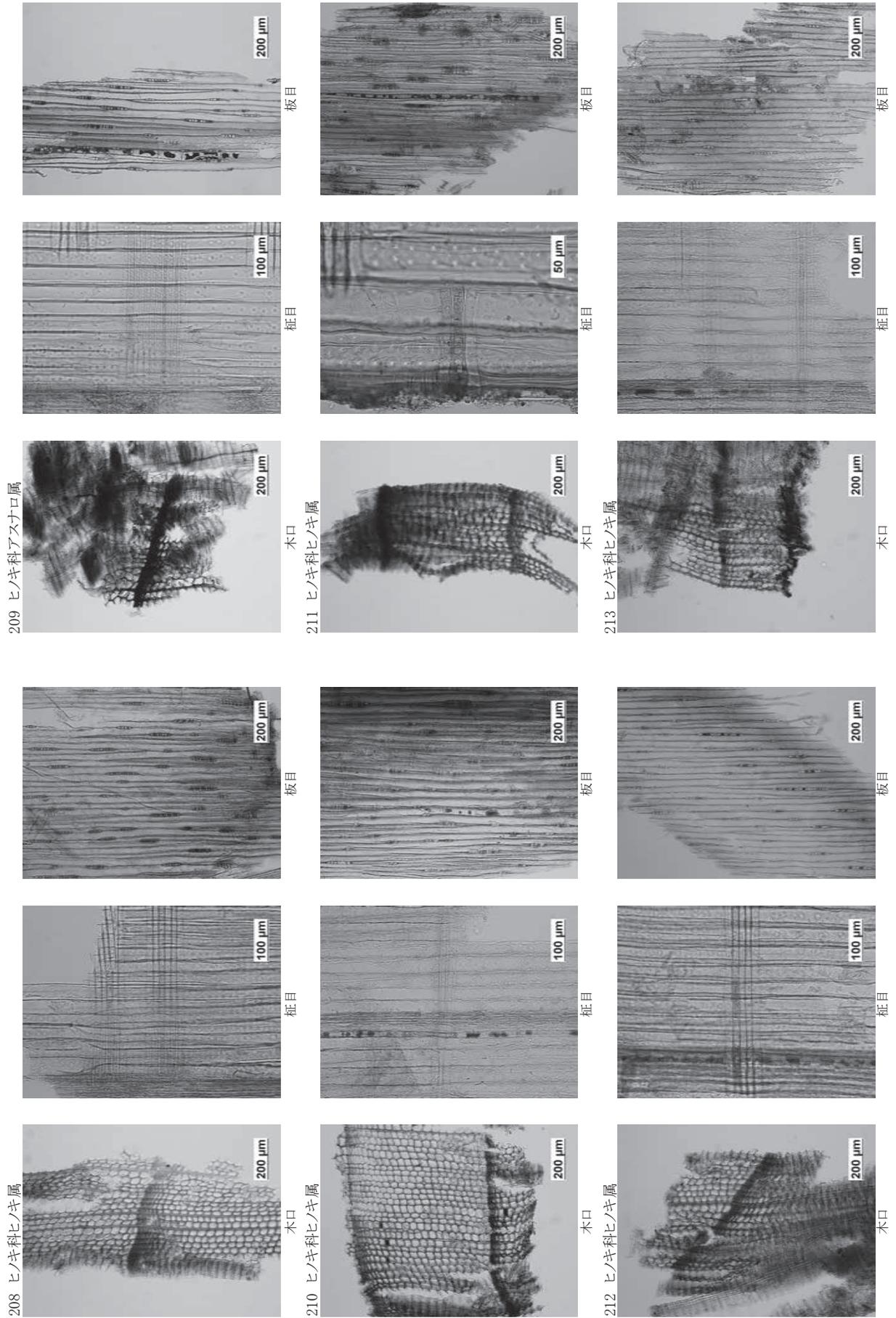


写真 60 木製品顕微鏡写真⑮

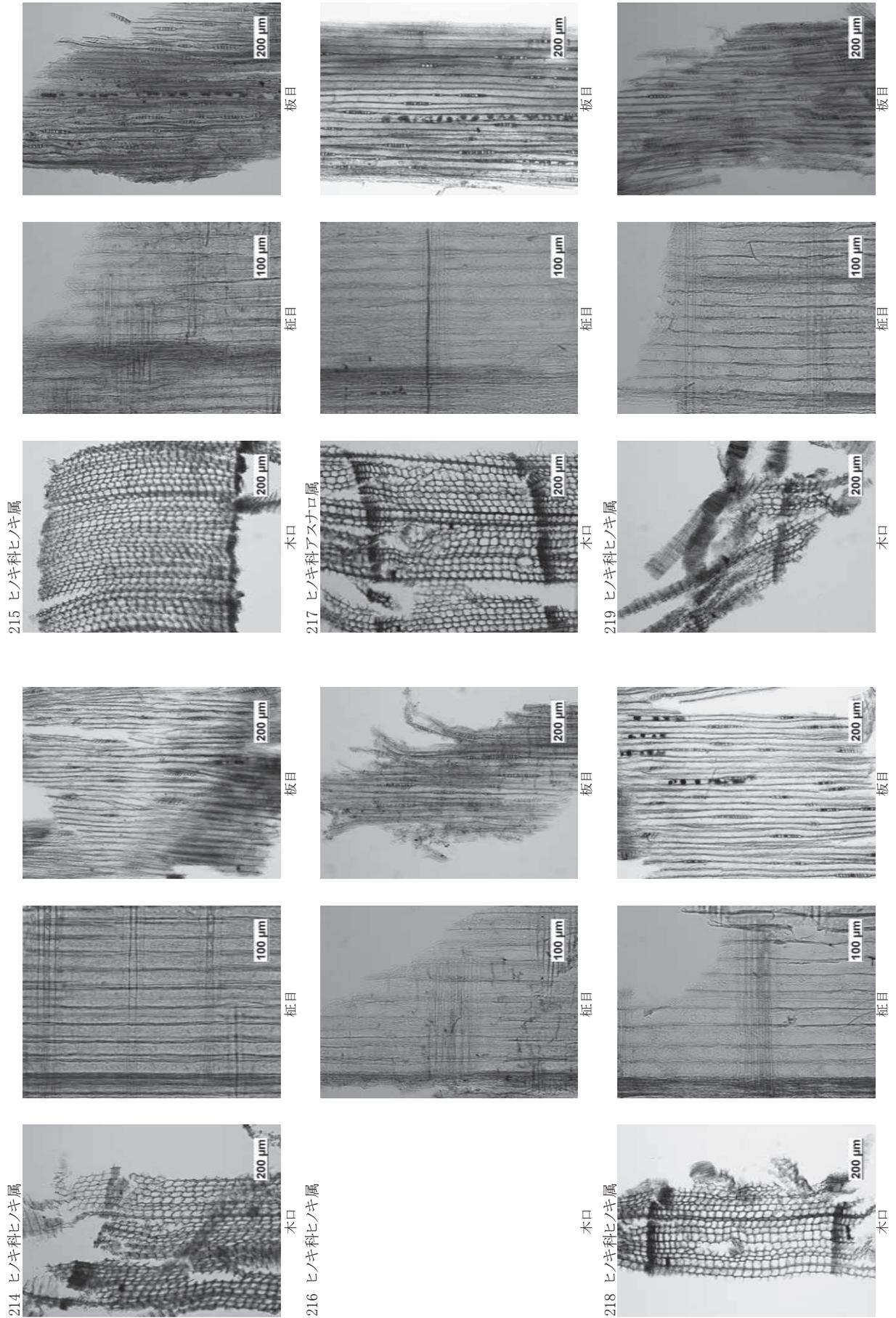


写真 61 木製品顕微鏡写真⑩





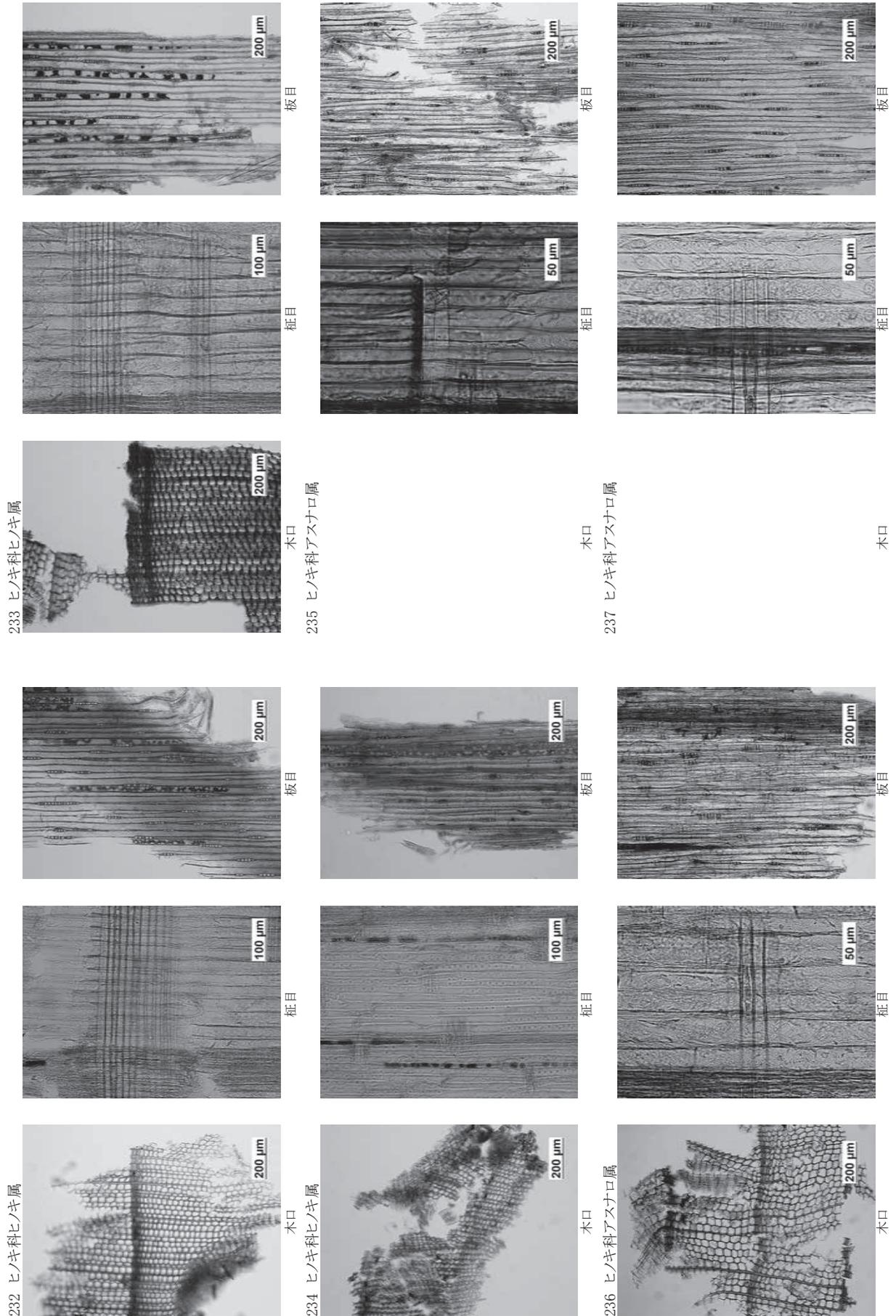


写真 64 木製品顕微鏡写真⑬

238 ヒノキ科アスナロ属

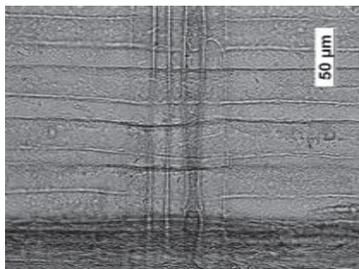


板目



板目

239 ヒノキ科アスナロ属

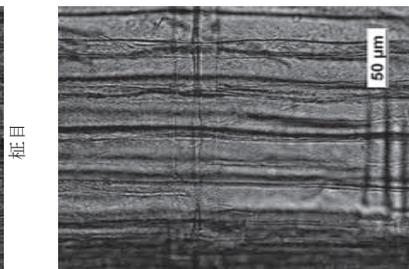


板目

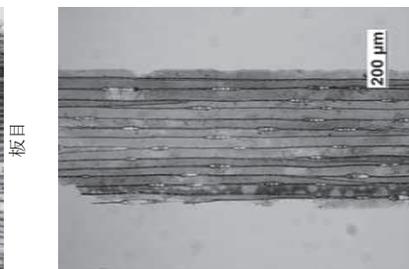


板目

240 ヒノキ科ヒノキ属

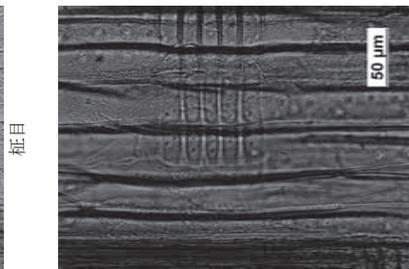


板目

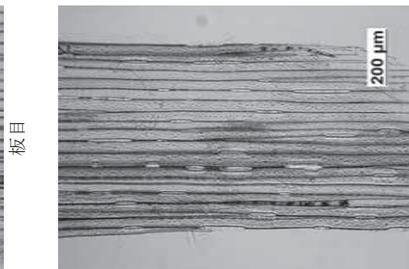


板目

241 ヒノキ科ヒノキ属



板目



板目

242 ヒノキ科ヒノキ属

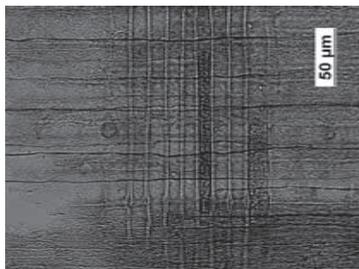


板目



板目

243 ヒノキ科アスナロ属



板目



板目

244 ヒノキ科ヒノキ属



板目



板目

245 ヒノキ科ヒノキ属



板目



板目



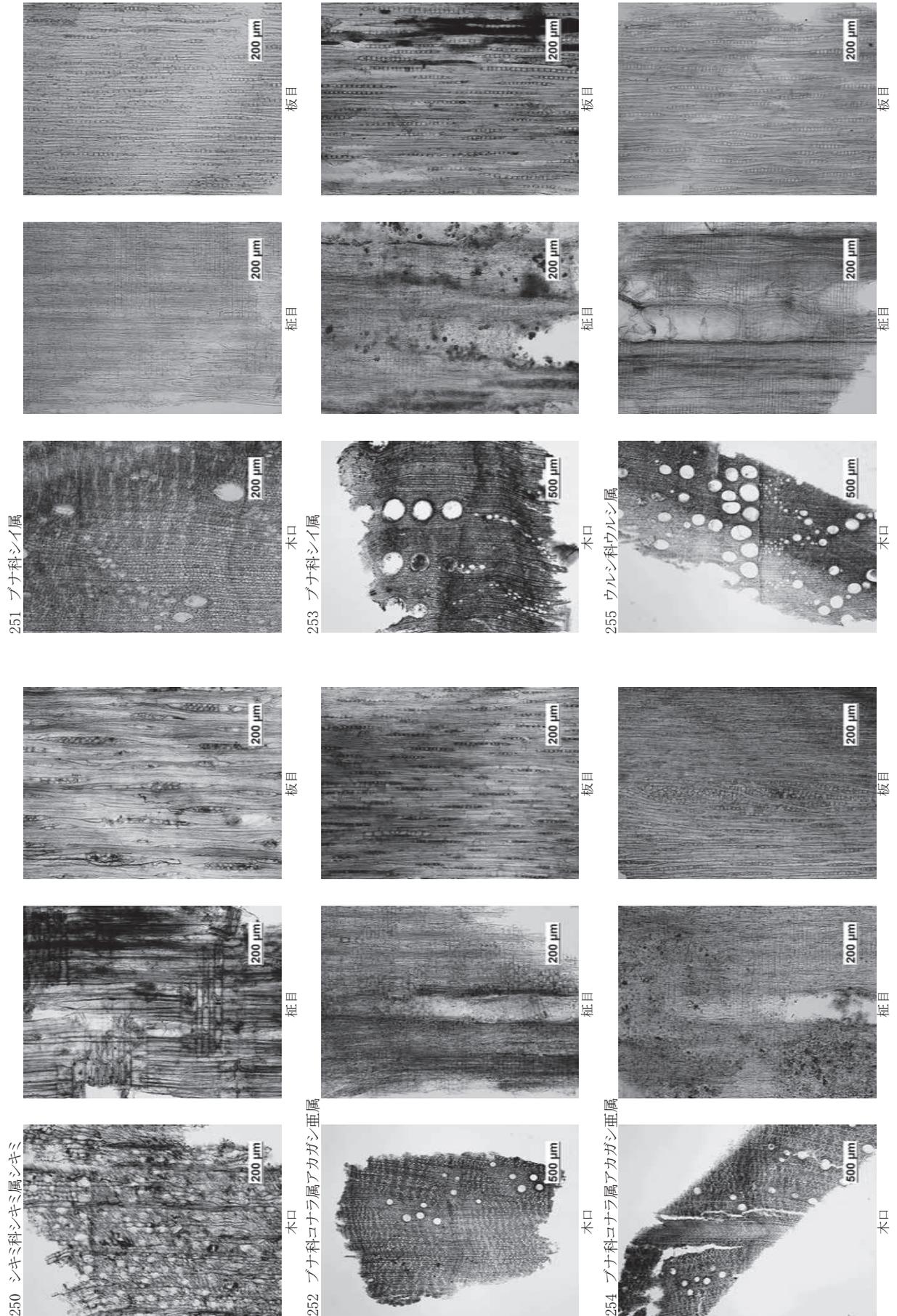
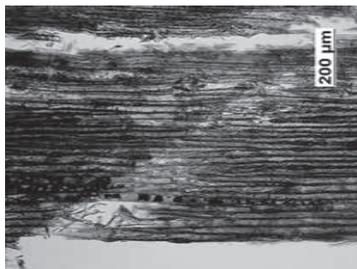
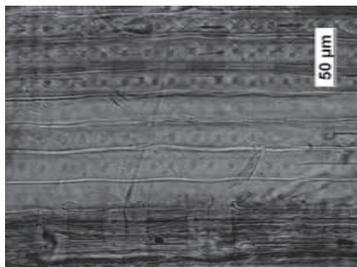


写真 67 木製品顕微鏡写真②

257 ヒノキ科アスナロ属

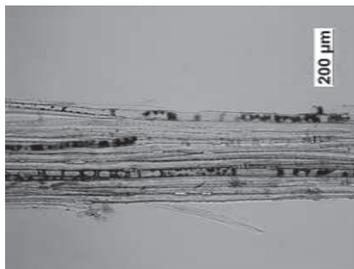


板目



板目

259 ヒノキ科アスナロ属



板目

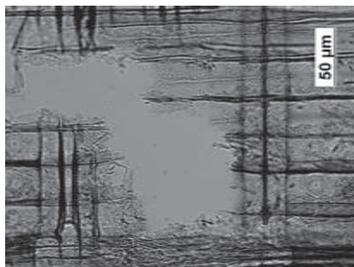


板目

261 ヒノキ科アスナロ属



板目



板目

木口

256 マツ科マツ属 [二葉松類]



板目



板目

258 ヒノキ科アスナロ属

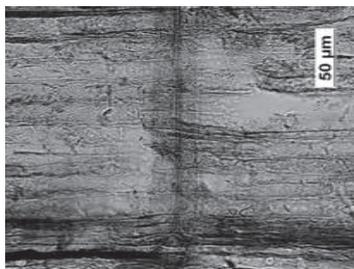


木口

260 ヒノキ科アスナロ属



板目

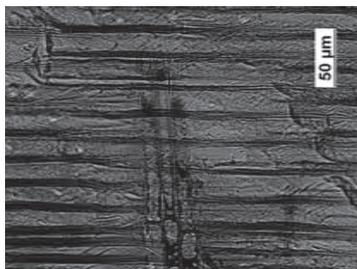


板目

木口

写真 68 木製品顕微鏡写真②

262 ヒノキ科ヒノキ属

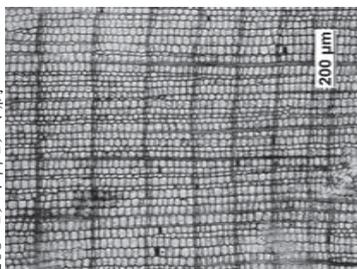


板目

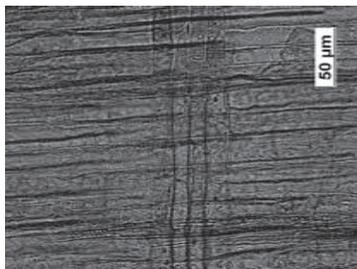


板目

263 ヒノキ科ヒノキ属



木口



板目

264 ヒノキ科アスナロ属



板目



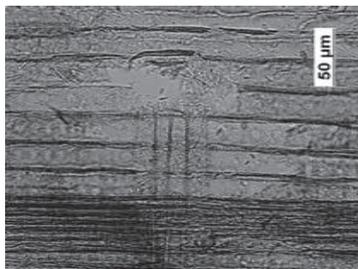
板目

木口

265 ヒノキ科アスナロ属

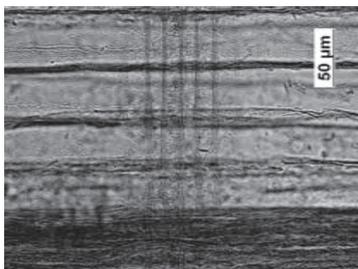


木口

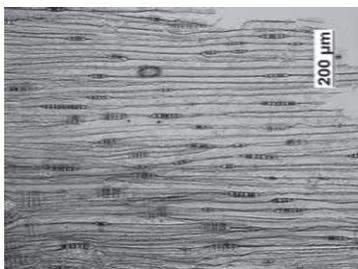


板目

266 ヒノキ科ヒノキ属



板目

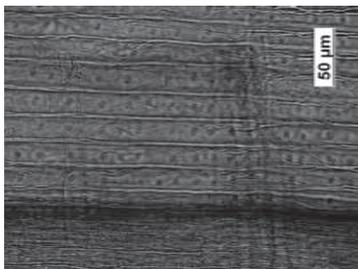


板目

267 ヒノキ科ヒノキ属



木口



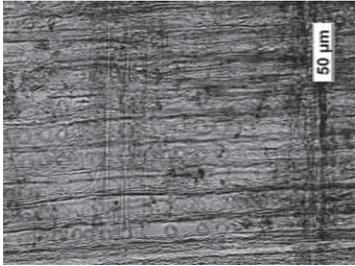
板目

木口

269 ヒノキ科ヒノキ属

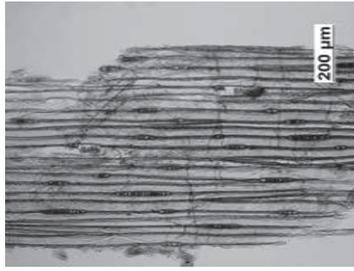


板目

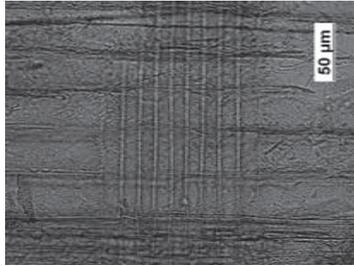


柀目

271 ヒノキ科ヒノキ属



板目

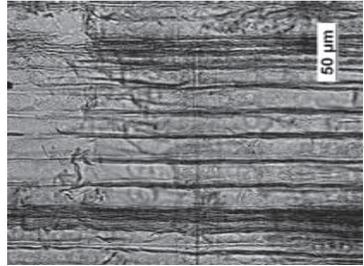


柀目

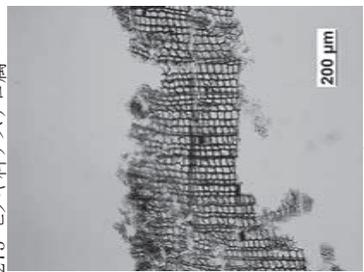
273 ヒノキ科アスナロ属



板目

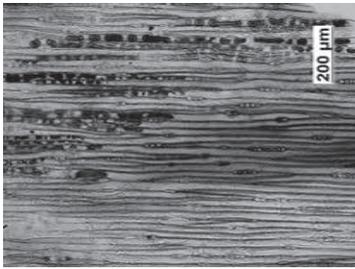


柀目

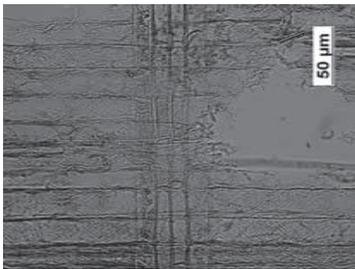


木口

268 ヒノキ科ヒノキ属



板目

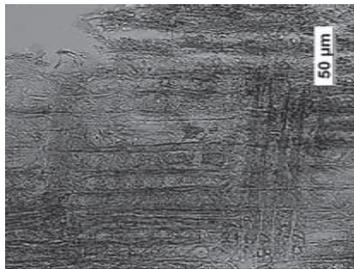


柀目

270 ヒノキ科ヒノキ属



板目

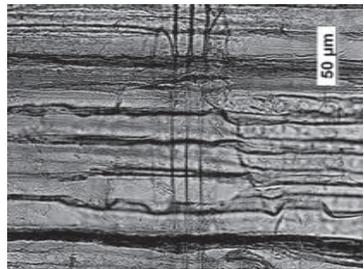


柀目

272 ヒノキ科アスナロ属



板目

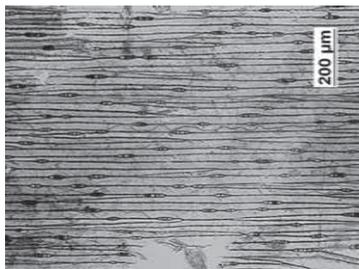


柀目

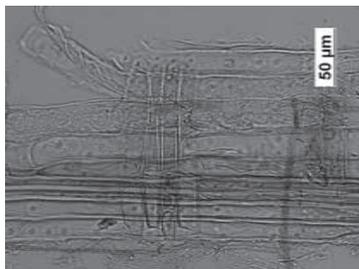
木口

写真 70 木製品顕微鏡写真⑤

275 ヒノキ科ヒノキ属



板目

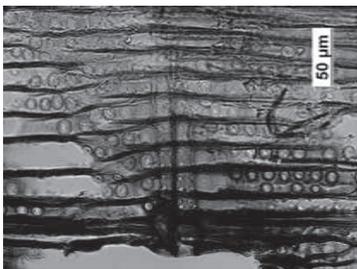


柀目

277 ヒノキ科アスナロ属

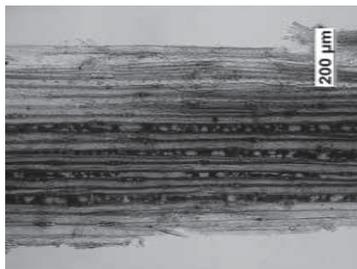


板目



柀目

279 ヒノキ科アスナロ属



板目



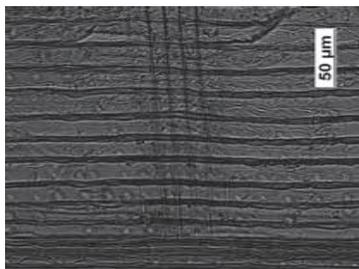
柀目

木口

274 ヒノキ科ヒノキ属

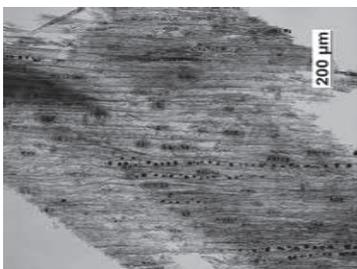


板目



柀目

276 ヒノキ科アスナロ属



板目



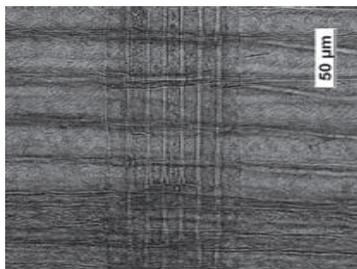
柀目

木口

278 ヒノキ科アスナロ属



板目



柀目

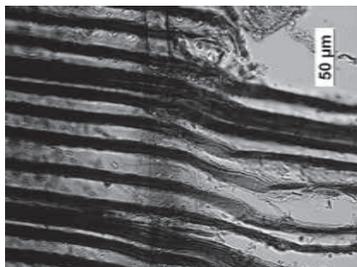
木口

写真 71 木製品顕微鏡写真②

281 ヒノキ科アスナロ属

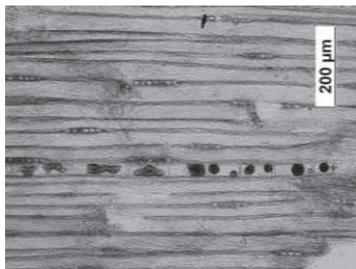


板目

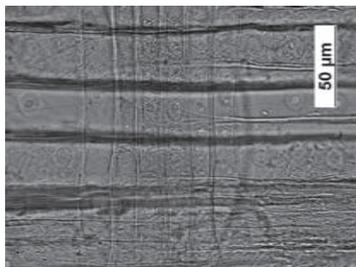


板目

木口  
283 ヒノキ科ヒノキ属



板目

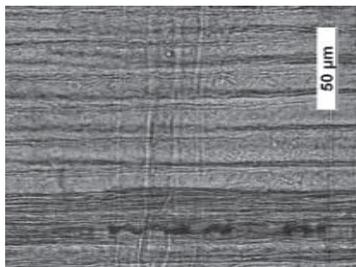


板目

木口  
287 ヒノキ科アスナロ属



板目



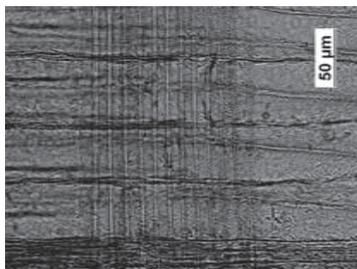
板目

木口

280 ヒノキ科アスナロ属



板目

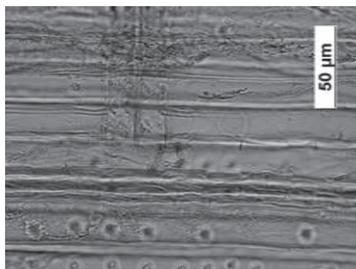


板目

木口  
282 ヒノキ科アスナロ属



板目



板目

木口  
284 ヒノキ科ヒノキ属



板目



板目

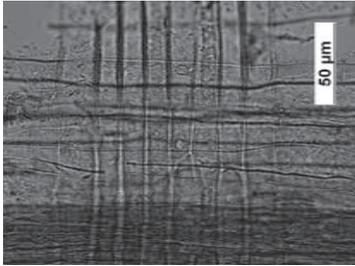
木口

写真 72 木製品顕微鏡写真⑦

289 ヒノキ科アスナロ属

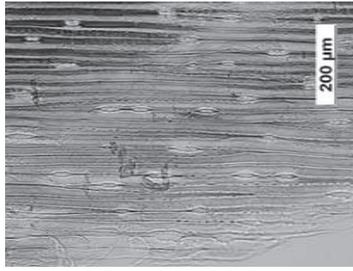


板目

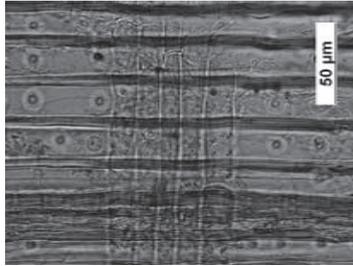


柁目

291 ヒノキ科アスナロ属



板目

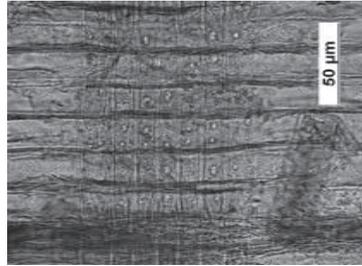


柁目

293 ヒノキ科アスナロ属



板目



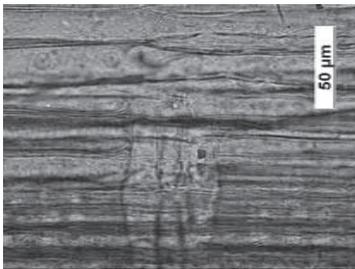
柁目

木口

288 ヒノキ科アスナロ属



板目



柁目

290 ヒノキ科アスナロ属

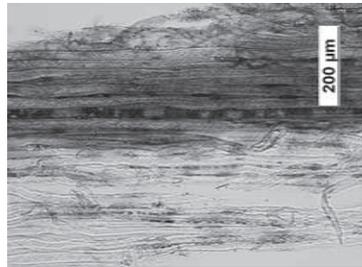


板目

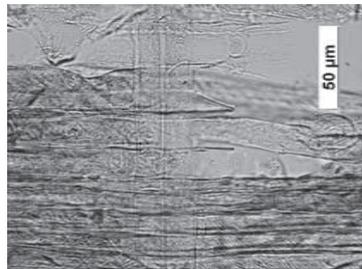


柁目

292 ヒノキ科アスナロ属



板目



柁目

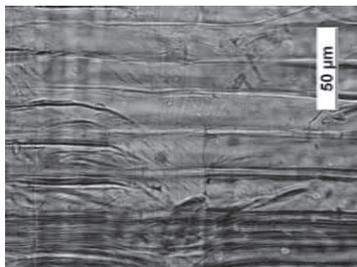
木口

写真 73 木製品顕微鏡写真⑧

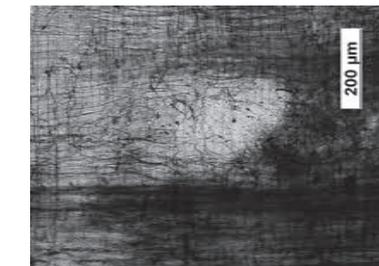
295 ヒノキ科アスナロ属



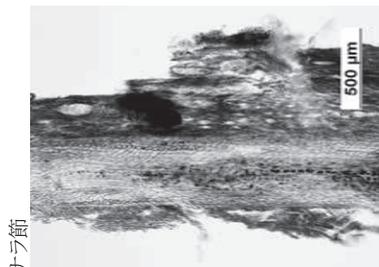
板目



柀目



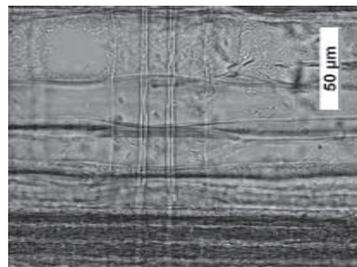
板目



柀目



板目



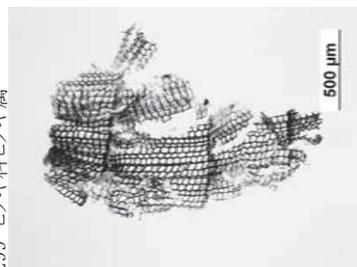
柀目

297 ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

木口

299 ヒノキ科ヒノキ属

木口

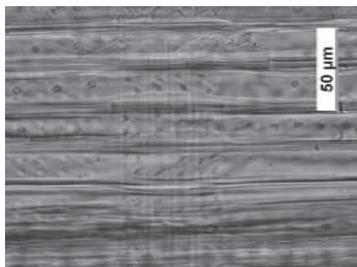


木口

294 ヒノキ科アスナロ属



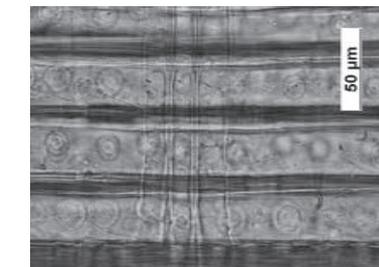
板目



柀目



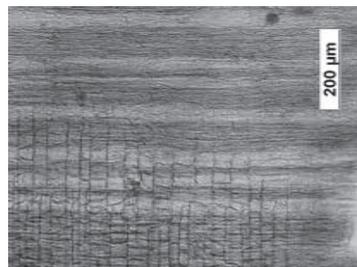
板目



柀目



板目



柀目

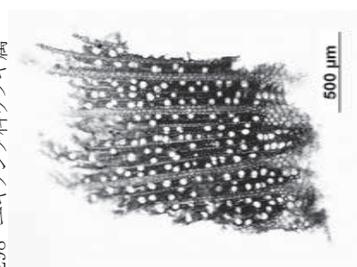
296 ヒノキ科アスナロ属

木口



298 ヨキノミタ科ウツギ属

木口



木口

写真 74 木製品顕微鏡写真②

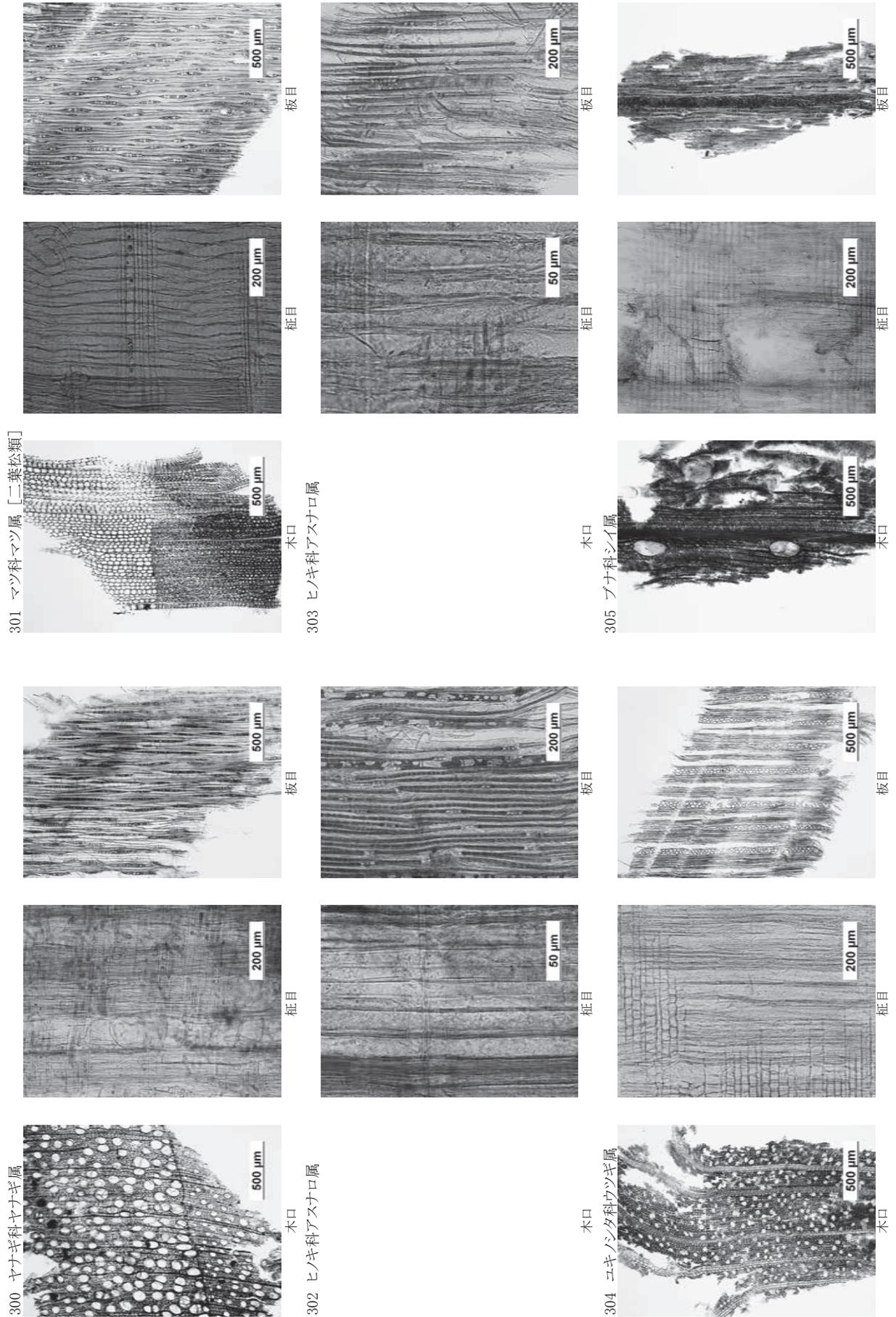


写真 75 木製品顕微鏡写真③

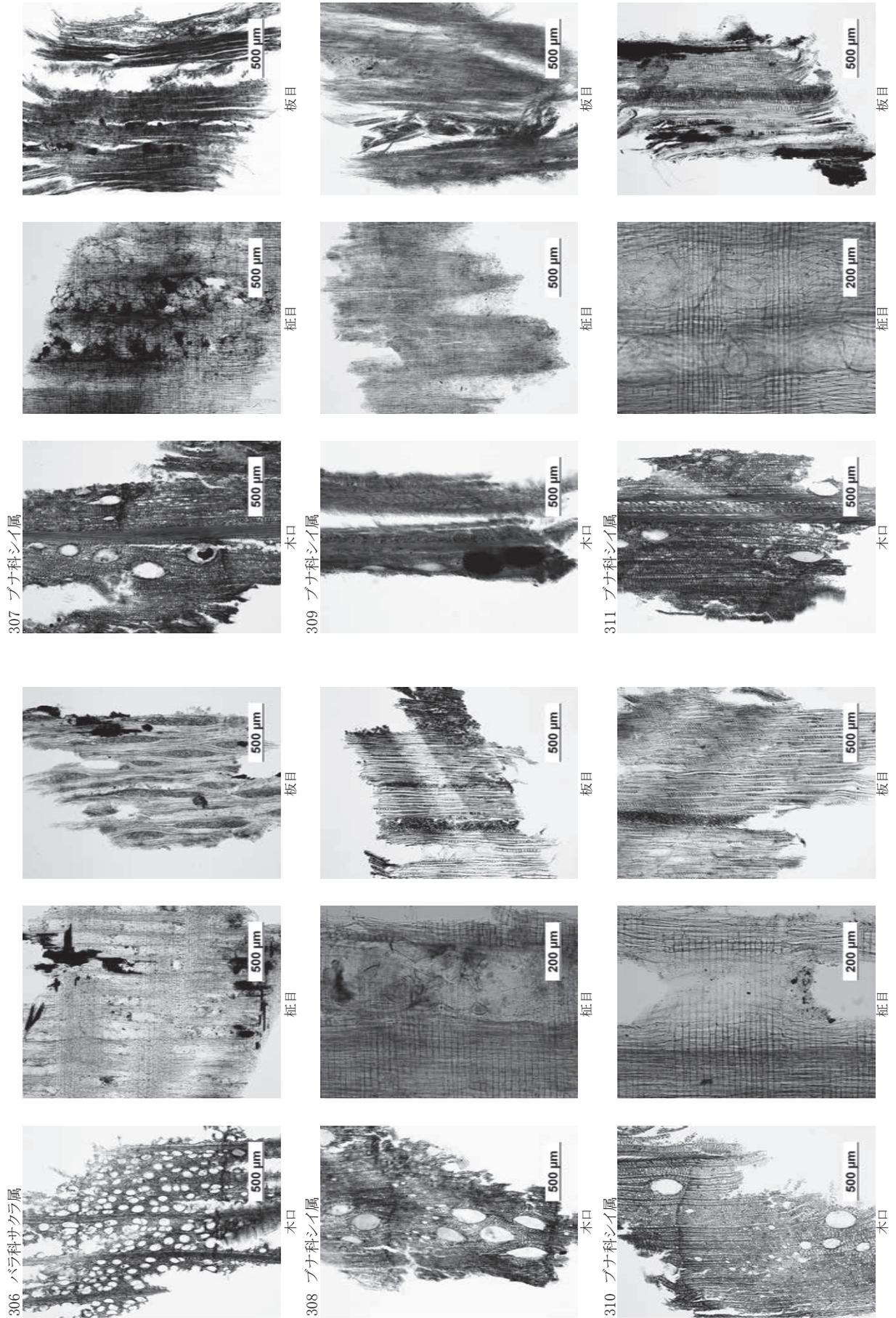


写真 76 木製品顕微鏡写真③

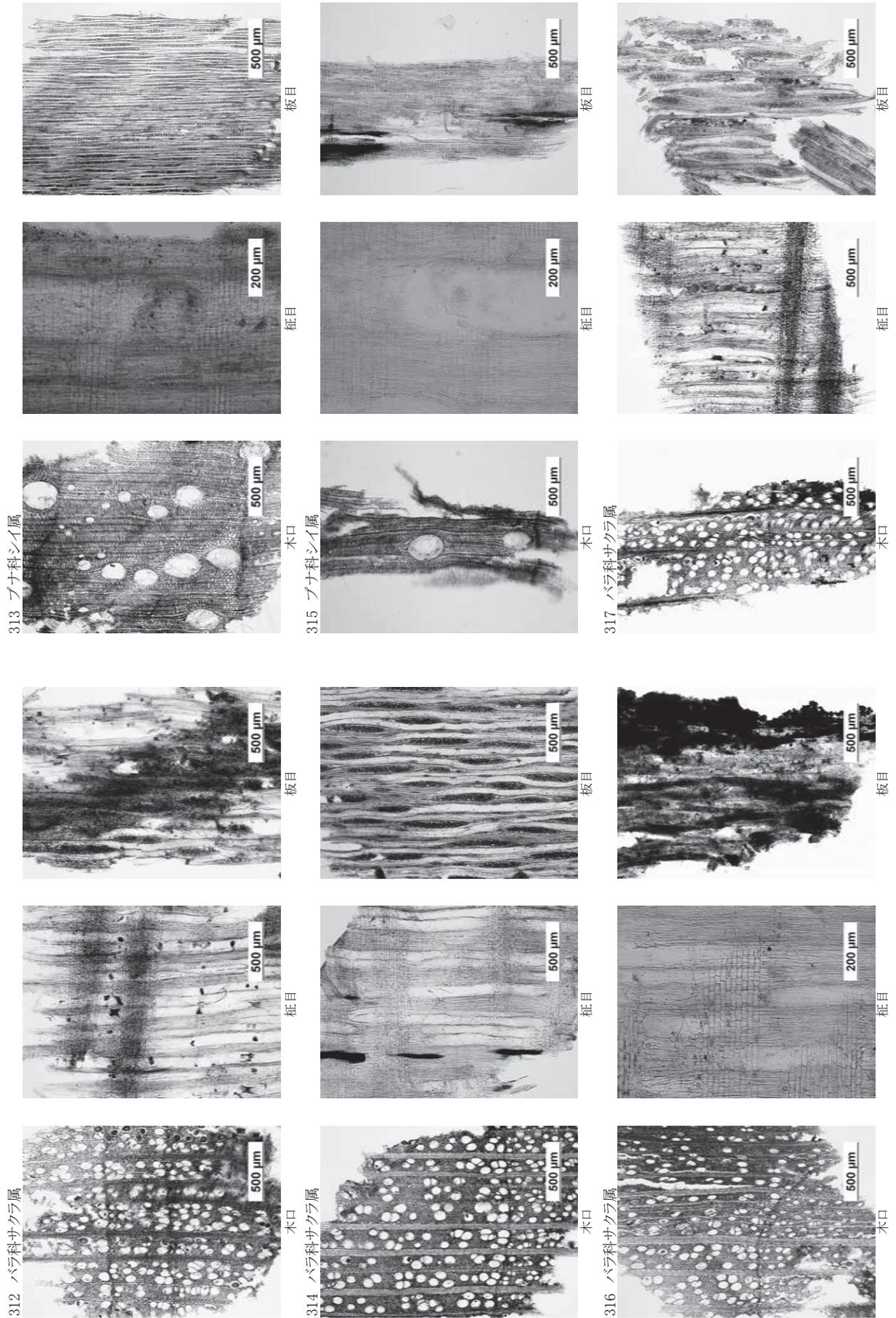


写真 77 木製品顕微鏡写真②



## 付篇3

## 防府市多々良廃寺跡採取の古代瓦

水久保 祥子

## 1. はじめに

当館では、小野忠瀨氏によって昭和31(1956)年5月に防府市多々良二丁目付近で採取された瓦を所蔵している。採取された場所は、周防国府の北限域より約200m北に位置する多々良山丘陵の末端の斜面にあたりとされるが発掘調査は行われておらず詳細は不明で、現在ではその地点を特定することも難しい。当館に残る採取地点を示す地図には、多々良廃寺跡として周知されている範囲の東端に印が付けられている(図44)。

採取時の状況としては、小野氏らが防府地域を踏査した際に、当時の山口大学の学生が散布した瓦と土器を発見し、その一部を標本として採取したとのことである。小野氏によると、瓦が採取された当時は礎石とみられる花崗岩塊があり、それとともに瓦や土師器、須恵器が押し流されて散乱している状態であったという。これら遺物については丘陵上の平坦面から流されてきたとみている。また、瓦を白鳳期に比定し、周防国府の設置よりも遡る「律令時代初期の在地豪族の氏寺ではないか」としている<sup>註1</sup>。

防府市の三浦家文書乾元2(1303)年の平子重有和与状に、平子氏の荘園「多々良庄」内の「法興寺」の名があり、瓦が採取された場所をその所在地と推定する説もある。しかし、瓦とは大きな時期差があるため、採取された瓦の時代の寺院を指すときには一般的に「多々良廃寺」の名称が使用されている<sup>註2</sup>。なお、本稿では埋蔵文化財包蔵地として周知されている「多々良廃寺跡」の名称を用いている。

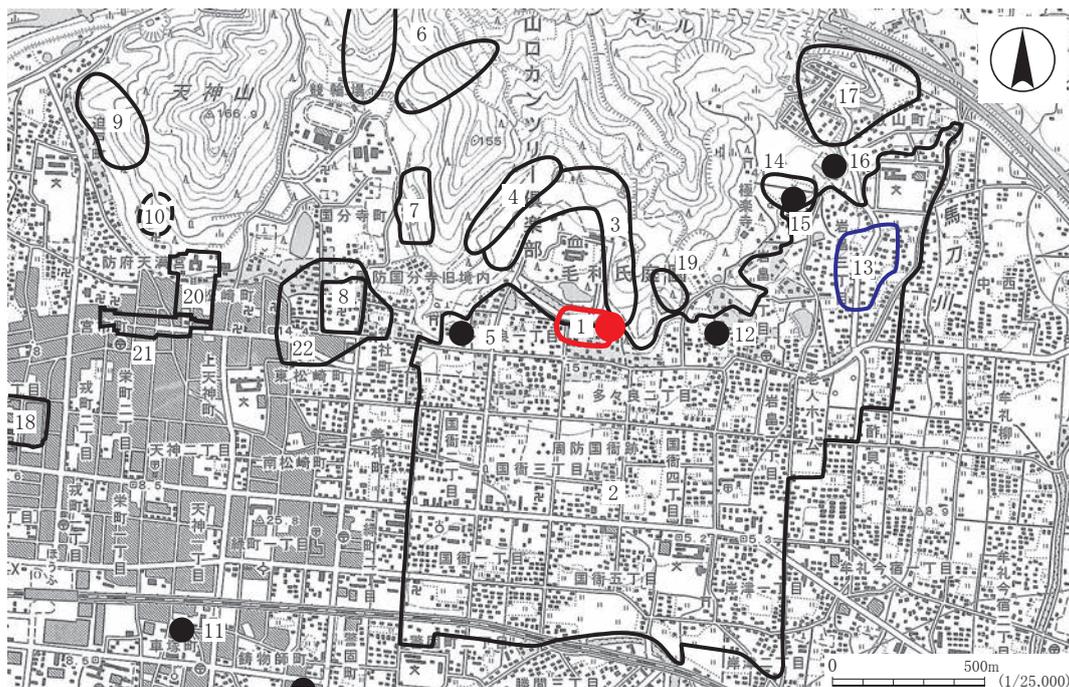
これまで各書で資料が紹介されており、年代観等についても概ね見解が示されているが、資料を所蔵している当館が正式に報告したことがないため、所蔵品の確認と整理の意味もかねて、ここで改めて多々良廃寺跡の採取瓦を紹介することとした。

## 2. 既往の多々良廃寺跡採取瓦についての報告

当館で所蔵している瓦は、忍冬蓮華文軒丸瓦1点、唐草文軒平瓦1点、平瓦5点、丸瓦2点である。そのうち忍冬蓮華文軒丸瓦については、昭和43(1968)年に奈良国立博物館で開催された『飛鳥・白鳳の古瓦展』に出展されており、3種に分類されたうちの第1様式の一つとして紹介されている<sup>註3</sup>。キャプションは、「山口・周防国府」となっている。昭和50(1975)年には中野孝之氏が軒丸瓦を山口県内出土の白鳳・奈良時代の軒瓦の一つとして紹介しており、文様の状況から7世紀後半の所産としている<sup>註4</sup>。

また、多々良廃寺跡の瓦は、小野氏が採取した昭和31(1956)年の同年8月に佐伯敬紀氏によっても採取されており、それは山口県立山口博物館(以下、山口博物館)に所蔵されている。昭和62(1987)年には山口大学人文学部考古学研究室から『呉町廃寺発掘調査報告書』の付篇として、それまで未発表であった山口博物館所蔵の軒丸瓦片2点と平瓦1点、当館所蔵の平瓦4点、丸瓦2点が掲載されている。軒丸瓦については、文様の意匠や中房の大きさなどから7世紀第3四半期に比定されている。軒平瓦についての記載はなく、「現状では軒平瓦は採集されておらず、本来存在しなかった可能性も考えられる」との記述がある<sup>註5</sup>。

平成16(2004)年刊行の『防府市史』では、当館と山口博物館が所蔵する資料が併せて掲載されている<sup>註6</sup>。また、多々良廃寺跡と同様の文様をもつ軒丸瓦が出土する周防国府跡天田地区(以下、旧天田遺跡<sup>註7</sup>)との関係についても言及している。旧天田遺跡出土軒丸瓦は、多々良廃寺跡採取のものと比較して



1. 多々良廃寺跡 2. 周防国府跡 3. 多々良ゴルフ場古墳群 4. 多々良ゴルフ場遺跡 5. 惣社古墳
6. 多々良寺山古墳群 7. 多々良寺山遺跡 8. 周防国分寺 9. 迫戸古墳 10. 天神山古墳 11. 車塚古墳
12. 岩島古墳群 13. 周防国府跡天田地区 (旧天田遺跡) 14. 切石遺跡 15. 岩島宇津和古墳 16. 岩島経塚
17. 大將軍遺跡 18. 八王子遺跡 19. 峠ケ口遺跡 20. 防府天満宮 21. 宮市まちなみ遺跡
22. 周防国分寺関連遺跡 ● 瓦採取地点

図44 多々良廃寺跡周辺遺跡分布図

国土地理院発行2万5千分の1地図「防府」を用いて作成

文様が明瞭で焼成状態が良く、多々良廃寺跡採取瓦は焼成不良品ともみえることから、多々良廃寺跡とする瓦採取地点は瓦窯跡である可能性が指摘されている。

### 3. 多々良廃寺跡採取資料(図45～47、写真79～81、表24)

当館では軒丸瓦1点、軒平瓦1点、平瓦5点、丸瓦2点を所蔵している。「多々良山」との注記があり、そのうちの平瓦2点と丸瓦1点には「1956. 5. 27」と採取日の日付も明記されている。資料館の館蔵品リストの遺跡名の欄には「多々良ゴルフ場古瓦遺跡」、出土地点として「多々良山」が登録されている。また、別コンテナ保管のもので、出土年月日が同日で出土地点が「多々良山」として登録されている須恵器片が1点ある。注記されている日付等から瓦とともに採取された土器の一つとも考えられるが、周知遺跡名の登録がなされておらず瓦とは別項目で登録されているため、本稿では取り上げていない。

1～5は平瓦。凸面に格子叩き、凹面に布目痕が残るもの(1～3)と、凹面に同心円当て具痕が認められるもの(4・5)とに分けられる。

1・2は凹面に桶状模骨痕と布目痕が残り、凸面は格子叩きで仕上げている。1は側面の凹面側に分割破面、凸面側に分割断面が確認でき、狭端面はナデで仕上げられている。凸面の格子は0.4～0.5cm四方の正格子叩きと一辺0.7cm前後の斜格子叩きが確認できる。2は側面の凹面側に分割断面、凸面側に分割破面が認められる。凸面には0.4cm×0.7cm程度と0.4～0.5cmの格子が認められる。2の凹面には、布の末端、分割界線も残る。3は凹面に布目痕、凸面に一辺0.4～0.6cmの格子叩きが残り、側縁の凹面側に分割断面、凸面側に分割破面が確認できる。全体的に他の平瓦と比べるとやや薄手である。

4の凹面には布目痕と補足の叩き締め同心円当て具痕が残っている。凸面は、全体的に摩滅しているため不明瞭ではあるが、縦方向に筋状の凹線が確認できる。5の凸面は叩きの痕跡がナデ消されて

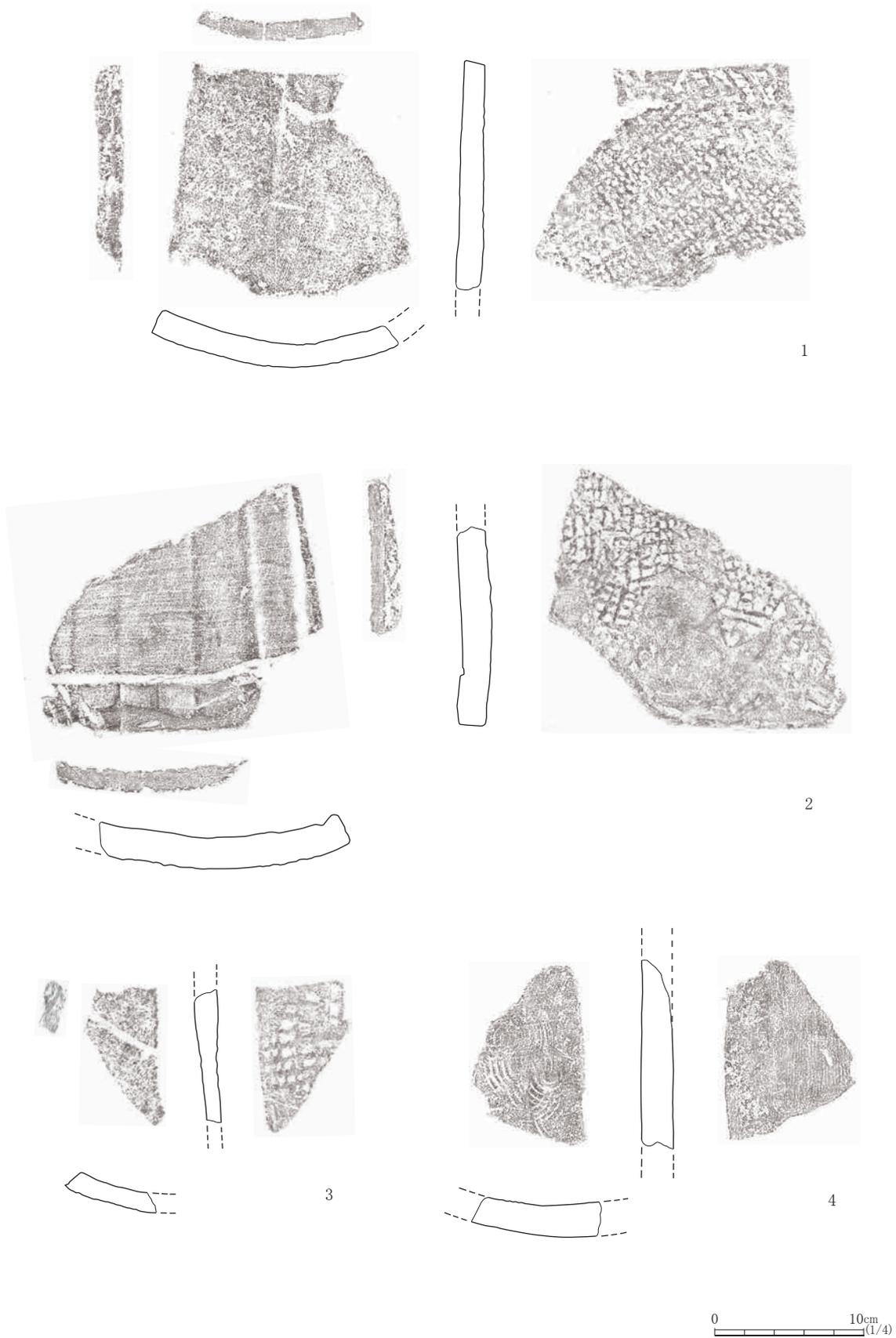


図45 多々良廃寺跡採取瓦実測図①

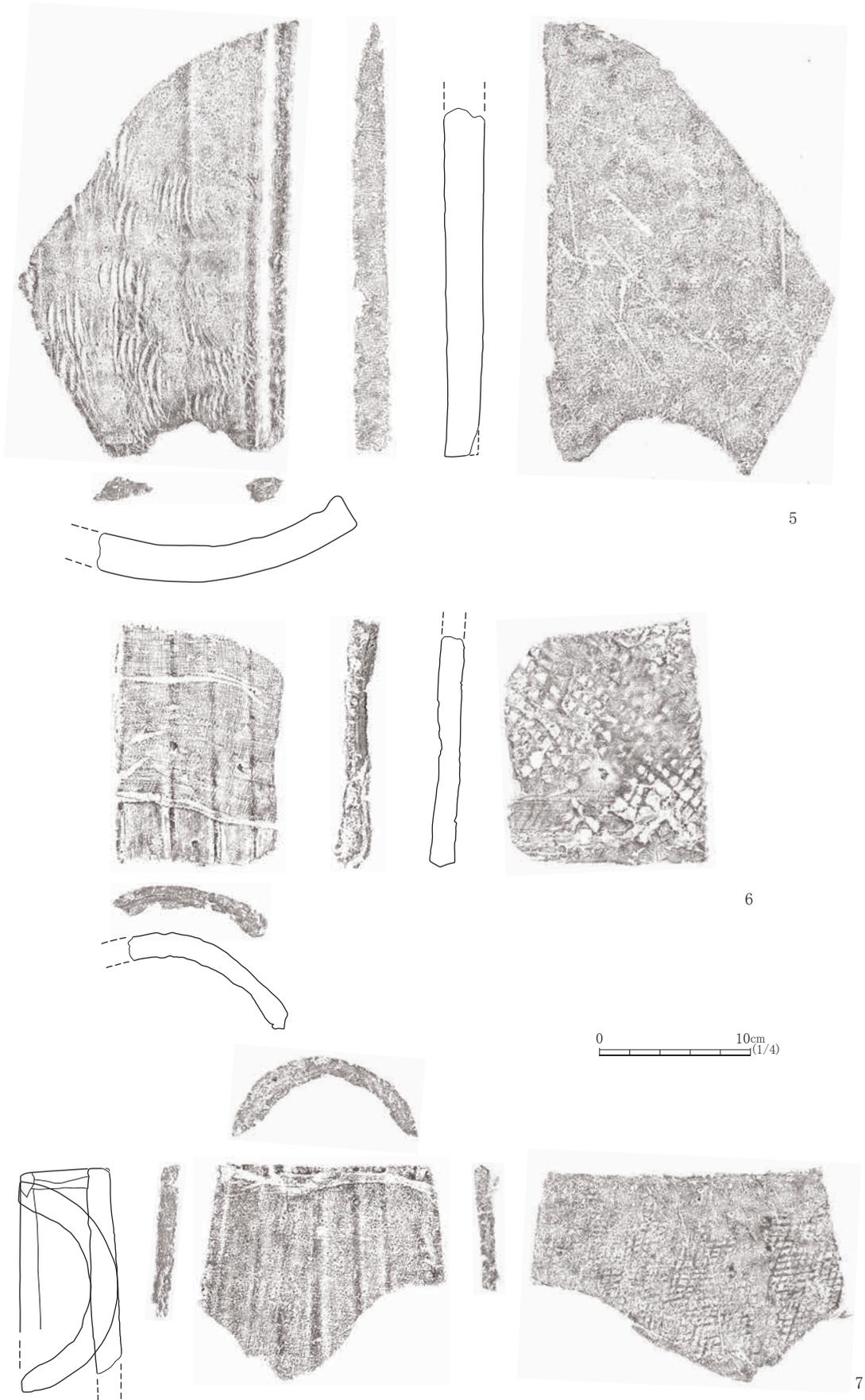


図 46 多々良廃寺跡採取瓦実測図②

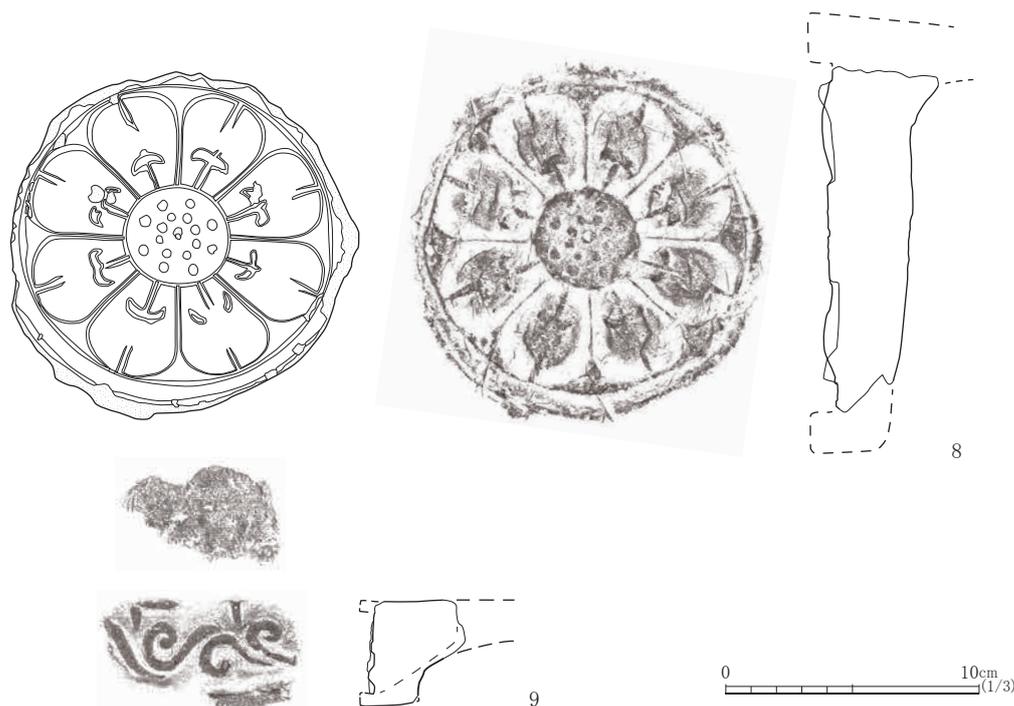


図 47 多々良廃寺跡採取瓦実測図③

いて無文で、凹面には下半部に同心円当て具痕がある。また、拓本で表現しきれなかったが、凹面側の側面付近や分割界線の一部に布目痕がかすかにみられる。分割界線には、撚紐状の痕跡が認められる。

6・7は丸瓦。ともに凹面に桶状模骨痕と布目痕が残る。6の凸面側の下半部は横方向のヘラケズリで整えられており、広端面は断面V字形に面取りされている。凸面の格子叩き目は重複叩きと表面の摩耗によって読み取りづらいが、0.5～0.6cm四方とみられる。凹面には布の末端がみえ、側面には凹面側に分割断面、凸面側に分割破面が確認できる。7は行基式の丸瓦。凸面は一辺0.4～0.5cmの斜格子叩きが施されており、両側面はケズリで整えられている。

8は忍冬蓮華文軒丸瓦。八葉の蓮弁の子葉にあたる部分に三葉の忍冬文を施す。忍冬文は左右の葉が小さくまとまっているのに対して中央の葉となる部分が蓮弁の先端まで軸線のようにのびており、独特な意匠となっている。中房の蓮子は1+8+8で、蓮弁に対応して配置されている。資料は丸瓦部との接合部分で破損しており外縁を欠失しているが、山口博物館所蔵品と旧天田遺跡出土の同文軒丸瓦から素縁であることがわかる。<sup>註8</sup>外縁が残る資料を参考に復元すると、瓦当面径は17cm弱となる。

9は段顎の唐草文軒平瓦。防府市史でも触れられているが、形態等からみて前述の軒丸瓦と組み合うものではないとみられる。

#### 4. 忍冬蓮華文について

忍冬蓮華文軒丸瓦は蓮華文に忍冬文を加飾したもので、3種に分類されている。第1様式は、広闊薄肉な六葉蓮華文の各蓮弁中に忍冬文を配したもので、第2様式は、四葉の蓮華文の弁間に忍冬文をおくもので、第3様式は、八葉素弁蓮華文の弁間に小形の忍冬文と円文を配したもので、第1様式は百濟様式、第2・第3様式は高句麗様式の影響が強いとみられている。<sup>註9</sup>

多々良廃寺跡採取の軒丸瓦は蓮弁中に忍冬文を配するものとしては第1様式となるが、蓮弁が八葉で第1様式の他の例とは文様の意匠が異なっている。他例の蓮弁は薄肉で立体的な忍冬文が施されているのに対し、多々良廃寺跡例の蓮弁は肉厚で、摩耗によるところもあろうが忍冬文自体はあまり立体的ではない。また、中央の葉が軸線のように伸びている意匠は日本国内の出土品の中では他に例をみない。この文様は、百済の軍守里廃寺出土の箱形文様埴にある忍冬蓮華文に類似しているとして、国内の伝播ではなく朝鮮半島からの直接の渡来である可能性が示されている<sup>註10</sup>。箱形文様埴については7世紀前半頃と推察されている<sup>註11</sup>。多々良廃寺跡例については中房の蓮子が二重に巡っていることなどからしても7世紀第3四半期以降とみられる。

## 5. 多々良廃寺跡の所在地について

多々良廃寺跡は、瓦が採取されたことをもってその存在を想定されているのみで、詳細については不明である。瓦の採取地点については明確に限定できないものの、丘陵の斜面であることは記されている。採取地点周辺に廃寺が存在したとすれば斜面の上部、丘陵上と考えるのが自然であろうが、先述したように、当館で所蔵している軒丸瓦は旧天田遺跡出土のものと比較して焼成不良品と見受けられ、瓦が採取された場所は瓦窯跡であった可能性が指摘されている。

旧天田遺跡からは複数の溝などが検出されており、墨書土器をはじめ、土師器、須恵器、金属製品、瓦、木製品などが出土している。また、旧天田遺跡の実態については未だ不明ではあるものの、周防国府跡の中でも瓦の出土量が群を抜いて多いことが報告されている。出土瓦には忍冬蓮華文軒丸瓦だけでなく、周防国分寺に類似する軒丸瓦や長府国府・国分寺推定地出土例に類似する軒平瓦なども出土している。旧天田遺跡周辺に多々良廃寺跡の存在を想定して、旧天田遺跡を含む多々良山南東一帯に周防国分寺整備以前の施設群が存在していた可能性も考えられている<sup>註12</sup>。

旧天田遺跡では多々良廃寺跡と時期が重なる7世紀後半代の遺物が認められているが、当該期の遺構は検出されていない。寺院跡と結びつけられる建物跡等は確認されていないが上述のように群を抜く瓦の出土があること等から、旧天田遺跡を中心とした周辺一帯の調査が多々良廃寺跡の所在地その他の解明にも大きく関わってくるものと思われる。今後の調査の進展に期待したい。

### 【註】

- 1) 小野忠熈(1985)『山口県の考古学』, 吉川弘文館, 東京
- 2) 防府市(2004)「多々良廃寺」, 『防府市史 資料Ⅱ 考古資料・文化財編』, 山口
- 3) 奈良国立博物館(1970)『飛鳥・白鳳の古瓦』, 奈良
- 4) 中野孝之(1975)「山口県出土の古瓦—白鳳・奈良時代の軒瓦について—」, 山口県地方史学会(編)『山口県地方史研究』第33号, 山口
- 5) 吉田寛・古賀信幸(1987)「防府市多々良廃寺採集の古瓦」, 『呉町廃寺発掘調査報告書』(山口大学人文学部考古学研究室研究報告第4集), 山口
- 6) 防府市(2004)「多々良廃寺」, 『防府市史 資料Ⅱ 考古資料・文化財編』, 山口
- 7) 佐々木達也(2005)「天田遺跡試掘調査」, 防府市教育委員会(編)『平成15年度防府市内遺跡発掘調査概要』(防府市埋蔵文化財調査概要0501), 山口
- 防府市教育委員会(2006)「周防国府跡第150次調査(旧天田遺跡)」, 防府市教育委員会(編)『平成16年度防府市内遺跡発掘調査概要』(防府市埋蔵文化財調査概要0601), 山口

防府市教育委員会(2006)「概況」,防府市教育委員会(編)『平成16年度防府市内遺跡発掘調査概要』(防府市埋蔵文化財調査概要0601),山口

天田遺跡は、2003年度の調査成果を受けて周防国府関連遺跡との認識から、周防国府跡天田地区と呼称が変更されている。

8)吉田寛・古賀信幸(1987)「防府市多々良廃寺採集の古瓦」,『呉町廃寺発掘調査報告書』(山口大学人文学部考古学研究室研究報告第4集),山口

佐々木達也(2005)「天田遺跡試掘調査」,防府市教育委員会(編)『平成15年度防府市内遺跡発掘調査概要』(防府市埋蔵文化財調査概要0501),山口

9)註3と同じ

10)奈良国立博物館(1970)『飛鳥・白鳳の古瓦』,奈良

防府市(2004)「多々良廃寺」,『防府市史 資料Ⅱ 考古資料・文化財編』,山口

11)亀田修一(1993)「百済の瓦・新羅の瓦」,仏教藝術學會(編)『仏教藝術』209,東京

12)佐々木達也(2005)「天田遺跡試掘調査」,防府市教育委員会(編)『平成15年度防府市内遺跡発掘調査概要』(防府市埋蔵文化財調査概要0501),山口

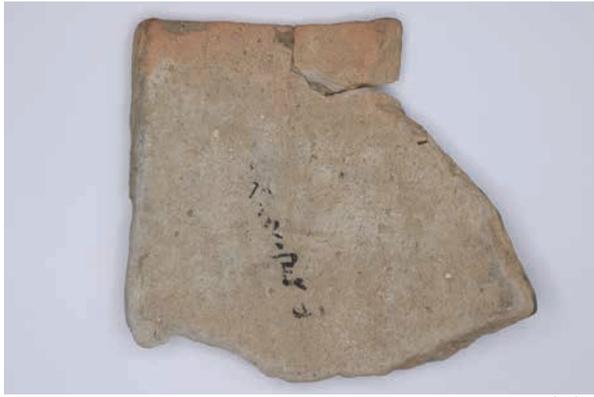
#### 【文献】

佐原真(1972)「平瓦桶巻作り」,『考古学雑誌』第58巻第2号,東京

篠宮正(1985)「忍冬蓮華文軒丸瓦小考」,『滋賀考古学論叢』第2集(江波洋先生還暦記念論集),滋賀考古学論叢刊行会,滋賀

滝本正志(1983)「平瓦桶巻作りにおける一考察－粘土円筒分割のための指標の種類について－」,『考古学雑誌』第69巻第2号,東京

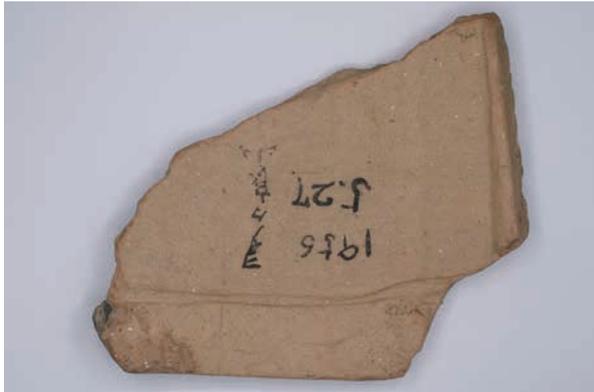
藤井寺市教育委員会(1987)『藤井寺市及びその周辺の古代寺院(上)』(藤井寺の遺跡ガイドブックNo.2),大阪



1-1



1-2



2-1



2-2



3-1



3-2



4-1



4-2



5-1



5-2

写真79 多々良廃寺跡採取瓦①



6-1



6-2



7-1



7-2



9-1



9-2



9-3



9-4

写真80 多々良廃寺跡採取瓦②



8-1



8-2



8-3



8-4



8-5

写真81 多々良廃寺跡採取瓦③

表24 出土遺物(瓦)観察表

法量( )は残存値

遺物 番号	コンテナ・ 袋	器種	法量(cm)				色調			胎土	備考
			①長さ	②幅	③厚	④重量(g)	①凸面	②凹面	③瓦当面		
1	コンテナ 93・袋49	平瓦	①(15.6)	②(17.5)	③(1.8)	④534.63	①浅黄色(2.5Y7/4)	②にぶい黄橙色(10YR7/4)	③橙色(7.5YR7/6)	0.5~3mm φの長石・石英・チャート含む	
2	コンテナ 93・袋49	平瓦	①(15.0)	②(18.4)	③(2.2)	④824.13	①②橙色(7.5YR7/6)			0.5~2mm φの長石・石英含む	
3	コンテナ 93・袋49	平瓦	①(10.0)	②(6.1)	③(1.6)	④79.49	①②橙色(5YR6/8)			0.5~3mm φの長石・石英・チャート含む	
4	コンテナ 93・袋49	平瓦	①(12.6)	②(8.9)	③(2.3)	④300.39	①黄灰色(2.5Y4/2)	②にぶい黄橙色(10YR6/4)		0.5~1mm φの長石・石英含む 0.5~1cmのチャート含む	
5	コンテナ 93・袋49	平瓦	①(29.8)	②(18.5)	③(2.75)	④1685.23	①にぶい黄橙色(10YR6/4)	②にぶい黄橙色(10YR6/3)		0.5~3mm φの長石・石英・チャート・くさり礫含む	
6	コンテナ 93・袋49	丸瓦	①(18.0)	②(17.0)	③(1.75)	④457.56	①②橙色(5YR6/6)			0.5~4mm φの長石・石英含む	
7	コンテナ 93・袋49	丸瓦	①(14.8)	②(14.2)	③(1.8)	④614.34	①にぶい黄橙色(10YR7/4)	②明黄褐色(10YR7/6)		0.5~3mm φの長石・石英・くさり礫含む	
8	コンテナ 93・袋49	軒丸瓦	①(13.9)	②(13.6)		④754.36	③灰黄褐色(10YR6/2)			0.5~2mm φの長石・石英含む	
9	コンテナ 93・袋49	軒平瓦	①(4.2)	②(8.7)		④153.55	③にぶい黄橙色(10YR7/4)			0.5~2mm φの長石・チャート含む	

館藏品調査報告  
－平生町宮原古墳出土遺物－

横山 成己

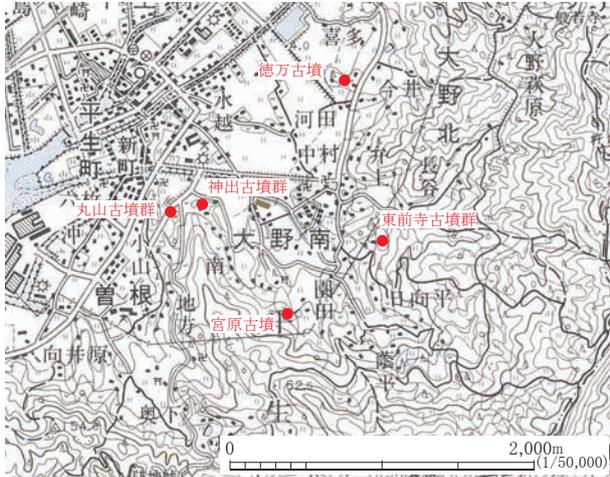


図 48 平生町大野の主な横穴式石室墳の位置  
国土地理院発行5万分の1地図「柳井」を用いて作成

1. 資料の由来

山口大学埋蔵文化財資料館には、当館設立以前に、県内各地にて本学教員および学生により採取された考古資料が多数収蔵されている。その多くは、本学教育学部で教鞭を執っていた小野忠熙氏と、氏の指導した地理学談話会および文化会考古学部に所属した学生により採取されたものとみられる。資料情報として採取年月日の残るものは限られるが、採取時期としては小野氏が教育学部光分校着任してまもなくの昭和25年(1950)以降から、本学の吉田地区(山口市)統合移転直前の昭和30年代末頃までに集中するようである。

これらの資料群のうち、本稿にて紹介するのは、ほぼ完形の須恵器坏蓋1点である。当館の資料収蔵状況としては、遺物コンテナ番号18、遺物収納袋番号4に該当する。蓋天井部外面に「大野 宮原古墳 寄贈」の注記が見られることから、大野村(昭和30年(1955)に平生町と合併)の宮原古墳から出土した資料を、所有者より譲り受けたとみられる。当館には同時に採取したと想像される土師器小片1点(遺物コンテナ番号2、遺物収納袋番号1)も存在するが、両者ともに採取年月日は残されていない。

なお、当資料については、令和3年(2021)11月3日(水・祝)の山口県立山口博物館との連携事業(平生町教育委員会共催)、講座「古代ウォーク(平生町)」配付資料に実測図を掲載している。

2. 宮原古墳について(図48、写真82・83)

宮原古墳は、室津半島の北西部、大星山から北西に大きく派生する丘陵の山腹(標高約70m)、平生町大野南に位置している。周辺には北東約800mに10基からなる東前寺古墳群が、北西約900mに神出古墳群<sup>註2</sup>が位置しており、半島内でも古墳



写真 82 宮原古墳推定地遠景(東から)  
令和5年5月3日撮影



写真 83 宮原古墳推定地近景(北東から)  
令和5年5月3日撮影

時代後期から飛鳥時代にかけての古墳が密に分布する地域である。

古墳の文献上の初出は、弘津史文氏による報告である(弘津1927)。報告では、大野村大字南村小字宮原第648番地山林にて大正3年(1914)5月25日に発見されており、無袖式の横穴式石室(全長9尺、幅7尺、高さ6尺)内から坏8点、提瓶3点、埴1点、つまみ付き蓋1点、高坏2点が出土したとされる。

一方、『平生町史』(本村1978)によると、宮原古墳は大正6年(1917)頃偶然発見された無袖式の横穴式石室墳(現存長2.45m、幅2.1m)で、奥壁と両側壁の基底石が遺存しており、遺物は羨門部付近から出土したとされる。須恵器には坏蓋1点、坏2点、蓋3点、埴2点、高坏3点、提瓶1点、脚付長頸壺1点、甕1点が存在し、うち高坏1点は東京国立博物館に収蔵され、他は地元の個人所蔵となっている。ここでは、藤田等氏により公開された遺物実測図を転載しておく(図49)。

両者とも無袖式横穴式石室墳で石室幅も共通していることから、元来同一墳であり、石室長・高の縮小は破壊が進行したためと推定することも可能であるが、発見年が異なっていること、出土遺物に相違が認められることから、別墳である可能性も残す。遺跡地の現状確認とともに今後の検討が必要であろう。

当館所蔵品は、出土遺物の所蔵者から直接寄贈を受けたと推測されるため、古代ウォーク下見時(令和3年(2021)6月1日実施)に所蔵者宅を訪問したものの、すでに居住されていないとのことで、知人に庭や畑地の管理を委ねている状況であったことから、出土資料(図49)を実見することができず、石室の存否を含め詳しい情報を得るに至らなかった。

### 3. 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の宮原古墳出土須恵器(図50、写真84、表25)

MHK1は口縁の一部を欠失するが、ほぼ完形の須恵器坏蓋である。口径13.4cm、器高3.75cmを測る。扁平な天井部から内湾して口縁に至り、口縁端部は丸く収める。器面調整は外面上位1/6に回転ヘラ削りが、以下は回転ナデが施され、天井部中央に直線的なナデが施される。内面は回転ナデが施され、中央に直線的なナデが施されている。焼成は堅緻で、色調は内外面とも灰色を呈している。胎土は緻密で、長石のほか金雲母が含まれている。

これまで知られている出土遺物(図49)から、宮原古墳の初葬は古墳時代後期中頃、追葬は古墳時代後期後半と推定されており(藤田1966)、当資料は追葬時の供献土器とみられる。

### 4. 小結

室津半島基部の平野部は現在、柳井市、田布施町、平生町の市街地が広がるが、閉塞時期が不明ながらも古代のある時期までは、古柳井水道が貫通していたと推定されている。古墳時代後期まで上記の環境下にあったならば、古墳の所在する大野南は、百済部一戎ヶ下海峡から北東に古柳井水道に侵入してまもなくの室津(島)北西内湾部(これを大野湾と仮称する)に当たる。大野湾から水道を北西に約6km直進すると、古墳時代前期から後期にかけて首長墓が展開する田布施川河口域(田布施町川西や宿井)に至る。大野湾が海交通上要衝の地であったことは容易に想像が付き、宮原古墳は東前寺古墳群とともに、その奥津城と言える場所に立地していることから、今後当地の再評価が必要であろう。

#### 【註】

- 1) 藤田等ほか(1966)『東前寺古墳群発掘調査報告』平生町文化財資料Ⅰ, 平生町教育委員会, 平生(山口)
- 2) 神出古墳群については、現在までに5基が確認されており、弘津氏による大正2年と10年の調査が指摘されている(平生町教育委員会による現地遺跡看板)が、弘津氏による大正2年(1913)2月の調査地は「大野村字南小字丸山(円墳・箱式石棺)」、大正10年3月15日の調査地は「大野村字南小字大久保4番第7・8番地(円墳・横穴式石室か)」となっており(弘津1927)、西に

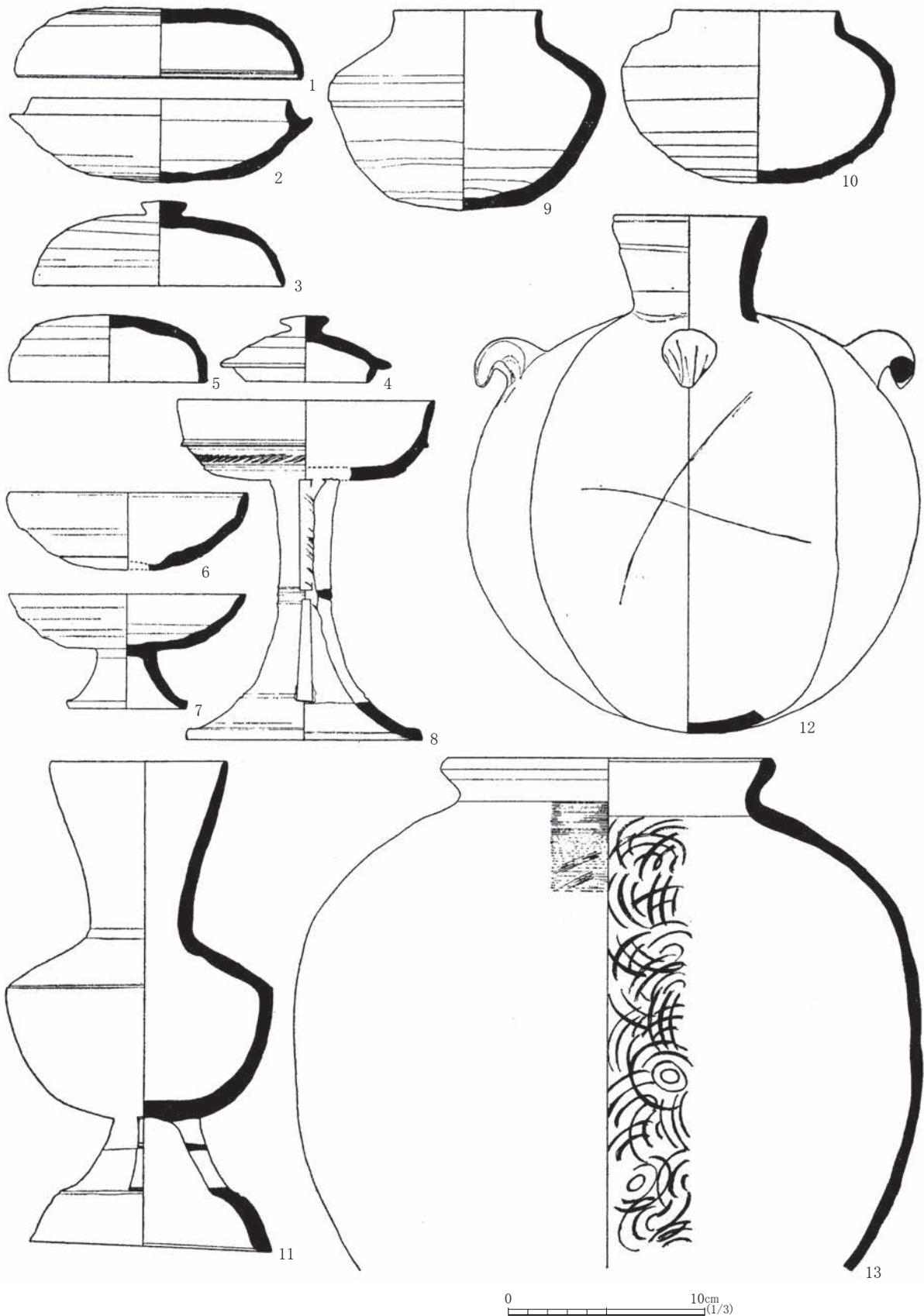


図 49 宮原古墳出土遺物  
『東前寺古墳群発掘調査報告』平生町教育委員会 1966 より転載・一部修正

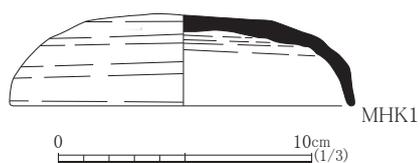


図 50 宮原古墳出土遺物（当館所蔵）



写真 84 宮原古墳出土遺物（当館所蔵）

表25 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
				①口径②底径③器高	①外面 ②内面				
1	宮原古墳	須恵器 坏蓋	ほぼ 完形	①13.4 ③3.75	①②灰色(N6/~5/)	密(0.1~4mmφの砂粒(金雲母・長石など)少量混ざる)			

近接する丸山古墳群と混同している可能性がある。なお、昭和63年4月4日に4号墳から出土した須恵器蓋坏と提瓶は平生町歴史民俗資料館に収蔵されている。

3) 国立文化財機構所蔵品統合検索システム [https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/tnm/J-8615?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-8615?locale=ja)  
 詳細情報抜粋 [出土地]山口県平生町 宮原古墳 [寄贈者]奥本嘉男氏・奥本鶴松氏寄贈 [所蔵者]東京国立博物館  
 [機関管理番号]J-8615

4) 宮原古墳については、昭和40年(1965)に平生町大野南にて実施された東前寺山古墳群の発掘調査時に、藤田等氏により現地調査と出土資料調査が実施されている。報告書に提示された遺物実測図(本稿図49)のうち、3・4・5・10・11・12の6点は個人蔵で、他は藤田氏が石室左側壁前端部で採取したとされる(藤田1966)が、藤田氏採取資料1・2・6・7・8・9・13の7点の所在は確認できていない。

【文献】

弘津史文(1927)『周防国熊毛郡上代遺跡遺物発見地調査報告書』, 弘津史文(編), 山高郷土史研究会発行, 山口  
 藤田等(1966)「I 古墳群の位置・環境」, 藤田等(編)『東前寺古墳群発掘調査報告』平生町文化財資料 I, 平生(山口)  
 本村豪章(1978)「第一編平生地方の古代・中世 第一章平生地方の原始・古代 第三節古墳時代」, 平生町史編纂委員会(編)『平生町史』, 平生(山口)

## 付篇5

## 山口県東部における弥生時代高地性集落出土土器

田畑 直彦

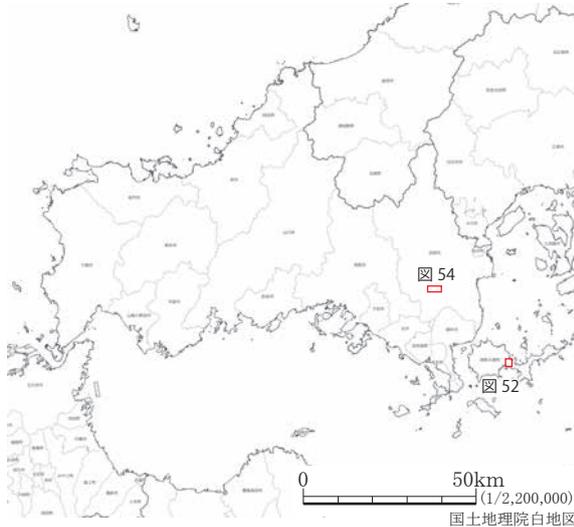


図 51 関連遺跡位置図



- 1 飯ノ山遺跡調査地点 (岡本・工藤 1952)  
 2 毛所遺跡 (中野 2004) 3 沓松遺跡A (中野 2004)  
 4 沓松遺跡B1 (中野 2004) 5 沓松遺跡B2 (中野 2004)  
 6 鹿家遺跡 (中野 2004)

○ 埋蔵文化財包蔵地 (山口県遺跡地図)

図 52 沓松遺跡位置図

## 1. はじめに

当館は、昭和20～30年代の小野忠熙氏や当時在籍していた学生による調査に伴い、山口県東部における弥生時代高地性集落から出土した遺物を収蔵している。このうちの一部は『島田川』等により報告されているが、出土遺物が未報告のため時期比定が困難な遺跡もあり、遺跡の位置づけに支障をきたしている。そこで本稿では、上記のうち、3遺跡について時期が判断できる図化可能な土器を報告したい。

## 2. 沓松遺跡

## 遺跡の概要

沓松遺跡は周防大島町大字土居(土居地区)所在の遺跡である。標高約60～80m、比高約55～75mの丘陵地斜面に立地する。『山口県遺跡地図』による所在地は「周防大島町東安下庄字沓松奥」であるが、これは後述する安下庄地区の沓松遺跡の所在地であることから、表記は誤りであろう。また、小野・中野・山本ほか1979では、所在地が「大島郡橋町大字土居小字沓松」で、2004年の合併以前における埋蔵文化財包蔵地付近の表記であるが、図示された場所は埋蔵文化財包蔵地の約400m東側に位置する。この場所は大字油良(油良地区)であることから、上記の場所は誤りであろう。

次に混同を避けるため、安下庄地区の沓松遺跡について述べたい。同遺跡を報告した中野孝之氏は3地点に細分し、「峠のをA、谷の東側をB、Bの中でより谷間のをB1、遠のく傾斜地をB2と呼ぶことにしたい。」としている(中野1975)。図52では中野氏が示した各地点の地番のおおよその中心地を示した。B1では中野氏自身が土器小片6点を見つけたという。また、B2では磨製石剣1点が出土したとされるが、上記以外の遺物の詳細は不明である。

沓松遺跡の周辺では飯ノ山遺跡が標高約120

m、比高約115mの後期前葉・後期後葉～終末期の高地性集落である。また、中野氏の検討によると、時期不詳の高地性集落として、加世田遺跡(標高約50m、比高約45m)、丸子遺跡(標高約60m、比高約55m)、流田遺跡(標高約80～100m、比高約75～95m)、鹿家遺跡(標高約60～80m、比高約50～70m)がある。なお、迫遺跡は山口県遺跡地図では時期はその他とされているが、中野氏が報告した毛所遺跡は同氏が示した地番<sup>註3</sup>では迫遺跡内にあり(図52-2)、中期もしくは後期とみられる土器底部と石鏃・石斧が出土している。この他に、山口県遺跡地図によると詳細は不明であるが、平床遺跡、油良郷遺跡も弥生時代の遺跡とされている。以上のように、土居地区と安下庄地区の沓松遺跡を含めた広範囲で弥生時代の遺跡が分布しており、今後、遺跡の所在地表記・位置・範囲について整理する必要がある。

土居地区の沓松遺跡の発見は戦前に遡る。「防長石器時代遺物発見地名表」(昭和10年9月現在防長史談会1935)によると、「日良居村・土居、沓松」で弥生土器が発見されており、発見報告者は小川五郎氏である。岡本定氏・工藤正氏が作成した「弥生式文化時代遺跡遺物発見地名表」(昭和27年4月10日現在 岡本・工藤1952)では散布地(住居址推定)、蜜柑畑で山間の凹地に位置し、標高80mで、昭和25～27年にかけて弥生土器、石剣(折片)、石鏃が出土したとされる。小野・中野・山本ほか1979では弥生Ⅲ期とされ、「詳細不明。周辺の山地にも弥生系土器片の散布地が多く、注意を要する。甕棺墓地もある。付近のほぼ同一高度に同類の遺物散布地が点在。」と記載している。また、小野1985では、「屋代島北斜面の標高80メートル、比高75mの尾根に立地するⅢ期とⅣ期の高地性集落の遺跡で、壺棺墓の存在や、ほぼ同じ高度の斜面の各所から土器の散布が報告されている。」と記載している。このほか、金関1964では筆者編年(田畑2014)の中期Ⅳとみられる甕1点の実測図が掲載されている。以上から、詳細は不明だが、中期中～後葉の集落が存在したと推定される。

### 出土土器

今回報告する土器は3点で、1と2・3は各々別箱に収納されている。1の収納袋には須恵器、瓦質土器片もあるが、注記がないため他遺跡出土遺物の混在である可能性がある。また、1は赤字による注記が一部消えており詳細は不明だが、同じ袋に収納されている胴部片には赤字で「日良居村沓松」注記さ



写真85 沓松遺跡遠景(北東から)



写真86 沓松遺跡近景(南東から)

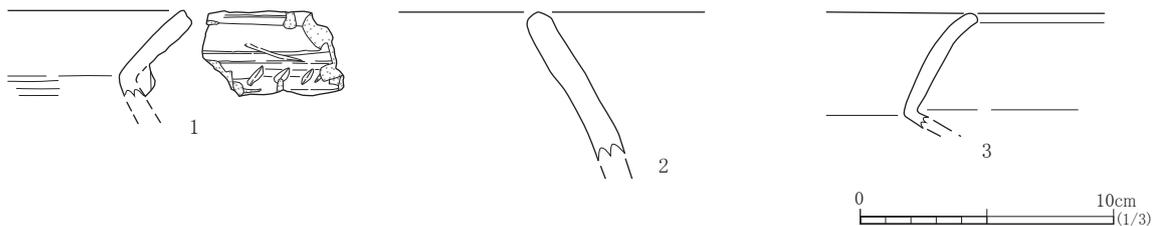


図53 出土遺物実測図(土器)①

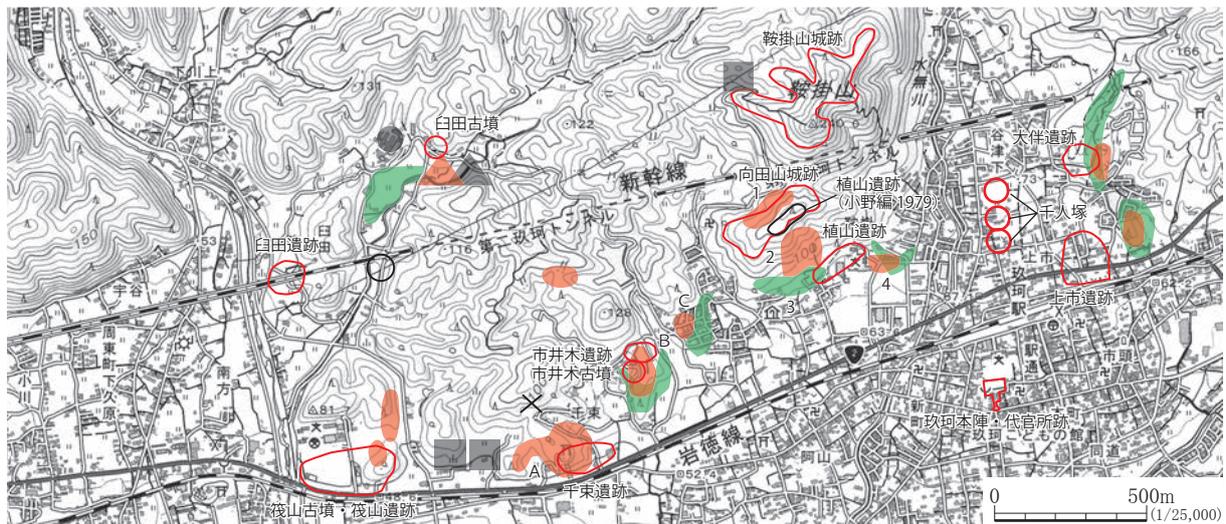
れている。2・3はラベルの注記によると、発見者～発掘者名は学術調査団で、昭和26年6月2日に出土した土器である。出土状況は「北斜面の反対側は森林となり、土器多数散布せるも比較的破片は北側より大なり」と記載されている。また、2には「日良居村沓松5」、3には「日良居村沓松2」と注記されている。以上の注記の状況から1も2・3と一連の出土であった可能性が高い。

1は弥生時代中期中～後葉の甕の口縁部で、口唇部に凹線文を1条、頸胴部界に刻目突帯を施す。2は弥生時代後期後葉～終末期の複合口縁壺の口縁部か。内外面にナデを施す。3は弥生時代終末期～古墳時代前期の短頸壺の口縁部で、内外面にナデを施す。

### 3. 植山遺跡

植山遺跡は、岩国市玖珂町の鞍掛山(標高240m)の南側に派生する向田山山頂から山麓の小起伏山地に所在する遺跡で、山頂の比高は約90mである。小野・中野・山本ほか1979による所在地は「玖珂郡玖珂町大字阿山下」であるが、<sup>註5</sup>「大字阿山下」は「阿山上」の誤りで、現在の表記は岩国市玖珂町阿山上である。小野1953では文章による記載はないが、図版第37 島田川流域の遺跡分布図において、上記の植山遺跡周辺に「弥生式遺跡」、「土師器祝部土器出土地」がある。当館は大上孝臣氏の調査により出土し、昭和28年4～5月の日付で、1「鞍掛うらく(山頂)」、2「くらかけ中腹」、3「鞍掛 山麓」、4「くらかけ・ぬの目瓦・土器破片」のラベル注記がある遺物を収蔵している。「鞍掛」は阿山遺跡を含む植山遺跡の東側隣接地周辺の字名だが、<sup>註6</sup>位置と地形から上記の1～3は図54-1～3に対応すると考えられる。また、小野・中野・山本ほか1979の位置は図54-1の南東側だが、図54-1と遺跡範囲の形態が近似するため、図54-1を転写した際、位置がずれた可能性がある。

なお、現在は山頂付近が中世城館の向田山城跡、南東側の山麓部、図54-3と4の間が植山遺跡として埋蔵文化財包蔵地に認定されている。本稿では混乱を避けるため、山頂の向田山城跡内や埋蔵文化財包蔵地外の場所も含めて植山遺跡と呼称しておく。



- ▲ 既往の縄文土器発見地 (小野 1953)      ● 弥生式遺跡 (小野 1953)      ▲ 既往の弥生式土器発見地 (小野 1953)
- 土師器祝部土器出土地 (小野 1953)      × 既往の石器発見地 (小野 1953)      ● 古墳 (小野 1953)
- 1～3 植山遺跡 (小野 1953 1: 山頂, 2: 中腹, 3: 山麓)、4 阿山遺跡 (小野 1953)
- A～C 千束遺跡 (小野 1953 A: A地区, B: B地区, C: C地区)
- 弥生遺跡 (小野 1960) ○ 土師式村落推定遺跡 (小野 1960) ○ 埋蔵文化財包蔵地 (山口県遺跡地図)

図 54 植山遺跡・千束遺跡位置図

## 出土土器

4～6はラベルに「鞍掛うら(山頂)」の注記があり、山頂付近から出土したと考えられる。いずれも弥生土器壺の頸～胴部で、外面は摩滅により調整不明、内面に指頭痕がある。また5の外面にはヘラ状工具による刺突が僅かに残る。いずれも器壁は7～10mm程度と厚く、やや長胴を呈するとみられる。上記は清水遺跡出土土器と近似していることから、後期後葉～終末期に位置づけられる。7・8はラベルに「くらかけ中腹」の注記があり、中腹で出土したと考えられる。中腹は急斜面であることから、山頂付近からの流れ込みとみられる。7は弥生土器壺の頸～胴部で摩滅により外面の調整は不明。頸部外面には板状工具による刺突がある。8は弥生土器壺もしくは鉢の底部。摩滅により内外面の調整は不明。やや丸底を呈する。いずれも後期後葉～終末期に位置づけられる。9～11はラベルに「鞍掛 山麓」の注記があり、山麓から出土したと考えられる。山麓は「土師器祝部土器出土地」とされており、土師器、須恵器も出土している。9は弥生時代中期中～後葉の甕の胴～底部。内外面ナデ調整で、内面にはコゲが付着する。10は須恵器甕の胴部。内面に同心円状の当て具痕があり、外面に平行タタキを施す。11は土師器皿底部。外底面に糸切り痕がある。12～16はラベルに「くらかけ・ぬの目瓦・土器破片」の注記がある。出土地点は定かではないが、須恵器、瓦質土器、土師質土器が含まれることから山麓から出土したと考えられる。なお、当館収蔵遺物には瓦は含まれていないが、山麓東側では古代の平瓦が出土している(岩国市教育委員会文化財保護課2023)。12は弥生土器で中～後期の壺もしくは鉢底部。底部は上底で内外面にナデを施す。13は弥生土器で後期後葉～終末期の甕の底部。外面は被熱し、底面中央を穿孔する。14は須恵器甕胴部。外面に平行タタキを施す。15は近世の瓦質土器火鉢の頸部、16は近世の土師質土器焙烙の口縁部である。



写真 87 植山遺跡・千束遺跡・筏山遺跡遠景(南東から)



写真 88 植山遺跡(南東から)



写真 89 千束遺跡(南から)

#### 4. 千束遺跡

千束遺跡は岩国市玖珂町千束に所在する。丘陵地に立地しており、最高地点の標高は約75mで比高は約25mである。小野1953ではA～C地区に分けられている。このうち、A地区では須佐神社南側の参道と神社東西の道の断面、東麓の民家付近に何らかの遺構の断面とみられる堅穴が18箇所確認された。また、出土土器の時期は、「第6号の堅穴底から平底の土器の底部を得たのをはじめ、検出した少数の土器はすべて彌生式中期と見うけられるものである。」とされている(小野1953)。当館収蔵資料は、昭和27(1952)年1月30日に大上孝臣氏の調査により、A地区西部の包含層で出土したものが主体で、ラベルには「堅穴多数」と記載されている。なお、現在はA地区の須佐神社とその東側が千束遺跡として埋蔵文化財包蔵地に認定されている。また、B地区北部は市井木遺跡として埋蔵文化財包蔵地に認定されており、平成8(1996)年に墓地造成に伴い実施された発掘調査(石井1997)では、後期前葉の堅穴住居跡1棟や後期とみられる段状遺構2基、土坑1基が検出され、弥生土器、砥石、紡錘車未製品、鉄

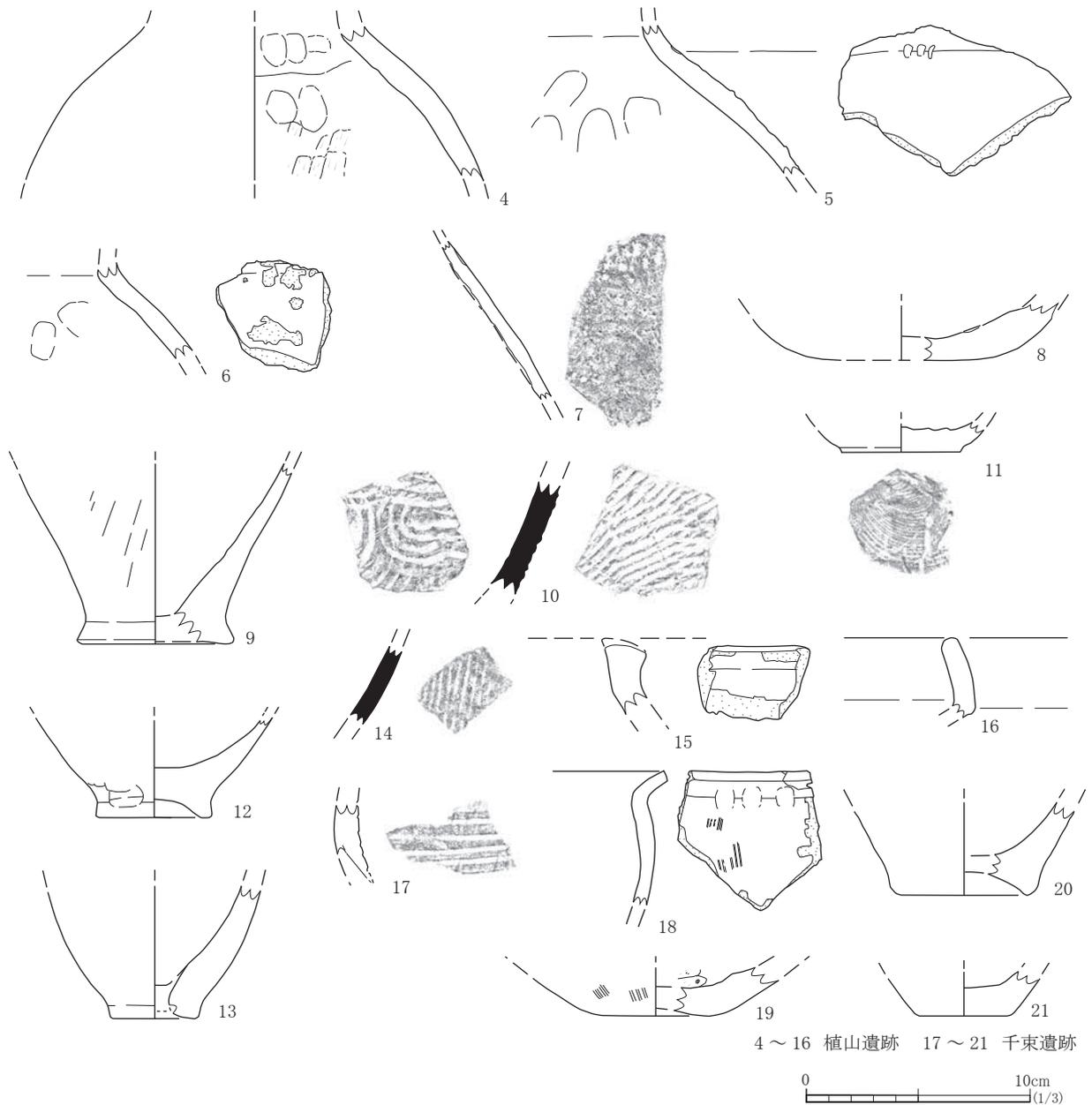


図55 出土遺物実測図(土器)②

製品(鉄鏃の茎か)<sup>註7</sup>が出土した。C地区は現在、全域が宅地である。

### 出土土器

17～21は弥生土器。このうち19は小野忠熙氏による調査で出土した土器で、注記が一部消えているため、出土地点等は不明である。19以外は前述の通り、大上孝臣氏による調査で出土した土器である。17は前期後葉～中期前葉壺の頸部。外面に6条のヘラ描沈線を施す。18は中期前～中葉の甕の口縁～胴部。摩滅が著しいが、外面の一部にタテハケが残存する。19は弥生時代後期後葉～終末期の壺もしくは鉢の底部。外面にタテハケ、内面にケズリを施す。20は弥生時代後期の甕。内外面とも摩滅が著しく調整は不明。上底を呈し、外面は被熱が顕著である。21は弥生時代後期後葉～終末期の甕の底部。外面は被熱しており、内外面とも摩滅が著しく調整は不明。

## 5. 小結

今回、2では周防大島町土居地区の杳松遺跡から出土した弥生時代中期中～後葉、後期後葉～古墳時代前期の土器を報告した。また、遺跡の出土地点や範囲等を検討した結果、土居地区、安下庄地区の広域に遺跡が存在することが確認できた。今後は現地調査を踏まえて、時期別にどのように遺跡が変遷したのかを確認する必要がある。土居地区、安下庄地区に同時に集落が存在したと仮定すると、周防大島南北の海上における可視領域を確保していたこととなり、遺跡の性格を捉える上でも重要である。

3では岩国市玖珂町の植山遺跡の山頂、中腹、山麓の3箇所から出土した土器を報告した。山麓部では弥生時代中期中～後葉の土器も出土したが、高地性集落である山頂と山頂付近から遺物が流れ込んだと考えられる中腹では、後期後葉～終末期の土器が出土した。植山遺跡の山頂は標高約160m、比高約90mで、現在知られている島田川流域遺跡群の中では最も比高が高い。また、島田川流域遺跡群では比高約70mの遺跡に、溪月院遺跡、大浴遺跡、平畑遺跡があるが、いずれも植山遺跡同様、後期後葉～終末期に位置づけられる。島田川流域遺跡群の南側にはかつて存在した古柳井水道の周囲に比高100mを越える後期後葉～終末期の高地性集落である大崩遺跡、石城山神籠石、吹越遺跡などが存在する。島田川流域では比高100mを越える高地性集落は未確認だが、比高70mを越える高地性集落が出現した背景には、古柳井水道周辺に存在する高地性集落の出現と関連がある可能性が高い。なお、小野1960によると、詳細は不明だが鞍掛山の西側にも弥生時代の遺跡が存在するとされる。

4では岩国市玖珂町の千束遺跡から出土した弥生時代前期後葉～中期前葉、中期前～中葉、後期～終末期の土器を報告した。前期後葉～中期前葉及び後期後葉～終末期の土器は標高約67m、比高約22mの高地性集落である筏山遺跡からも出土している(小野1961・岩国市教育委員会文化財保護課2023)。また、小野1960によると詳細は不明だが、筏山遺跡と千束遺跡の間にも弥生時代の遺跡が存在するとされる。上記から、島田川の上流域においても、中流域と同様に弥生時代前期後葉～中期前葉に高地性集落が出現し、移動しつつ終末期まで存続したと考えられる。

以上、今回報告した土器は少量・小片ではあるが、山口県東部の高地性集落を考察する上で重要な手がかりとなるだろう。

### 謝辞

岩国市玖珂町所在の遺跡や出土遺物については岩国市文化スポーツ振興部文化財課 藤田慎一氏よりご教示いただいた。末筆ながら記して感謝いたします。

本稿は科研費(20K01074)の研究成果の一部を含む。

【註】

- 1) 図52は国土地理院2020年発行25,000分の1地形図「安下庄」を使用した。
- 2) 中野1975や上記を引用した八幡1983の記載から、土居地区の杓松遺跡と安下庄地区の杓松遺跡が混同されたと推測する。
- 3) 中野2004第22図で示された毛所遺跡は現在の埋蔵文化財包蔵地付近に相当するが、小字名は「山崎」「恵良」である。一方、中野氏が示した毛所遺跡の地番周辺の小字名は「毛所」であること、標高を除く地理的な記載内容と矛盾しないことから、中野2004第22図の位置は誤りと考えられる。
- 4) 日良居村は昭和30(1955)年4月10日に安下庄町と合併して橘町が発足したことにより廃止された。
- 5) 図54は国土地理院2017年発行25,000分の1地形図「玖珂」を使用した。
- 6) 図54-3は、地図の合成の際にずれが生じたため、標高100m付近までが遺跡範囲になっているが、原図では標高80m以下が遺跡範囲である。
- 7) 石井編1997では遺構が検出された最高点の標高は約98mであるが、調査区南側の墓地及び残存する丘陵の標高との対応関係からおおよそ76mと推定する。

主要参考文献

- 石井龍彦(1989)『清水遺跡』山口県教育委員会(編)山口県埋蔵文化財調査報告第118集,山口
- 石井龍彦(1997)『市井木遺跡』玖珂町教育委員会(編),玖珂(山口)
- 岩国市教育委員会文化財保護課(2023)『玖珂の遺跡』,岩国(山口)
- 小野忠熙(1953)「第四章 島田川の遺跡群」,山口大学島田川遺跡学術調査団(編)『島田川 周防島田川流域の遺跡調査研究報告』,山口
- 小野忠熙(1960)「山口県玖珂盆地の考古学的調査」,山口大学教育学部(編)『山口大学教育学部研究論叢』第10巻第1部,山口
- 小野忠熙(1961)「24 筏山古墳と経塚」『山口県文化財概要第4集 埋蔵文化財』,山口県教育委員会(編),山口
- 小野忠熙・中野一人・山本一朗ほか(1979)「山口県域」,小野忠熙(編)(1979)『高地性集落跡の研究 資料篇』学生社,東京
- 小野忠熙(1985)『山口県の考古学』吉川弘文館,東京
- 岡本定・工藤正(1952)「考古学的に見た周防大島の一断面」,大島文化研究連盟(編)『大島文化研究』第1号,橘(山口)
- 金関 恕(1964)「山陰地方 I」,小林行雄・杉原莊介(編)『弥生式土器集成 本編1』東京堂出版,東京
- 田畑直彦(2006)「山口県島田川流域の弥生集落—中流域遺跡群を中心として—」,日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会(編)『日本考古学協会2006年度愛媛大会発表要旨集』,松山(愛媛)
- 田畑直彦(2014)「周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成22年度—』,山口
- 田畑直彦(2022)「土井ヶ浜遺跡と周辺の集落遺跡の謎」,古代史シンポジウム実行委員会(編)『第7回古代史シンポジウム IN しものせき 資料集』,下関(山口)
- 中野孝之(1975)「周防国屋代島中部(安下庄地区)の遺跡分布について—弥生系遺跡の立地—」,山口県立安下庄高等学校(編)『研究学報1975』,橘(山口)(中野孝之(2004)『大島郡の考古学』,大島(山口)所収)
- 防長史談会(1935)「防長石器時代遺物発見地名表」,防長史談会(編)『防長史学』第6巻第2号,山口
- 八幡熊治郎(1983)「第1章第二節 弥生式文化時代」,橘町史編集委員会(編)『橘町史』,橘(山口)
- 山口県(1980a)『1/50,000土地分類基本調査(地形分類図)「久賀・柱島」』,山口
- 山口県(1980b)『1/50,000土地分類基本調査(地形分類図)「岩国」』,山口
- 山口県観光スポーツ文化振興課(2023)『山口県遺跡地図』,山口

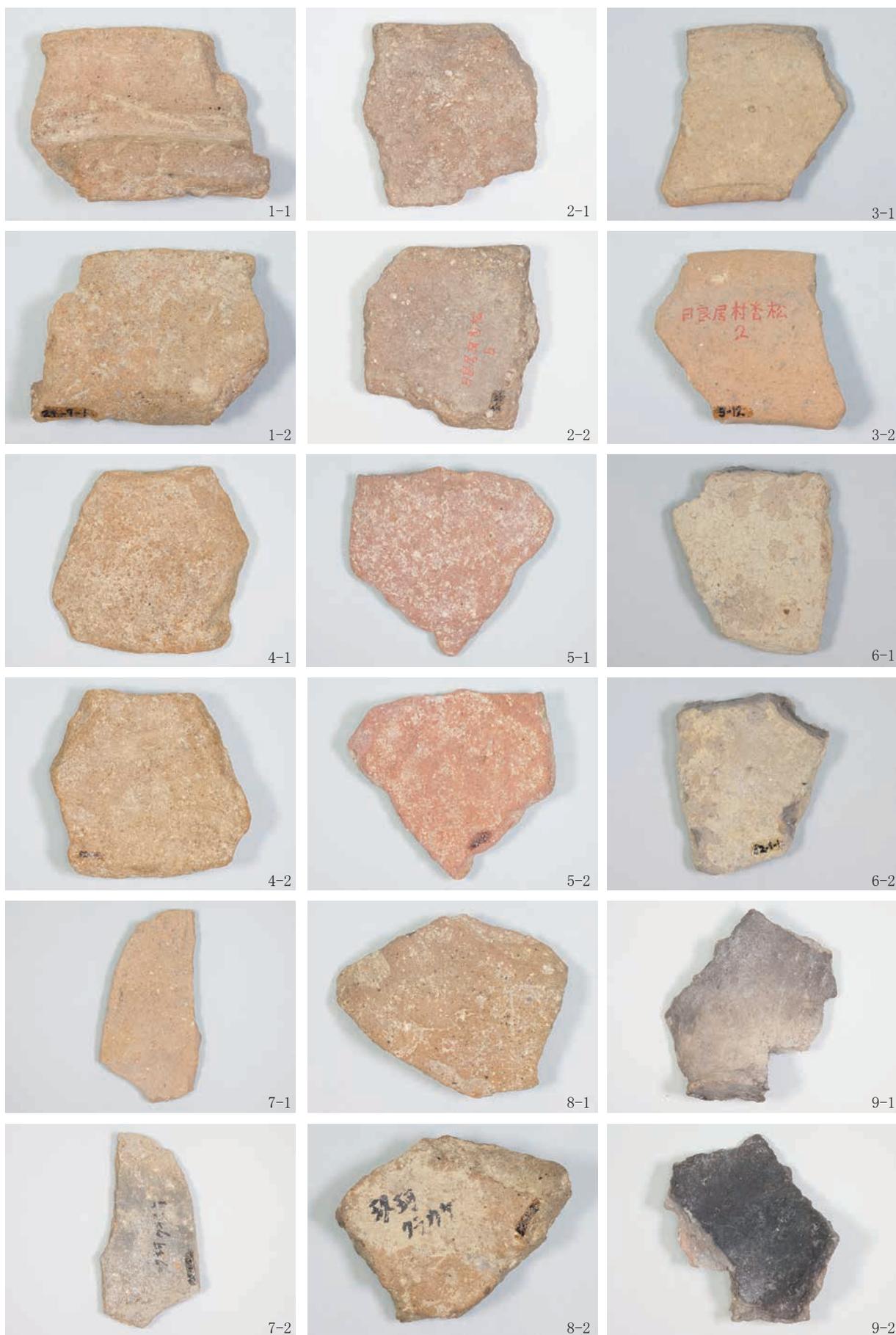


写真 90 出土遺物(土器)①

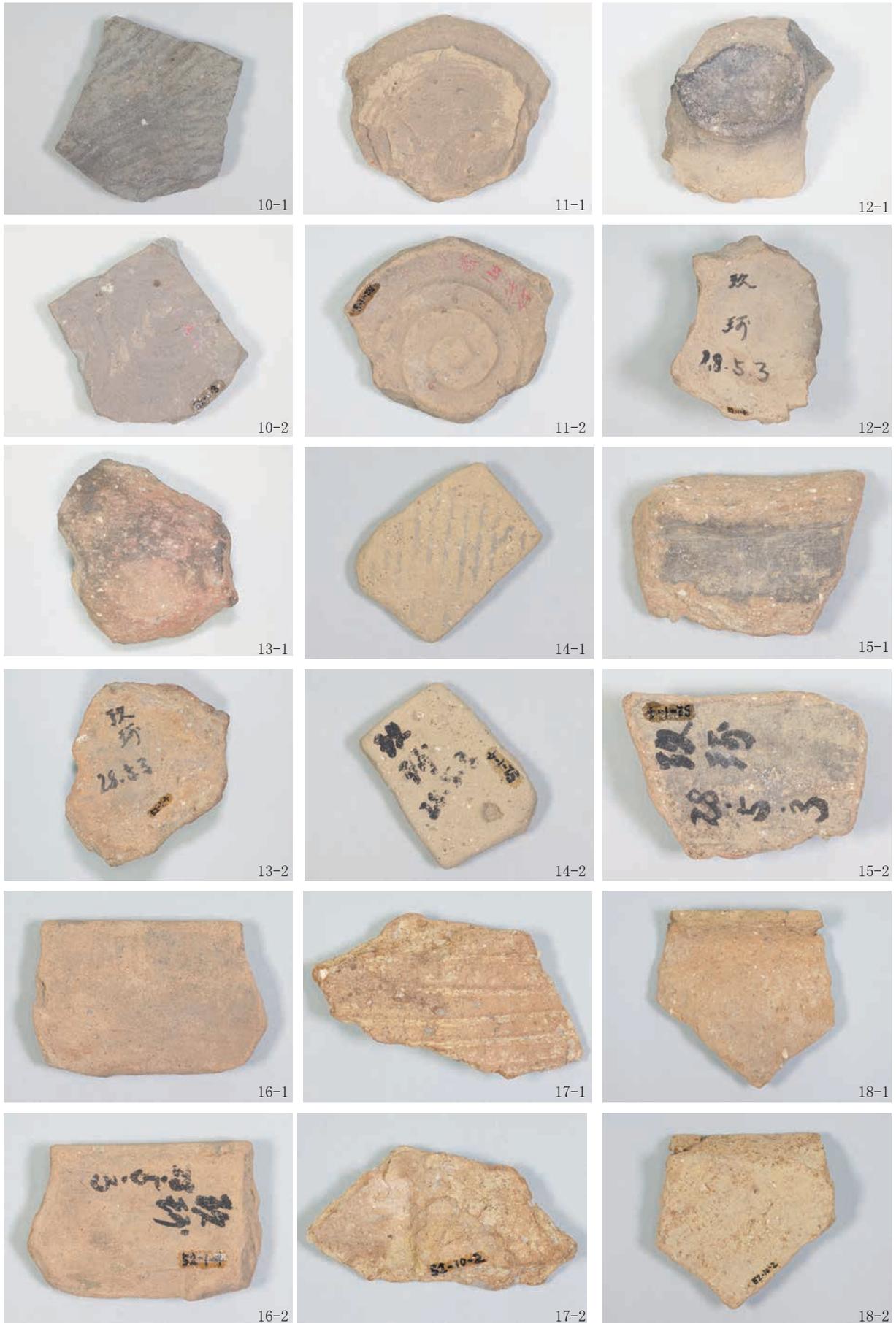


写真 91 出土遺物(土器)②

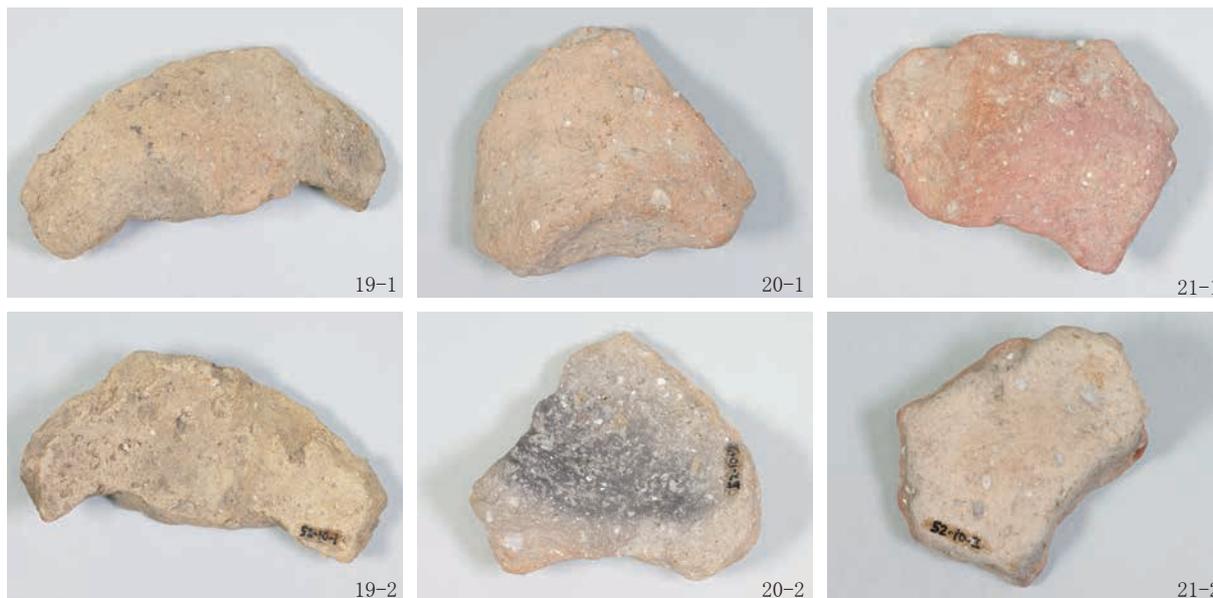


写真 92 出土遺物(土器)③

表26 出土遺物(土器)観察表

遺物番号	遺跡・地区名	器種	部位	法量 (cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考 (4~21はラベルの注記)
					①外面	②内面		
1	杵松遺跡	弥生土器 甕	口縁部			①②にぶい橙色 (7.5YR6/4)	0.5~5mmの砂粒を含む	土器注記:○松 (日良居村杵松か)
2	杵松遺跡	弥生土器 壺か	口縁部か			①②灰黄橙色 (10YR5/2)	0.5~5mmの砂粒を含む	学術調査団による調査 で昭和26年6月2日出土 土器注記:日良居村杵松5
3	杵松遺跡	弥生土器もしくは 土師器 壺	口縁部			①浅黄色 (2.5Y7/3) ②橙色 (7.5YR7/6)	0.5~4mmの砂粒を含む	土器注記:日良居村杵松2
4	植山遺跡	弥生土器 壺	頸部~ 胴部			①灰黄褐色 (10YR6/2) ②にぶい黄褐色 (10YR6/3)	0.5~3mmの砂粒を含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛うら (山頂 大土)
5	植山遺跡	弥生土器 壺	頸部~ 胴部			①赤橙色 (10R5/3) ②赤橙色 (10R6/6)	0.5~4mmの砂粒を含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛うら (山頂 大土)
6	植山遺跡	弥生土器 壺	頸部~ 胴部			①②灰白色 (5Y8/2)	0.5~3mmの砂粒を含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛うら (山頂 大土)
7	植山遺跡	弥生土器 壺	胴部			①にぶい橙色 (7.5YR7/4) ②灰色 (7.5Y6/1)	0.5~4mmの砂粒を含む	28.4.26玖珂くらかけ 中腹 大土
8	植山遺跡	弥生土器 壺もしくは 鉢	底部	②(5.4)		①にぶい褐色 (7.5YR5/4) ②黄褐色 (10YR6/4)	0.5~7mmの砂粒を含む	28.4.26玖珂くらかけ 中腹 大土
9	植山遺跡	弥生土器 甕	胴部~ 底部	②(7.0)		①灰黄色 (2.5YR7/2) ②黒色 (N2/0)	0.5~3mmの砂粒を含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛 山麓 土師、祝部 大土
10	植山遺跡	須恵器 甕	胴部			①灰色 (N5/0) ②灰色 (N6/0)	0.5~5mmの砂粒を少量含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛 山麓 土師、祝部 大土
11	植山遺跡	土師器 皿	底部	②(5.3)		①にぶい黄褐色 (10YR6/3) ②にぶい黄褐色 (10YR7/4)	0.5~3mmの砂粒を少量含む	28.4.29彌生式土器片 玖珂町鞍掛 山麓 土師、祝部 大土
12	植山遺跡	弥生土器 壺もしくは 鉢	底部	②(5.2)		①にぶい黄褐色 (10YR7/2) ②にぶい黄褐色 (10YR7/3)	0.5~5mmの砂粒を含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
13	植山遺跡	弥生土器 甕	底部	②(4.0)		①暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) ②にぶい橙色 (2.5YR6/4)	0.5~5mmの砂粒を含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
14	植山遺跡	須恵器 甕	胴部			①浅黄色 (2.5Y7/3) ②灰黄色 (2.5Y7/2)	0.5~2mmの砂粒を少量含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
15	植山遺跡	瓦質土器 火鉢	頸部			①②灰色 (7.5Y4/1)	0.5~8mmの砂粒を含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
16	植山遺跡	土師質土器 焙烙	口縁部			①②にぶい橙色 (7.5YR6/4)	0.5~3mmの砂粒を少量含む	28.5.3玖珂 くらかけ ・ぬの目瓦・土器破片 大土
17	千束遺跡	弥生土器 壺	頸部			①にぶい橙色 (7.5YR6/4) ②にぶい黄褐色 (10YR7/3)	0.5~5mmの砂粒を含む	彌生式土器 玖珂部 高森町千束 大土孝臣 27.1.30 包含層
18	千束遺跡	弥生土器 甕	口縁部~ 胴部			①にぶい橙色 (7.5YR7/4) ②浅黄色 (2.5Y7/3)	0.5~5mmの砂粒を含む	彌生式土器 玖珂部 高森町千束 大土孝臣 27.1.30 包含層
19	千束遺跡	弥生土器 壺もしくは 鉢	底部	②(4.8)		①②浅黄色 (2.5YR7/3) ②の一部灰白色 (2.5Y8/2)	0.5~3mmの砂粒を含む	彌生式土器片 玖珂部 玖珂町千束 小野 2 以下不明
20	千束遺跡	弥生土器 甕	底部	②(4.6)		①にぶい橙色 (5YR7/4) ②黄灰色 (2.5Y6/1)	0.5~6mmの砂粒を含む	彌生式土器 玖珂部 高森町千束 大土孝臣 27.1.30 包含層
21	千束遺跡	弥生土器 甕	底部	②(4.0)		①にぶい橙色 (2.5YR6/4) ②灰白色 (10YR8/2)	0.5~5mmの砂粒を含む	彌生式土器 玖珂部 高森町千束 大土孝臣 27.1.30 包含層



## 報告書抄録

ふりがな	やまぐちだいがくまいぞうぶんかざいしりょうかんねんぼう
書名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
副書名	—令和2年度—
巻次	
シリーズ名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
シリーズ番号	18
編著者名	田畑直彦 横山成己 水久保祥子
編集機関	山口大学埋蔵文化財資料館
所在地	〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1 TEL083-933-5035
発行年月日	西暦2024年(令和6年)3月29日

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田遺跡	集落	古代 中世	土壇 ピット		
山口大学 医学部構内遺跡	散布地				



山口大学埋蔵文化財資料館年報  
— 令和2年度 —

令和6年3月29日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8



